

大 津 町 北 遺 跡 中 野 清 水 遺 跡

2004年3月



国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

大 津 町 北 遺 跡
中 野 清 水 遺 跡

2004年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会



1. 墨書土器「塩冶」(76-477)

カラー図版2



2. 出雲平野（中野清水遺跡は右端、中央は出雲ドーム、手前は斐伊川）



3. 中野清水遺跡から島根半島をみる



4. 中野清水遺跡 II区2層 SX04



5. 中野清水遺跡 II区3層 遺物出土状態



6. 中野清水遺跡 II区2層 II群 遺物出土状態



7. 中野清水遺跡 II区2層 SX20



8. 中野清水遺跡 II区2層 出土「人面」小型手捏土器



9. 同上 (62-296)



10. 中野清水遺跡 IV区土器2群



11. 中野清水遺跡 VII区 SX02出土遺物

序

国土交通省中国地方整備局松江国道事務所では、出雲市内の一般国道9号線の慢性的な交通渋滞を緩和して、円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、バイパスの建設を進めています。

この道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ関係機関と協議しながら進めています。しかし、やむをえず回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施して、記録保存を行っています。

出雲バイパスにおいても、道路建設予定地内にある埋蔵文化財について鳥根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成8年度から発掘調査を行ってきました。

本報告書は、平成13・14年度に実施した大津町北遺跡と中野清水遺跡の調査結果をとりまとめたものであります。本書が、広く郷土の文化財に関する資料として、学術、並びに教育のために活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも充分留意して行われていることへの理解をいただきたいと思うものであります。

最後に、発掘調査にご尽力をいただいた鳥根県教育委員会、並びに関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成16年3月

国土交通省中国地方整備局松江国道事務所

所長 本 田 幸 一

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成8年度から一般国道9号バイパス建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってきました。この報告書は、平成13年度と14年度に実施した出雲市中野町にある大津町北遺跡と中野清水遺跡の発掘調査の結果をとりまとめたものです。

遺跡の存在する出雲平野は、斐伊川・神戸川によって中国山地から運ばれた土砂によって原始・古代の遺跡が保存状態良好な状態で数多く埋もれています。発掘調査の結果、主として弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が発見されました。

とりわけ、中野清水遺跡から出土した奈良時代の須恵器の中に「塩治」と読める墨書があったことは、律令国家と地方の関係を考える上に注目されることです。このあたりが『出雲国風土記』に記載された古代の神門郡塩治郷に含まれていたことを裏付ける資料となりました。

本報告書がこの地域ばかりでなく、わが国の歴史を知る基礎的な資料として多少なりとも役に立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局をはじめ、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

島根県教育委員会

教育長 広 沢 卓 嗣

例 言

1. 本書は国土交通省から委託を受けて、島根県教育委員会（広沢卓爾教育長）が平成13年度と14年度に実施した出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要である。
2. 調査対象遺跡は次のようである。
 - (1) 大津町北遺跡：出雲市大津町
 - (2) 中野清水遺跡：出雲市中野町
 - (3) 中野美保遺跡：出雲市中野町
3. 事務局は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（穴道正年センター長）に置き、内田律雄、仁木聡、中野靖睦、河田健二、山根肇、岩崎健、岩崎裕介、渡辺真二、田中令子、糸賀伸文の職員が現地調査と資料整理を行った。
4. 発掘調査の調査区の分担は次の通りである。

大津町北遺跡 内田
中野清水遺跡 I区—内田、II区—内田、III区—仁木、IV区—内田、V区—仁木、VI区—内田、VII区—仁木、VIII区—内田・仁木
中野美保遺跡 I区—仁木、II区—仁木、III区—仁木、IV区—仁木、V区—内田、VI区—内田、VII区—仁木、VIII区—仁木
5. 本報告書で報告する遺跡は、大津町北遺跡と中野清水遺跡である。
6. 調査にあたっては次の方々から指導・助言・協力を得た。（順不同、敬称略）

梶山林維（國學院大学）、永岡充、唐沢陽司（宇部市教育委員会）、吉岡博之（舞鶴市教育委員会）、石松崇（香住町教育委員会）、金田明大、深澤芳樹、飛田恵美子（奈良文化財研究所）、濱崎真二（下関市教育委員会）、角弘行、岡部裕俊（前原市教育委員会）、山口誠治、加藤良彦、山崎純男、常松幹雄（福岡市教育委員会）、渡邊貞幸、古野毅（島根大学）、田中義昭、蓮川法璋（島根県文化財保護審議員）、千家和比古（出雲大社）、米田美江子（出雲市文化企画部文化財室）、佐古和枝（関西外国語大学）、藤田憲司（大阪府文化財協会）、関和彦（共立女子高校）、平野卓治（横浜市歴史博物館）山田真宏（鳥取市埋蔵文化財センター）渡辺政己（文化財コンサルタント）、義江彰夫（東京大学）、古賀信行（山口市教育委員会）、岩本次郎（帝塚山大学）、菊池照夫（法政大学）、村上恭通、田崎博之（愛媛大学）、永嶋正春、小林謙一、今村峰雄、坂本稔（国立歴史民俗博物館）、（防府市教育委員会）、高島英之（群馬県教育委員会）、松山智弘、穴沢義功
7. 発掘作業については、国土交通省中国地方整備局、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。
8. 遺物の実測・トレースには、以下の方々を協力を得た。（順不同、敬称略）

瀬川恭子、山根るみ子、来海順子、岸美佐子、佐々木順子、佐々木孝子、藤原美奈子、長谷川江美、服部麻美、高畑あゆみ、油利崇、三谷早希子、池田恵理、佐海由美子
9. 本書の執筆は、外部からいただいたVI、VIIを除き、II、IVを渡辺真二が、I、III、V、VIIIを内田律雄が行った。
10. 本書の編集は上記指導者と埋蔵文化財調査センター職員の協力を得ながら内田律雄が行った。
11. 発掘調査を行った上記遺跡の図面、写真、遺物などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

目 次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の歴史的環境	2
III. 調査の概要	6
IV. 大津町北遺跡	11
V. 中野清水遺跡	36
I区	36
II区	51
III区	120
IV区	126
V区	151
VI区	158
VII区	165
VIII区	180
VI. 中野清水遺跡出土木製品の樹種	191
VII. 出雲市中野清水遺跡出土漆・土器付着物質資料の ¹⁴ C年代測定	193
VIII. 古代神門郡塩冶郷の祭祀　—まともにかえて—	197

図 版 目 次

第1図	大津町北・中野清水遺跡位置図(1)	1
第2図	大津町北・中野清水遺跡位置図(2)	3
第3図	大津町北・中野清水遺跡位置図(3)	4
第4図	大津町北・中野清水遺跡調査区	7
第5図	大津町北・中野清水遺跡上層関係図	9・10
第6図	大津町北遺跡遺構図	12
第7図	大津町北遺跡出土遺物(1)	13
第8図	大津町北遺跡出土遺物(2)	14
第9図	大津町北遺跡出土遺物(3)	17
第10図	大津町北遺跡出土遺物(4)	18
第11図	大津町北遺跡出土遺物(5)	19
第12図	大津町北遺跡出土遺物(6)	20
第13図	大津町北遺跡出土遺物(7)	21
第14図	大津町北遺跡出土遺物(8)	22
第15図	大津町北遺跡出土遺物(9)	23
第16図	大津町北遺跡出土遺物(10)	24
第17図	大津町北遺跡出土遺物(11)	25
第18図	大津町北遺跡出土遺物(12)	26
第19図	大津町北遺跡出土遺物(13)	27
第20図	大津町北遺跡出土遺物(14)	28
第21図	大津町北遺跡出土遺物(15)	29
第22図	大津町北遺跡出土遺物(16)	30
第23図	大津町北遺跡出土遺物(17)	31
第24図	大津町北遺跡出土遺物(18)	32
第25図	大津町北遺跡出土遺物(19)	33
第26図	大津町北遺跡出土遺物(20)：上 中野清水遺跡出土遺物：下	34
第27図	中野清水遺跡I区遺構実測図(1)	37
第28図	中野清水遺跡I区遺構実測図(2)	38
第29図	中野清水遺跡I区S X01出土遺物	39
第30図	中野清水遺跡I区遺物出土状態	41
第31図	中野清水遺跡I区出土遺物(1)	42
第32図	中野清水遺跡I区出土遺物(2)	43
第33図	中野清水遺跡I区出土遺物(3)	44
第34図	中野清水遺跡I区出土遺物(4)	45
第35図	中野清水遺跡I区出土遺物(5)	46
第36図	中野清水遺跡I区出土遺物(6)	47
第37図	中野清水遺跡I区出土遺物(7)	48

第38区	中野清水遺跡Ⅰ区出土遺物(8).....	49
第39区	中野清水遺跡Ⅱ区遺構配置図.....	52
第40区	中野清水遺跡Ⅱ区土層図.....	53
第41区	中野清水遺跡Ⅱ区S X02・05実測図.....	54
第42区	中野清水遺跡Ⅱ区S X04出土遺物.....	55
第43区	中野清水遺跡Ⅱ区S B01・S X23・S D01実測図.....	57
第44区	中野清水遺跡Ⅱ区2層遺物分布図.....	58
第45区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(1).....	59
第46区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(2).....	60
第47区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(3).....	61
第48区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(4).....	62
第49区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(5).....	63
第50区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(6).....	64
第51区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(7).....	65
第52区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(8).....	66
第53区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(9).....	67
第54区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(10).....	68
第55区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(11).....	69
第56区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(12).....	70
第57区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(13).....	71
第58区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(14).....	72
第59区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(15).....	73
第60区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(16).....	74
第61区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(17).....	75
第62区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(18).....	76
第63区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(19).....	77
第64区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(20).....	78
第65区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(21).....	80
第66区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(22).....	81
第67区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(23).....	82
第68区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(24).....	83
第69区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(25).....	84
第70区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(26).....	85
第71区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(27).....	86
第72区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(28).....	87
第73区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(29).....	88
第74区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(30).....	89
第75区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(31).....	90
第76区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(32).....	91
第77区	中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(33).....	92
第78区	中野清水遺跡Ⅱ区2層2群遺物出土状態.....	93・94
第79区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S D01関係図(1).....	96
第80区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S D01関係図(2).....	97
第81区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S D01関係図(3).....	98
第82区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X20遺物出土状態.....	100
第83区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X20出土遺物(1).....	101
第84区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X20出土遺物(2).....	102
第85区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X20出土遺物(3).....	103
第86区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X20出土遺物(4).....	104
第87区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X23付近遺物出土状態.....	105
第88区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X23付近出土遺物(1).....	106
第89区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X23付近出土遺物(2).....	107
第90区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X07遺物出土状態.....	108
第91区	中野清水遺跡Ⅱ区2層S X07出土遺物.....	109
第92区	中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(1).....	113
第93区	中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(2).....	114
第94区	中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(3).....	115
第95区	中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(4).....	116
第96区	中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(5).....	117
第97区	中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(6).....	118
第98区	中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(7).....	119
第99区	中野清水遺跡Ⅲ区遺構実測図.....	121

第100図	中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(1).....	122
第101図	中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(2).....	123
第102図	中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(3).....	124
第103図	中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(4).....	125
第104図	中野清水遺跡Ⅳ区遺構配置図.....	127
第105図	中野清水遺跡Ⅳ区2層出土遺物.....	128
第106図	中野清水遺跡Ⅳ区2層遺物出土状態.....	131
第107図	中野清水遺跡Ⅳ区2層土器3群出土遺物.....	132
第108図	中野清水遺跡Ⅳ区2層土器2群出土遺物(1).....	133
第109図	中野清水遺跡Ⅳ区2層土器2群出土遺物(2).....	134
第110図	中野清水遺跡Ⅳ区2層土器2群出土遺物(3).....	135
第111図	中野清水遺跡Ⅳ区2層土器2群出土遺物(4).....	136
第112図	中野清水遺跡Ⅳ区2層土器2群出土遺物(5).....	137
第113図	中野清水遺跡Ⅳ区2層土器2・4群出土遺物.....	138
第114図	中野清水遺跡Ⅳ区3層出土遺物(1).....	140
第115図	中野清水遺跡Ⅳ区3層遺構図.....	143
第116図	中野清水遺跡Ⅳ区3層出土遺物(2).....	144
第117図	中野清水遺跡Ⅳ区3層出土遺物(3).....	145
第118図	中野清水遺跡Ⅳ区3層出土遺物(4).....	146
第119図	中野清水遺跡Ⅳ区3層出土遺物(5).....	147
第120図	中野清水遺跡Ⅳ区3層出土遺物(6).....	148
第121図	中野清水遺跡Ⅳ区3層出土遺物(7).....	149
第122図	中野清水遺跡Ⅴ区遺構実測図.....	152
第123図	中野清水遺跡Ⅴ区出土遺物(1).....	153
第124図	中野清水遺跡Ⅴ区出土遺物(2).....	154
第125図	中野清水遺跡Ⅴ区出土遺物(3).....	155
第126図	中野清水遺跡Ⅴ区出土遺物(4).....	156
第127図	中野清水遺跡Ⅴ区出土遺物(5).....	157
第128図	中野清水遺跡Ⅵ区調査区及び出土遺物(1).....	159
第129図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(2).....	160
第130図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(3).....	161
第131図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(4).....	162
第132図	中野清水遺跡Ⅵ区遺構配置図.....	165
第133図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(1).....	166
第134図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(2).....	169
第135図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(3).....	170
第136図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(4).....	171
第137図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(5).....	172
第138図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(6).....	173
第139図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(7).....	174
第140図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(8).....	175
第141図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(9).....	176
第142図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(10).....	177
第143図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(11).....	178
第144図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(12).....	179
第145図	中野清水遺跡Ⅵ区遺構配置図.....	181
第146図	中野清水遺跡Ⅵ区 S X02.....	182
第147図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(1).....	183
第148図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(2).....	184
第149図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(3).....	185
第150図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(4).....	186
第151図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(5).....	187
第152図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(6).....	188
第153図	中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(7).....	189
第154図	年代測定試料暦年較正年代 確率密度分布.....	196
第155図	年代測定試料採取土器.....	196
第156図	大津町北・中野清水遺跡出土土器・須恵器関係図(1).....	201
第157図	大津町北・中野清水遺跡出土土器・須恵器関係図(2).....	202
第158図	支脚使用想定図.....	205
第159図	古代出雲郡・神門郡関係図.....	206

I 調査に至る経緯

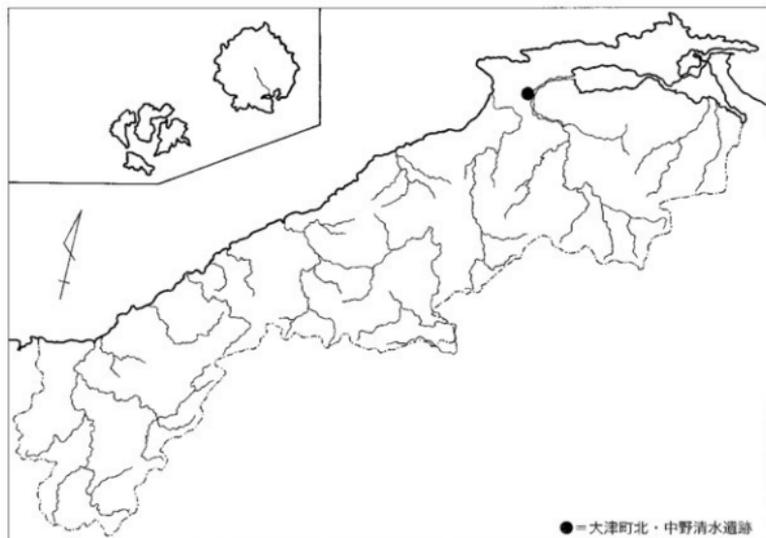
一般国道9号は、昭和41年に一次改築を完了したが、その後の交通量の増加に伴い、各所で交通渋滞が発生していた。特に出雲市内は近年都市計画化が急速に進み、現在の国道9号は朝夕はもとより、日中においても慢性的な渋滞による影響で、幹線道路としての機能が麻痺状態に達していた。出雲バイパスはこうした現状に対処するため、昭和55年と昭和58年に都市計画決定されたものである。

こうした中で、埋蔵文化財との調整が具体化したのは、平成3年度である。出雲市内の国道9号を所管する松江国土工事事務所は、平成3年9月24日付けで島根県教育委員会に出雲バイパス建設予定地内の遺跡の有無を照会してきた。これに対して県教委文化課（当時）は、平成5年2月に道路建設予定地周辺の遺跡分布調査を実施し、出雲市姫原町上ノ島西遺跡、出雲市小山町蔵小路西遺跡、出雲市渡橋町渡橋沖遺跡、出雲市天神町天神北本町遺跡、出雲市白枝町白枝遺跡の5遺跡を発見するとともに、遺跡の存在する可能性の高い要注意箇所4箇所をそれに追加して、平成5年3月31日付けで遺跡の存在と文化財保護法上の諸手続き、並びに取り扱いについて協議が必要な旨を回答した。両者の協議の結果、平成8・9年度に姫原西遺跡と蔵小路西遺跡を島根県埋蔵文化財調査センター（当時）が発掘調査し、報告書を刊行した。既刊の報告書は次の通りである。

『姫原西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1 1999

『蔵小路西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2 1999

大津町北遺跡・中野清水遺跡・中野美保遺跡はこれらの東側に存在する遺跡で、平成11年度に行った遺跡範囲確認調査を踏まえ、平成13年度と14年度に発掘調査を島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。本報告書で報告する遺跡は、大津町北遺跡と中野清水遺跡である。



第1図 大津町北・中野清水遺跡位置図(1)

II 遺跡の歴史的環境

大津町北遺跡と中野清水遺跡は、それぞれ島根県出雲市の大津町と中野町に所在し、出雲・斐川平野のほぼ中央に位置する(第1図～第3図)。北に北山山系、南に中国山地、東は宍道湖、西に日本海に囲まれた県内最大の平野で、斐伊川・神戸川の沖積作用によって形成された。遺跡の東に斐伊川、西には中野美保遺跡²が隣接し斐伊川河床には、斐伊川鉄橋遺跡³が存在する。

縄文海進の頃の出雲・斐川平野は海水面が上昇し日本海が入り込んで古宍道湖とつながり大きな古宍道湖湾を形成していた。平野の沖積が始まったのは海進のピーク(約6000年前)以降、海水面の後退に伴い斐伊川・神戸川から流れ込んだ上砂により沖積が始まったと考えられている。その後、二度にわたり三瓶山が噴火し、これらの火山灰等の噴出物も古宍道湖湾に流れ込み出雲・斐川平野の中央部が形成され、東に古宍道湖、西に神門水海ができた。多少の変動はあるもののその後はこの状態が長らく安定した。

中世になり中国山地で製鉄が盛んになり原料の砂鉄を採取するために鉄穴流しが各地で行われるようになった。これによって搬出する大量の土砂が川を下り、当時両河川が流れ込んでいた神門水海を埋め、さらに流れを変えた斐伊川は、古宍道湖を東に後退させた。この頃から斐伊川は大きな氾濫を繰り返し度々流れを変えたが、江戸時代初頭に宍道湖に流れ込む現在の川筋になり、出雲・斐川平野を形成するに至った。

出雲・斐川平野で最も古い遺跡としては、縄文時代早期末の菱根遺跡(大社町)と上長浜貝塚(出雲市)が挙げられ、前期には三田谷遺跡(出雲市)に人々が暮らし始める。この頃の平野部は縄文海進で古宍道湖湾となっていたため遺跡は山地あるいは丘陵地に見られる。後期になると海水面が低下し平地に進出するようになり神西湖南岸(湖陵町)や矢野遺跡⁸、後谷遺跡⁹が現れる。

弥生時代になると生活空間は平野全域に広がり集落遺跡群を形成するようになる。神門水海の周辺では四絡遺跡群⁵～⁸、天神遺跡群¹³、古志遺跡群¹²、神西湖南岸の遺跡群、大社町の原山遺跡・鹿倉山遺跡等の遺跡群が形成され、古宍道湖西岸に青木遺跡¹⁶、神門水海と古宍道湖の間で斐伊川左岸に位置する中野遺跡群が形成される。この他、墓域としての西谷墳墓群¹⁰が形成し始める。大津町北遺跡・中野清水遺跡¹は、中野遺跡群に属し中野美保遺跡²とともに中核をなしていたと思われる。

古墳時代前期の古墳は少なく大寺古墳¹⁷、山地古墳(出雲市)等、数えるほどしかないが、後期になると大念寺古墳⁹、上塩冶築山古墳(出雲市)など出雲西部でも最大クラスの首長の墓が築かれるようになる。また、山地や丘陵地の斜面に多数の横穴墓が造られ横穴墓群を形成するようになる。その代表として上塩冶横穴墓群¹¹や神門横穴墓群などが挙げられる。出雲・斐川平野にはこれら古墳や横穴墓を造るだけの権力と経済力が存在したことが、この事から窺うことができる。

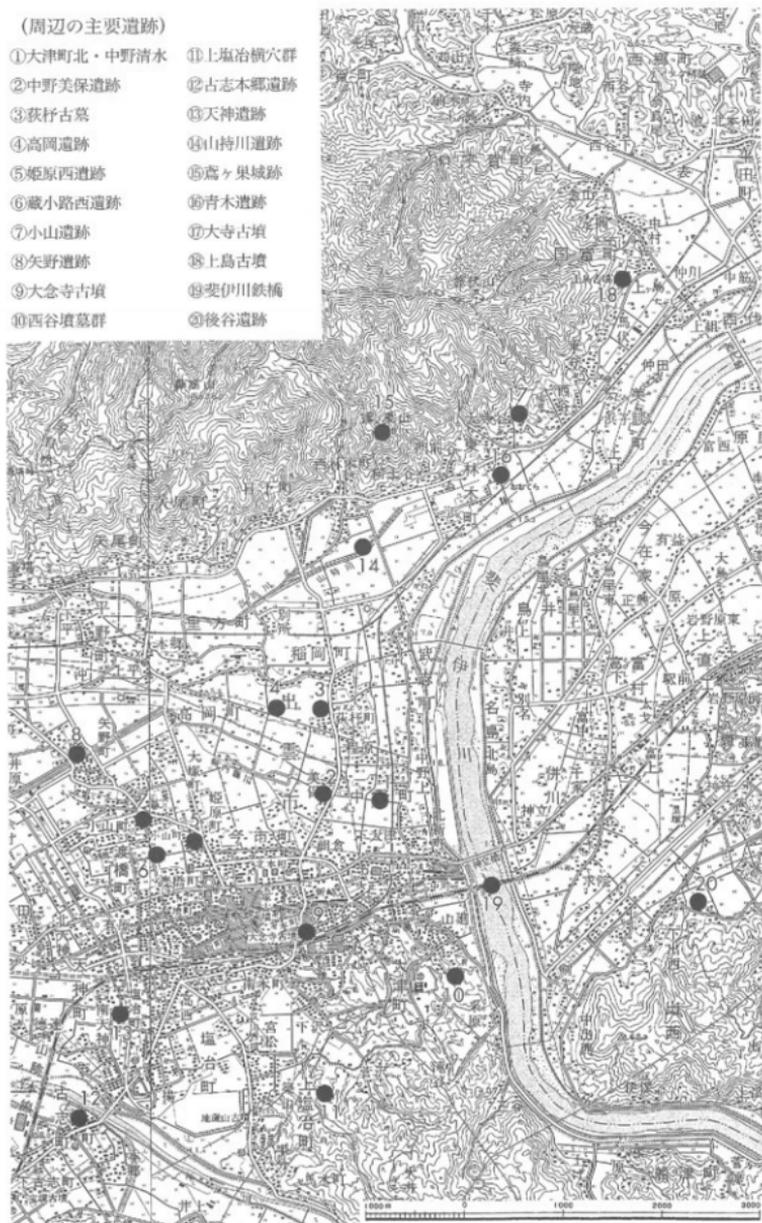
近年の調査で出雲・斐川平野で『出雲国風土記』関連の遺跡が多数発見されている。出雲郡郡家正倉と推定される後谷遺跡⁹、神門郡郡家と推定される古志本郷遺跡¹²、官衙関連遺跡の三田谷I遺跡(出雲市)、神門寺境内廃寺等がそれに当たる。この他にこの時期の墳墓として朝山古墓、小坂古墳、光明寺3号墓、菅沢古墓など石櫃を伴う火葬墓が見つかった。また、青木遺跡¹⁶からは多数の木簡や埴書土器、祭祀物が出土しており、この時期の風俗習慣を知る貴重な資料となっている。



第2圖 大津町北・中野清水遺跡位置図(2)

(周辺の主要遺跡)

- | | |
|------------|---------|
| ①大津町北・中野清水 | ⑪上麻治横穴群 |
| ②中野美保遺跡 | ⑫古志本郷遺跡 |
| ③荻村古墓 | ⑬天神遺跡 |
| ④高岡遺跡 | ⑭山持川遺跡 |
| ⑤姫原西遺跡 | ⑮高ヶ果城跡 |
| ⑥藏小路西遺跡 | ⑯青木遺跡 |
| ⑦小山遺跡 | ⑰大寺古墳 |
| ⑧矢野遺跡 | ⑱上高古墳 |
| ⑨大念寺古墳 | ⑲斐伊川鉄橋 |
| ⑩西谷墳墓群 | ⑳後谷遺跡 |



第3図 大津町北・中野清水遺跡位置図(3)

中世城館としては、鷹ヶ巣城¹⁵、半分城、大井谷城がある。天神遺跡¹³、矢野遺跡⁸、蔵小路西遺跡⁶からは居敷跡が発掘され、蔵小路西遺跡の屋敷跡は「國人領主朝山氏」の居館跡と推定されている。埋葬関連では、龍泉系青磁を伴出した荻杵古塚³や姫原西遺跡⁵の木棺墓などがある。

参考文献

1. 川中義昭『中海・宍道湖岸西部域における農耕社会の展開』『出雲 神庭荒神谷遺跡』第1冊 鳥根県教育委員会1996
2. 足立克巳『姫原西遺跡』一般国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1鳥根県教育委員会1999
3. 足立克巳『蔵小路西遺跡』一般国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2鳥根県教育委員会1999
4. 勝部智明『古志本郷遺跡Ⅱ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XI鳥根県教育委員会2001
5. 松尾充晶『古志本郷遺跡V』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVI鳥根県教育委員会2003
6. 『遺跡が語る古代の出雲』出雲市教育委員会平成9年
7. 『弥生時代のひかわ』斐伊川町教育委員会1999
8. 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』鳥根県教育委員会1980
9. 川上稔・湯村功『上長浜貝塚』出雲市教育委員会1996
10. 今岡 三・梶田勝造『三田谷Ⅰ遺跡 (Vol.1)』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V鳥根県教育委員会1999
11. 熱田貴保・難波孝之ほか『三田谷Ⅰ遺跡 (Vol.2)』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VIII鳥根県教育委員会2000
12. 伊藤智『三田谷Ⅲ遺跡』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X鳥根県教育委員会2000
13. 川上稔・松山智弘『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』出雲市教育委員会1991
14. 角田徳幸『建設者新庁舎建設に伴う天神遺跡発掘調査報告書IV』出雲市教員委員会1986
15. 『天神遺跡7次発掘調査報告書』出雲市駅付近連続立体交差事業地内 出雲市教育委員会1997
16. 片倉愛美『地中建設弘済会事務所建設に伴う天神遺跡11次発掘調査』出雲市教育委員会2001
17. 高橋智也『天神遺跡 (第12次発掘調査)』都市計画道路山陰本線南沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会2002
18. 川上稔『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会1986
19. 今岡清・三浦清ほか『史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書』出雲市教育委員会1984
20. 松本岩雄ほか『鳥根県古代文化センター調査研究報告書4 上塩冶築山古墳の研究』鳥根県古代文化センター1999
21. 近藤正『出雲・荻杵発見の骨甕器』『考古学雑誌』第54巻3号

III 調査の概要

出雲・畿川平野の中央を日本海に注ぐ一級河川斐伊川の左岸に、大津町北遺跡と中野清水遺跡は存在する(第1～3図)。発掘調査の結果、これらの遺跡は、斐伊川によって運ばれた莫大な上砂によって厚く覆われ、遺物の保存状態は良好であった。しかし、長い間に堆積した土砂は斐伊川を天井川にし、このあたりの平野の地下には大量の地下水が含まれることとなった。その為、調査区内ではいたるところから湧き上がる伏流水に悩まされ、発掘調査は困難を極め、十分な記録が取れないところもあった。

中野清水遺跡では、調査区を道路建設予定地に沿って便宜上、西側から、Ⅷ区、Ⅶ区、Ⅳ区、Ⅲ区、Ⅴ区、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅵ区とした(第4図)。大津町北遺跡は、中野清水遺跡Ⅵ区の一畑電鉄電車線路を挟んだ東側に隣接してある。これらの調査区は、ちょうど出雲平野を東西に横断するかたちで、長さ約420mに及ぶ。

各調査区において、遺構や遺物がみられるのは人別して三層あった。各調査区の上層の比較は第5図に表した。大津町北遺跡と中野清水遺跡Ⅶ区に1層がないのは、一辺約9m四方の矢板を組んだからである。

1層は近世以降～現代までで、水田耕作上の下は幾層かの流砂層がみられた。流砂層は1層にしかなかった。斐伊川の洪水砂と考えられる。それぞれの流砂層の下層には水田跡があり、近世以降に水害が幾度か繰り返されたことが推定された。発掘調査にあたってはこの1層については重機で取り除き、2層から精査を行うこととした。

2層は六世紀後半から中世にかけての層で、大津町北遺跡と中野清水遺跡のⅠ区・Ⅴ区・Ⅶ区・Ⅷ区において最上層に水田跡を検出した。中世の遺構は、大津町北遺跡、中野清水遺跡のⅠ区・Ⅱ区で検出した。3層は弥生時代中期から古墳時代中期にかけての層で、大津町北遺跡と中野清水遺跡の全ての調査区に認められた。

大津町北遺跡の遺構は、近世の水田跡に関係すると思われる幅80cmの溝SD01と中世の集石遺構を検出した。遺物は7世紀代～8世紀の須恵器・土師器、壘形土器、土製支脚、製塩土器、小型手捏土器、土錘等が出土した。3層では古墳時代前期と考えられるSX01とその付近に土器溜まりが検出された。土器群は弥生時代末から古墳時代前期の土器で、壘形土器、壺形土器、高坏、低脚坏、鼓型器台を主とする。この中には生漆採集容器が1点含まれていた。4層からは若干量の弥生時代後期の土器が出土した。

中野清水遺跡では、Ⅰ区で中世と考えられる水田の畦の下から板の上に土師質土器を置いた遺構SX01や、曲物の入った土坑SK02等が検出された。遺物の中には4枚の銭貨があり、そのうち3枚が渡来銭で、うち1枚は「貫泉」である。須恵器・土師器は7世から8世紀のもので、その他に、小型手捏土器や土錘がある。3層からは多くの弥生時代末から古墳時代前期の土器が出土した。器種構成は大津町北遺跡の3層の土器群に似るが、中には器高88.1cmの大型の壺形土器もある。

Ⅱ区の中世の遺構は、4～5cmの礫を径60cmほどに集石したSX02・05や土鍋と土師質土器を出土したSX04がある。古代の遺構には、掘立柱建物跡SB01、溝状遺構SD01、鍛冶炉跡等がある。古代の遺物が最も多く出土したのはこのⅡ区であった。壘や壘形土器、土製支脚の炊飯用具の他、小型手捏土器をはじめとする各種の土製模造品が多量に廃棄された状態で出土した。特にSD01の付



第4図 大津町北・中野清水遺跡調査区

近に多かった。小型手捏土器の中には胴部外面にいわゆる「人面」を表したものもある。鉄製品が多いのも特徴である。須恵器・土師器の中には8世紀代のいくつかの墨書土器がみられた。その中に「塩治」と読める墨書須恵器があり注目される。3層からは弥生時代末から古墳時代前期の土器が出土した。器種構成は大津町北遺跡の土器群に似るが、山陰以外からの搬入品、又はその影響を受けたと考えられる土器が目につく。

Ⅲ区は2層において7～9世紀の須恵器・土師器が出土した。土師器の食器類の多くは赤彩土師器で、墨書がみられるものもある。この他、甕形土器、土製支脚、製塩土器等がある。3層からは弥生時代末から古墳時代前期の土器が出土した。他の調査区に比較して遺物の出土量が少ないため器種構成ははっきりしない。土器の中には金工細工の魚丁を連想させる竹管文をもつ特殊なものもある。また、遺物は発見されなかったが径2mの土坑があった。

Ⅳ区の2層では調査区の東側に6世紀後半から8世紀にかけての土器群を検出した。その内の土器2群は6世紀末～7世紀初頭の一群で、須恵器、土師器、甕形土器、甕、土製支脚等で構成されたセットと捉えることができる良好な資料となった。この土器2群の南に接して須恵器大甕が底部を故意に打ち欠いて掘え置かれていた。3層では調査区の東端で、珪瑯製勾玉、滑石製模造品、小型手捏土器等古墳時代中期の祭祀遺物が出土した。調査区の西側では弥生時代中期から古墳時代前期の土器が出土した。これらに混在して鉄旗があった。また、土製の生漆採集容器が1点あった。それらを取り除くと土坑P1とその周辺に7カ所の小ピットが検出された。

V区の2層からは甕形土器、小型手捏土器、土鍾、石製紡錘車等が出土したが、量は他の調査区に比較して少ない。3層からは弥生時代末から古墳時代前期の土器が出土した。炊飯に使用された大型の甕形土器、鉢形土器がある。4層からは弥生時代中期の甕形土器と壺形土器が出土した。

Ⅵ区の2層は7～8世紀の須恵器・土師器の食器類の他、甕形土器、土製支脚、製塩土器、小型手捏土器、土鍾等があり、遺物の構成はⅡ区に似ている。須恵器の中には漆専用容器と考えられるものもある。3層からは弥生時代末から古墳時代前期の土器が出土した。出土量は他の調査区に比べて少ないが、比較的小型の甕が多い。舟形の土製品もある。

Ⅶ区の2層からは奈良時代の少量の遺物が出土した。小型手捏土器や土玉がある。3層からはほぼ南北方向に並ぶ弥生時代末から古墳時代前期の土器群を検出した。壺形土器、鼓形土器、高坏、低脚坏の大型のものが多くの特徴である。中には華構造船を模した土製品もある。さらに、大津町北遺跡やⅣ区でみられた生漆採集容器が2点出土した。

Ⅷ区の2層はほとんど遺物が出土しなかった。3層は薄く、弥生時代末から古墳時代前期の土器群SX02を検出した他には、大型の甕形土器1個を除き、この時期の遺物はあまりみられなかった。4層からは弥生時代中期の土器、石器が出土した。この時期には鋳造鉄斧が伴う。

大津町北遺跡・中野清水遺跡の両調査区を通してみると、この平野が一面に水田化する近世以前は、全体的に、いくらかの起伏を持ちながらも、西高東低の地形であったことが知られる。つまり現在の斐伊川に向かい低くなっていることになる。新しい時期の遺物が西に行くに従い少なくなり、逆に古い遺物が高いレベルに出土しているのはその為である。斐伊川が現在天井川であることを考慮すると、原始・古代には両遺跡から斐伊川を見下ろせたであろうと推測される。以下、調査の概要を報告するが、弥生時代後期から古墳時代前期の土器については、一応の日安として、赤沢編年と松山編年に依拠して説明することとする。

IV 大津町北遺跡

大津町北遺跡は中野清水遺跡Ⅵ区の東側に位置し、一畑電鉄の軌道で隔てられ現在の区画上、大津町北遺跡の遺跡名が付けられている。今回の調査結果から、遺構や、出土遺物の性格、また、連続した地層からも中野清水遺跡と同一の遺跡と考えられる。このことを前提に大津町北遺跡と中野清水遺跡の層位を統一して表した(第5図)。

2層の遺構 中世以降(第6図上、図版1上)

2層からは溝状遺構のSD01とピット状遺構のSX02が検出された。

SD01は幅約40～80cm、深さ約5～8cm、長さは調査範囲内で完結せず範囲外へ続いている為、不明であるが現状で6.6m確認できた。伴出遺物がないため正確な時期は特定できないが、上面から掘り込まれたものと思われ、近世の水田に伴う水路ではないかと思われる。

SX02は長径約60cm、短径約40cmの卵形のピット状遺構である。伴出遺物がないため時期は不明であるが中世の遺構と思われる。SX02が単独ピットか他の遺構に付随する遺構なのかは、今回の調査範囲が非常に狭いため不明である。

3層の遺構 弥生時代末～古墳時代前期(第6図下、図版1下)

3層からはSX01、SD02、P1、P2、P3が検出された。この5つの遺構は検出レベルから2グループに分けることができる。SX01とP1の3層では比較的新しいグループとSD02、P2、P3の比較的古いグループである。共に弥生時代末から古墳時代前期である。

SX01は上端直径2.5～3メートル、下端直径2.1～2.4メートルの不整形な円形をした土壇である。深さは約30cmであるが、後の削平(3層c)により上面がなくなっていると考えられ、本来は3層bから掘り込まれ、その深さは60cm程度あったと思われる。遺構の性格は不明であるが堅穴住居、或いはそれに付随する遺構、土塚墓等と考えられるが、今回の調査では判然としなかった。SX01のすぐそば北東側から大量の古式土師器が出土しており、これらとの関連も考えなければならない。類例として中野清水遺跡Ⅳ区P1と出雲市長廻遺跡SI01の貯蔵穴などがある。

P1は直径約40cmのピットである。SX01との関連は不明であるが、ほぼ同時期と思われる。P1周辺からは大量の古式土師器が出土しているが関連は不明である。

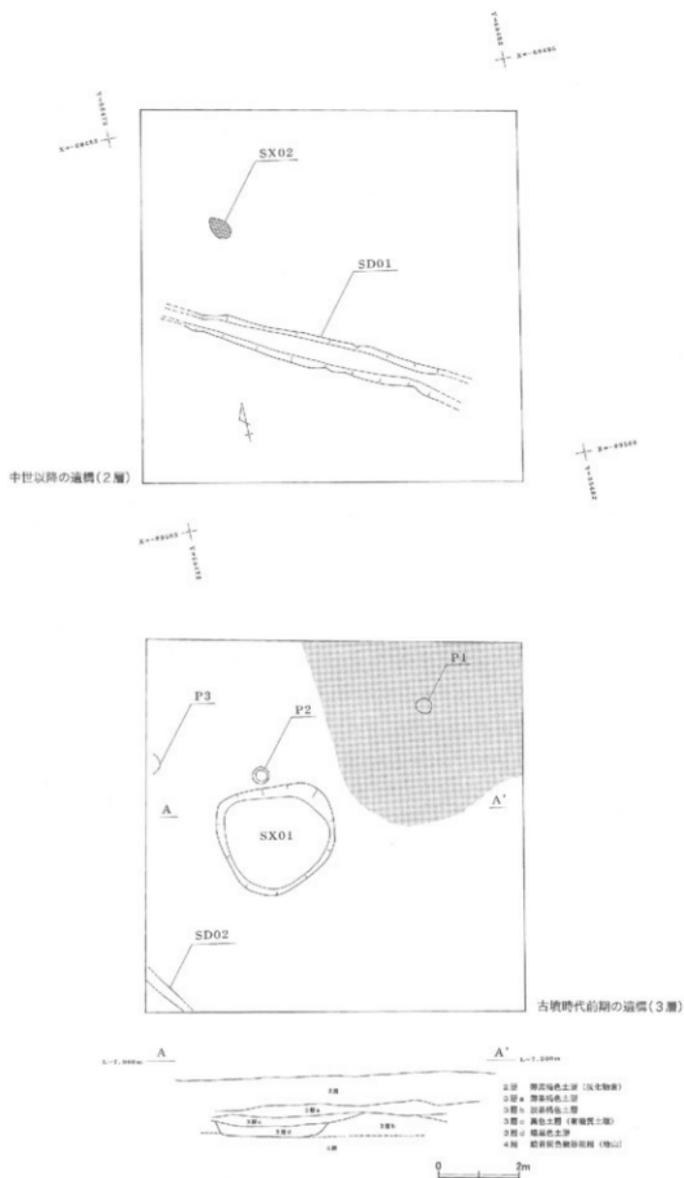
P2は直径約40cm、深さ約8cm。P3は遺構の大半が調査区外のため大きさ、深さ共に不明である。SD02は幅約20cmで長さは不明である。P2、P3、SD02それぞれ遺構の性格、関連について今回の調査では、明らかにしなかった。

遺構ではないが廃棄されたと考えられる弥生時代末～古墳時代前期の古式土師器が1箇所から大量に出土した。第6図下の網掛け部分がそれにあたる。ここからは、コンテナ数が100箱を超える古式土師器が出土した。その範囲が20㎡弱と狭いことを考えると特筆すべきことである。この部分に何らかの遺構があった可能性も考えられるが平面観察では遺構を認めることができなかった。ただ、2層と3層各層の色が非常に似かよっているため検出できなかったのかもしれない。

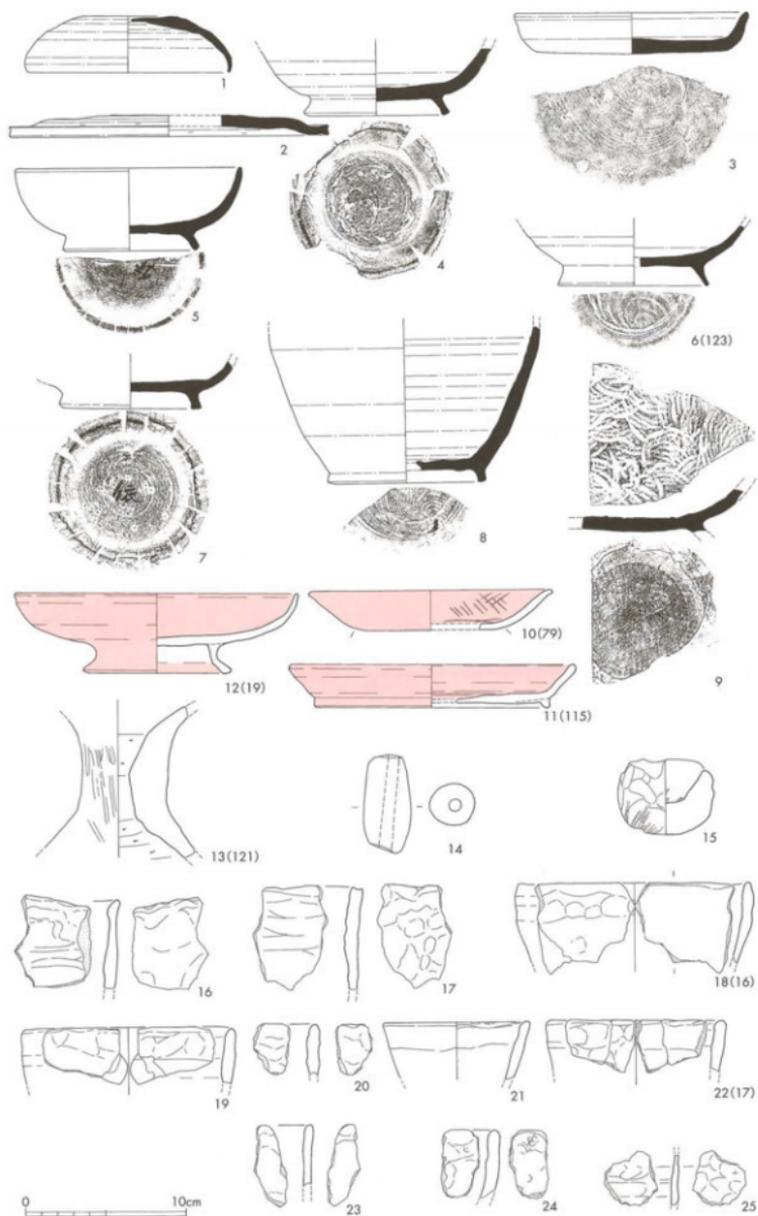
尚、出土した遺物のほとんどが現位置を保っていると思われる(図版2下)。

2層出土の遺物(第7・8図、図版3)

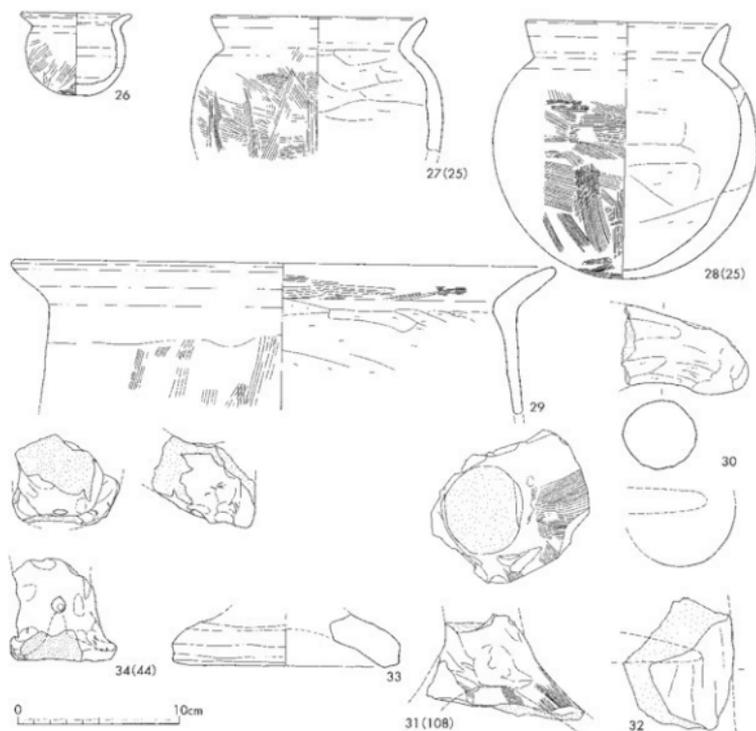
1～9は7世紀末～8世紀の須恵器、10～12は赤彩土師器片、13は土師器の器台、14は土師、15は小型手捏土器、16～25は8世紀以降の製塩土器、26～29は土師器甕、30～32は土製支脚である。



第6図 大津町北遺跡遺構図



第7圖 大津町北遺跡出土遺物(1)



第8図 大津町北遺跡出土遺物(2)

26～34は7世紀末～8世紀頃のものである。

1・2は須恵器蓋で内・外面共に回転ナデ調整。3は須恵器皿Aで底部外面に回転糸切りが認められる。4は高台付杯Bで底部内面に使用痕が認められた。5～7も高台付杯Bで底部外面に回転糸切りの痕跡がありその上に墨書を認めた。5・7は「依」。6は「＝」状の文字の断片である。8・9は高台付の壺で8の底部外面には回転糸切りがあり、9の底部外面と内面にタキ痕と底部外面に一条のヘラ跡が認められた。

10～12は赤彩土師器杯で底部外面以外ほぼ全面に赤彩されている。10・11は8世紀、12は7世紀末から8世紀である。10の内面には暗文が認められた。

13は7世紀の土師器の器台。外面はミガキ、受部内面はナデ、脚部内面はヘラ削りで胎土が荒く鈍い橙色を呈している。全体に荒い造りである。14は土錘である。長さ6.3cm、最大径2.8cm、孔径0.8cm、重さ49.66gで黒褐色を呈し、やや胎土が荒い。15は小型手捏土器。14・15とも時期不明。16～25は8世紀以降の製塩土器である。製塩土器は大津町北遺跡から中野清水遺跡Ⅵ区・06T・Ⅱ区に掛けて多く出土している。

26～29は7世紀末～8世紀頃の土師器の甕型土器で外面は目の粗いハケ目で内面はヘラ削り、

27・28の胎厚は約1~1.5cmある。26はこれらのミニチュア土器である。

30~34は7世紀末~8世紀頃の土製支脚の破片で、今回の調査では全体を復元できる資料は得られなかった。

3・4層出土の遺物(第9~26図、図版3~13)

4層からは、わずかではあるが弥生後期後半の土器が出土した(35~38)。35は鼓形器台で九重式、36は甕型土器で草田2期。口縁に櫛状工具で波状文が一条、肩部に二条施されている。37・38は共に甕型土器で的場式、口縁に並行沈線が施され肩部に貝殻復縁による刺突文が描かれている。

3層からは弥生時代末から古墳時代前期の古式土師器が大量に出土した(39~183)。そのほとんどが第6図下の網掛け部分からの出土である。器形別では圧倒的に壺・甕類が占め続いて鼓形器台、高坏、低脚坏である。少量ではあるが注口土器、甕、漆容器が見られた。祭祀に関わる何らかの遺構があったのかもしれない。

39~95は壺・甕・鉢類、96~99は注口土器、101~103は山陰系以外の器台、105・106はミニチュア土器、107・108は九州系陶、109は生漆採集容器、104・110・111は蓋、110・111は脚付壺の蓋である。112~115は底脚付壺、117~120は甕型土器、121~156は高坏・低脚坏類、157~183は鼓形器台である。

壺・甕・鉢類39~95(第9図~第20図)

39~41は草田5期で40の底部は穿孔されている。42・44~56は草田6期で42・44~46・49・50・52~56は大木権現山式(以下大木式)、47・51は小谷1式である。42~45は胴部が、やや短く丸味を帯びた小型の甕型土器。46~56は倒卵型の甕で48は赤彩が認められ、45も赤彩の可能性が高い。52は底部に、53は胴部に穿孔が認められ53は焼成前穿孔の可能性が高い。51の底部にも穿孔の可能性が高い。

57~63・67は草田7期で57~59は小谷2式である。57~59は器高20~30cmの中型甕、60は赤彩された小型丸底甕、61・63は小型広口丸底甕、62は直口壺である。63は赤彩の可能性があり、布留0式併行期と思われる。

64~67は小型甕で64と66は単純口縁で畿内系の様相を呈している。胎土が在地のものであるので搬入ではなく在地模造と思われる。65は複合口縁で口径が胴径よりやや大きく口縁が直立気味に立ち上がり肩部は、なだらかで胴部がやや張り出している。頸部から肩に掛け施文され、一条の沈線と貝殻復縁による不規則な刺突文が施されている。全体にアンバランスなイメージである。山陰系の土器で胎土も在地のものと思われるが出雲平野の土器とは、やや趣を異とする。

68は中型の甕、小谷3式で列点文が施されている。69も中型の甕でヘラ状工具による波状文が一条施されている。70は小谷3式の小型丸底甕で胴部外面に縦約3cmのヘラ印が見られる。

71は単純口縁の小型丸底甕で胴部外面の下2/5はハケ調整、それより上から口縁外面及び口縁内面に掛け丁寧な横ミガキがされている。胎土は在地のもので畿内系在地模造であると思われる。72はV様式の甕もしくは壺の底部で平底である。3層から出土した壺甕類のほとんどが丸底であるのに対し平底はわずかである。

73は片口鉢の小片である。この器形の完形品が中野清水遺跡IV区(第121図45)から出土している。74は中型鉢の大木式、76は大型鉢、小谷3式である。76の口縁内面は二次焼成による剥離が著しく内部で火を使用した可能性がある。75・77は草田7期の甕もしくは鉢である。

78～82は草田6期の中型の壺型土器。78・80～82は大木式、83は中型の壺型土器の口縁部～肩部で小谷1～2式である。84（小谷1～2式）・86は口縁が短くやや内傾し肩部が少し張っている。85（大木式）・87（小谷1～2式）はやや大型の壺型土器で共に口縁部に穿孔が見られる。87は1孔のみ、85は口縁部の残りが少なく1孔だけ確認できた。88は小谷1～2式。89～92は小谷2式である。

93は口縁が直口状の壺である。94・95は胎土が明らかに在地とは異なり搬入と考えられ北部九州～西瀬戸内地域の上器と思われる。94は器壁が厚く胎土には砂粒を多く含む。

96～99は注口土器である。97が草田5期でそれ以外は草田5～6期である。99の器面には僅かではあるが赤色顔料が残っていた。100～103は器台で100は周防系の在地模造と思われる。方形と思われる透かしを認めた。101～103は畿内系在地模造である。

104は蓋で同型が中野清水遺跡VIII区（第151図26）で出土している。105・106はミニチュア上器。107・108は九州系在地模造の甗。

109は生漆採集容器。当初、内部にはほとんど残存物がなかったため用途不明であったが、中野清水遺跡IV区（第121図51）と同VIII区（第137図27・28）から同型の土器が出土し、その内部に漆が残存していた事から生漆採集容器と判断した（図版14）。

110・111は半球形状の蓋で上部に4つの小さな孔がある。直口壺あるいは無頸壺の蓋に使用されたと思われる。110は貝殻復縁による刺突文と綾杉文が丁寧に施され施文の後、穿孔されている。一方、111は無紋でミガキ調整のみである。どちらも精製土器ではあるが対照的である。

112～114は底脚付壺で112は無頸壺、115は複合口縁の底脚付小型壺型土器である。いずれも胎土は在地のものとかかわらない。116～120は甗型土器である。今回の調査では口縁から底部までの一貫した資料は得られなかった。

高坏類 121～139・142～146（第22～23図）

121～123・125は大木～小谷式、126～139は小谷2～3期である。135～139・142・143は畿内系の高坏に似るが胎土が在地のものであるので在地模造と思われる。ただ、137は赤彩の可能性があり、胎土がやや在地とは異なるので搬入の可能性が有る。135・136・139・142の脚部は裾がラッパ状に大きく広がっている。

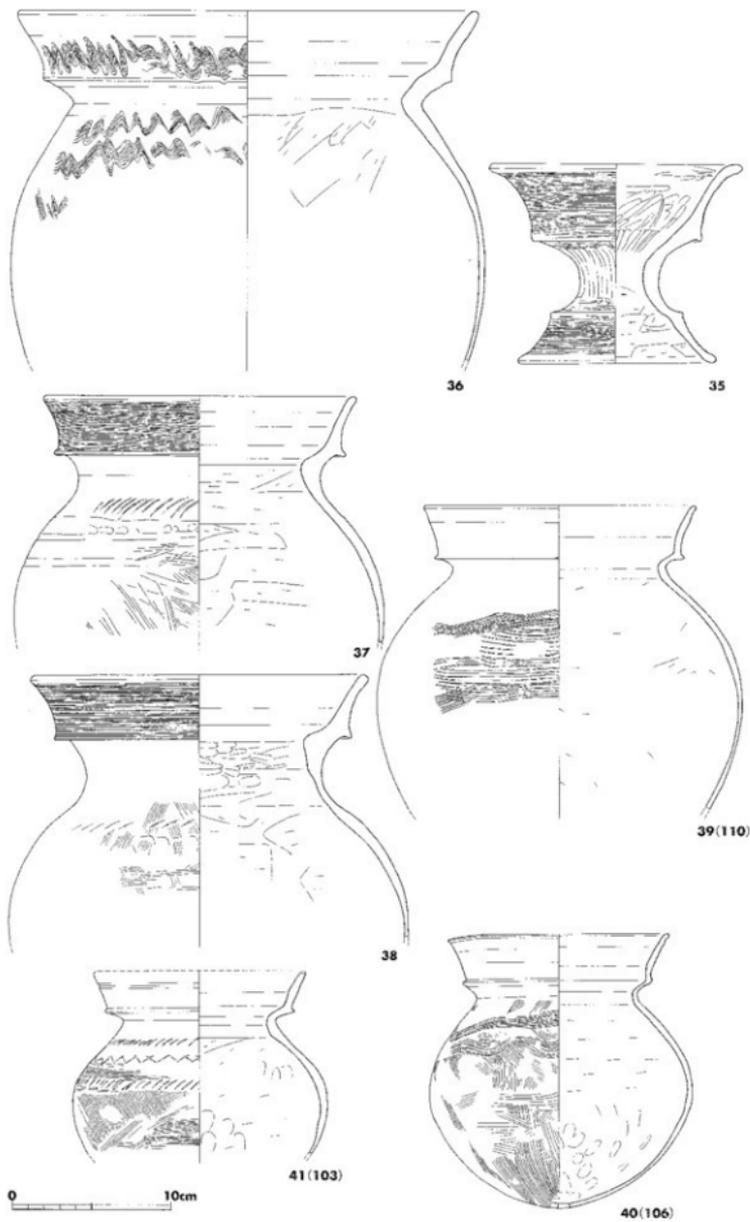
低脚坏類142・147～156（第23図）

140・141は口縁部下端に稜を有し口径が30cmを越える大型低脚坏で、胎土は在地である。小谷2～3期に属する。この器形を低脚坏とするか高坏とするかは迷うところではあるが、ここでは便宜上低脚坏に入れた。類例としては隣接する中野清水遺跡VII区（第143図77～79）と中野美保遺跡から出土しているがいずれも口縁を有しない。今回、唯一141は口縁から途中までではあるが脚部にかけて残存していた。こうした稜を持つ大型低脚坏には幾つかのバリエーションがあるようで中野清水VIII区第143図74のように高坏にも見られる。

149は小型の低脚坏である。橙色を呈し外面に二次焼成が見られる。150・152・155の脚部内面には2本ないし3本のへら記号状のものが印されていた。

鼓形器台157～183（第24～26図）

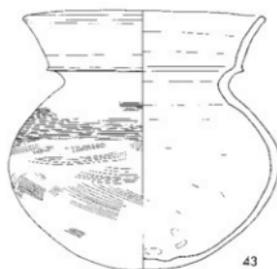
157は草田5期、158～167は大木式、168～171は小谷2式、172～175は小谷2～3式、177～183は草田7期である。大半の口径20～30cmでそれ以外に少量の小型器台（175・176）が出土した。



第9圖 大津町北遺跡出土遺物(3)



42(108)



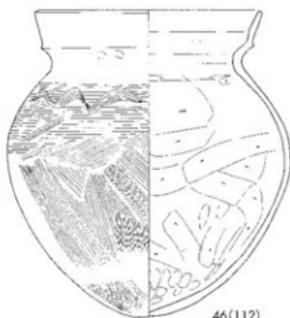
43



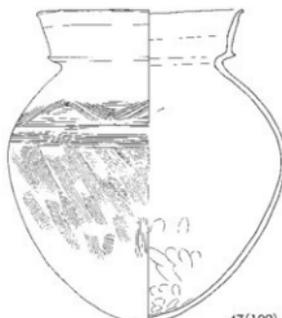
44(103)



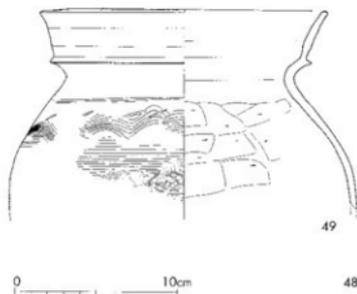
45(103)



46(112)



47(109)



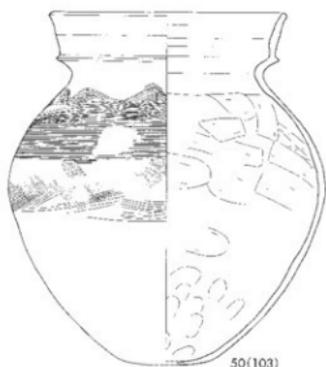
49



48(109)

0 10cm

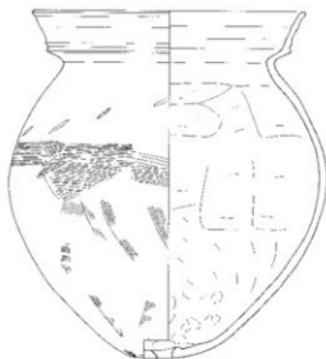
第10図 大津町北遺跡出土遺物(4)



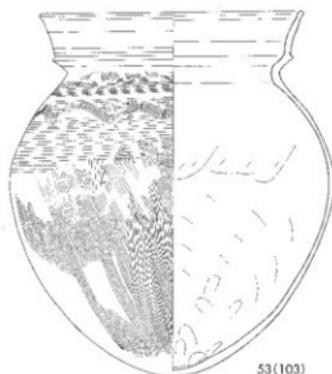
50(103)



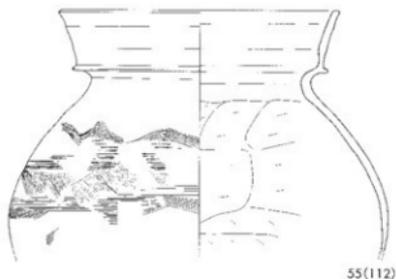
51(110)



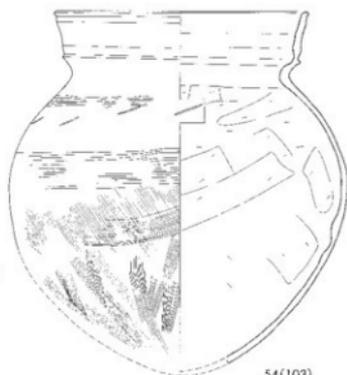
52(110)



53(103)



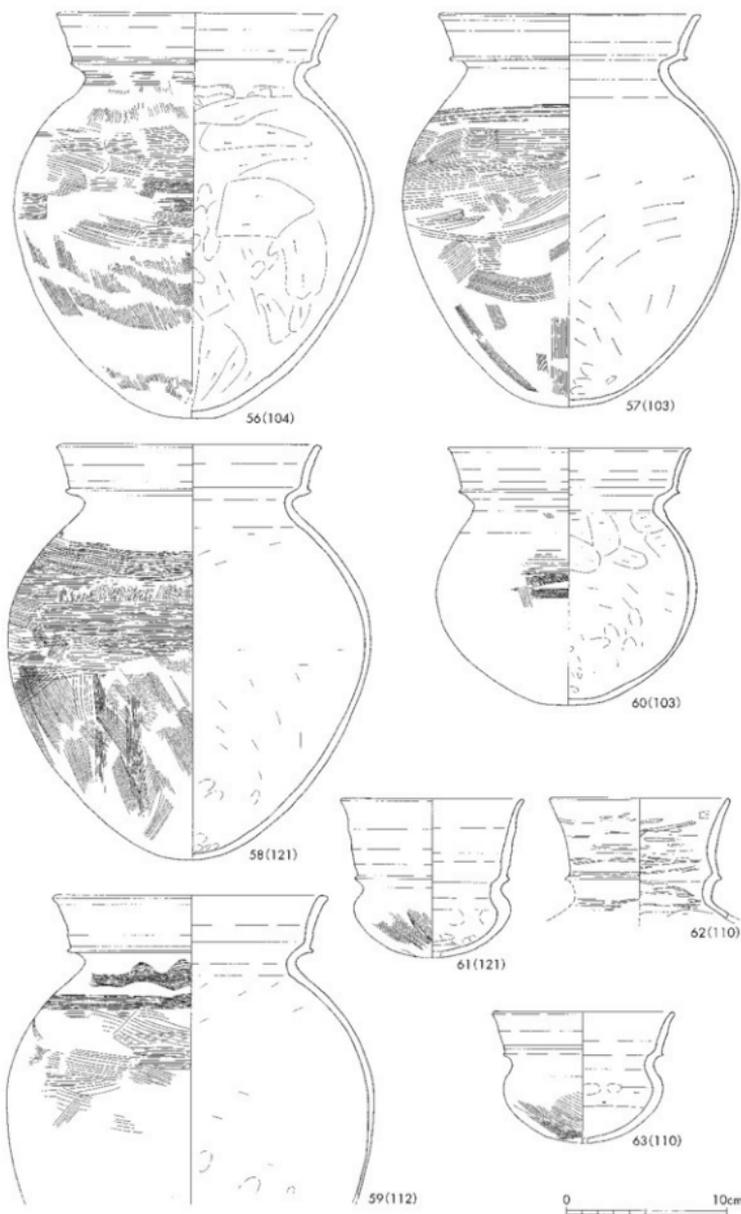
55(112)



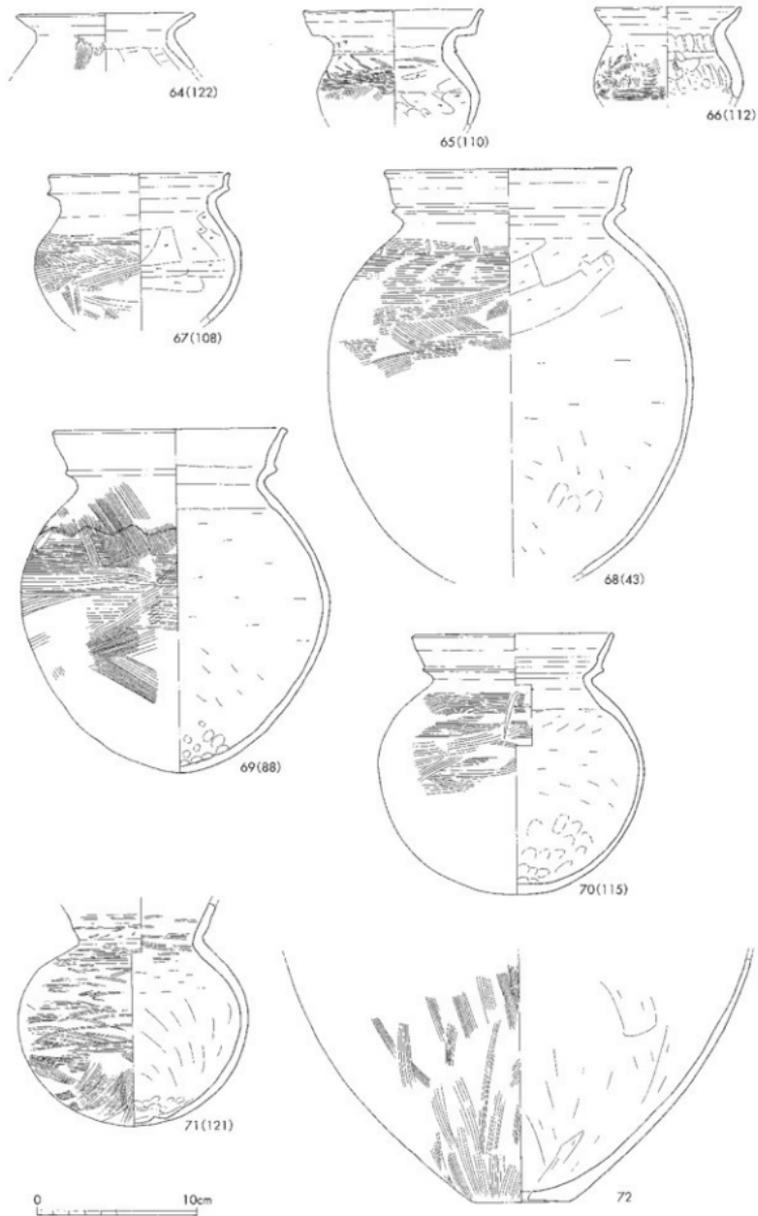
54(103)

0 10cm

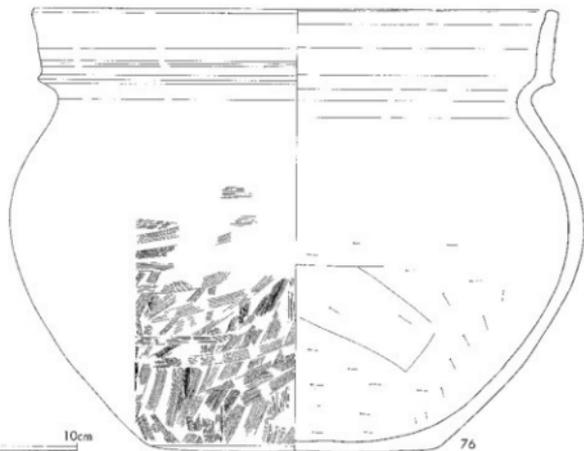
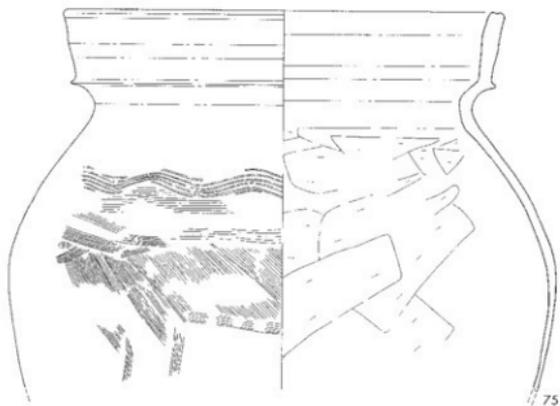
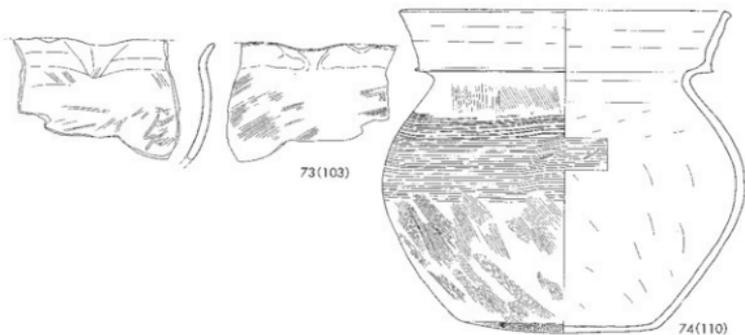
第11圖 大津町北遺跡出土遺物(5)



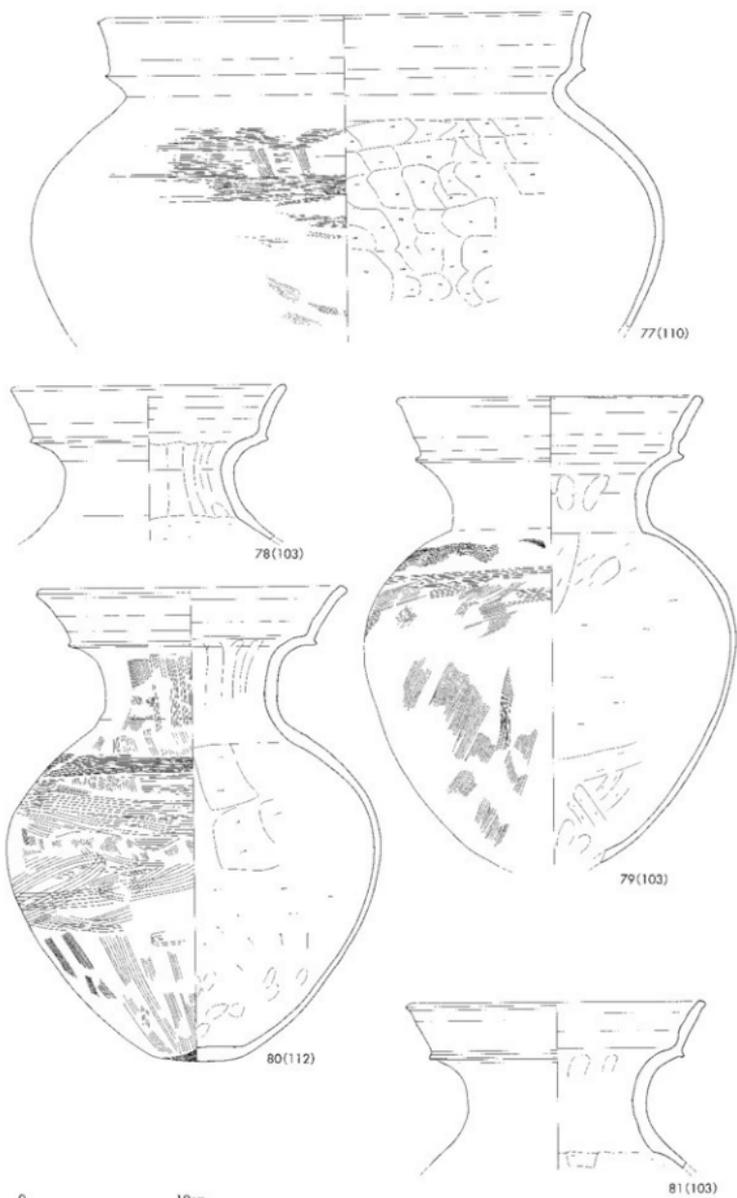
第12図 大津町北遺跡出土遺物(6)



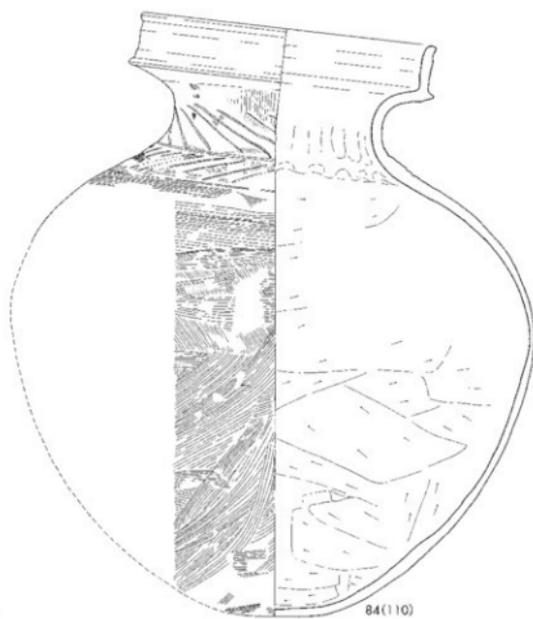
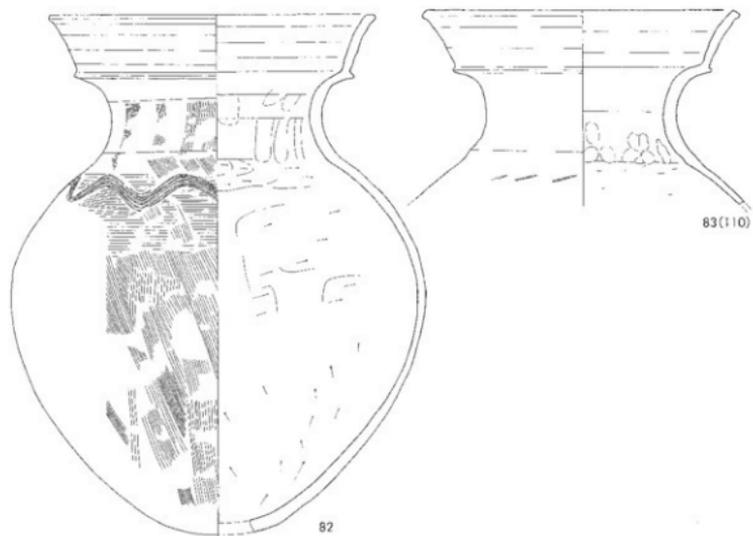
第13図 大津町北道跡出土遺物(7)



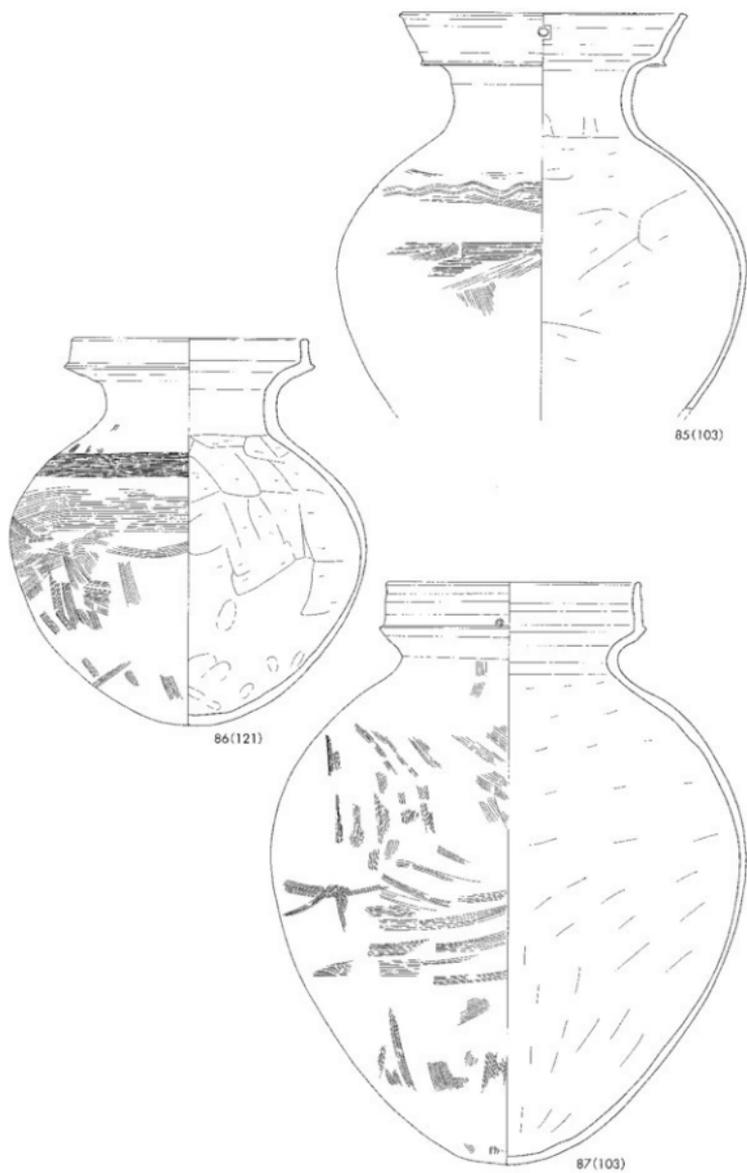
第14図 大津町北遺跡出土遺物(8)



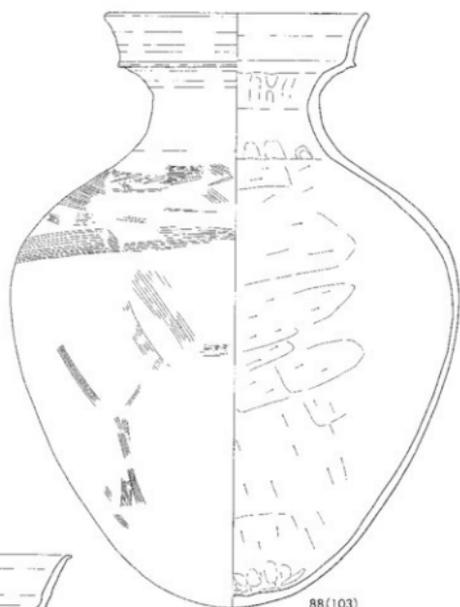
第15圖 大津町北遺跡出土遺物(9)



第16図 大津町北遺跡出土遺物①



第17図 大津町北遺跡出土遺物(1)



88(103)



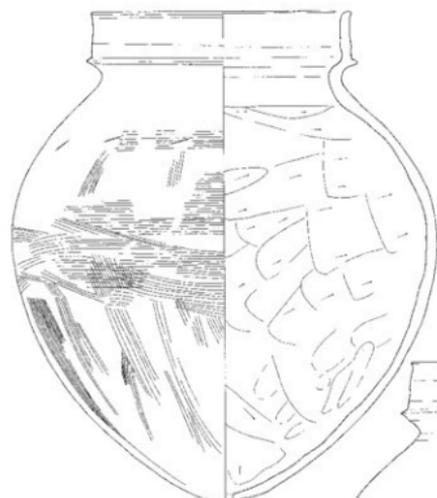
89(103)



90(103)



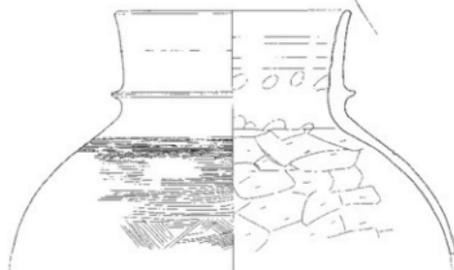
第18図 大津町北遺跡出土遺物⑬



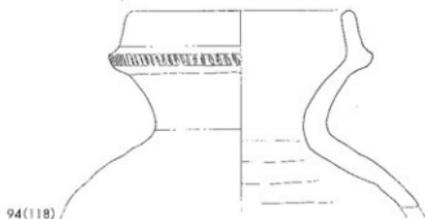
91(104)



92(110)



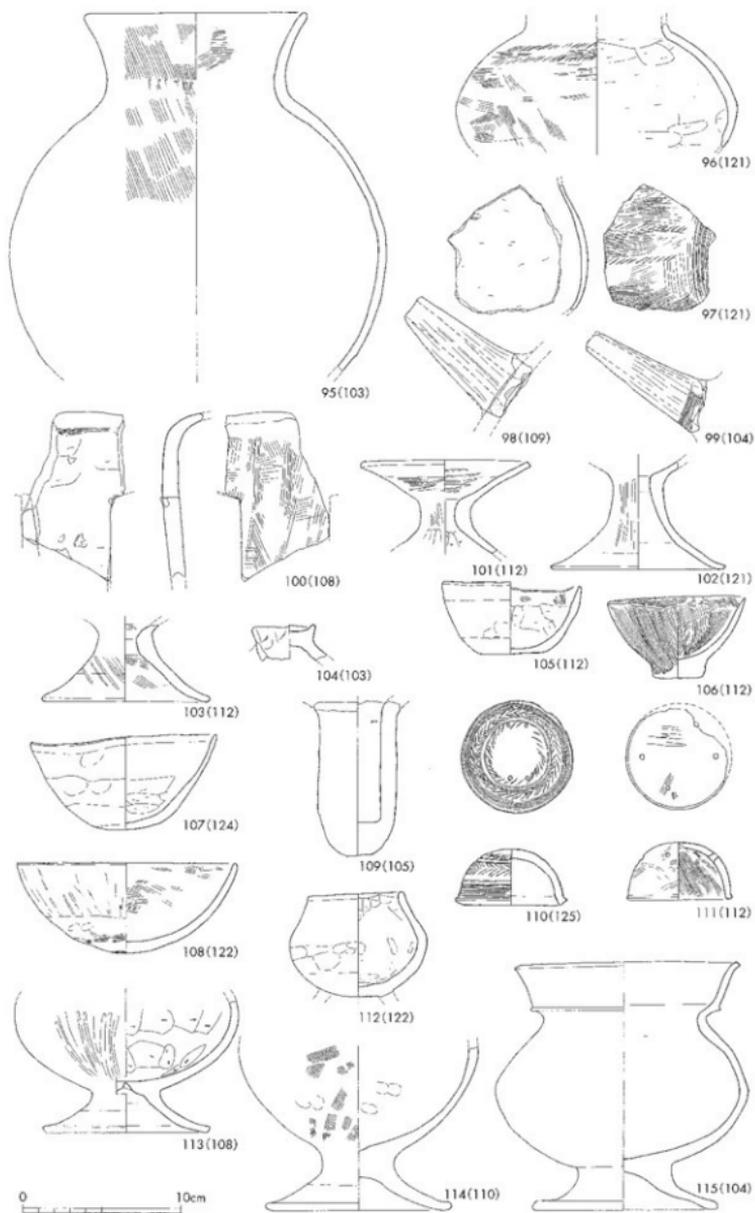
93(109)



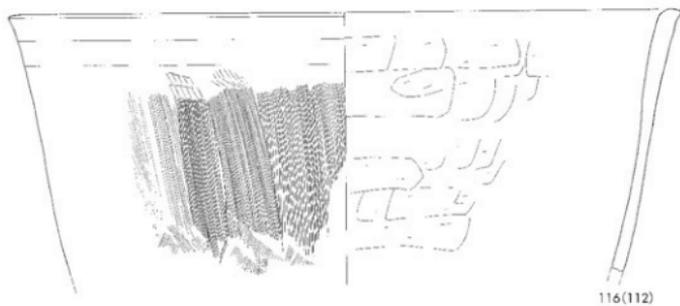
94(118)

0 10cm

第19圖 大津町北遺跡出土遺物⑬



第20圖 大津町北遺跡出土遺物(4)



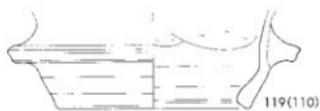
116(112)



117(108)



118(122)



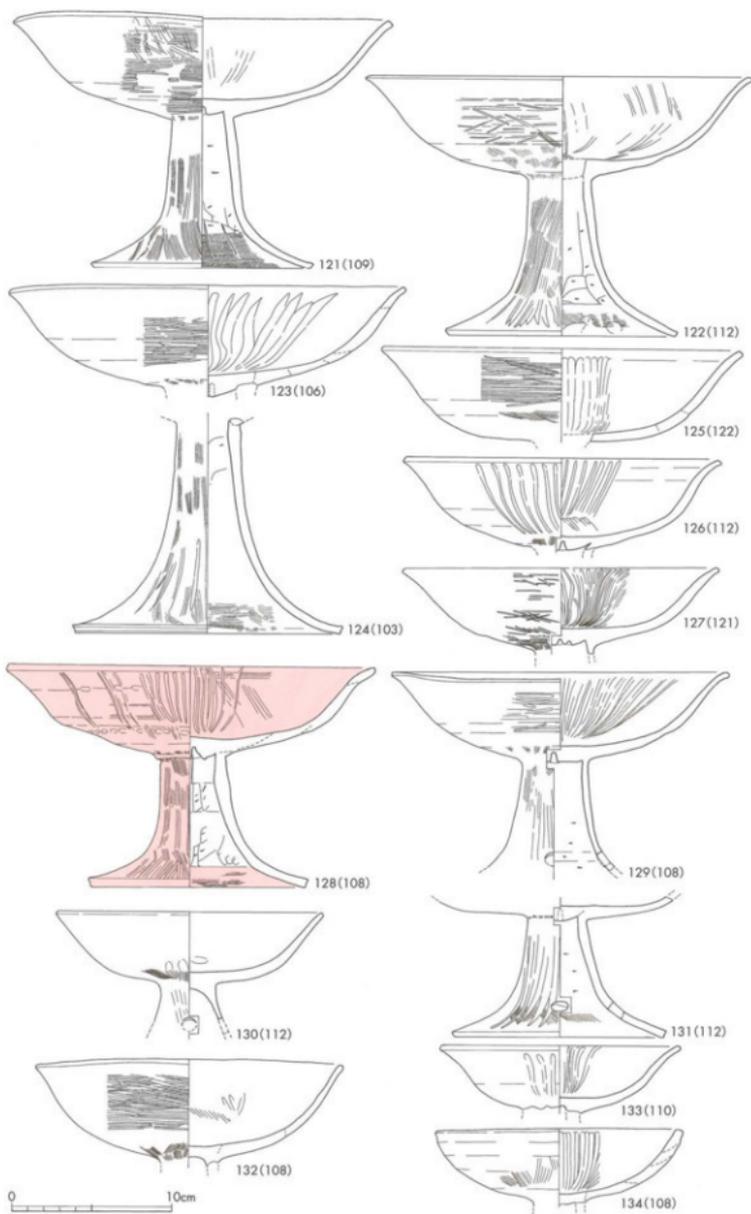
119(110)



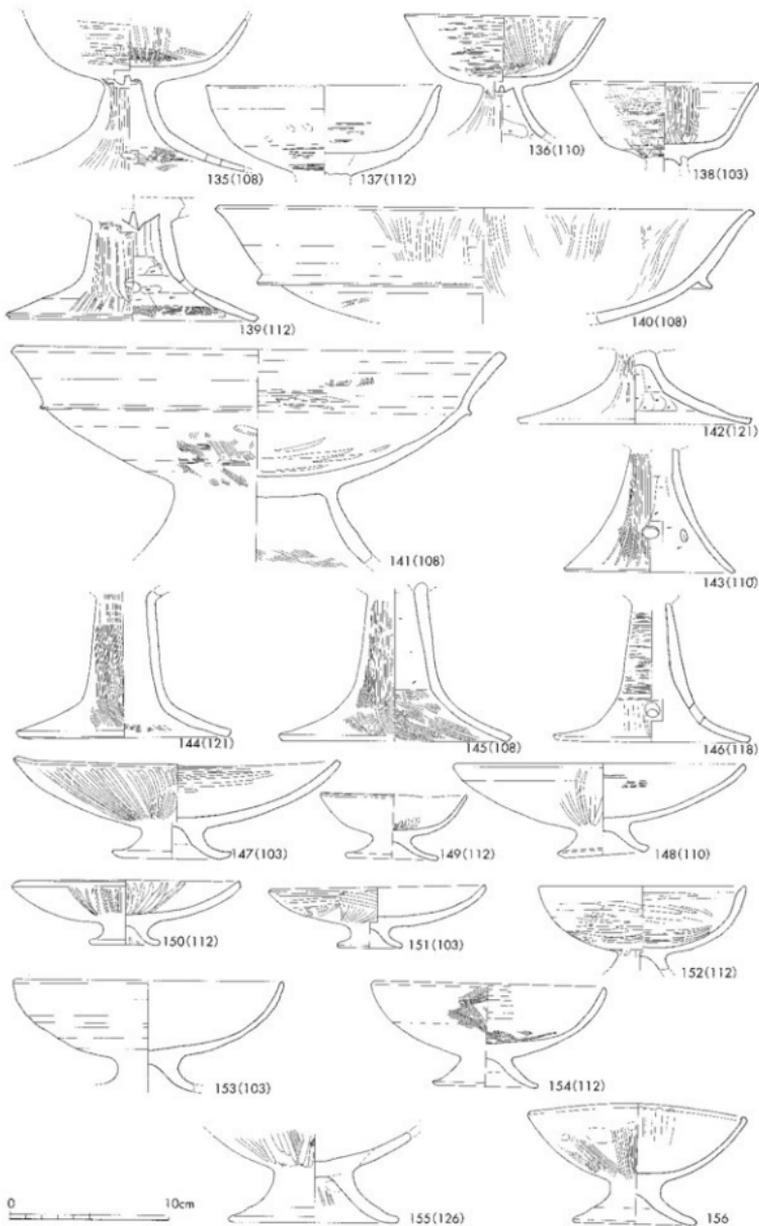
120(109)

0 10cm

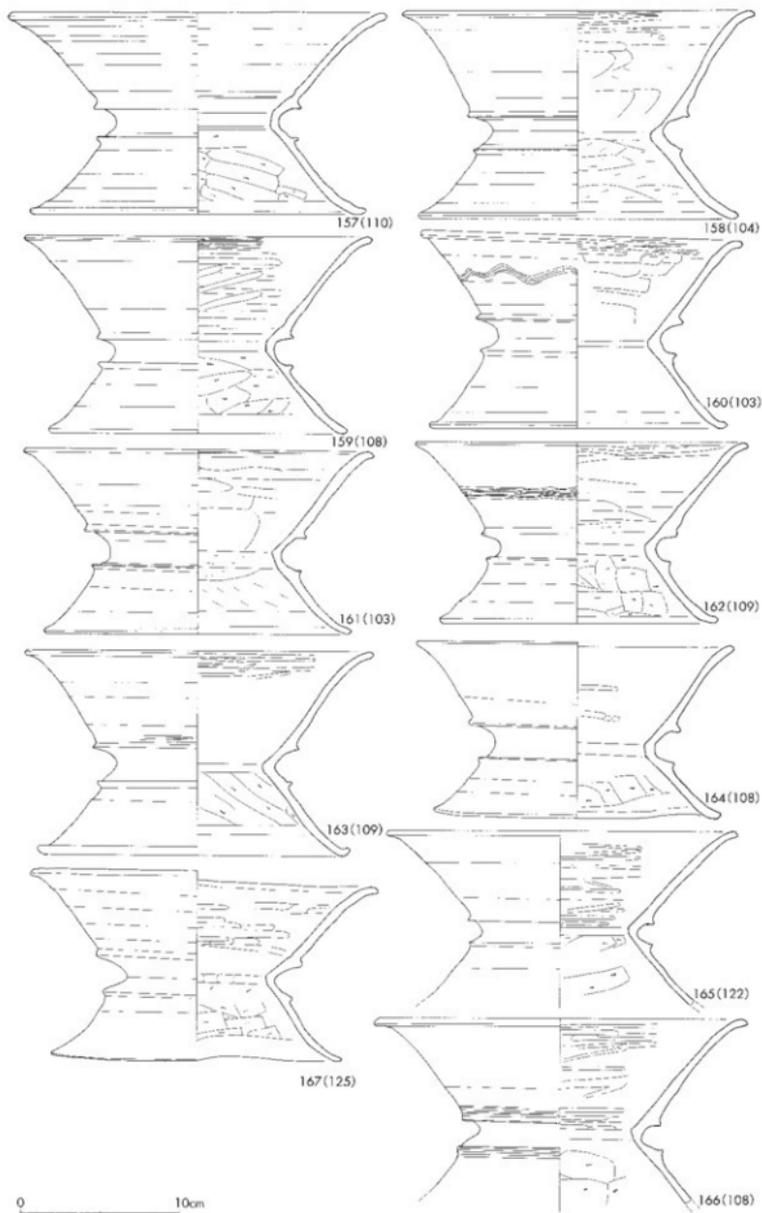
第21圖 大津町北遺跡出土遺物(1)



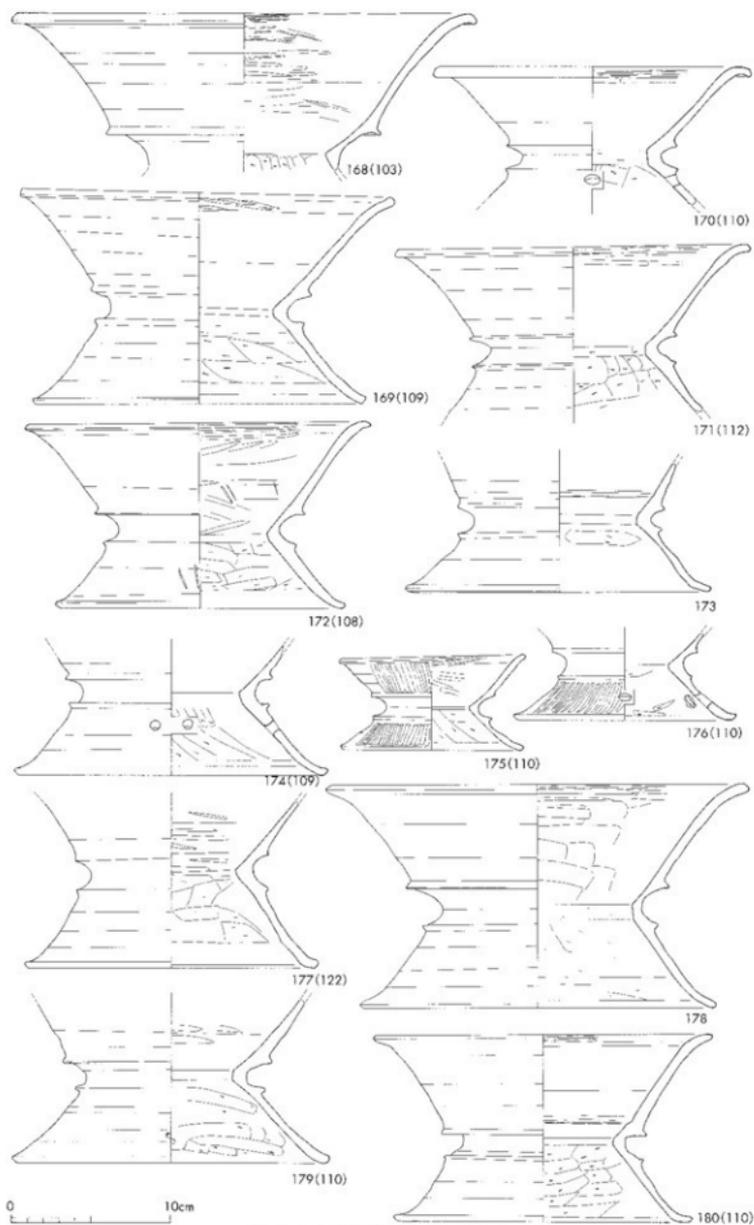
第22図 大津町北道跡出土遺物⑩



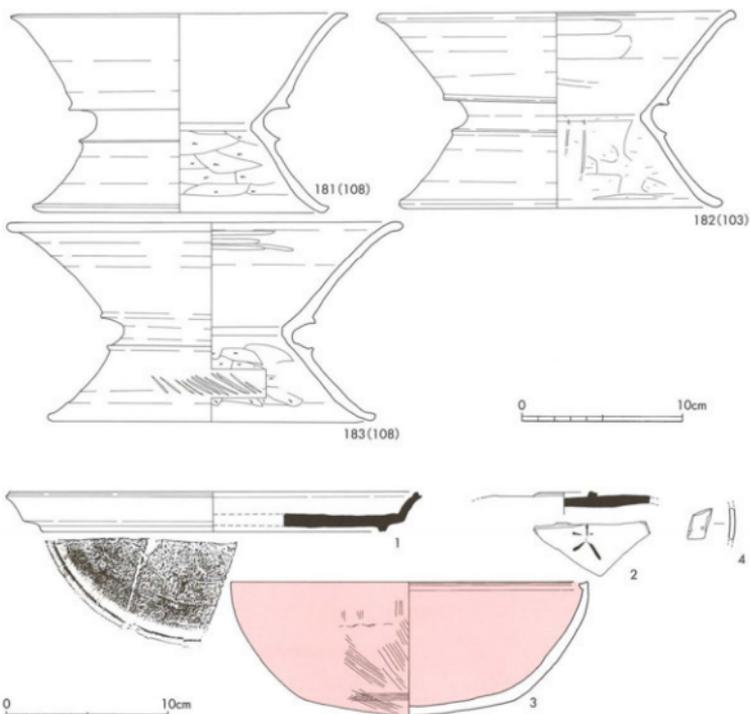
第23圖 大津町北遺跡出土遺物(7)



第24図 大津町北遺跡出土遺物18



第25図 大津町北遺跡出土遺物19



第26図 大津町北道跡出土遺物(上)・中野清水道跡出土遺物：下

175は完形で明赤褐色を呈し内外面に丁寧なミガキが施され精製された小型器台である。

170・174・176の器台には円形の透かしが施され、それぞれ3もしくは4方、前面に2孔1対、3方透かしがある。全体に透かしを有する器台は少ない。

182の脚部内面に2本のヘラ記号状の印が、183の脚部外面前面にヘラ状工具による斜線文が見られた。178・183は赤彩の可能性がある。183のヘラ記号状の印は第23図150・152・155の底脚杯の脚部内面のそれらと共通する。

まとめ

3層からは、赤彩或いは胎土が鮮やかな橙色を呈する壺・甕型土器や高坏、低脚坏、注口土器、甗など祭祀を思わせる土器が多数出土している。また、多くの甗と一部の低脚坏、鼓形器台から使用痕跡（二次焼成）が認められた。焼成前に胴部に穿孔された日用的ではない甗などもあり、この事から大津町北道跡が祭祀の場であったか、或いは、祭祀に使用された土器を埋納、もしくは廃棄した場所であった可能性が高い。それは弥生時代末頃（草田5期）から始まり古墳前期（小谷式）まで祭祀空間として延々と続き、それ以降は中野清水道跡に場を移したと思われる。壺甗などの内部には供物があった可能性があるが、今回の調査では検出できなかった。わずかに、製塩土器と生

漆採集容器は、その内容物を特定できる遺物であった。

今回の調査では、調査範囲が80mと非常に狭く大津町北遺跡の極一部に過ぎない。調査の成果を持って大津町北遺跡の全体を捉えるものではなく、遺跡の範囲は中野清水遺跡と地質的にも連続しており出土物の性格も酷似している。その為、中野清水遺跡、或いは中野遺跡群の東端と捉えるほうが自然である。大津町北遺跡より東は、トレンチ調査で標高5m辺りまで砂層しか見られず遺物も皆無であったことから、この地より東は当時、斐伊川もしくは、その支流が流れていたと推測される。渡橋沖遺跡報告書の占地形復元では中野遺跡群に当たる場所が二本の川に挟まれた三角州として描かれている。これとトレンチ調査の結果を合わせて考えると大きな中洲だった可能性も考えられる。三角州或いは中洲の「東端」と「川」が祭祀のキーワードなのかもしれない。

また、少量ではあるが九州・西瀬戸、畿内・北陸系の搬入土器或いは在地模造土器が出土し、これらの地区と交流があったことを窺わせる。

なお、この地の古老の話では、ここに昔、大きな神社があったと言いつえられており、大津町北遺跡より北約300mに小さな社（中野神社）があり、ここに江戸時代まで大三輪神社があった。また、『出雲神社巡拝記』（江戸幕末期）にも同様の記述が見られていたことなどを付け加えておく。

参考文献

1. 伊藤智・平石充『長瀬横穴墓群・長瀬遺跡（Vol.1）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XIII 島根県教育委員会2001
2. 赤沢秀則『南講武草田遺跡』講武地区県営園地整備事業発掘調査報告書5 鹿島町教育委員会1992
3. 岡野大系・大庭俊次「渡橋沖遺跡と周辺の遺跡」『渡橋沖遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会1999
4. 渡部幹編『出雲神社巡拝記』天保4年（1833）

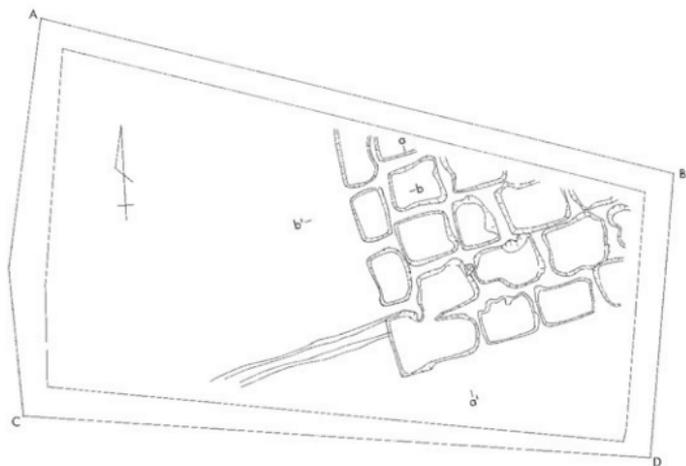
V 中野清水遺跡

I区 I層を除去するとほぼ磁北に揃えた方形の小区画の上坑群が現れた(第27図、図版5)。いずれも床は水平ではないが、標高7m前後である。一見すると小区画水田のようにみえる。この土坑群は中世～近世の水田面に掘り込まれている。床面に近いところから、近世の陶胎染付の小破片が出土した(第38図68)。これ以外の遺物は出土しなかった。こうしたことから、この土坑群は近世以降の土取坑とみなされる。大津町北遺跡付近で、近・現代の瓦窯で使用される窯道具が出土しているため、一つの可能性として、瓦生産のための粘土採掘坑が考えられる。中野清水遺跡から2km西で調査された出雲市高岡町の高岡遺跡の小区画水田と報告されている遺構²⁷⁾も同様なものであろう。この土坑群に切られた水田面には、東西方向の畦畔が8mほど残っていた。幅は90cm、高さ20cmである(図版15)。

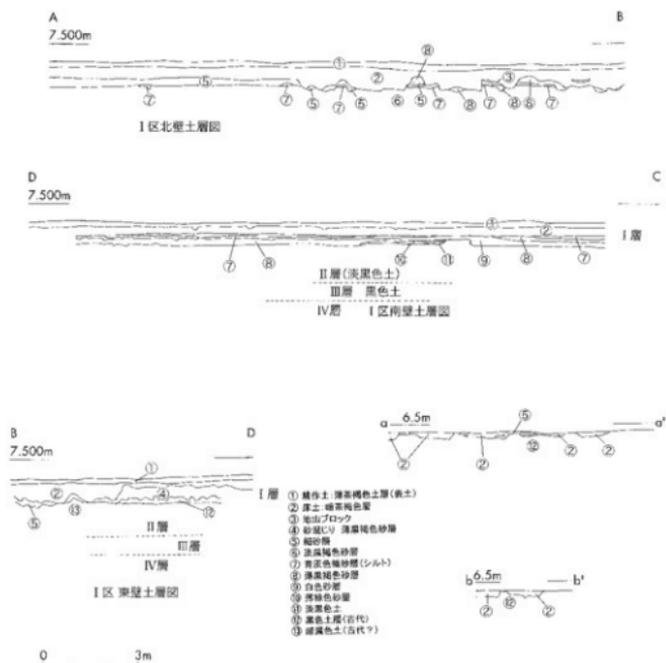
2層では、この畦畔の下に、畦畔と同じ方向のSX01を検出した(第28図、図版16)。杉板の上に22枚以上の土師質土器が正位置でまともな状態で置かれていた。遺構の検出状況から、元来、杉板で作られた箱状のものの中に土師質土器が納められ埋設されていたところに、後に水田となったため、畦畔に沿うかたちで残存したものにみえる。また、畦畔の下に故意に埋設したようにもみえる。後者であるならば水田祭祀であろう。土師質土器は皆、口径8cm前後、器高4cm前後で、器面は淡黄褐色を呈し、胎土には白色の微砂粒を含む。外面底部は回転糸切り跡を残すものである(第29図、図版20)。ロクロの回転方向は右回りである。完形に近いものが多い。灯明皿として使用した痕跡はみられない。類似した遺跡に、松江市北東部遺跡平成8年度調査区T-11がある²⁸⁾。水田の下から土師質土器21枚と鉄製製品が南北方向にまともな状態で出土している。報告者は性格を祭祀としているが、中野清水遺跡のSX01を含め、墓である可能性も捨てきれない。

SX01とほぼ同じレベルでSK01とSK02を検出した(第28図、図版17、18)。SK01は径65cm、深さ35cmの円形で、底に近いところに微砂粒と有機質の薄い層があった。木製の蓋がしてあった可能性はある。中からは遺物は発見できなかった。このSK01の東側3mのところにはSK02がある。径1.0×0.9m、深さ0.3mの不整楕円である。底一面に薄い有機質の層があり、中からは折敷の上に曲物を乗せ、それらが傾いた状態で出土した。このことからSK02の上に、木製、又は植物質の蓋が覆われ、その上に折敷と曲物を供えた状況を復元することができる。SK01とSK02には、時間がたつと朽ちてしまうものが入られていたのだろう。可能性の一つに墓が考えられるが、人骨は発見できなかった。これらの年代を確実に推定する遺物はないが、SK02内から出土した折敷と曲物の形態から、古代～中世としておきたい。樹種鑑定の結果は両者とも杉材である(VI章)。折敷は、35×30cm、厚さ0.6cmの方形板である。曲物は径24×22.5cm、器高11.7cmの楕円形で、接合部は板皮で縫い止められ、底板は5ヶ所に木釘で止められている。これらの遺構の周辺からは古代～中世の遺物が出土した。なお、折敷において、放射性炭素年代を測定したところ、AD810～840、AD860～960という測定値を得た。形態からみた年代観の範疇にはいるが、測定値を採用すれば、9～10世紀となる。

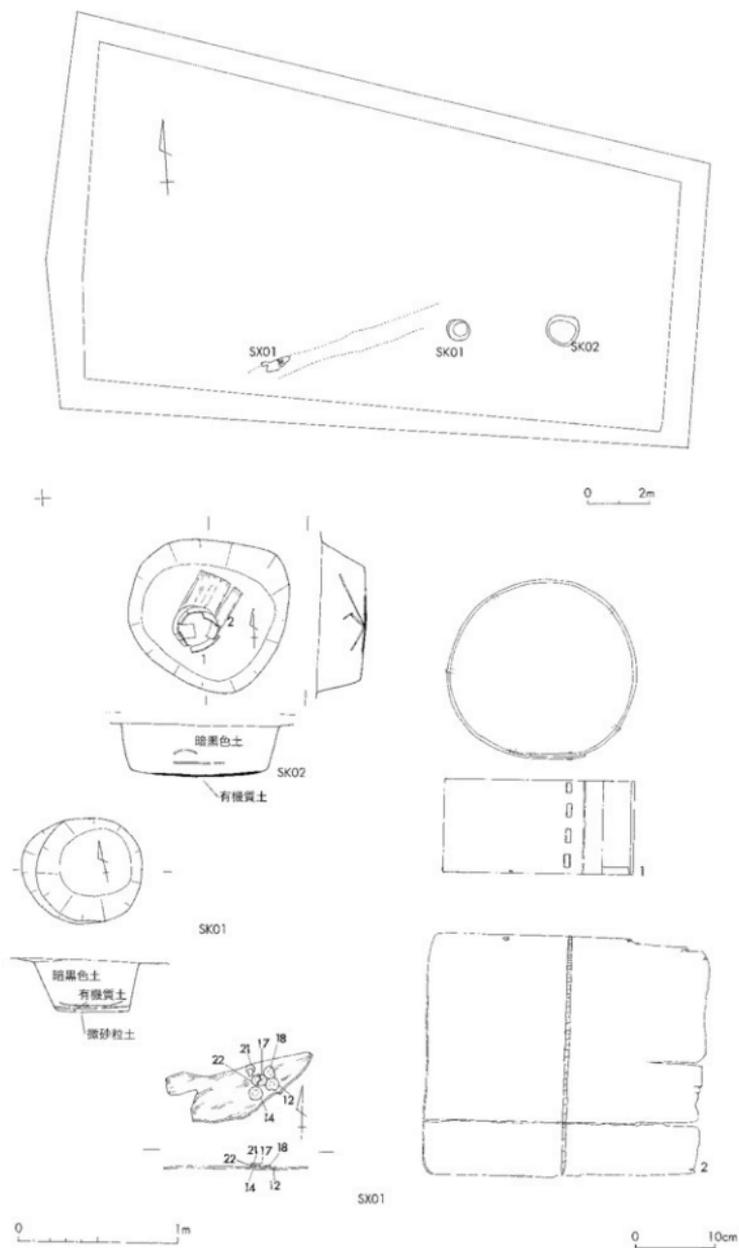
第37・38図は、古代～中世の遺物である。第38図73～75は銭貨である。73は元祐通宝(1086)で、径2.3cm、重さ3.0g。銭孔は0.7×0.7cmある。74は紹定通宝(1228)で、径2.4cm、重さ3.0g。裏面に「六」が読めるが、鋳型のズレがある。銭孔は0.7×0.7cmある。75は貨泉(9)で、径2.2cm、重



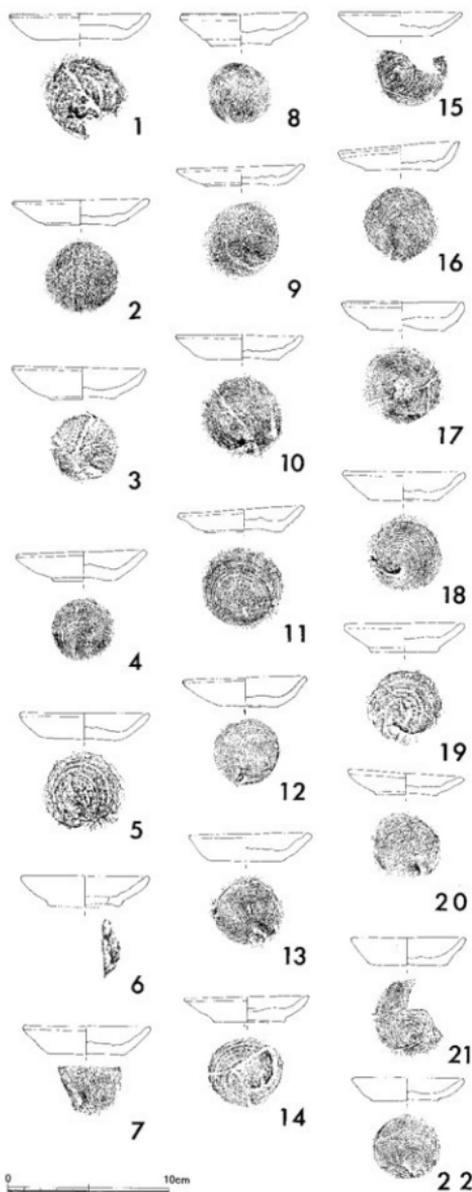
+



第27図 中野清水遺跡 I 区遺構実測図(1)



第28图 中野清水道跡Ⅰ区遺構実測図(2)



番号	法量	特徴	備考
1	最大径 (8.9cm) 器 高 1.6cm	淡褐色、白色の微砂粒を含む。	扉原 15
2	最大径 8.5cm 器 高 1.7cm	赤褐色、1cm以下の微砂粒を含む。	扉原 1
3	最大径 8.2cm 器 高 2.1cm	淡褐色、白色の微砂粒を少量含む。	扉原 12
4	最大径 7.9cm 器 高 1.9cm	淡桃黄色、白色微砂粒を少量含む。	扉原 6
5	最大径 8.0cm 器 高 2.2cm	桃灰色、白色の微砂粒を含む。	扉原 16
6	最大径 (7.8cm) 器 高 1.9cm	淡黄色、胎土密。	扉原 13
7	最大径 8.0cm 器 高 1.8cm	桃黄色、胎土密。	扉原 11
8	最大径 7.6cm 器 高 2.1cm	淡桃黄色、白色の微砂粒を含む。	扉原 5
9	最大径 7.7cm 器 高 1.3cm	淡青色、白色の微砂粒を少量含む。	扉原 8
10	最大径 7.7cm 器 高 1.5cm	淡桃黄色、白色微砂粒を含む。	扉原 9
11	最大径 7.7cm 器 高 1.6cm	淡黄色、白色微砂粒を含む。	扉原 7
12	最大径 7.8cm 器 高 1.8cm	淡い黄褐色、胎土には砂粒はみられない。	No6
13	最大径 7.4cm 器 高 1.8cm	淡桃黄色、白色・黒色の微砂粒を含む。	扉原 4
14	最大径 (7.0cm) 器 高 1.4cm	淡い黄褐色、胎土には砂粒はみられない。	No4
15	最大径 7.6cm 器 高 1.5cm	淡黄色、白色の微砂粒を含む。	扉原 2
16	最大径 7.6cm 器 高 1.9cm	淡黄色、胎土密。	扉原 3
17	最大径 7.6cm 器 高 1.8cm	淡い黄褐色、胎土には砂粒はみられない。	No3
18	最大径 7.6cm 器 高 1.8cm	淡い黄褐色、胎土には砂粒はみられない。	No5
19	最大径 (7.4cm) 器 高 1.8cm	淡黄色、白色の微砂粒を少量含む。	扉原 14
20	最大径 7.0cm 器 高 1.6cm	淡褐色、胎土密。	扉原 10
21	最大径 7.2cm 器 高 1.8cm	淡い黄褐色、胎土には砂粒はみられない。	No1
22	最大径 (7.2cm) 器 高 1.4cm	淡い黄褐色、胎土には砂粒はみられない。	No2

第29図 中野清水遺跡I区S X01出土遺物

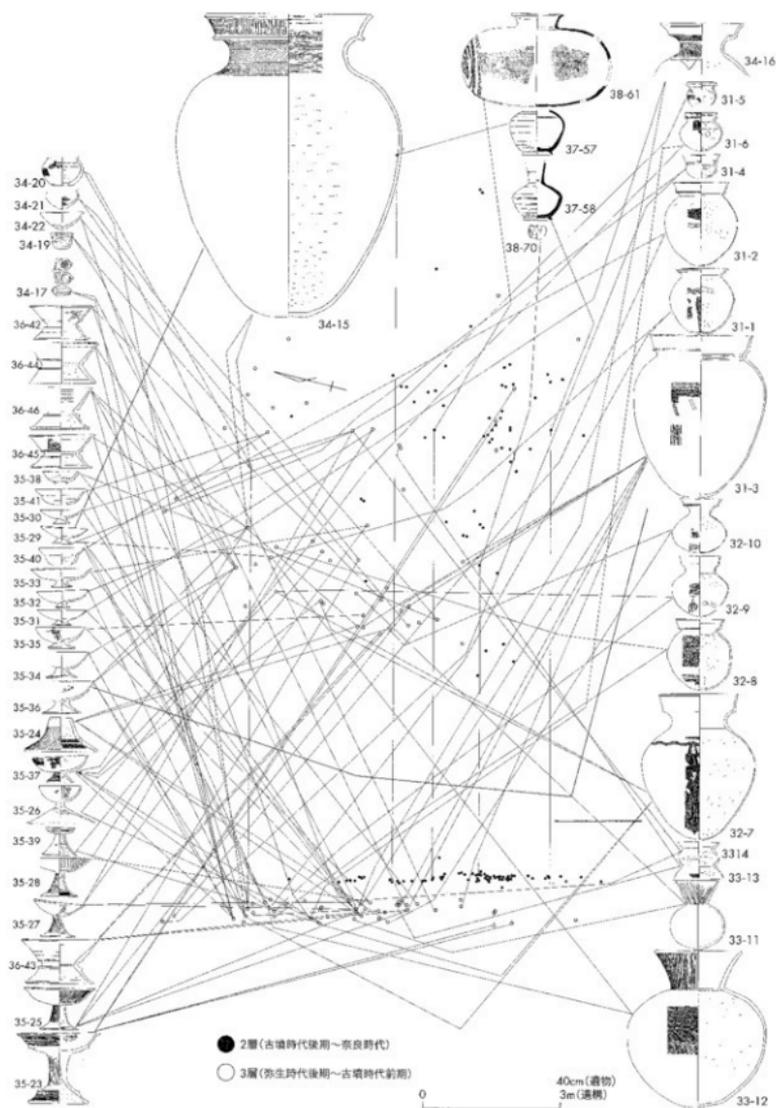
さ2.37gを量る。この貨泉の保存状態は良好で、鋳出されている文字もシャープである。初期の貨泉の2.95gに近く、渡来銭と考えられる。銭孔は大きく、0.8×0.8cmある。船定通宝や元祐通宝とともにたらされたものであろう。72はⅡ区2層の出土であるが便宜上ここに掲げておく。無紋銭で薄く、破損している。径は2.1cmあり、銭孔は0.7×0.7cmに復元される。

第37図は須恵器である。47・48・50～52は通常後期古墳や集落遺跡から出土する須恵器蓋環で、およそ6世紀末～7世紀前半のものである。47・48は蓋環の蓋である。47は口径14.4cm、器高5.3cm、48は口径12.8cm、器高4.5cmで、外面には「*」のヘラ記号がある。50～52は蓋環の身である。50は口径11.8cm、器高4.2cmで、外面底部には板目状痕がある。52は復元径が18.6cmと大きい。これらと同時期のものは、56の長頸壺、60の短頸壺、59の高坏、61の横瓶であろう。56は高台坏の底部であるが、これを長頸壺としたのは内面底部に径3.0cmの自然軸の剝離痕が観察されるからである。底部外面には糸切り痕はみられない。59は口径14.7cm、器高11.1cmの高坏で、脚部に一對の透かしがあるが、貫通するものと、先刻のみのものである。49は径15.3cm、器高2.6cmの環状握みの坏蓋。53は底部外面に回転糸切痕を残す出雲大井産須恵器坏A1。54は高台付皿Bである。底部外面の回転糸切痕をナデ消す。55は底部外面に静止糸切痕を残す高台付坏02。明瞭には見えないが、「×」または、「大」の墨書らしきものがある。これらは7世紀後半から8世紀前半にかけての時期のものである。57・58は同時期の長頸壺である。60の短頸壺は口径11.5×8.3cm、器高11.5cmで、口縁部に焼成時の歪みがある。61の横瓶は、口径14.8cm、器高27.2cm、復元した胴部最大径は43.2cmで、外面は叩き痕とカキ目があり、内面には青海波文と風船技法がみられる。

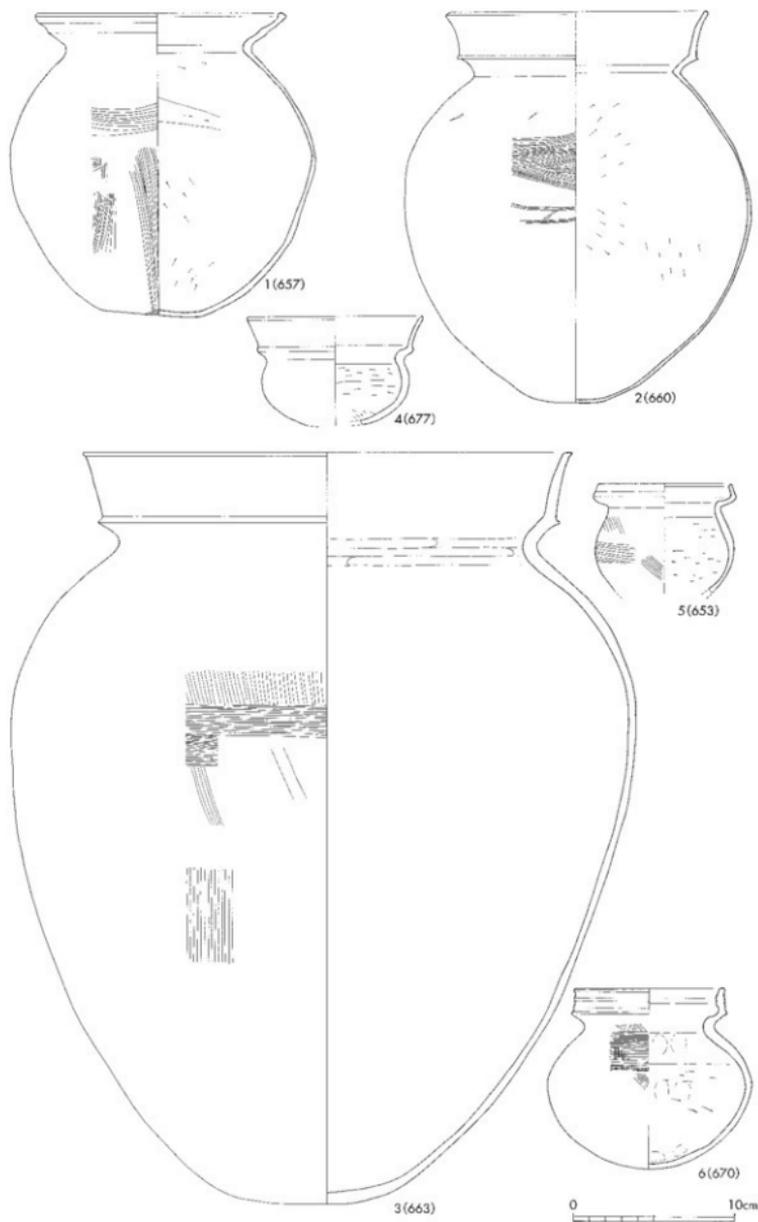
須恵器に対応する土師器は第38図62・63・64・66・67・69・70・71である。62は口径16.2cm、器高2.8cmの全面赤彩の土師器皿A。63は口径23.3cmの甕型土器。69・70は小型手握土器。小型手握土器の中では大きいもので、69は口径6.1cm、器高3.3cm、70は口径5.1cm、器高4.0cmある。64も手握土器であるが、高坏か高台付坏を模したものであろう。復元口径12.6cm、器高4.7cm。胎土は緻密で、ややくすんだ淡黄褐色。71は径1.7cmで、小型の土製支脚の一部と考えられる。66は土鍾で、長さ4.6cm、中央での径1.5cm、重さ9.58gを量る。孔径は0.4cmある。淡赤褐色を呈し、砂粒を含む。縦方向に調整痕がみられるが、二次焼成を受けている。67は繻の羽口であろう。径は7.0×6.5cmある。65は底部外面に回転糸切痕を残す坏で平安期に入るものであろう。

第31図～第36図は3層の遺物である。甕型土器、壺型土器、器台等がある。これらの多くは弥生時代末～古墳時代前期のもので、比較的まとまって出土した。(第30図)。

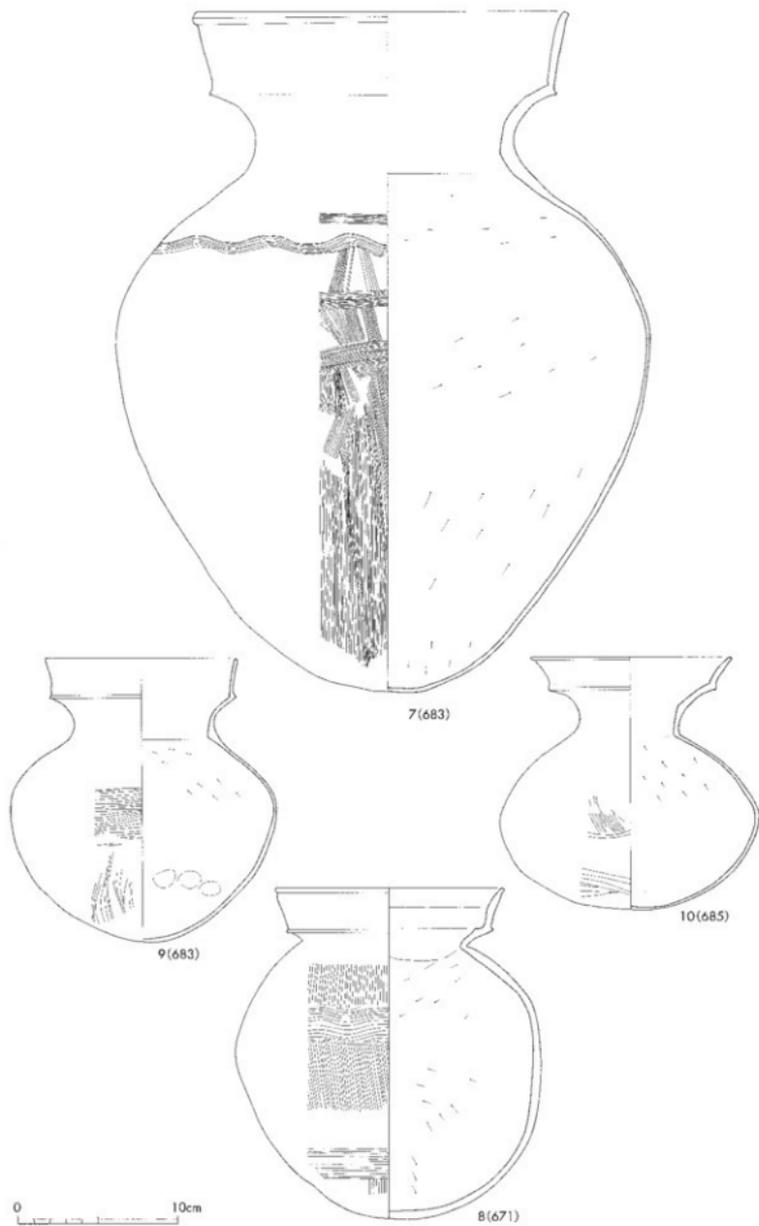
甕型土器で最大のものは、第31図3で、器高47.0cm、口径30.5cm、胴部径38.7cmを測る。やや胴長で、丸底にはならない。外面には底部先端付近をのぞいて胴部に煤炭化物の痕跡がみられる。また、内面には底部から9cm上に幅5cmほどに炭化物の付着した痕跡がある。全体がわかる最小の甕型土器である第31図6は器高11.1cm、口径9.3cmであるが、胴部下半から底部にかけて炭化物付着痕がある。これら以外の甕型土器のほとんどに同様な痕跡があるので、大小を問わず煮沸に使用されたと考えられる。甕型土器・壺型土器の多くが口縁部は複合口縁であるが、第31図1のような「く」の字口縁(以下、単純口縁とする)の甕もある。口径は15.7cm、器高18.9cmで器壁は薄い。外面の胴部中程から底部にかけてと、内面の肩部より下方から胴部にかけて幅4.0cmの帯状に炭化物付着痕がある。13・14は単純口縁か、複合口縁の退化形態であるのか判断に迷う。13は口径11.4cm、14は口径11.8cmある。第31図4・



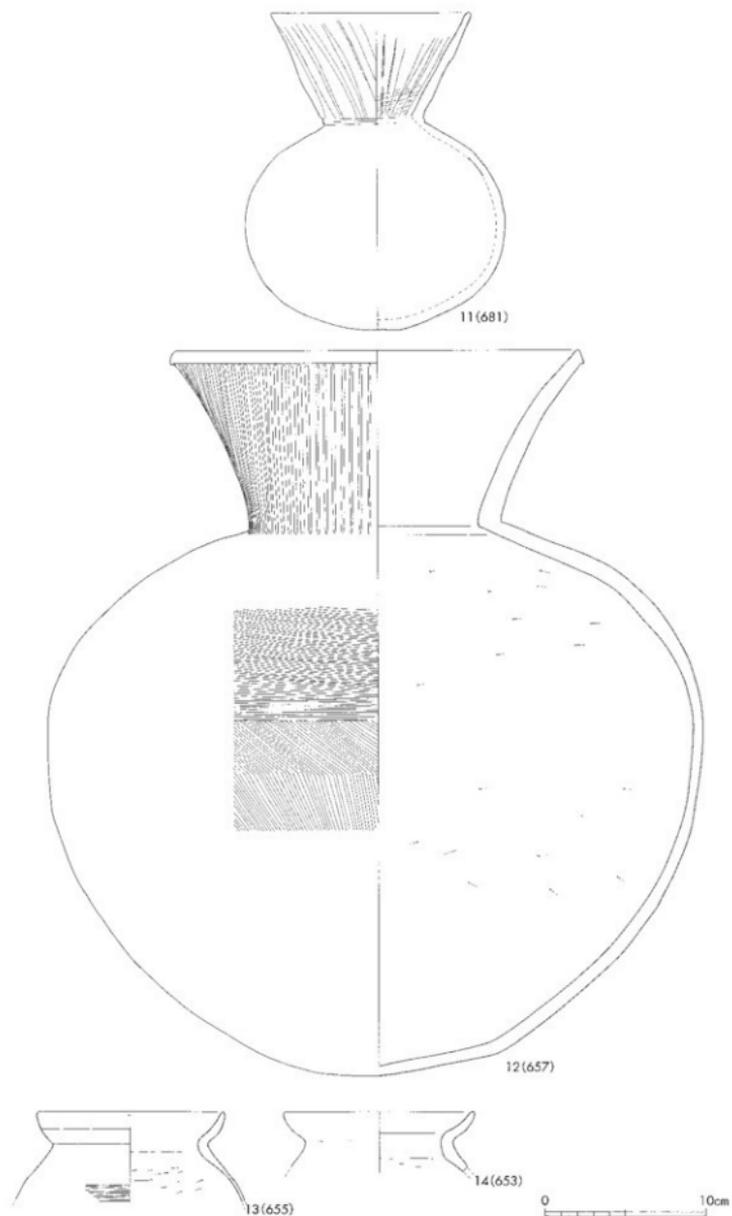
第30圖 中野清水遺跡I区遺物出土状態



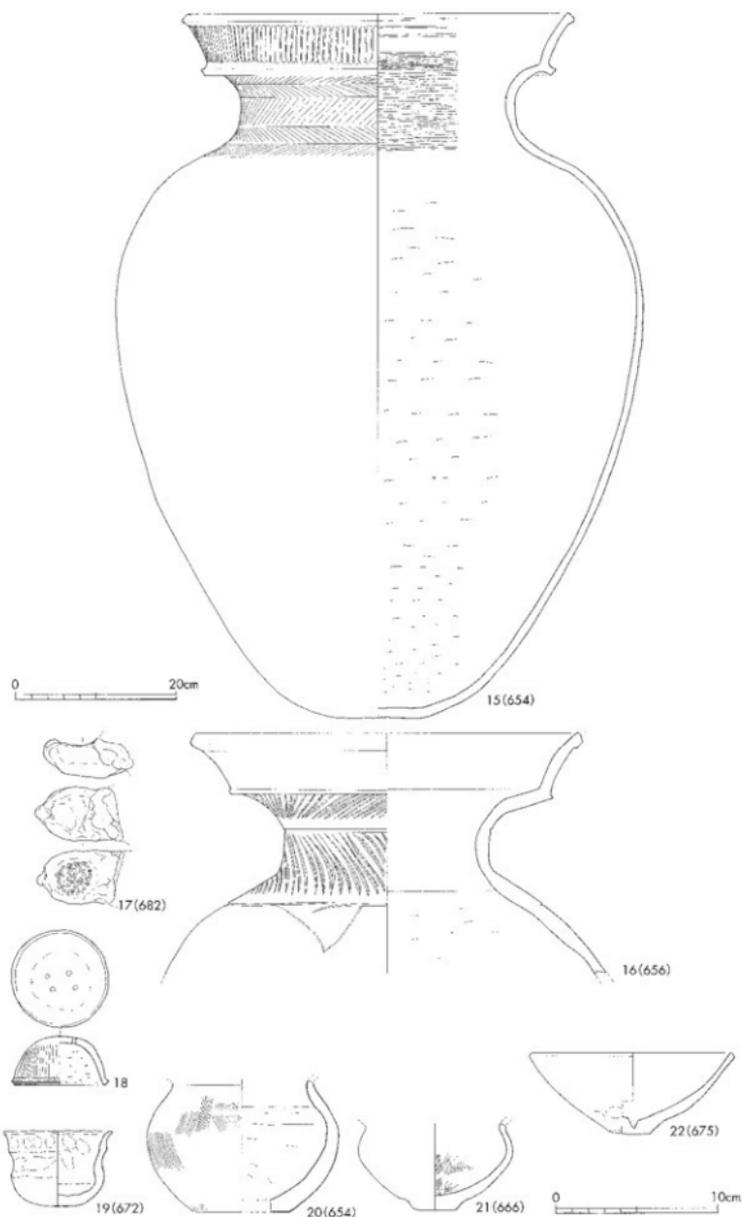
第31图 中野清水遗址I区出土遗物(1)



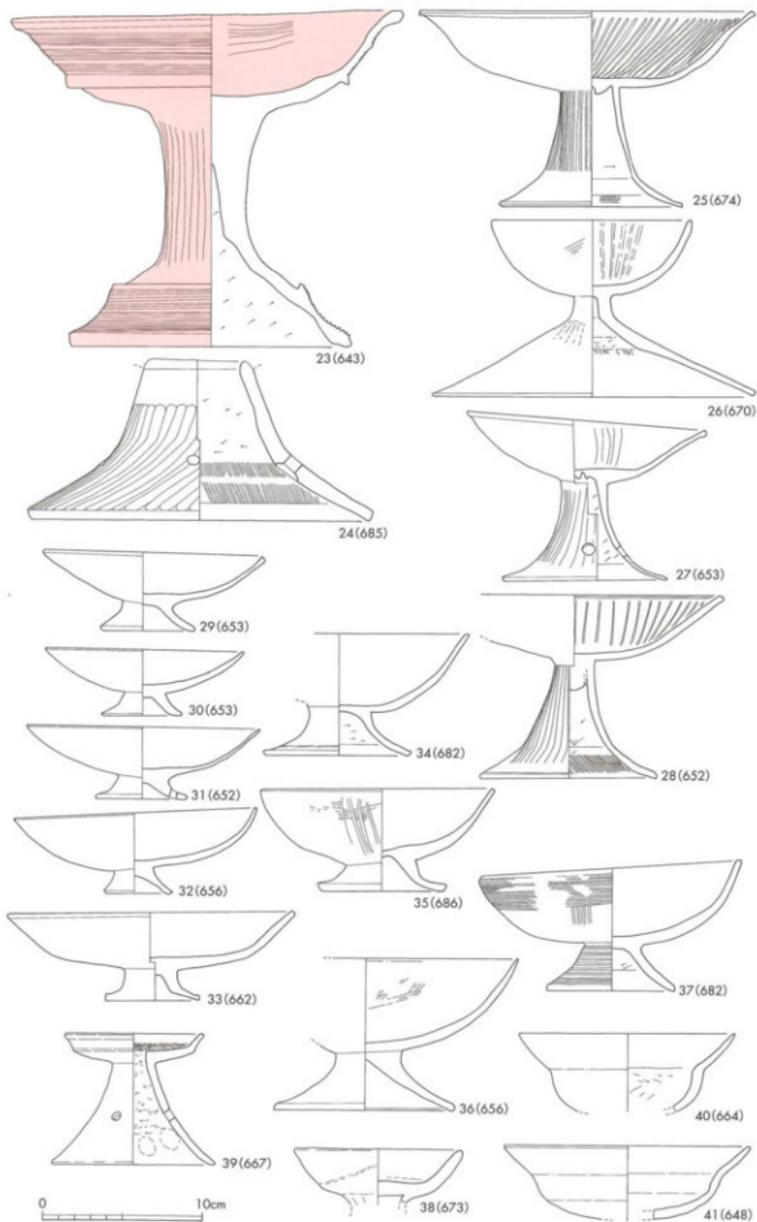
第32図 中野清水遺跡Ⅰ区出土遺物(2)



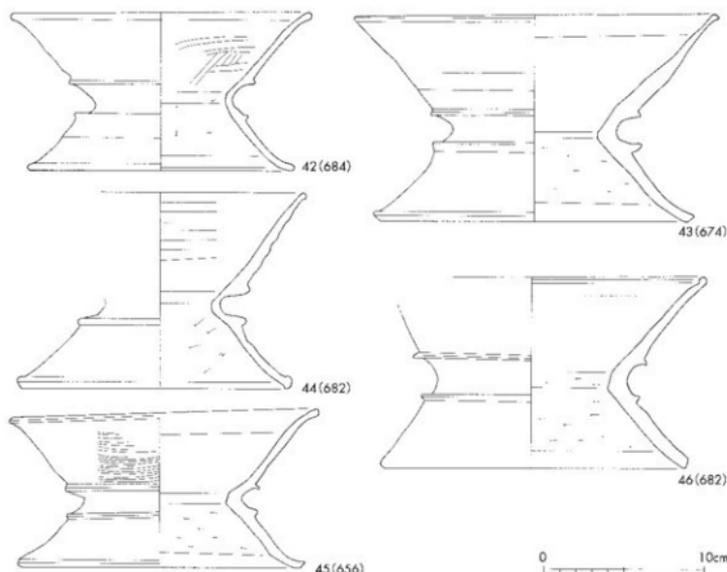
第33图 中野清水遺跡I区出土遺物(3)



第34图 中野清水道跡Ⅰ区出土遺物(4)



第35图 中野清水遺跡I区出土遺物(5)



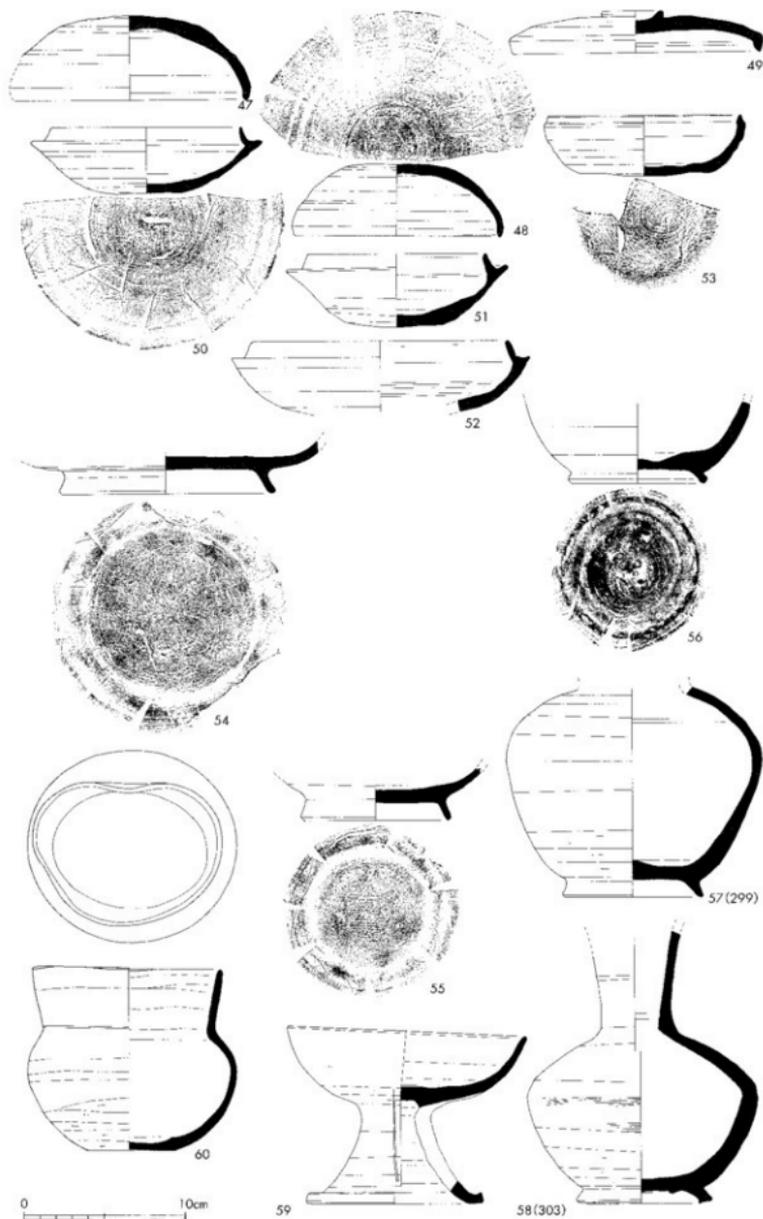
第36図 中野清水遺跡Ⅰ区出土遺物(6)

5は小型の甕型土器である。第32図8は口径14.1cm、器高20.7cmで底部外面に炭化物付着痕がある。第34図19は手捏土器で、口径6.7cm、器高4.7cmのミニチュアの甕型土器。

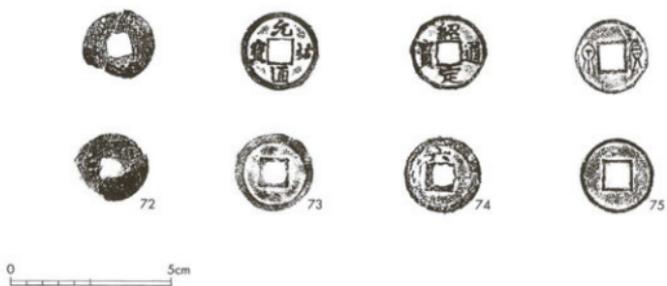
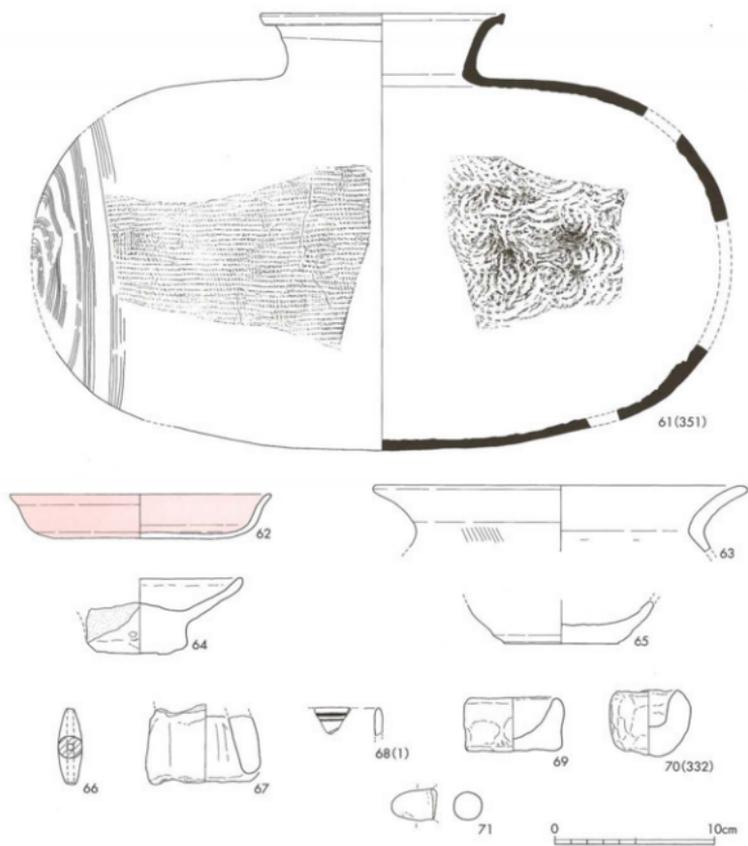
壺型土器で甕型土器の3と対応するのは第32図7であろう。但し、時期は若干先行するかもしれない。器高42.6cm、口径23.5cm、胴部径33.2cmで肩部に櫛描波状文を廻らす。丸底にはならない。9・10は小型の壺型土器である。器壁は薄く、胎土・調整は互いによく似ている。9は口径12.0cm、器高17.8cm、10は口径12.2cm、器高15.8cmで器高に対し胴部径が大きく口縁部は外に開く。第34図16は口径23.9cmで、頸部に羽状文と肩部に一条の沈線と一単位の鋸歯文を付けた壺型土器である。肩部の沈線は一周するが重ならず、故意を外して描かれたと思われる。鋸歯文もこの部分に意識して付けられている。図示できなかったが同じモチーフのものももう一俣体ある。同様なものは出雲市三田谷Ⅰ遺跡³⁰⁾でも出土している。古墳時代前期でも後半のころか。

壺型土器で最大のものは第34図15で、頸部に羽状文を施し、器高88.0cm、口径49.0cm、胴部径65.7cmを測る。底部は平底気味で少し内側にくぼむ。口縁部下端は幅1.0cm、長さ1.0cmの突帯状となる。口縁部外面は縦方向にヘラ磨き調整されている。胴部外面は丁寧なナデ調整、内面は口縁部から頸部にかけて横方向のヘラ磨き、肩部より下はヘラ削りである。淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好で、胴部外面に焼成時の黒斑がある。器面には径1cm前後の白色斑点胎土がみられる。壺楕を思わせるサイズである。

第33図11・12は直口甕で、胎土・焼成・色調とも互いに同じであるが、通常みられる壺型・甕型土器とは胎土・焼成等、趣を異にする。11は口径12.4cm、器高19.8cmで、頸部が低い突帯状となる。



第37图 中野清水遺跡Ⅰ区出土遺物(7)



第38图 中野清水遺跡Ⅰ区出土遺物(8)

赤褐色を呈し、胎土にはあまり砂粒を含まない。外面と口縁部内面にハケ調整の後縦方向に粗いヘラ磨きを行う。焼成がややあまくみえるのは二次調整を受けたためかもしれない。12は23.9cm、器高45.5cmで、淡い赤褐色。外面は細かなハケ調整痕、口縁部外面は縦方向にヘラ磨きを施す。内面は肩部より下をヘラ削りする。胴部外面に7.0×5.0cmの焼成時の器面剥離痕がある。色調に、赤褐色と黄白色の部分があるのは、二次焼成のためと思われる。大小の違いはあるが、両者とも胴部は球形に近く、底部を意識した作りとなっている。相似形といってよいだろう。使用時にはセット関係にあったと思われる。12は大原郡加茂町の神原神社古墳の埋納坑出土資料³⁰に似ている。第30図の出土状態では11・12と15は互いに接近して出土しており、土器溜まりというよりは埋葬施設があったかもしれない。

第34図18は、特殊な壺の蓋である。径6.0cm、器高3.1cmで紐通しの4つの小孔がある。外面は細かなヘラ磨き、内面はヘラ削りである。青谷上寺地遺跡の木製壺の例²⁹を参考にすると、低脚付で胴部が算盤玉形をした壺の蓋であろう。第34図20は小型の鉢。21は口縁部を失っているが小型の甕と思われ、明瞭な底部を作っている。22は21と同じ底部をもつ小型の鉢で、底部内面に三角錐状の小孔がある。17は甕、または甌の撮手と考えられる。小さな竹管文を径2.0cmの範囲に密にいたれた魚々子状の文様である。後述するⅢ区3層出土資料の中に類似の文様の上製品がある(第103図70~73)。

第35図23~39は高坏である。23は口径24.2cm、器高20.6cmで坏部外面と脚部外面に多条沈線をいれる。外面と坏部内面はヘラ磨きと、赤彩がある。脚部内面はヘラ削りである。弥生時代後期の九重式に相当する。3層の中でも下層から出土した。24は大型の高坏の脚部である。底径は21.3cmある。器壁は厚く孔を持つ。あまり類例はないがⅥ区3層出土資料の高坏に類似する(第143図)。外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整とヘラ削りである。29~33は低脚坏で、脚部の高さや径はあまり変わらないが、坏部径は13.7~17.8cmと各種ある。29~33は低脚坏としては坏部が皿状で小型のものの一群である。34~37は坏部が深い碗状である。これらに対し脚部の高い25・27・28の高坏は、坏部の外面中央に小さな円錐状の孔があるところが共通している。26は坏部が碗状、脚部は漏斗状に大きくひろく。器面の調整は観察しにくい。坏部の内外面と脚部にヘラ磨き、脚部の内面にはハケ目痕がある。口径12.3cm、器高11.0cm、脚部径20.0cmに復元される。布留式土器の影響を受けたものか。38は粗製の高坏の坏部。40・41は鉢の可能性もあるがここでは一応高坏に分類した。

第35図39、第36図42~46は器台である。39は浅い坏部に孔のある脚部をつけた器台。通常は布留式の高坏の器形のものである。坏部内面は細かなミガキ、脚部内面はヘラ削り後、下半に指ナゲがみられ、3ヶ所に小孔を穿つ。胎土は他の土師器と同様であり搬入品とは考えられない。出土状況から11の壺と臨時にセット関係にしたのかもしれない。42~46は鼓型器台である。いずれも上径が下径を少し上回り、くびれ部の短いものである。上部内面のミガキは、ミガキ以前のヘラ削りが残りやや粗雑である。色調は43・46が乳白色、これ以外は茶褐色である。この中で小型の42は、口径18.5cm、器高10.0cm、大型の43は口径22.7cm、器高13.0cmを測る。46は口唇部を内側に丸く仕上げる。色調の茶褐色のものは第33図11や12とセット関係にあったかもしれない。

第30図は2層と3層の出土遺物の関係を表したものである。層序に乱れはみられなかった。2層の土器群は後述するⅡ区のそれにつながっていると考えられる。壺棺として作成されたと考えられる第34図15の周辺では特殊な壺や高坏が出土している。埋葬施設として利用され、周辺の土器は埋葬時の祭祀用土器であった可能性がある。

Ⅱ区 Ⅱ区はⅠ区の南、Ⅶ区の西に設定した調査区である。Ⅰ層はほとんどⅠ区にみられたような土製の小土坑が調査区一面に掘られていた(図版25)。2層に古代～中世の遺構を検出した(第39図)。大津町北遺跡・中野清水遺跡の中で、古代の遺物が最も多く出土した調査区である。

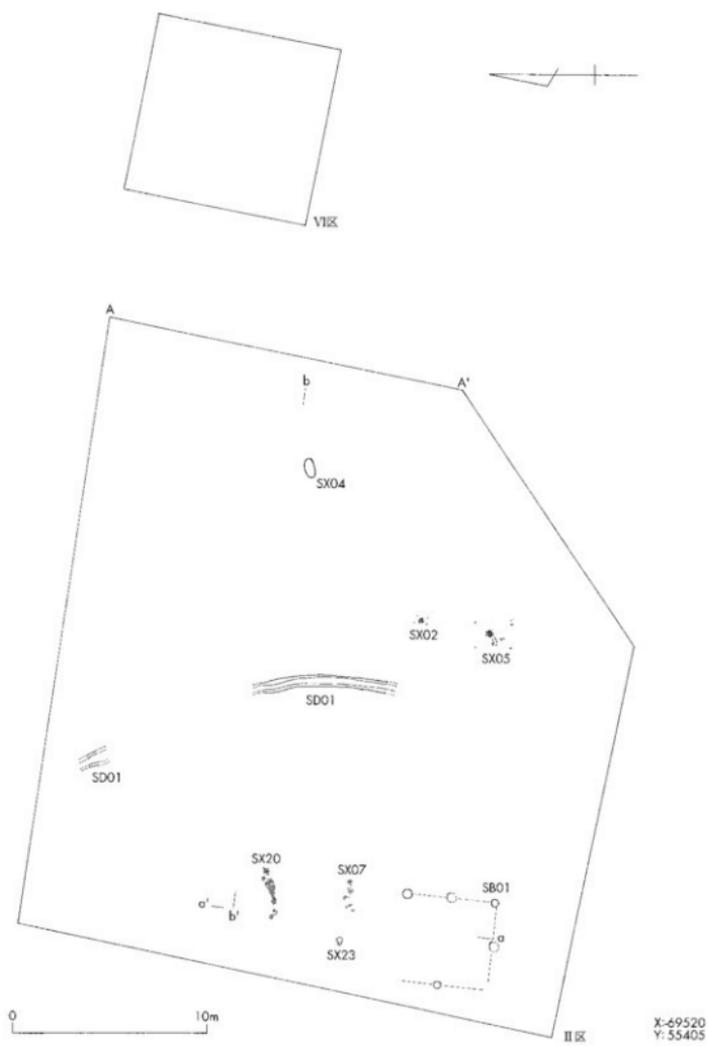
SX02とSX05は、礫を中心とした集石遺構である。SX02は中心に2個の角礫を置き、周辺に角が取れ、丸みを帯びた礫で径50.0cmの範囲に置いている。厚さは約20cmある。礫は海岸のものであろう。SX05はSX02の南3mの位置にあり、径40.0cmの範囲にSX02と同様な礫を敷き詰めている。後世の攪乱のためか周辺に礫が散乱している。この中に中世陶器の小破片があり、SX02とSX05はそのころの遺構と考えられるが性格は不明である。これらと同じ遺構は大津町北遺跡の2層にもあった。比較的位相関係も近いので互いに関連しあった遺構であろう。

SX04は調査区の東側に検出した1.25×0.90m、深さ0.1mの浅い土坑である(第42図)。中からは炭化物とともに、鉄鑄形土鍋と8枚の土師質土器が出土した(カラー図版4、図版24)。鉄鑄形土鍋は径32.5cm、器高14.3cmに復元される。内外面とも粗いハケ痕がこのころ。外面は煤が底部から口縁部まで全面に付着している。底部に近いところに器面の剝離がみられる。内面は薄い茶褐色を呈し、胎土には砂粒はみられず緻密である。土師質土器はサイズは一定していないが、底部外面に回転糸切痕を残す。いずれも二次焼成を受けている。こうしたことから、この場においてこれらの土器が使用されていたことが伺える。中世の住居の一部か、祭祀に伴う煮炊きが行われたと思われる。中世の遺物には、第47図73の長さ6.3cm、重さ3.69gの鉄製釘、75の長さ12.0cm、重さ22.16gの鉄片がある。

古代の遺構にSD01がある。Ⅱ区2層の遺物を取り除いた段階で、調査区のほぼ中央に緩い弧を描きながら南北方向の溝SD01を検出した(第43図)。幅は約30cm深さ20cmほどで、年代を示す遺物には7世紀代の須恵器の長頸壺の破片がある(図版40)。後述するようにⅡ区の2層土器Ⅱ群はこのSD01に沿うように分布をしており、土器群の出土状態と関係しているらしい。

調査区の西南隅には掘立柱建物跡SB01を検出した(第43図、図版36)。南北方向に主軸があり、2間×2間で、柱穴は6穴確認した。柱間はほぼ7尺ある。また、このSB01の北側に鍛冶炉SX23を検出した(第43図、図版36)。火床は径40cm、深さ15cmほどの円形で強く焼けている。この火床の東側に接して60×80cmの施土層があった。SB01とSX23はその位置関係から互いに関係ある遺構の可能性がある。とすれば柱穴は検出できなかったが、SB01はもう少しSX23のある北側に広がっていたかもしれない。このあたりの遺物出土状態は第87図に示した。遺物は7世紀代、8世紀代、平安期のものがあるが、SX23に最も近いのは7世紀代の須恵器・土師器と8世紀中頃以降と考えられる赤彩土師器を主とする土器の一群である。出土状況から判断すると7～8世紀の須恵器・土師器がSX23の年代を示していると思われ、SB01も同様に考えられる。SX23が廃絶してから、平安期にいたるまで数度の遺物の廃棄が行われているのが窺われる。

第88図と第89図にはSX23付近の遺物を示した。第88図526～533は須恵器である。527は蓋環の蓋、526は蓋環が小型化しボタン状の撮みが付いた蓋である。530・531は無高台の長頸壺の底部で、531にはへら記号がある。533は小型の壺であろう。底部外面には糸切りはみられず、へら記号がある。528は蓋環の蓋を形態上逆転させ環としたものと考えた(坏A0)。底部外面には糸切り痕はみられない。「×」のへら記号がある。体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は断面がS字状となる。後述する須恵器坏A1の粗形と考えられる。529・532は出雲大井産の坏で底部外面に回転糸切痕がある。



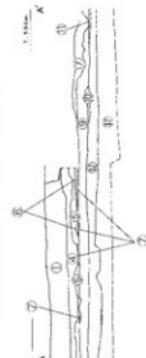
第39图 中野清水道跡II区遺構配置図

中野清水遺跡Ⅱ区 トレンチ土層図(東-西)



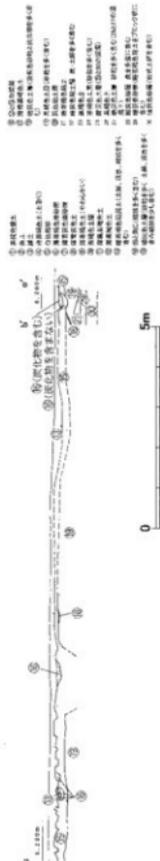
- ① 西側土層
② 西側土層(1層)
③ 西側土層(2層)
④ 西側土層(3層)
⑤ 西側土層(4層)
⑥ 西側土層(5層)
⑦ 西側土層(6層)
⑧ 西側土層(7層)
⑨ 西側土層(8層)
⑩ 西側土層(9層)
⑪ 西側土層(10層)
⑫ 西側土層(11層)
⑬ 西側土層(12層)
⑭ 西側土層(13層)
⑮ 西側土層(14層)
⑯ 西側土層(15層)
⑰ 西側土層(16層)
⑱ 西側土層(17層)

中野清水遺跡Ⅱ区 西壁土層図(一部)



- ① 西側土層
② 西側土層(1層)
③ 西側土層(2層)
④ 西側土層(3層)
⑤ 西側土層(4層)
⑥ 西側土層(5層)
⑦ 西側土層(6層)
⑧ 西側土層(7層)
⑨ 西側土層(8層)
⑩ 西側土層(9層)
⑪ 西側土層(10層)
⑫ 西側土層(11層)
⑬ 西側土層(12層)
⑭ 西側土層(13層)
⑮ 西側土層(14層)
⑯ 西側土層(15層)
⑰ 西側土層(16層)
⑱ 西側土層(17層)

中野清水遺跡Ⅱ区 トレンチ土層図(前-北)

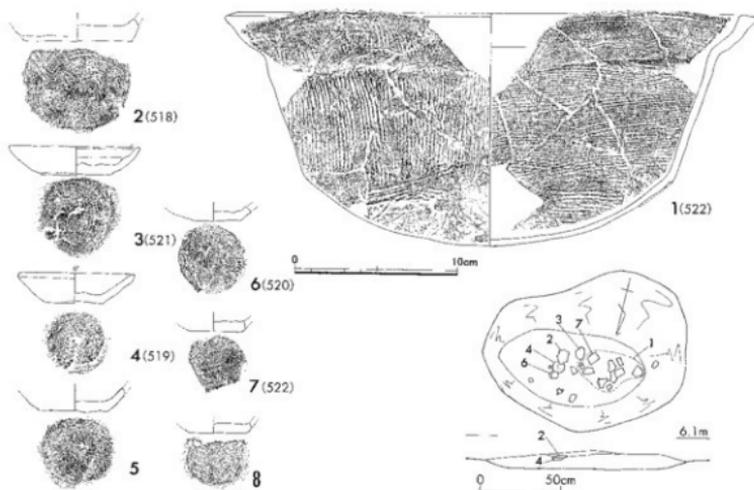


- ① 前側土層
② 前側土層(1層)
③ 前側土層(2層)
④ 前側土層(3層)
⑤ 前側土層(4層)
⑥ 前側土層(5層)
⑦ 前側土層(6層)
⑧ 前側土層(7層)
⑨ 前側土層(8層)
⑩ 前側土層(9層)
⑪ 前側土層(10層)
⑫ 前側土層(11層)
⑬ 前側土層(12層)
⑭ 前側土層(13層)
⑮ 前側土層(14層)
⑯ 前側土層(15層)
⑰ 前側土層(16層)
⑱ 前側土層(17層)

第40図 中野清水遺跡Ⅱ区土層図



第41图 中野清水遺跡Ⅱ区SX02・05実測図



第42図 中野清水遺跡Ⅱ区SX04出土遺物

後述するように須恵器環A 1に分類した。第88図534～第562図は土師器である。534～539は赤彩土師器の高環で、534には暗文がある。538・539は同一個体であろう。535・536は赤彩土師器の坏で、赤彩は全面に施される。器壁は厚く、外面はハケ調整がなされる。537・540は土製支脚の一部である。541・542は小型手捏土器である。543～548は甕型土器。549～560は赤彩土師器である。549は底部を欠くが鉄鉢形であろう。550～558は563～566の製塩土器や546の壘型土器と一群をなし、まとめて出土した(第87図)。いずれも、赤彩は底部外面にまでは達していない。558は無高台の皿(皿A)、それ以外は無高台の坏(坏B 1)である。559は高台付皿(皿B)で、高台は低く外側に貼り付けられている。560は体部が直線的に開く高台付の坏(坏B 2)である。561・562は平安期に下る土師器であろう。

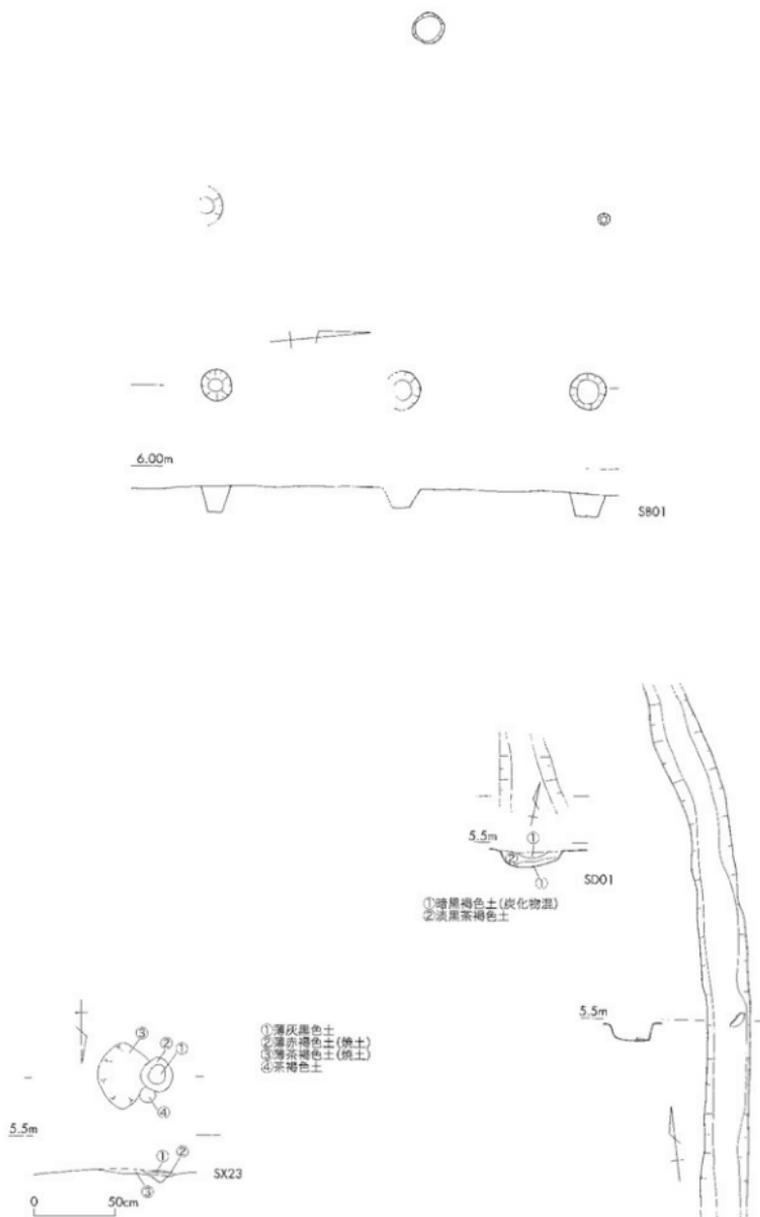
2層では調査区のほぼ全面にわたり古代の遺物が検出されたが、調査の途中でその分布には粗密があると思われたので、便宜上、調査区の遺物を出土状況に応じて、I～V群に分けて取り上げ検討した(第44図)。I群は調査区の東端、II群は調査区の中央で北西から南東にかけて、III群は調査区の北西隅、IV群はIII群の南側、V群はI群とII群の間である。とくにII群は最も遺物が集中していたところである(図版30～32、カラー図版6)。特に壘、甕型土器、土製支脚といった炊飯用具、須恵器・土師器の食器類が目立ち、それらは廃棄された状態であった。時期もおよそ6世紀末～平安期で、その間に幾度もわたり生活用具の廃棄がなされ、最終的に密集した状態になったと考えられる。従って廃棄された単位があったはずである。その単位を調査において明らかにする必要があったが、遺物の密集のしかたからは不可能であった。しかし、III群からIV群にかけて、比較的遺物の密集度が少ないところでは、SX07とSX20において、後世に幾ばくかは遺物が失われたのであろうが、廃棄の単位をつかむことができた。同様な単位の遺物群は中野清水遺跡ではIV区においても検出した。

Ⅱ区における各遺物群は、Ⅰ群は赤彩土師器と製塩土器、Ⅱ群は炊飯用具と食器類、Ⅲ群は小型模造品(祭祀遺物)、Ⅳ群とⅤ群は食器類という大雑把な傾向がみられた。そしてどの遺物群にも共通して、小型手捏土器等の祭祀遺物が伴っている。全体的にみれば祭祀色が強いと云えよう。以下は須恵器を除くⅠ群～Ⅴ群の主要遺物の概要である。

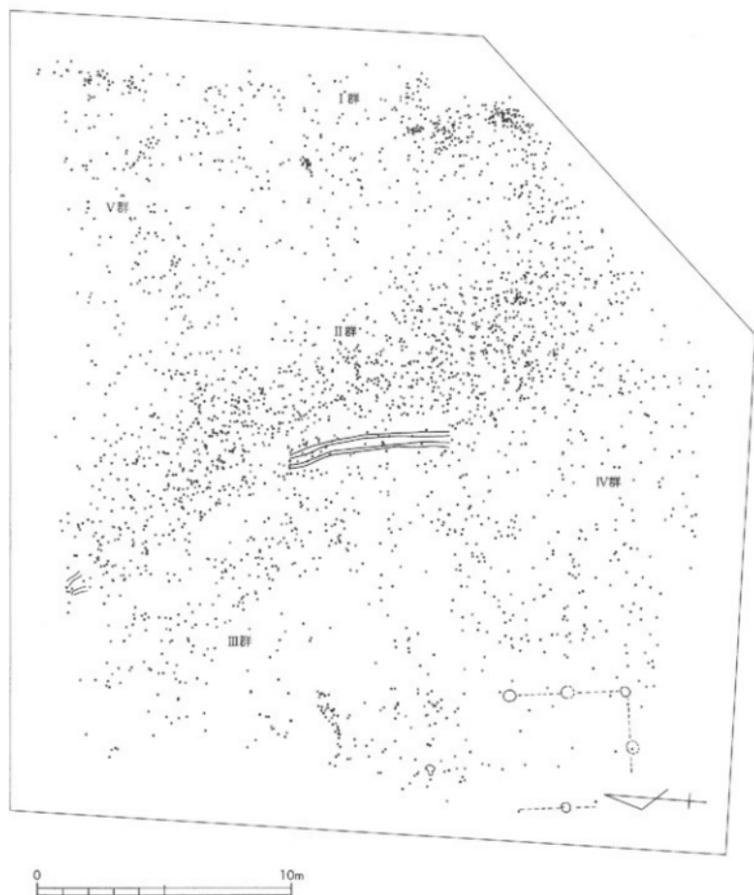
Ⅰ群の土器は赤彩土師器が多く、その内40点を第45図に図示した(図版42)。1は7世紀代の高坏であるが、その他は2を除き全て8世紀中頃以降のものであろう。2は復元口径14.2cm、器高5.2cmの鉢で、出雲の大井産須恵器を模倣したものである。口縁部内面に一条の沈線が入る。破片のため確実に確認でないが赤彩は全面に及んでいたものと思われる。3～24は無高台の坏(坏A)、26～30は高台付坏(坏B)、31～37は無高台の皿(皿A)、38～40は高台付皿(皿B)である。いずれも、25・27を除いて、赤彩は外面底部には及ばない。赤彩塗料も薄くハケの痕跡が明瞭である。これらのうち、7・8・11の底部外面には板目がみられる。また、9や12は灯明皿として使用されている。高台付坏(坏B)は皆、高台が外側に付けられている。30にいたってはわずかに高台の痕跡を残す程度である。赤彩土師器の胎土には、砂粒を含まない乳白色のものがほとんどであるが、26や29のように、砂粒を含み断面がくすんだ赤褐色の一群がある。13には墨書が底部外面にみられる。「三」、または「川」。24と38は朱墨で、前者は「一」、後者は「×」、または「大」であろう(図版43)。第46図41～44は壺型土器である(図版43)。赤彩土師器と同時期と考えられる。同様に同時期と考えられる遺物には多くの製塩土器があるが、その多くが細片である。第47図51・52は特殊な製塩土器を図示した。器面も断面も赤褐色で他の製塩土器と比較するとやや異質である。二次焼成は受けておらず、赤彩が施されているかもしれない。第47図72は古墳時代の耳環の鉄芯部である。54～65は上鉢である(図版42)。68～71は鉄器で、68～70は刀子、71は鎌の破片か。66は石製紡錘車で51.0gを量る。67は桃の種子。47～50は小型手捏土器である。53は小型の土製支脚で頭部を欠く。土製支脚としては最小のグループに入るものである(図版48)。45・46は平安期に入る土師器であろう。いずれも底部外面に回転糸切痕をのこす。45はさらに板目が、46は高台付で底部内面に焼成後に「×」印が刻されている。

第48図105～108は製塩土器である(図版44)。Ⅱ群に比較的近い位置でこれらがまとまって出土したので(図版35)、復元を試みたところ、4個体分となった。口径は13.0cm前後である。底部までは復元できなかった。底部は使用時において胴部や口縁部よりさらに細かく砕かれたのであろう。製塩土器焼成時の焼けひずみも大きい。

Ⅱ群の遺物は第48図～57図に示した。第48図76～78は7世紀代の土師器で、76は坏、77・78は高坏である。79～103は赤彩土師器である。いずれも、胎土は砂粒を含まない乳白色である。79は7世紀代の坏で全面赤彩。器壁は厚く胎土には砂粒を含む。胴部外面下半はへら削りである。91は鉢、80・90・92・93・94・96・97は無高台の坏(坏A)で、80と92には外面底部、及びその付近にケズリがみられ、全面赤彩である。98・99は高台付の坏(坏B)。98はしっかりとした高台で、赤彩は高台内側まで施されるが、底部外面には及んではいない。99は高台の外面の途中まで赤彩され、高台断面は逆三角形で外側に付く。81～89は無高台の皿(皿A)。81～84は不安定な底部で外面はへら削りで、全面赤彩である。85は底部はへら削りであるが赤彩はみられない。86は底部にへら削りはみられないが全面赤彩である。100～103は高台付の皿(皿A)で、いずれも高台は外側に付き、底部外面には赤彩は施されない。102の底部外面には墨書「三」、または「川」がある。これらの赤彩



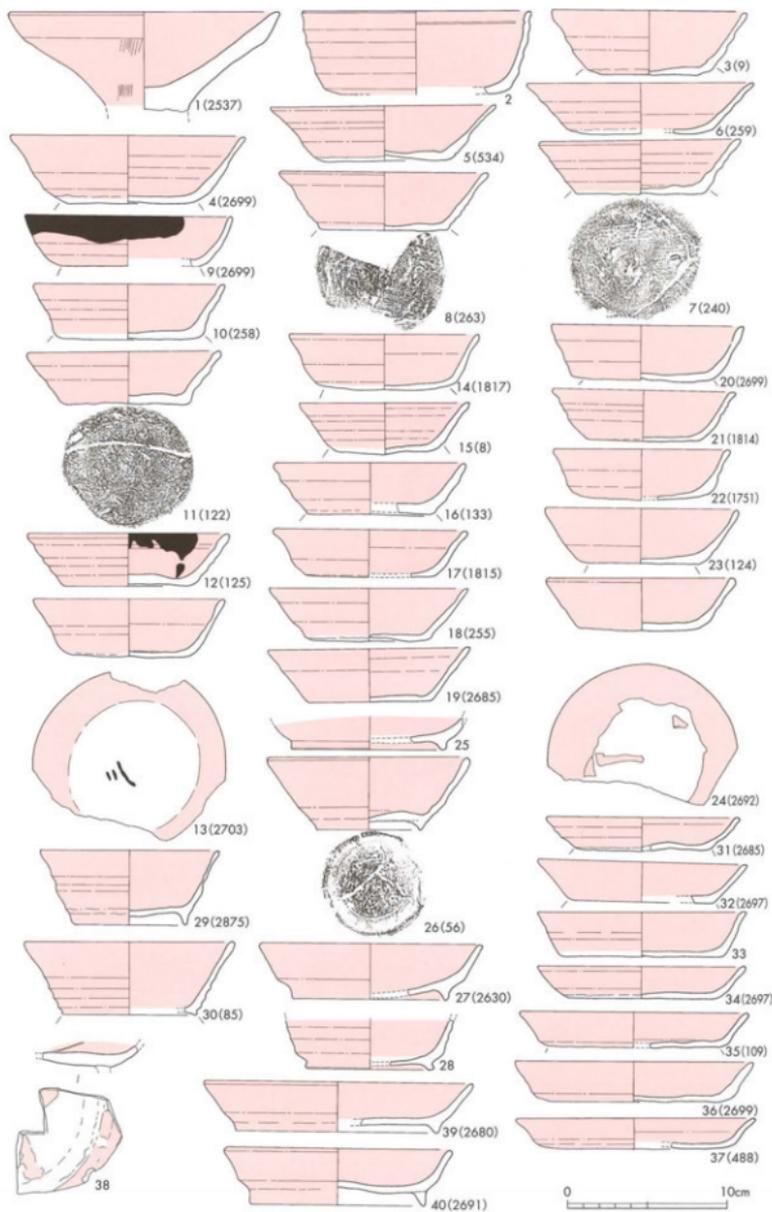
第43図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SB01・SX23・SD01実測図



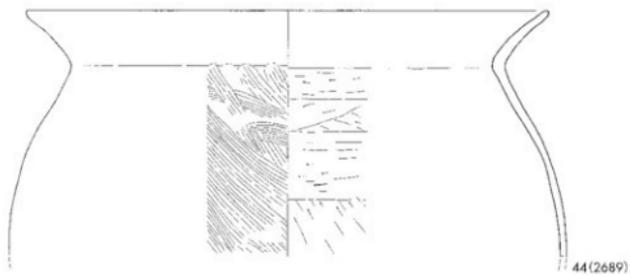
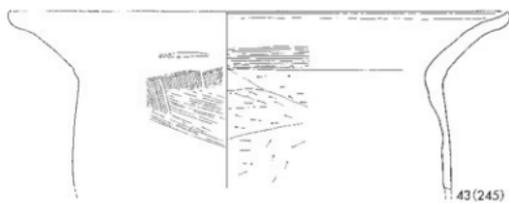
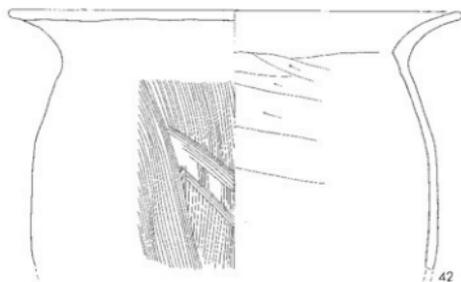
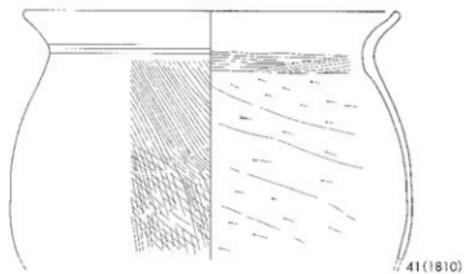
第44図 中野清水遺跡Ⅱ区2層遺物分布図

土師器は7世紀後半～8世紀のものである。104は底部外面に回転糸切痕を残し、低い高台を意識した土師器の坏である。平安期のものであろう。

109～112は土製模造品である(図版49)。109は不明土製品で23.46gある。110は高坏の手捏土器。111は土製勾玉で、長さ1.8cm、中央での径0.5cm、重さ0.77gある。112は土製小玉で、長さ0.6cm、径0.6cm、0.2gを量る。第49図113～138はいわゆる小型手捏土器である。最小の113は径3.8cm、器高2.2cm、最大の138は径8.0cm、器高7.7cmある。このうち、134は胸部に把手の剥離した痕がある。142は小型坏、143は甕型土器の模造品であらう。139～141は小型の鉢のようにみえるが、小型の甕型土器かもしれない。139は口径11.4cm、器高9.0cmで復元できる。140は口径14.0cm、器高8.8cmで、

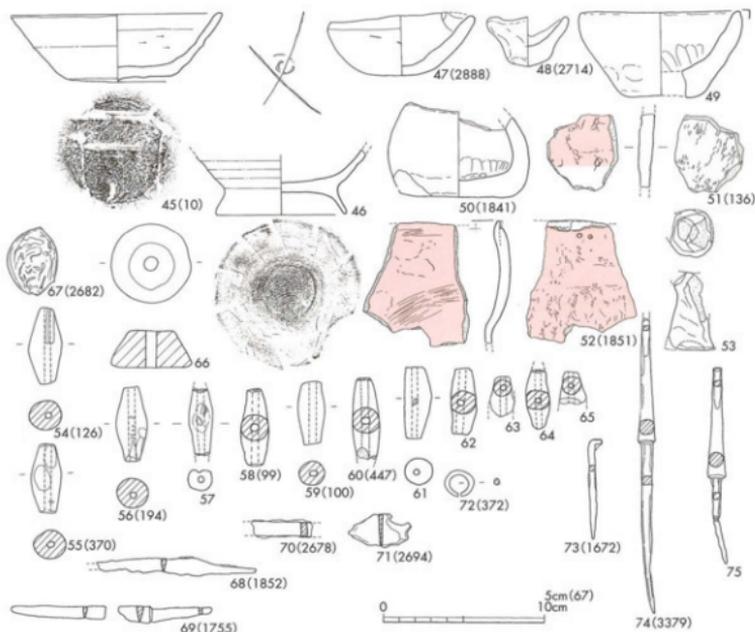


第45图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(1)



0 10cm

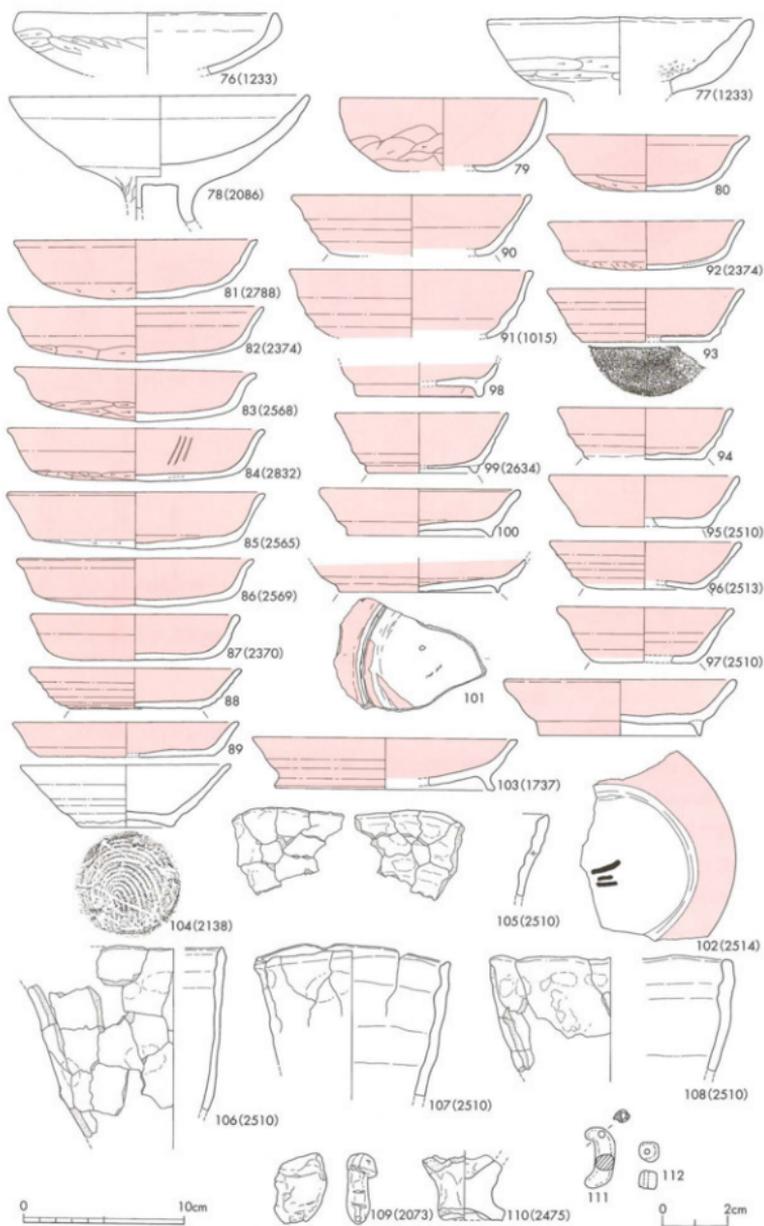
第46図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(2)



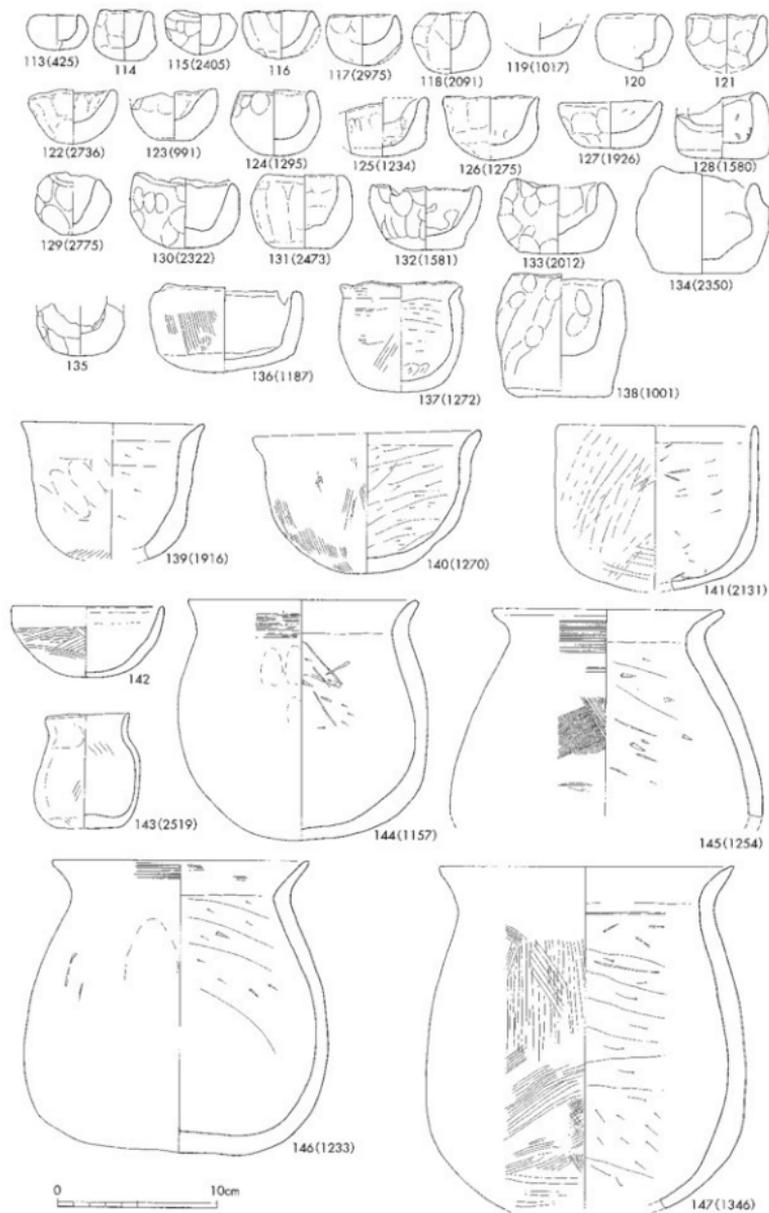
第47図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(3)

底部外面に炭化物付着痕がある。141は口径12.2cm、器高10.3cm。第49図144～137、第50図、第51図154～157、159、第52図160・161は甕型土器である。多くは胴部や底部外面に煤の付着した痕跡がある。144は口径14.4cm、器高15.0cmの小型の甕である。146は口径16.0cm、器高18.2cmの下膨れの形態の甕である。155は口径21.4cm、器高21.8cmで、下膨れの形態である。156は口径19.2cm、器高15.1cmの広口の甕である。157は口径18.2cm、器高24.0cmの下膨れの甕である。160は口径28.0cm、器高21.5cmの広口の甕である。第51図158、第52図162は甕である。158は底部の破片であるが、孔は2ヶ所である。162は口径32.0cm、底径12.4cm、器高21.6cmで、孔は2ヶ所である。第52図163～167の土製品は、完形のものはないが、これら5点から中央に撮みが付けられた蓋と判断される。166は径17.2cm、165は径16.2cmある。器高は5.1～5.3cmで、撮みの径は4.0cm前後である。甕型土器の頸部の内径がこれを超すものには使用できないので、比較的小型のものに用いられたのであろう。第49図～第52図の甕型土器のいくつかは該当する。

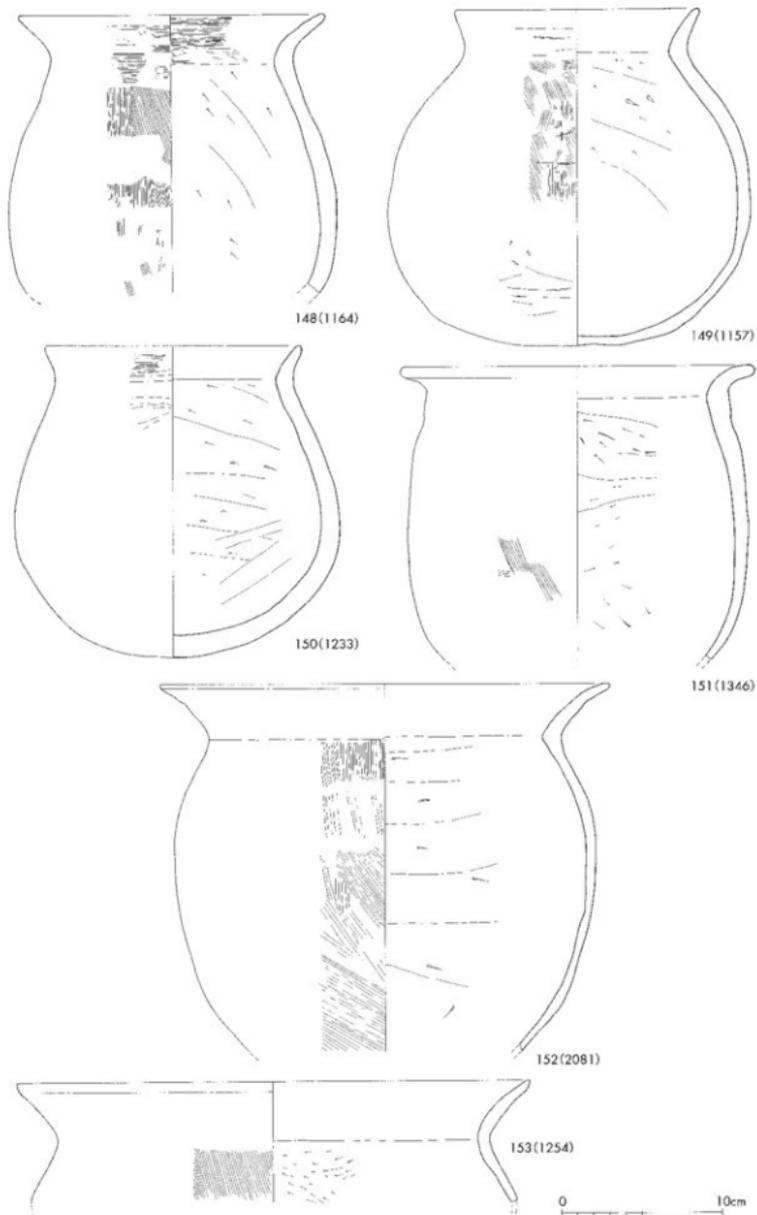
第53図～第56図は土製支脚である(図版46)。この土製支脚には大別して2種ある。胴部が円柱状で頭部が二股の第53図～第55図と獣脚形土製支脚と仮称した第56図である。前者は西日本に通常みられるもので、胴部に突起の付くものと(169・170、172～175)、付かないもの(168)がある。突起は胴部の中程より上に付けられ、先端がやや尖り上方にそり上がるもの(170)、円形で平坦となるもの(169・175)等一定していない。また、171は胴部に孔を穿つ。外面をハケ調整する169・171や、縦方向にヘラ削り調整する170・177等がある。第53図168～170、第172図は高さがそれぞれ



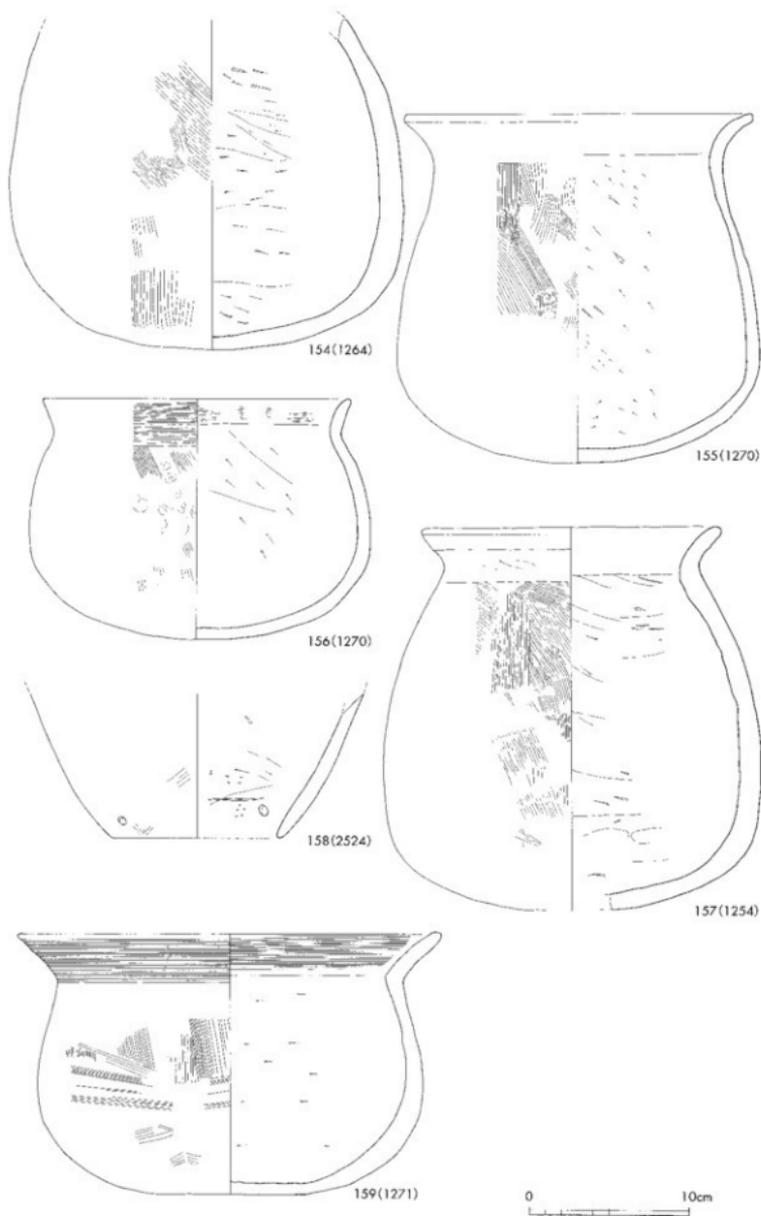
第48图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(4)



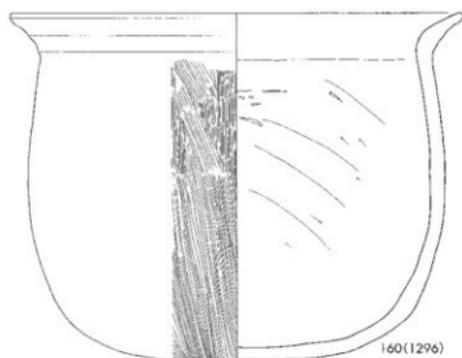
第49図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(5)



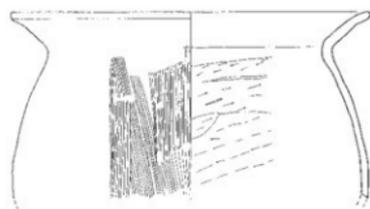
第50图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(6)



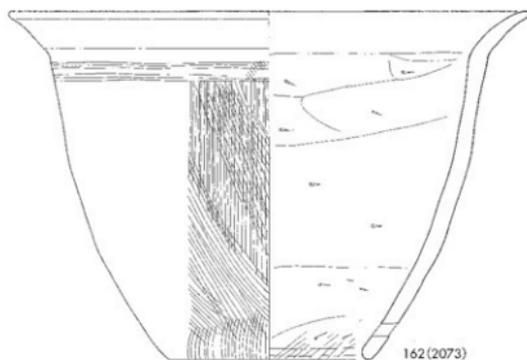
第51図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(?)



160(1296)



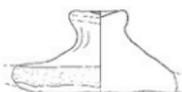
161(2693)



162(2073)



163(1964)



164(964)



165(996)



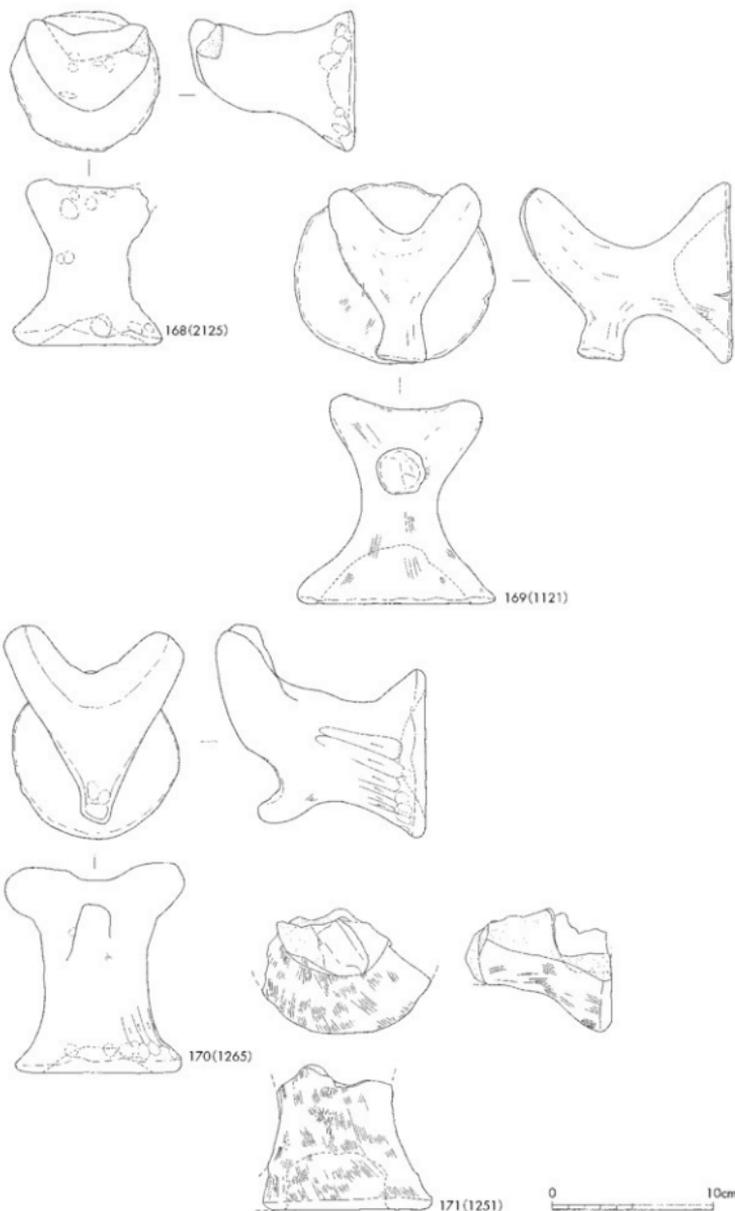
166(2686)



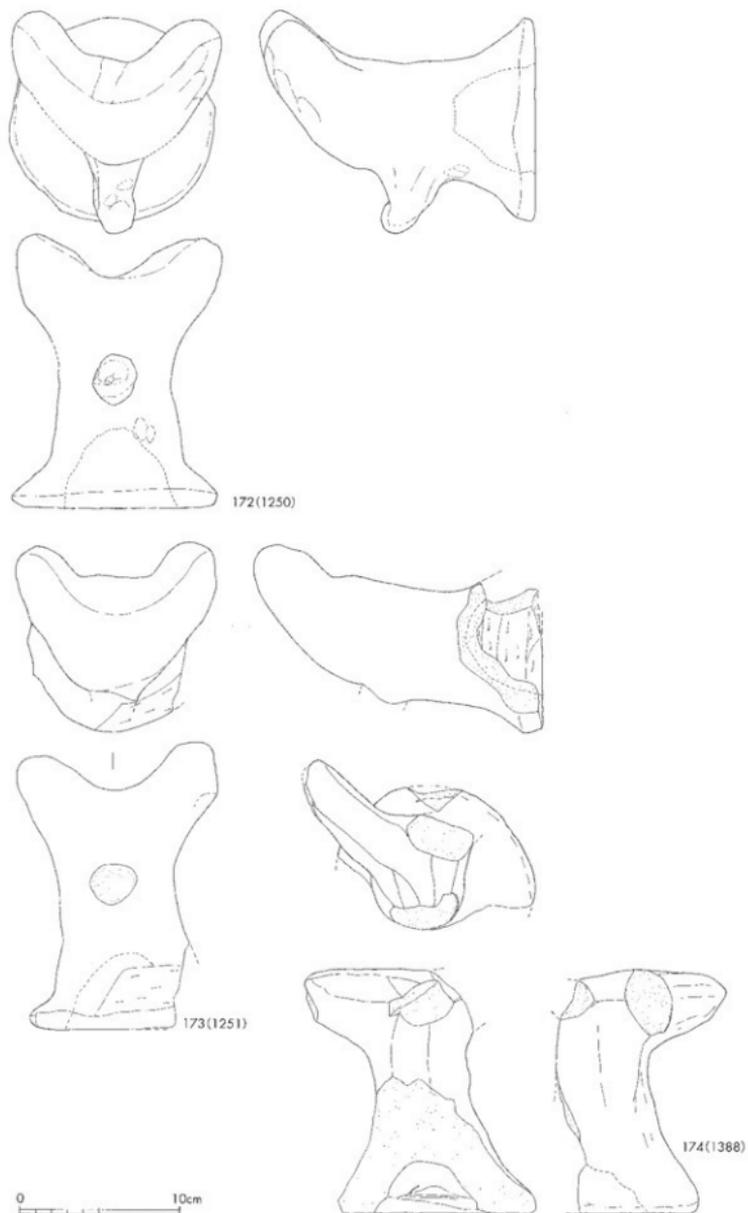
167(2324)



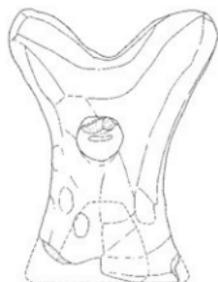
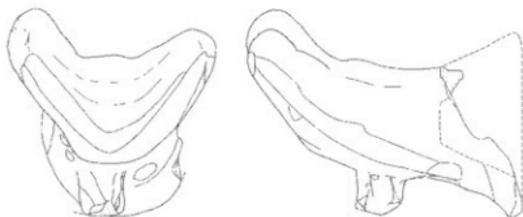
第52图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(8)



第53圖 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(9)



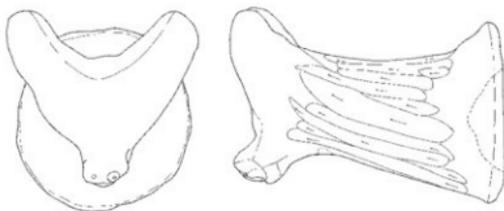
第54图 中野清水遺跡II区2層出土遺物⑩



175(1302)



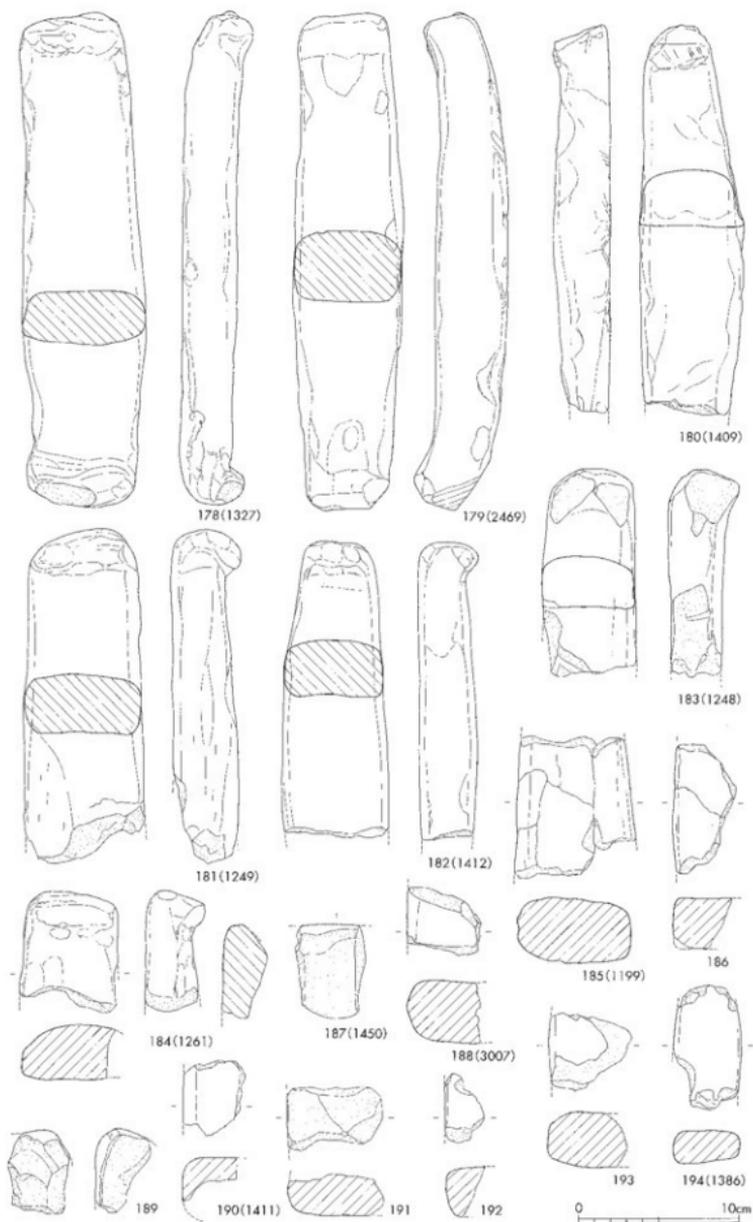
176



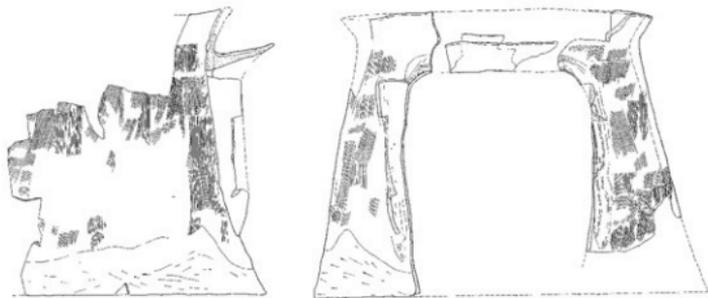
177(1232)

0 10cm

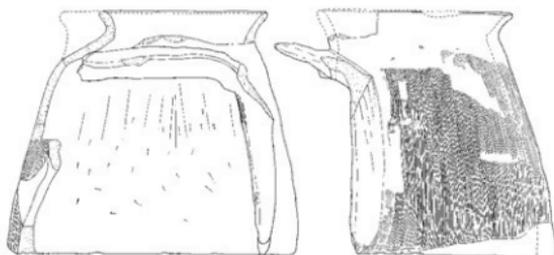
第55图 中野清水遺跡II区2層出土遺物(1)



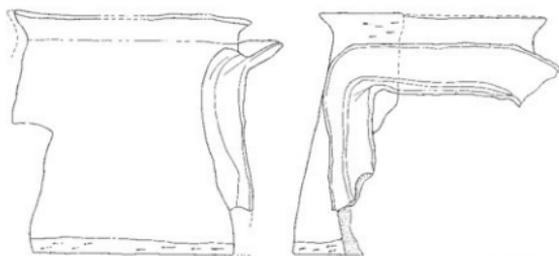
第56图 中野清水道跡Ⅱ区2層出土遺物(2)



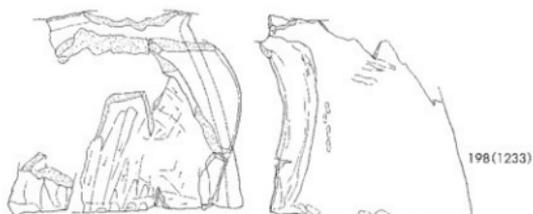
195(2054)



196(1270)



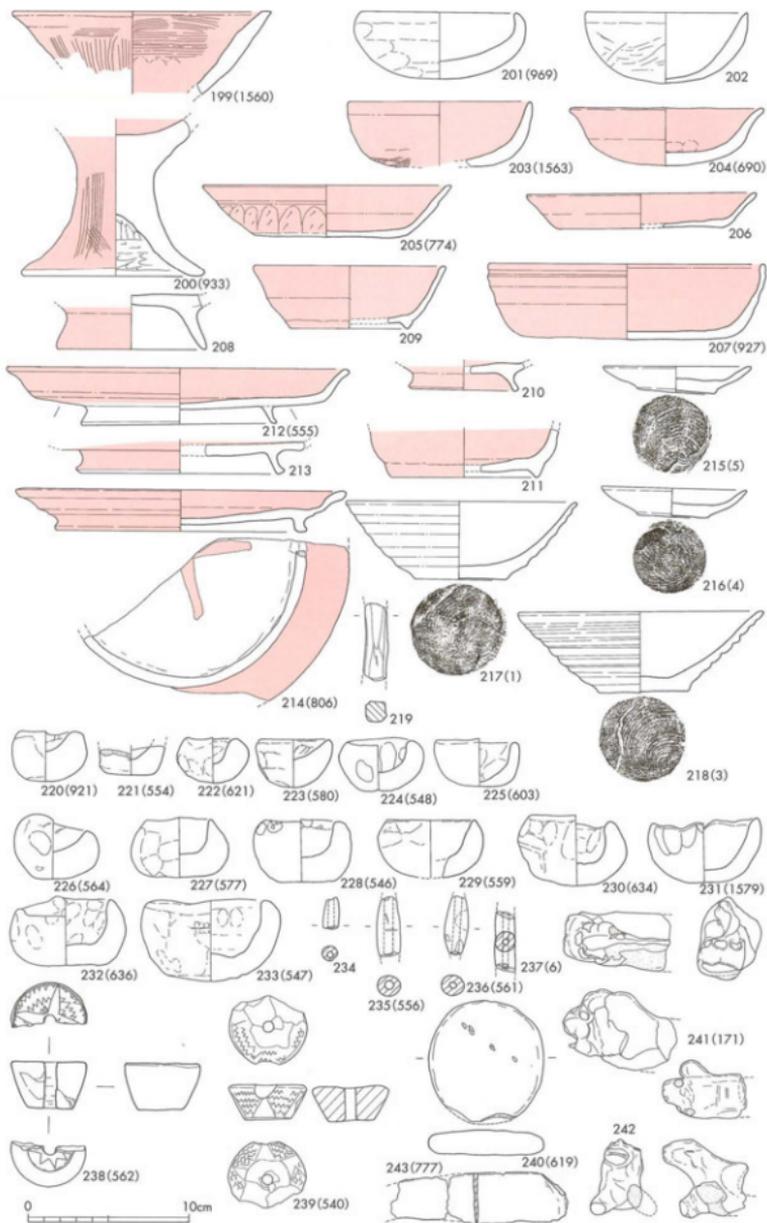
197(1222)



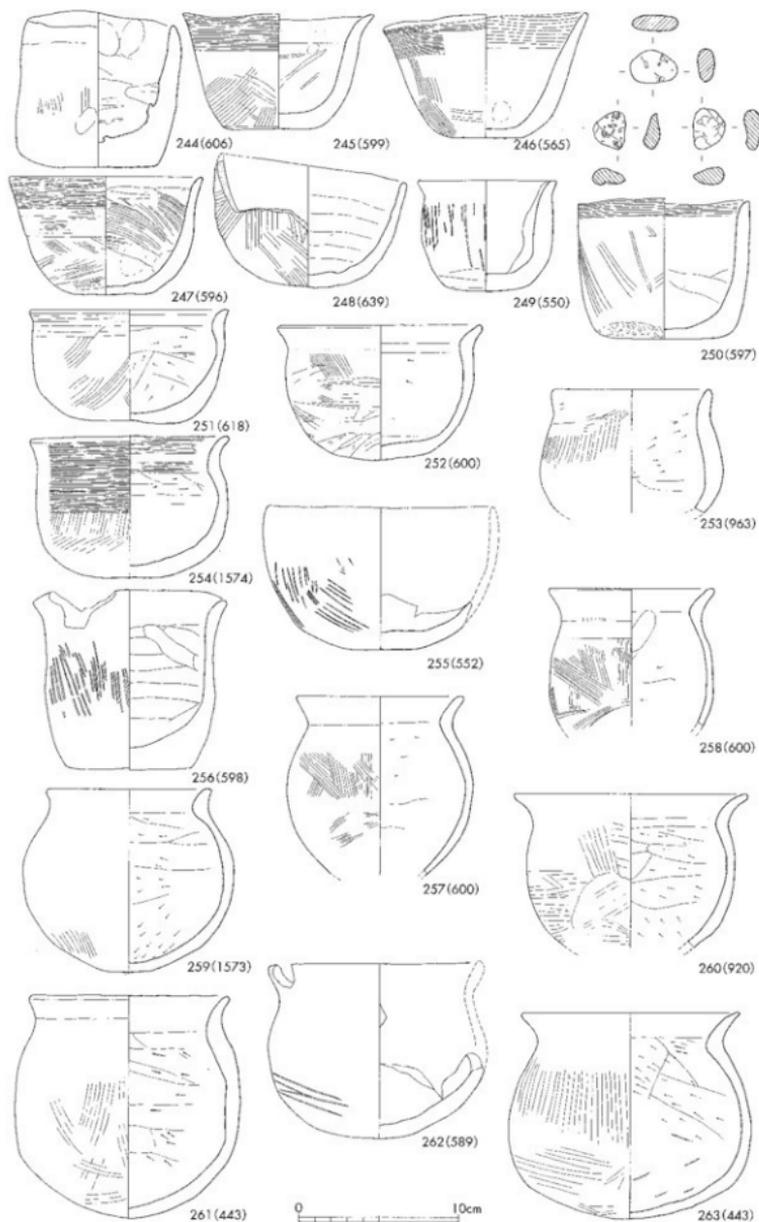
198(1233)

0 20cm

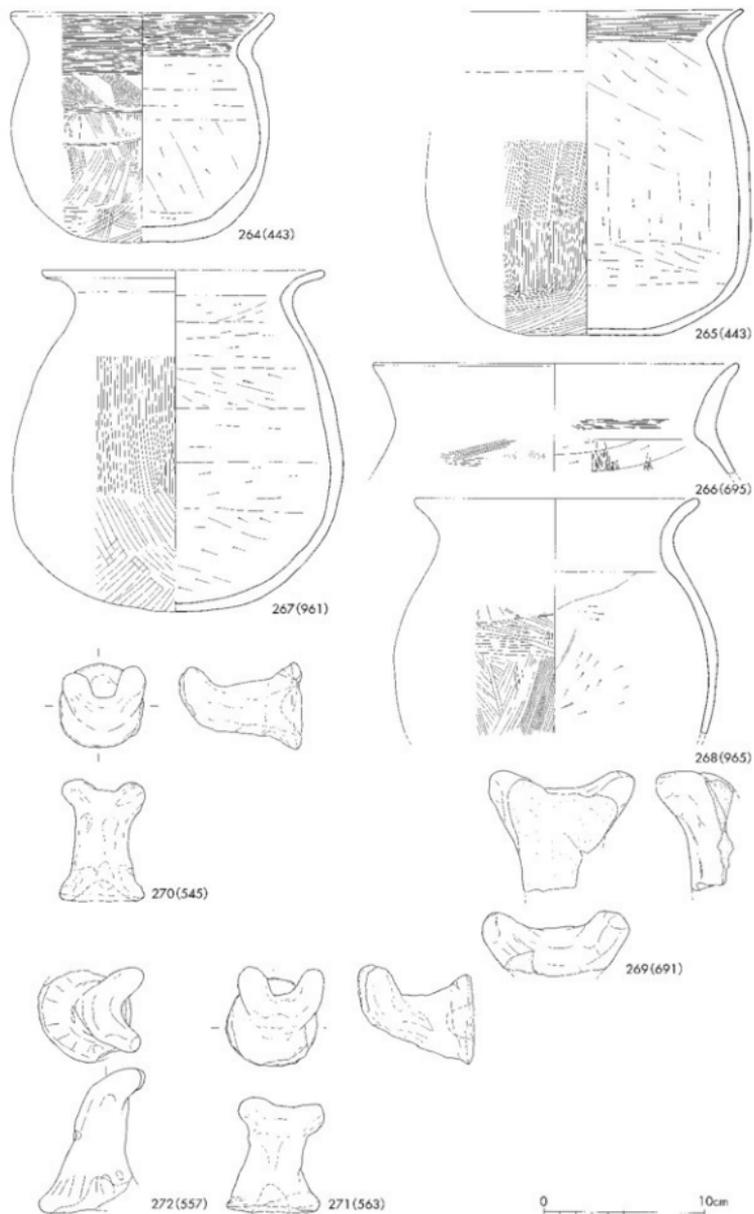
第57图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物13



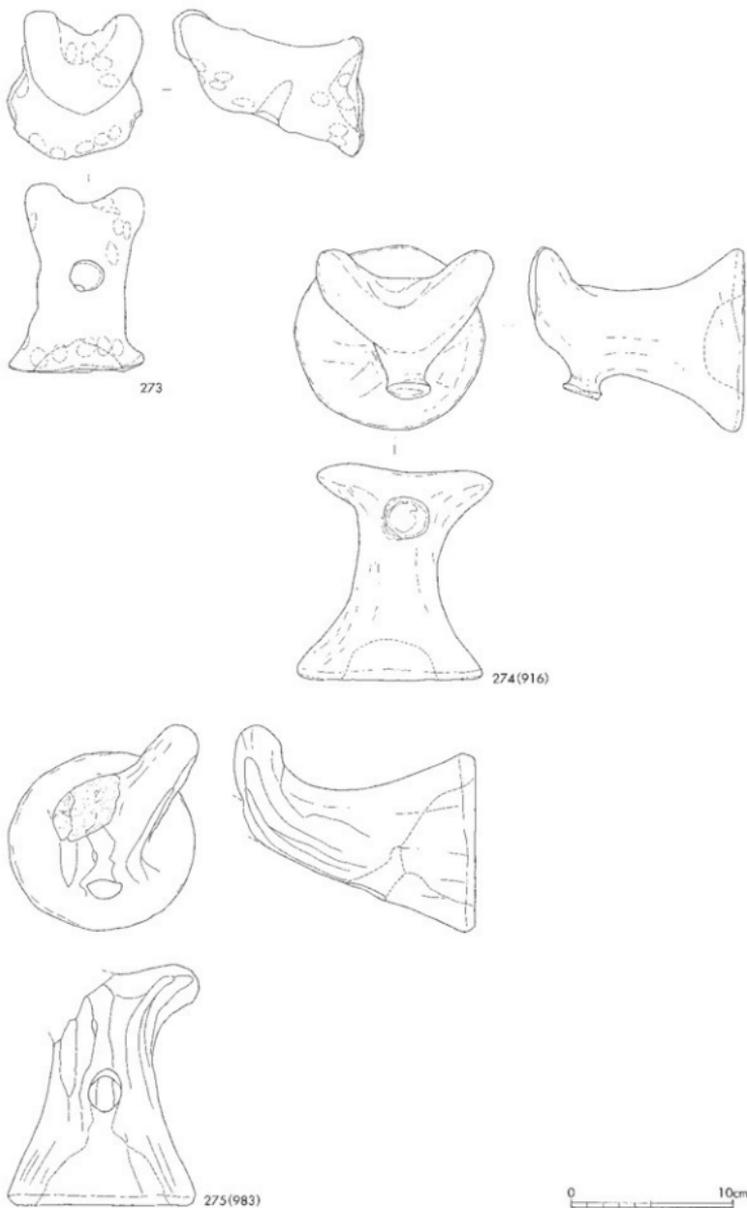
第58图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(14)



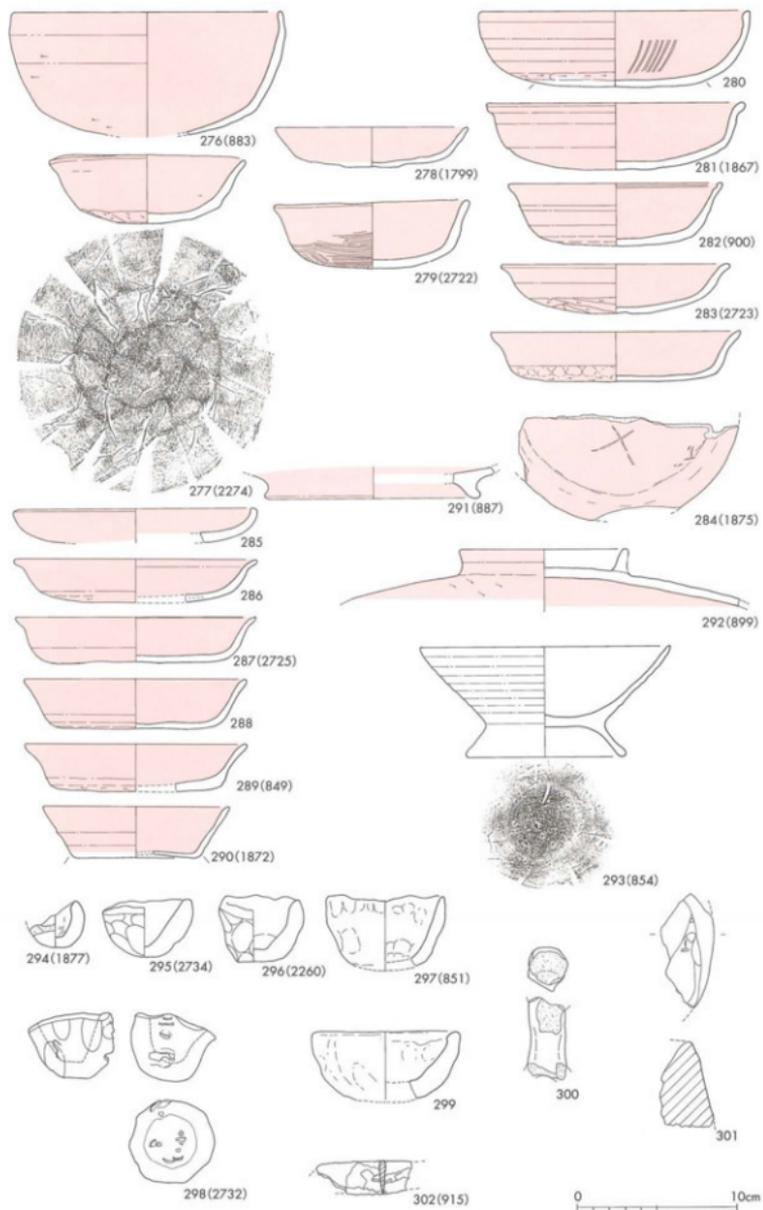
第59圖 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物19



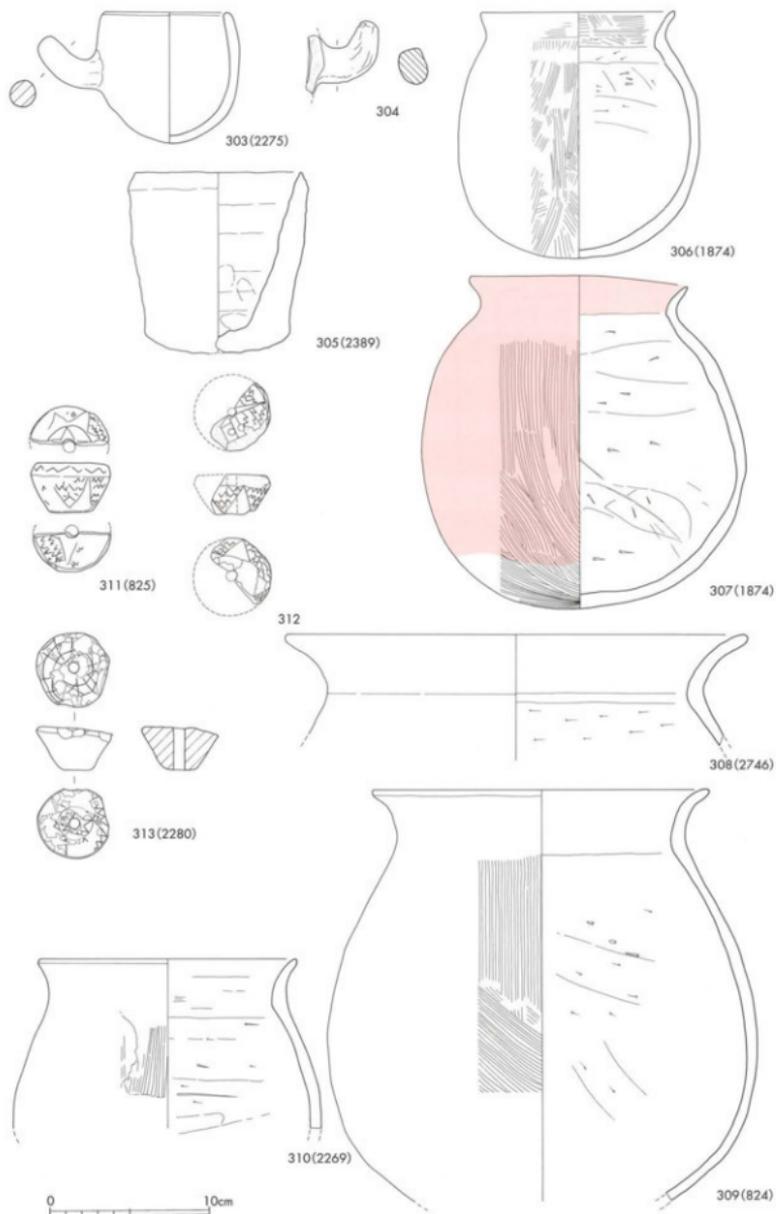
第60图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物⑩



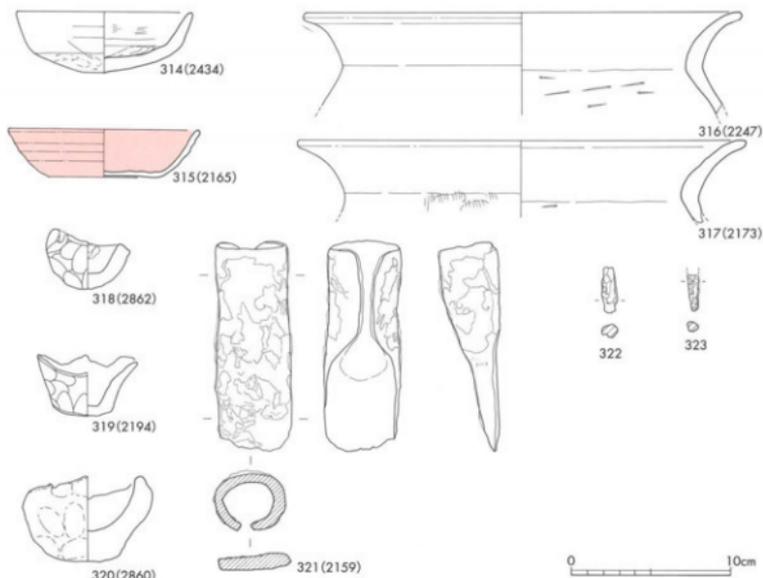
第61图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物17



第62图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(18)



第63图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物①⑨



第64図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物②

10.3・13.0・12.9・17.0cmあり、中型品の一群である。第55図176の突起には二つの円形浮文がある。同様に177の突起には、一部欠損しているが、二つの円形付文の下に一条の短い沈線が横方向にあり、顔を表現した可能性がある。このような視点でみると、175と176も顔かもしれない。千葉県酒々井町では9世紀の土製支脚に「人面」が横方向にへら書きされたものが出土しており、龍神であると指摘されている。土製支脚は元来そのような性格をもったものであろうか。第56図はこれまで報告例のない土製支脚である（図版47）。破片を接合し完形となったものは178と179である。178は長さ30.8cm、中央での幅7.6cm、厚さ3.3cmある。両端が同じ方向に曲げられている。反対側の面は縦方向に粗いナデ調整が施されている。成形後に葉状のものの上に置かれたようでその痕跡がみられる。179は長さ30.9cm、中央での幅6.7cm、厚さ4.4cmある。発見当初のような土製品なのか皆目検討がつかなかった。あえて言えば端部が獣脚に見えたので大型の盤の脚部と想像していた。遺物整理の途中で178・179のように復元され、また、どの破片も両端が曲げられた面が強く二次的に被熱しているのが観察されたので、これらを3本使用し、おそらく1/3ほどを末に埋めて甕型土器の底を支えた土製支脚であろうと判断した。全体は舟形にも見えるが、上下の区別はなくどちらでも使用できる。そして、他の土製支脚と区別するために「獣脚形土製支脚」と仮称した。両端が曲げられ、180にみられるように端部に平坦がみられるものがあるのは甕型土器の底を支えるための工夫であろう。181～193は破片であるがⅡ区2層Ⅱ群において少なくともこのような3本一組にした土製支脚が2セットはあったことになる。180～192を含めて観察すると、被熱していない面は平坦なものが多く、ほぼ、幅と厚さが同じであるので、箱状の型に入れて作られたと考えられる。

折れ方や破片のあり方も粘土塊の単位のようにみえる。194は両端を欠き、現状では長さ7.7cm、幅4.2cm、厚さ2.0cmあるが、この獣脚形土製支脚のミニチュアであろう。二次的な焼成はこの破片の範囲内ではみられない。

第57図は甕である（図版48）。いずれも、底部を欠いた壘型土器の胴部に大きな窓を開け焚き口とし、その縁に庇を付けた形態である。庇は口縁部より高くならない。195は器壁が薄く、側面の庇は床より5cm浮いたところまで付けられている。外面は丁寧な縦ハケ調整で、下方はヘラ削りがなされている。196の庇はわずかに1.5cm浮く。195～197は内面や庇の裏面に煤の付着がみられる。

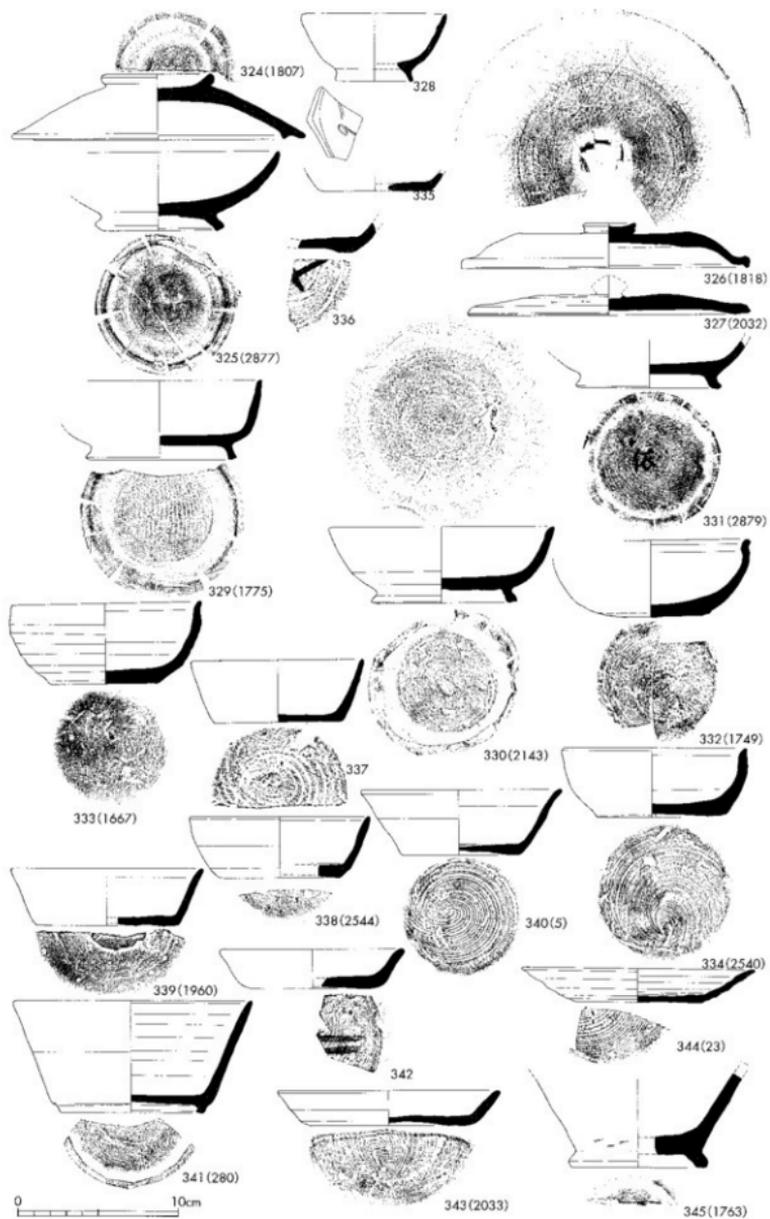
第77図にはⅡ群の鉄製品と石製品を図示した（図版54）。鉄製品には鋤・鍬類、鎌、刀子等がある。482～485は鋤、または鍬先である。482と483は接近して出土した（図版32）。482は466.0g、483は378.7g、484は75.99gを量る。完形ならば500g前後になろう。486は刀子の破片、487・488は鎌の破片であろう。489は刀子、または鉄族と考えられる。490は耳環で金箔が全面に残る。6.45gある。石製品には、紡錘車、勾玉、砥石がある。491～495は紡錘車で、492～494は全面を線刻鋸歯文で飾る。491と495は小破片のため不明である。完形の492は径4.7cm、高さ2.5cm、重さ51.56gある。496～498は砥石で、全体の形が知られるのは498である。長さ19.0cm、使用されたためすり減った中央での幅3.5cm、重量は696.89gある。499は碧玉製の勾玉の先端部片である。3.0gある。

なお、第77図500は、小破片のため器形不明の土器である。土師器のようにみえる。口縁部の一部であり、外面に竹管文状の文様がある。搬入品か。

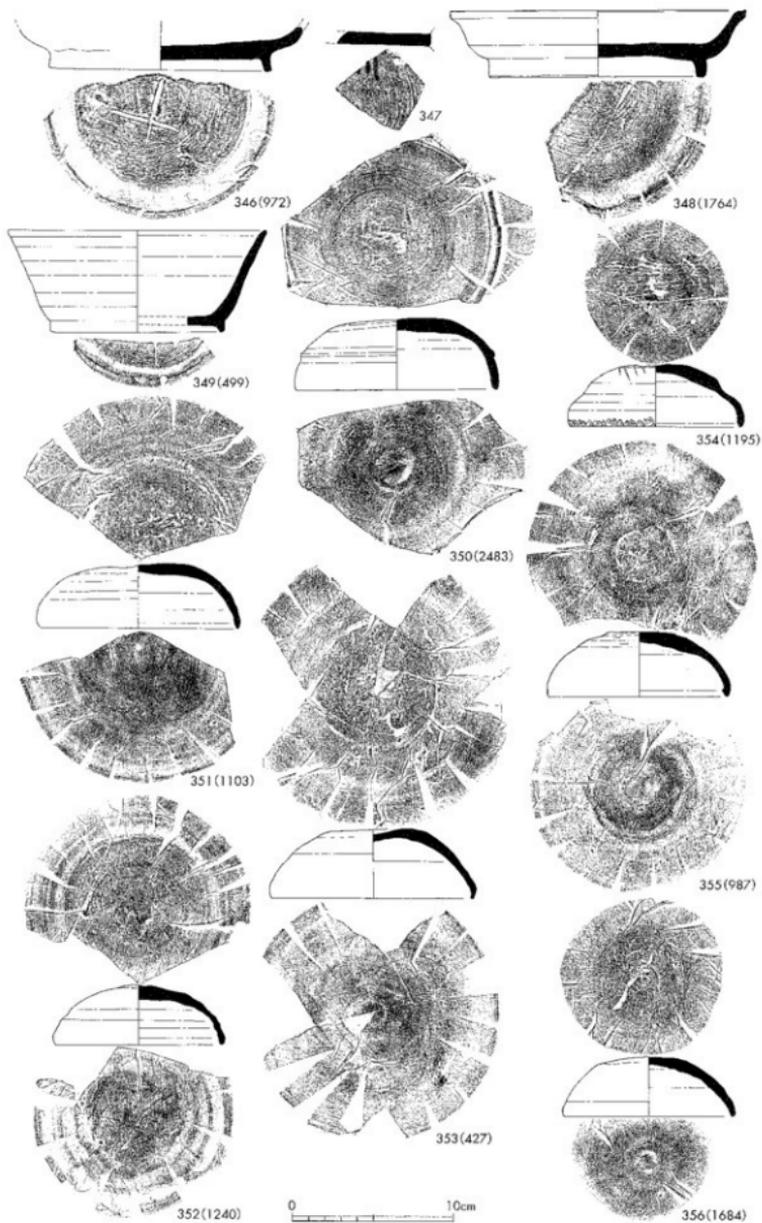
Ⅲ群の遺物を第58図～第61図に示した（図版48・49）。第58図199・200は赤彩土師器高杯で同一個体と考えられる。脚部の内面は粗いヘラ削りで赤彩はみられない。外面はハケ調整である。201・202は土師器杯で外面はヘラ削りと粗いハケ調整をしている。胎土には砂粒を含み器壁は厚い。203～214は赤彩土師器である。203は赤彩を除けば胎土・成形・調整が201・202に似る。204は口縁部が外反する以外は203に似る。205～214は器壁が薄く、胎土は砂粒を含まない乳白色を呈す。205・206は無高台の皿（皿A）213・214・215は高台付皿（皿B）である。205は全面赤彩で、外面はヘラ削りである。他の皿は底部外面には赤彩を施さない。212は高台が高く、口縁に比較して径が小さく内側に付く。213も同じであろう。214は高台が短くなり外側に付く。底部外面に「×」の朱墨がみられる。207は出雲の大井産須惠器の鉢を模したと考えられる鉢で、全面赤彩である。208は大皿の高台と思われる。外面のみに赤彩される。209は高台付杯で、高台は逆三角形で低く外側に付く。215～218は底部外面に同転糸切痕を残す土師質土器である。

219は不明土製品。把手かもしれない。220～233は小型手捏土器である。234～237は土鍾。238・239は石製紡錘車で、上下面、側面に鋸歯文を組み合わせた文様を線刻している。238は1/2が、239は2/3が残り、それぞれ、30.0gと30.57gを量る。240は径7.1×7.5cm、厚さ1.55cm、重さ88.89gの土製円板である。おそらく鏡の模造品であろう。一部に縄目状痕がついている。241・242は土師質の上馬である。頭部とその付近で、その他の部分を欠く。242は足が短い、鞍の表現がある。顔は口以外ははっきりしない。両者とも山陰地方に普通みられる須惠質のものと比較すると稚拙である。243は幅3.2cmの鉄鎌で先端部を欠く。19.85gある。

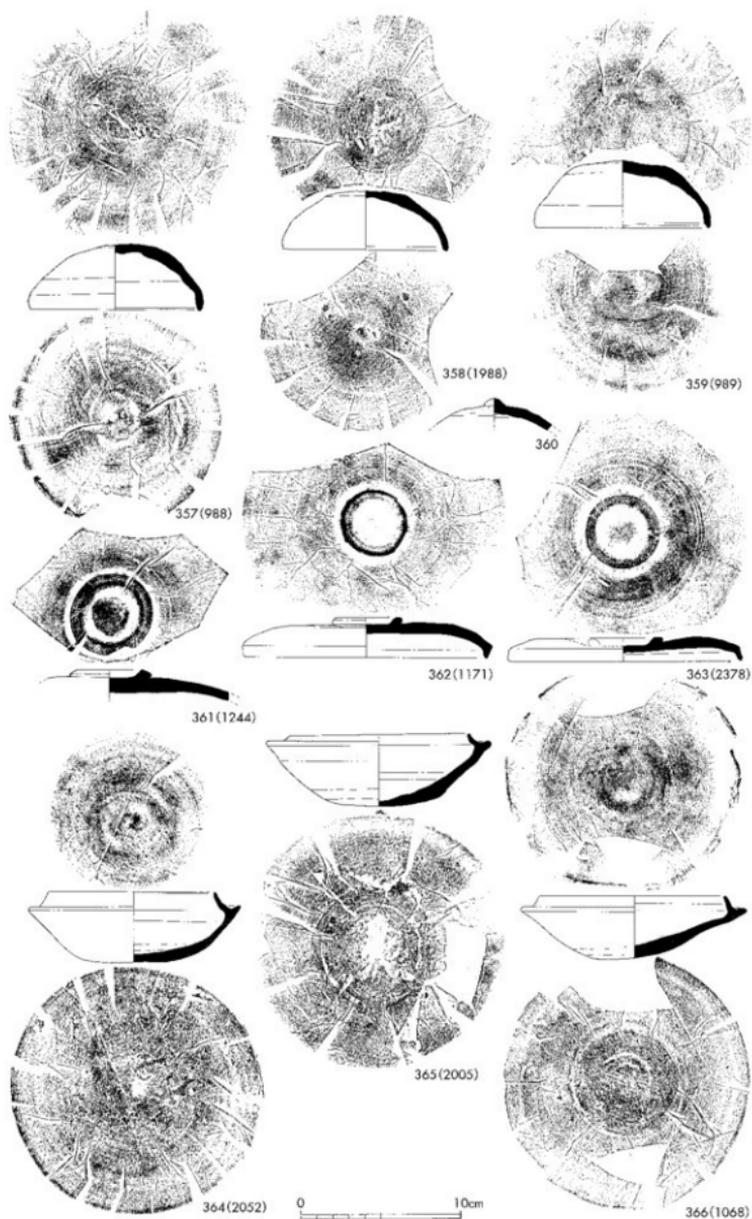
第59図は小型の鉢型、または壘型土器である。いずれも、外面はハケ調整、内面は口縁部以下で粗いヘラ削りを行う。このうち、250は口径10.6cm、器高8.6cmの鉢形土器であるが、中に自然石の小石3個が入れられていた。小石は2.3～2.9cm、厚さ2.0cm、重量7～9gほどで、摩擦している。



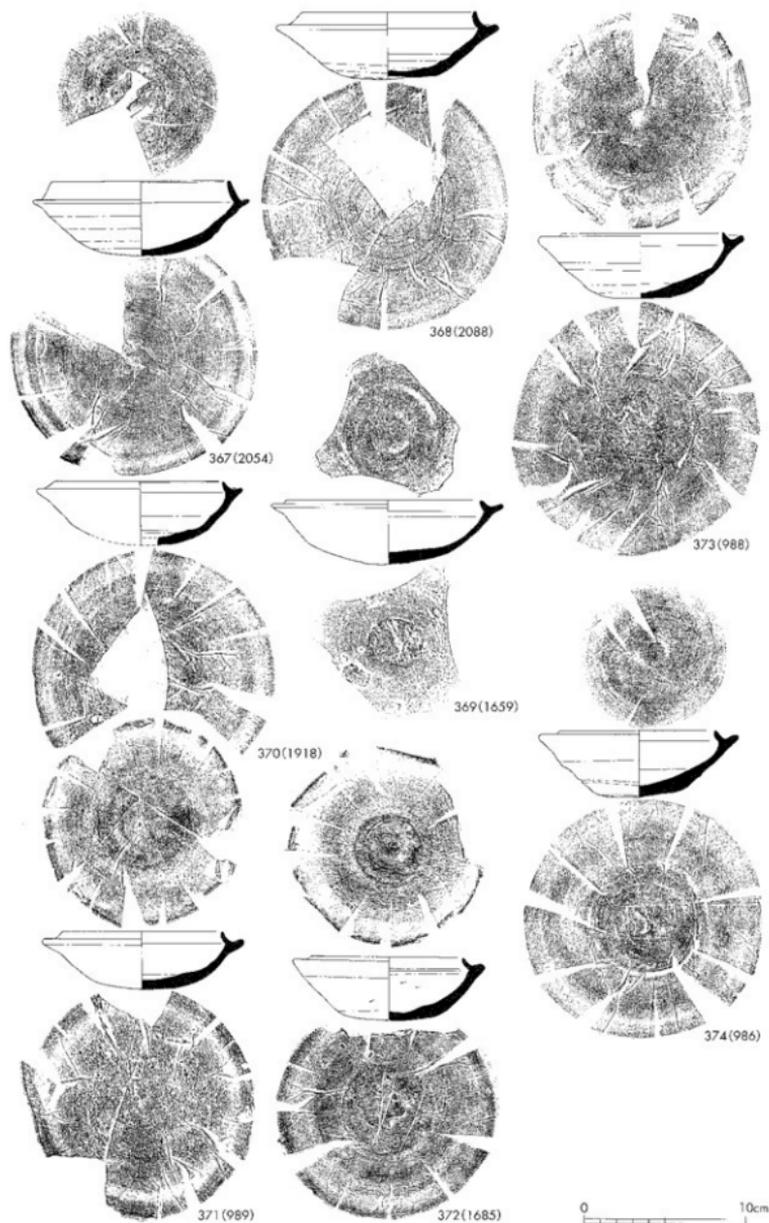
第65図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(2)



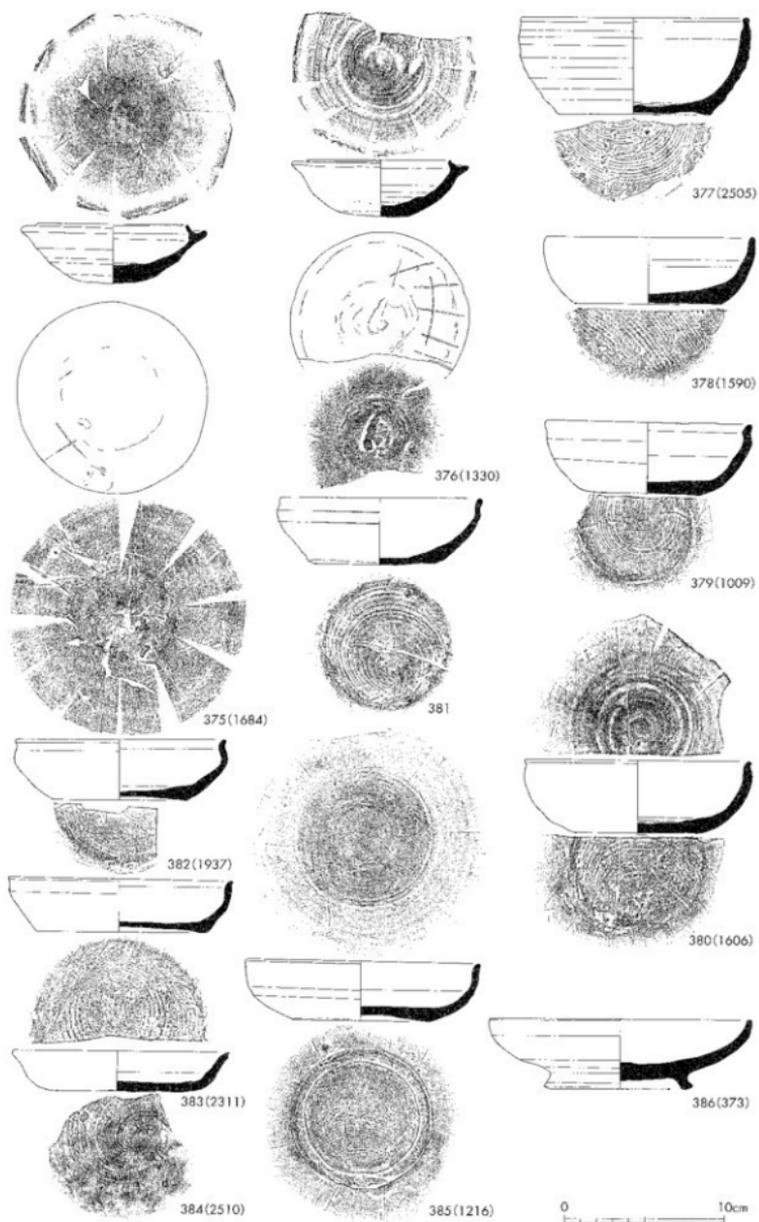
第66图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物②



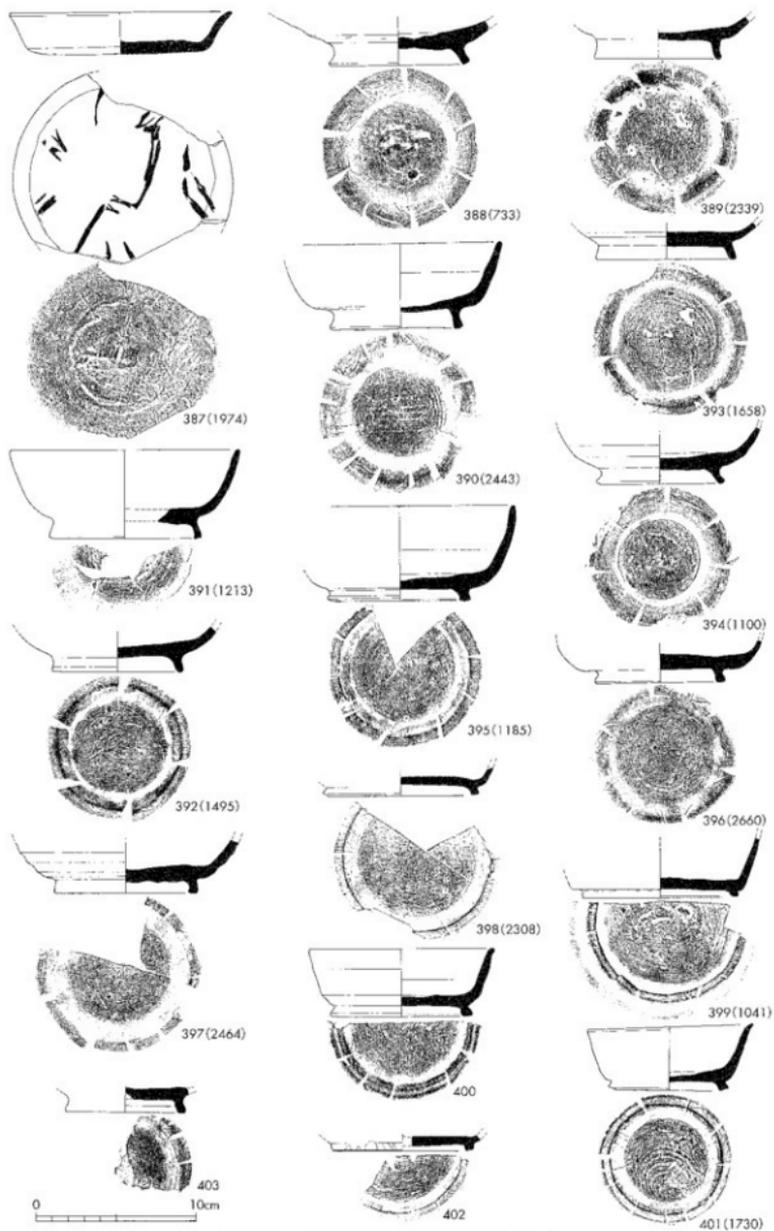
第67图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(3)



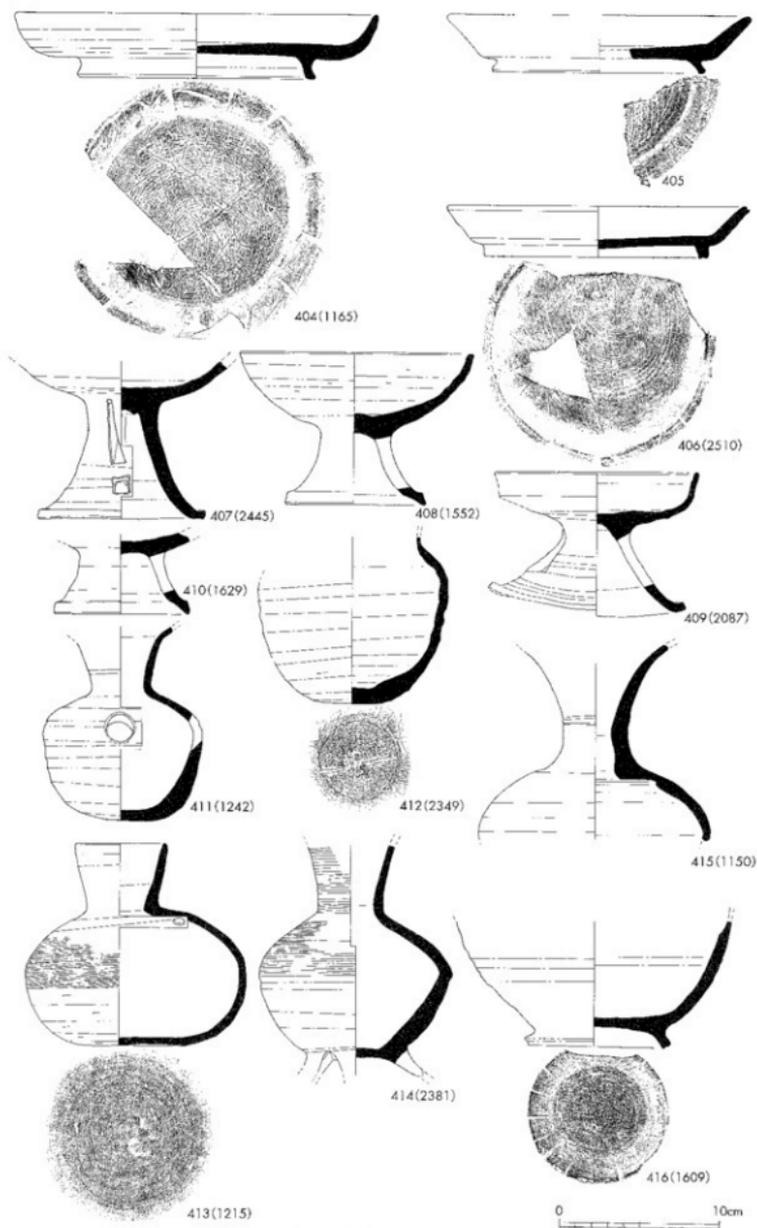
第68图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(24)



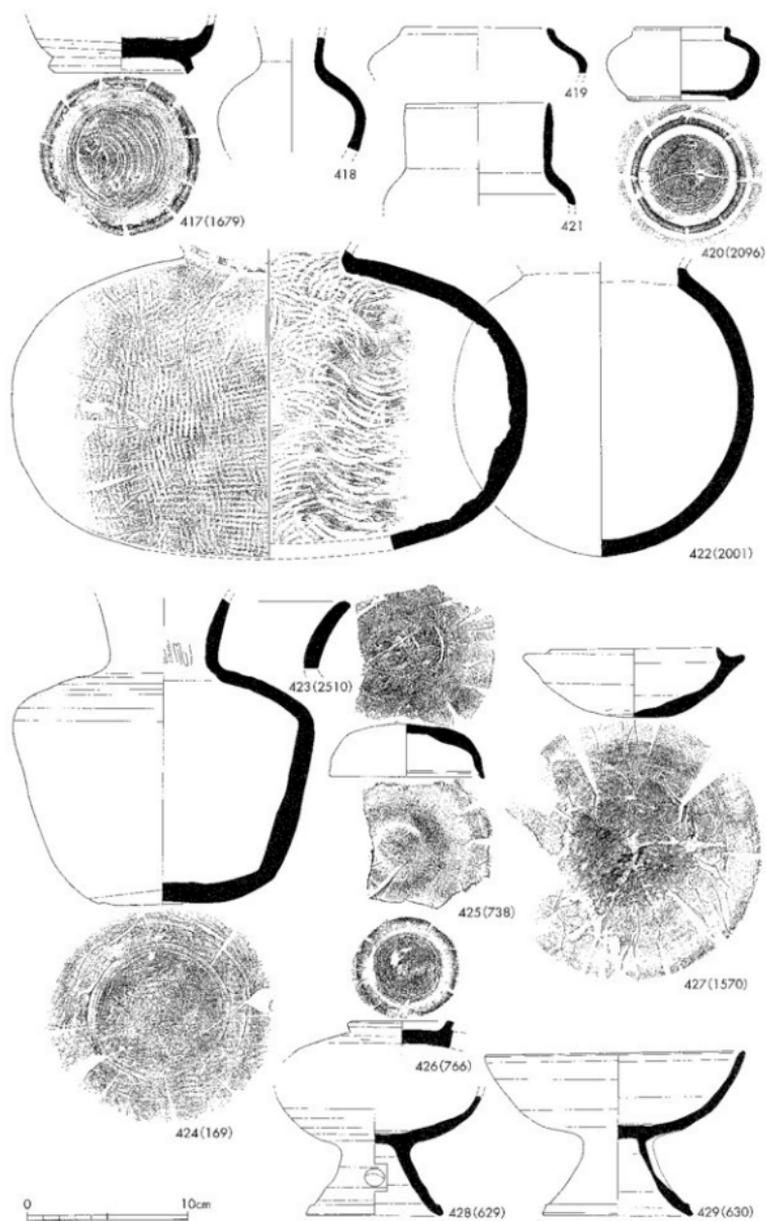
第69図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(2)



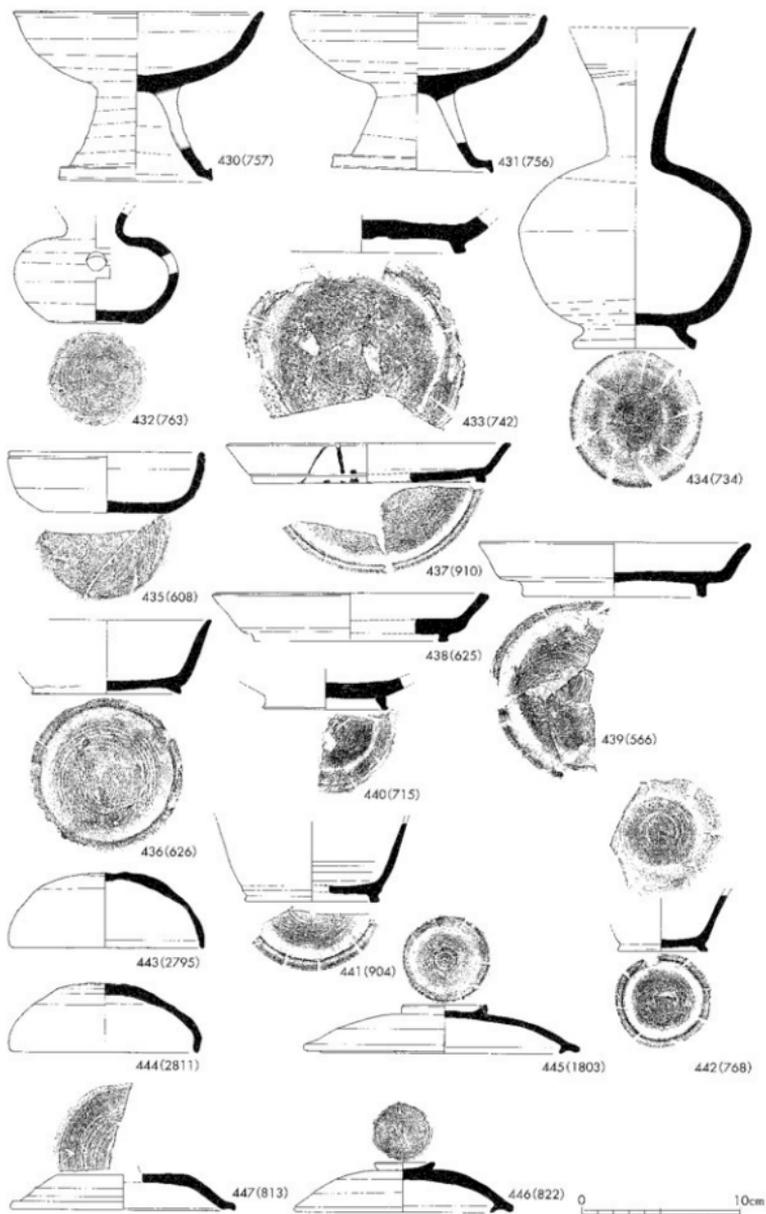
第70图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物26



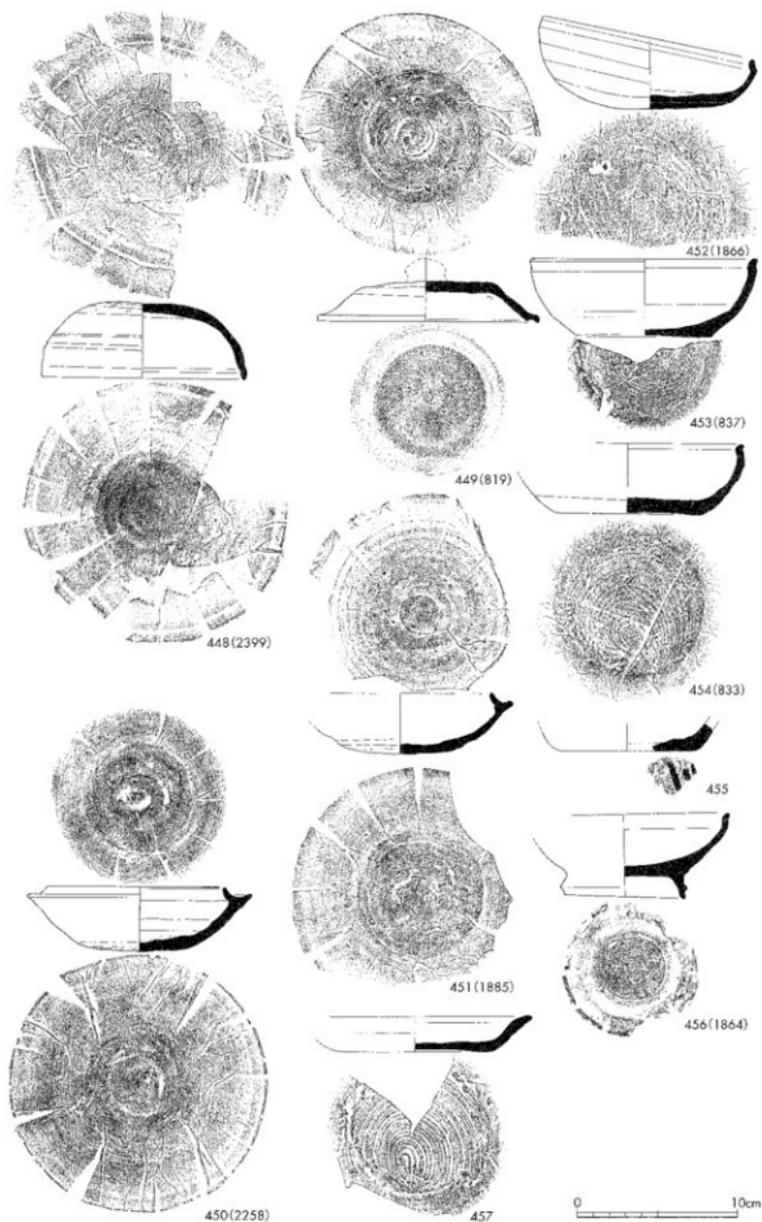
第71图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(2)



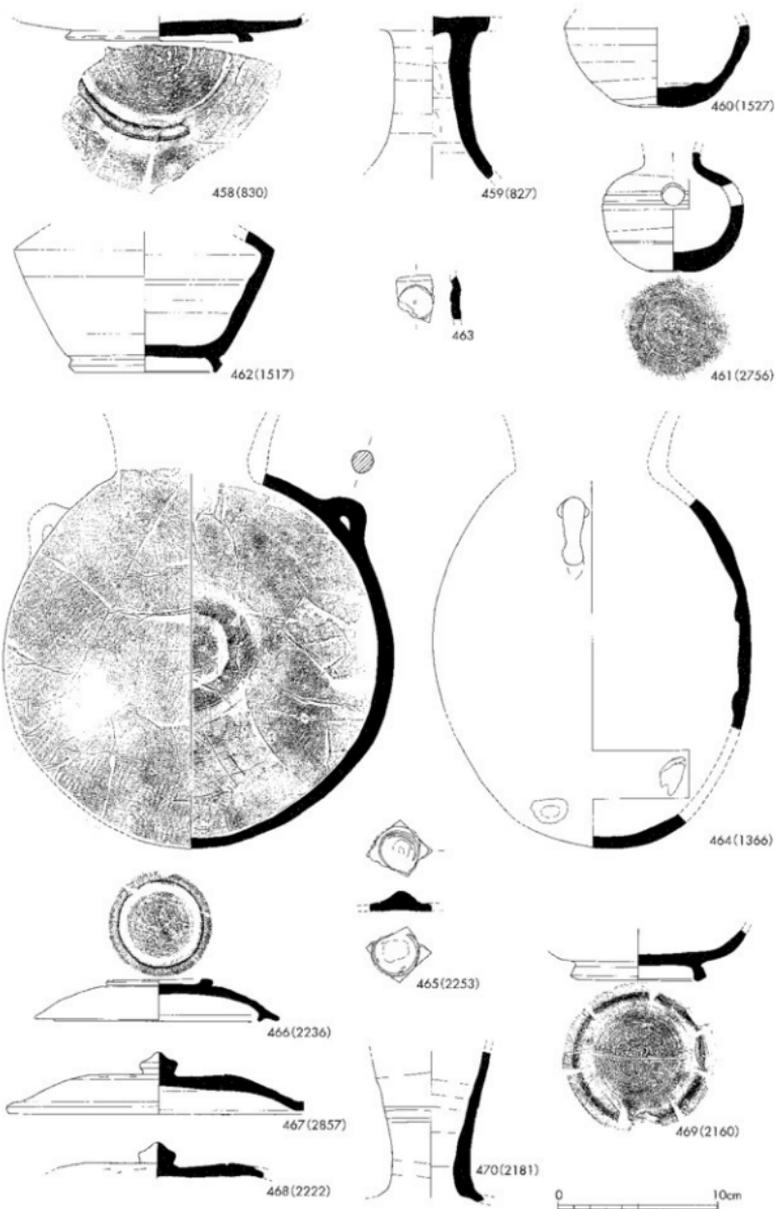
第72图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(28)



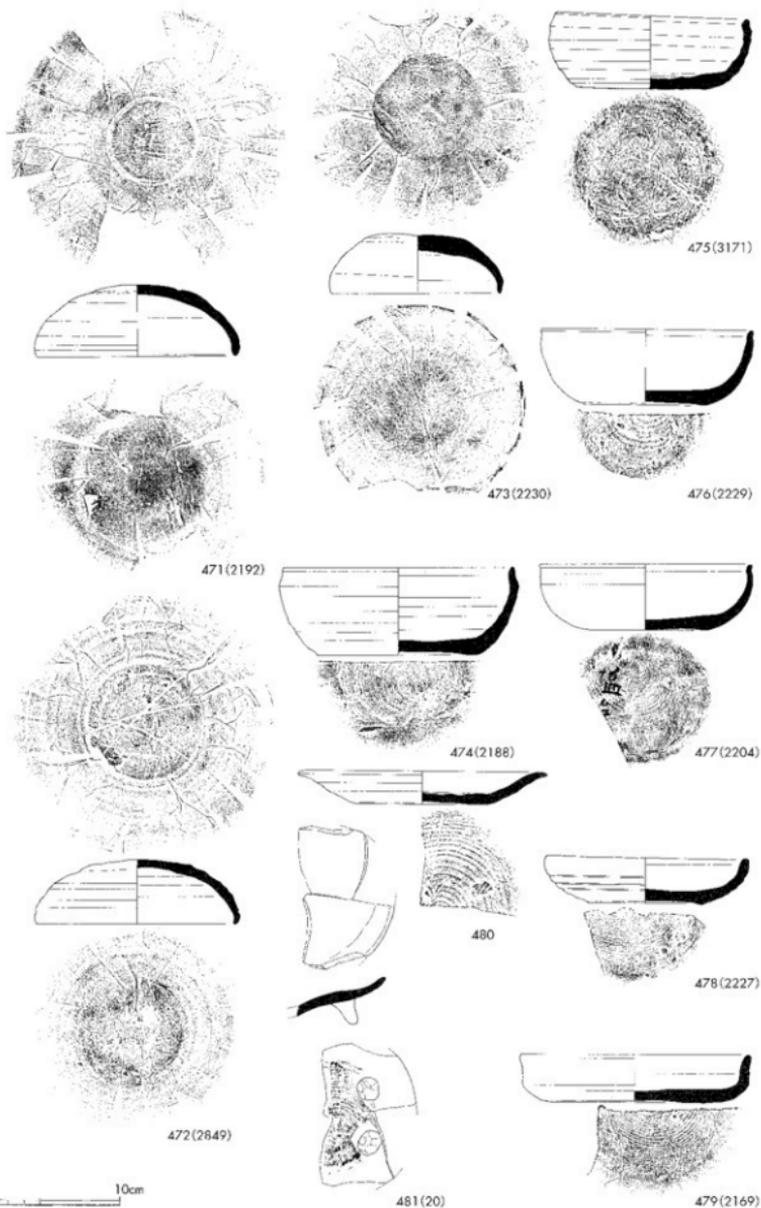
第73図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(29)



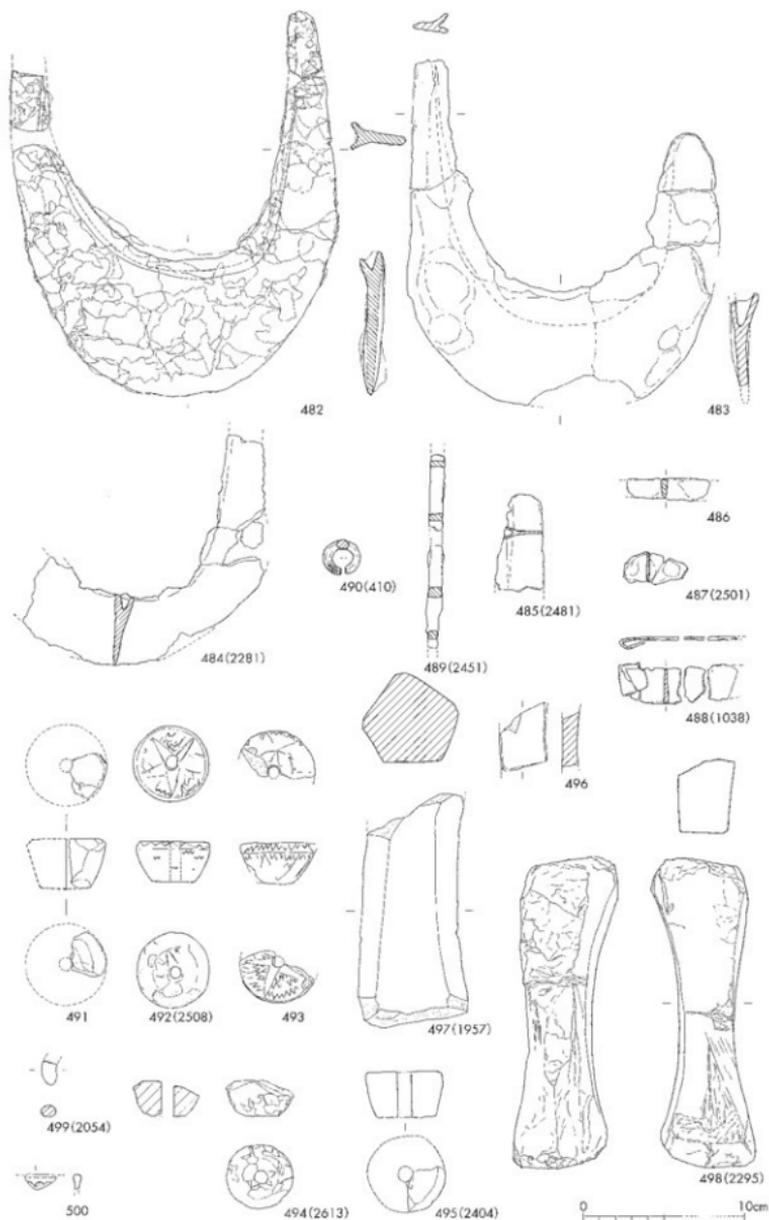
第74图 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(3)



第75图 中野清水道跡Ⅱ区2層出土遺物(3)



第76図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物



第77図 中野清水遺跡Ⅱ区2層出土遺物(33)

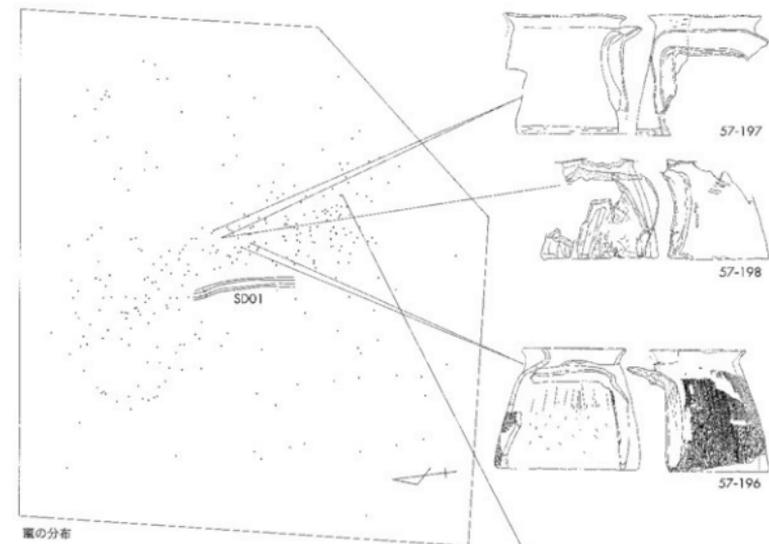
河川か海岸の石の中から選ばれたものと思われる。246は内面に部分的に黒色有機物質が付着している。外面にはいわゆる煤の痕跡はみられない。また、径2.6×2.0cm、厚さ0.9cm、重さ4.0gの自然石の小石が中に入った。これらの土器の中で、外面に煤、あるいは内面に黒色物質付着の痕跡があるのは、253・254・260・261・263で、いずれも普通煮沸に使用されていた甕型土器を小型化した形態のものである。第60図264～268は通常集落遺跡でみられる甕型土器で、内外面に炭化物の付着がある。264については口唇部の内側まで付着物がみられる。

第60図270・271・272は小型の上製支脚である。270と271は法量・胎土等からセット関係にあると考えられる。272は器高がやや高く、胴部に浅い孔がある。第61図273も小型の土製支脚であるが、一回り大きく、胴部に孔を持つ。これらの小型土製支脚は、第59図で示した小型の鉢、または甕型土器と組み合わせて使用されたと思われる。第60図269、第61図274・275は通常みられるサイズの土製支脚である。274は胴部に突起を持ち、きれいにナデ仕上げがなされている、275は胴部にヘラ削り調整がなされ、孔は底部のくぼみまで達している。第62図302は鉄鎌の破片と考えられる。7.85gを量る。I群～V群の中で最も祭祀遺物が多いのがIII群である。

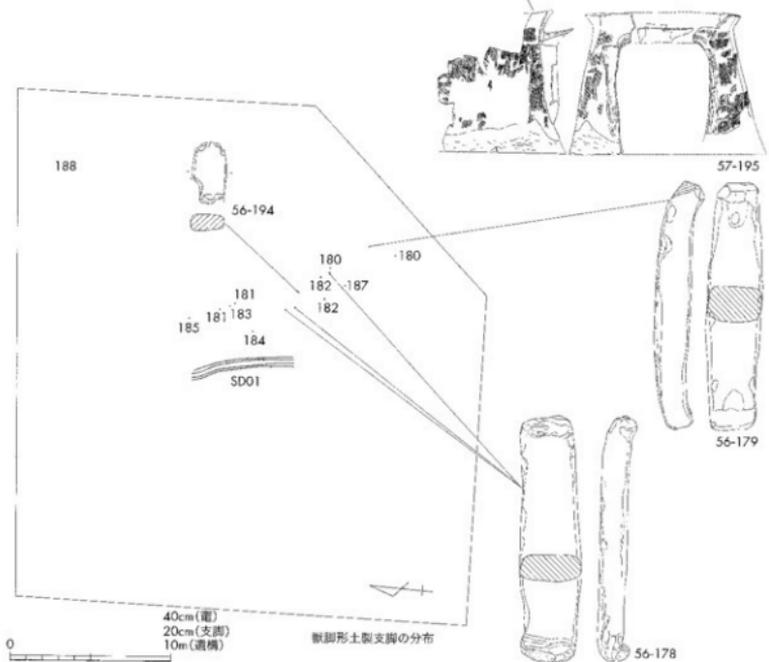
IV群の遺物は第62図と第63図に示した。第62図276～292は赤彩土師器である(図版49)。267は鉢で、口径16.8cm、器高7.8cmで全面赤彩である。断面にみる胎土は薄い赤褐色である。277は、全面赤彩で、胎土が薄い赤褐色で砂粒を含み、底部外面にヘラ削りを施した器壁の厚い坏である(坏O)。279も277に類似するが胎土は乳白色である。一心、坏Oとする。280・282・283・289・290は坏で(坏A)、全面赤彩の282・283・288・289と底部まで赤彩をしないものがある。280には内面に暗文がみられる。282は口唇部内面に一条の沈線がある。287・281・288・284・285・286・287は無高台の皿(皿A)である。284は底部にヘラ削りのある全面赤彩で、底部外面に焼成後の線刻の「×」記号がある。287以外は口径が大きく全面赤彩である。285は赤彩時のハケ痕がみられない厚く塗料が塗られている。291は高台付皿(皿B)である。しっかりとした高台である。底部外面まで全面に赤彩がある。皿Aの285のように丁寧で厚く赤彩が施されている。292は大型の皿、もしくは蓋と考えられる。ここでは蓋として図示した。外面は削りで、赤彩は撮みの内部には及んでいない。293は高台付の土師質土器である。

294～299は小型手捏土器である。このうち、298は径5.3cm、器高4.1cmで、胴部外面にいわゆる「人面」をヘラ状工具で造りだしている(カラー図版8・9、図版49)。眉・目・鼻・口が認められる。この「人面」の表現からは憤怒の印象を受ける。ここでは「人面」小型手捏土器と仮称しておく。また、底部外面にも胴部ほど明確でないがヘラ状工具で刺突された文様状のものがみられ、仮にこれも「人面」とすれば、胴部のそれに比して柔かな表現である。都城や太宰府、あるいは東国では、律令期に「人面墨書土器」がある。それらには複数の「人面」が描かれる場合も多く、その表情には憤怒や柔かなもの、佛顔のもの等様々である。祭祀という面で、中野清水遺跡出土のこの「人面」小型手捏土器は共通した概念を持つものであるかもしれない。さらに、II群の「人面」土製支脚とも(第55図175～177)何らかの関係があるように思われる。300は最小の土製支脚に分類される。301は不明土製品、復元径は10.0cmで紡錘車状となる。302は鉄鎌の破片であろう。7.85gを量る。

第63図303は口径8cm、器高8.2cmで丸底のコップ型を呈す。胴部中程に把手が付く。304も把手であるが、甕と考えられる。305は小型の鉢である。306～310は甕型土器である。このうち、307は口

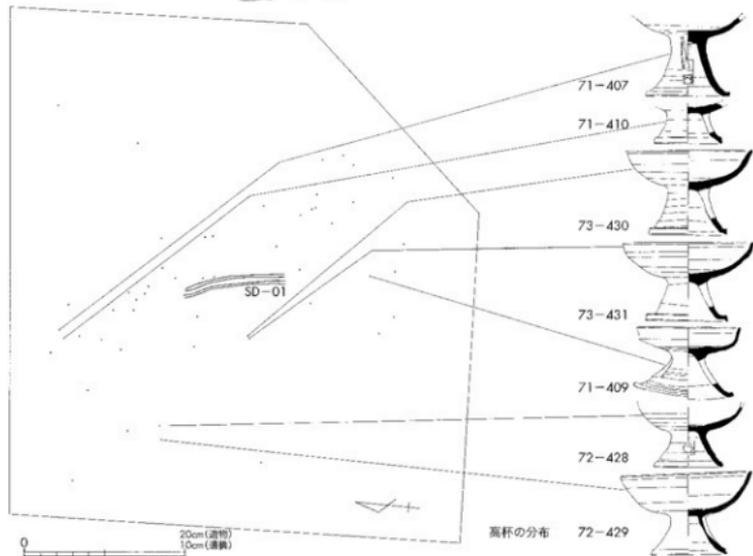
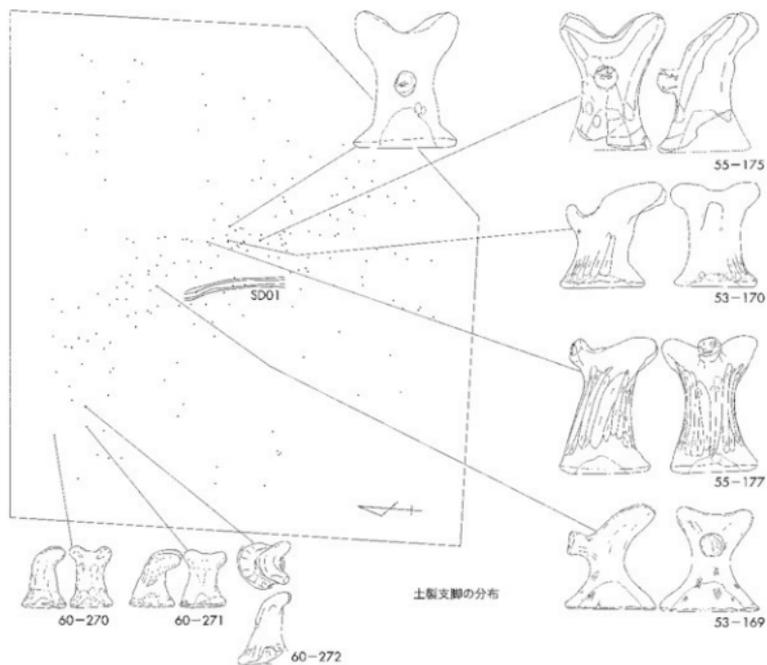


甗の分布

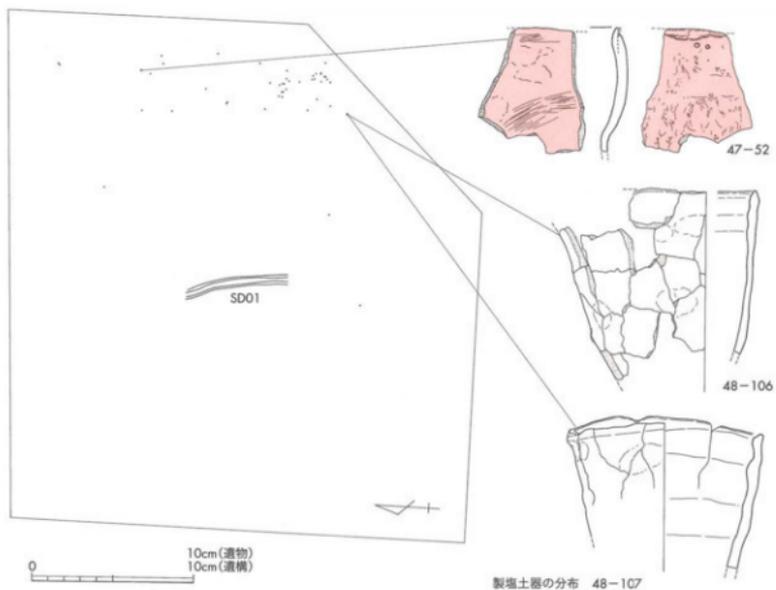
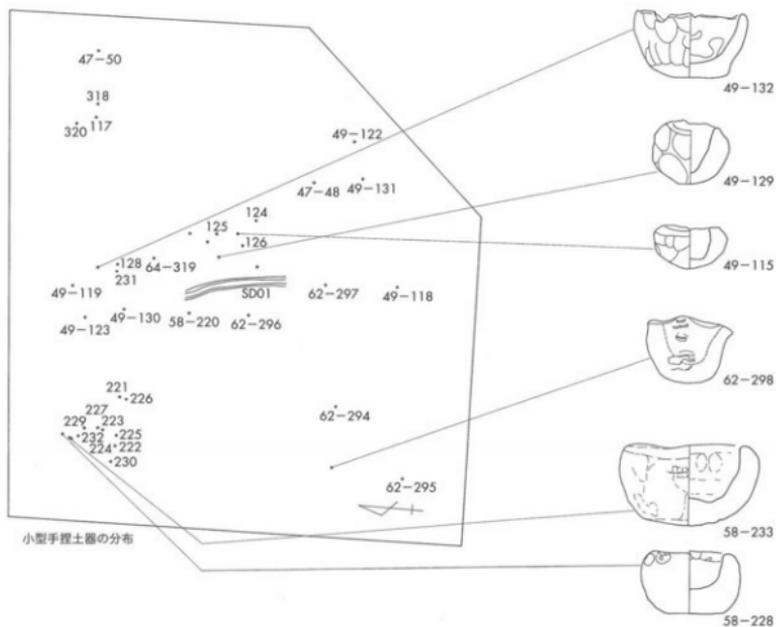


獸脚形土製支脚の分布

第79図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SD01関係図(1)



第80図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SD01関係図(2)



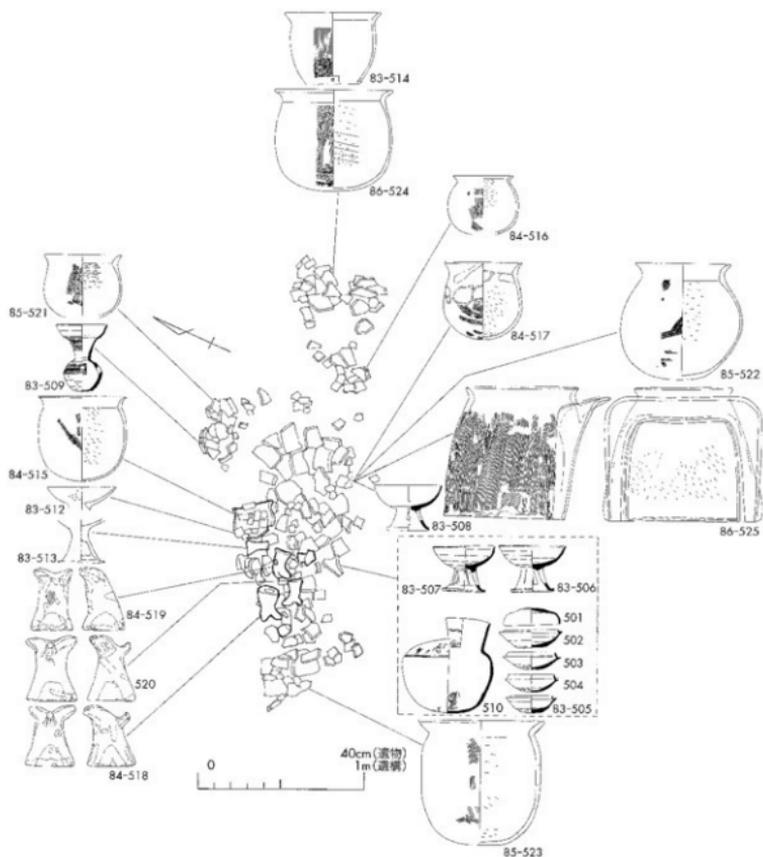
第81図 中野清水道跡II区2層SD01関係図(3)

径13.5cm、器高20.8cmの丸底で、外面はハケ調整、内面は頸部から下を横方向にヘラ削りしているが、胎土にはあまり砂粒は含まず乳褐色をしている。底部外面と内面の頸部から下（ヘラ削り部分）を除いて赤彩が認められる。さらに、外面の胴部中程から口唇部にかけてと、内面の口縁部と底部付近を除く胴部には、炭化物付着痕がある。同様な甕型土器に赤彩がみられるのは出雲市上塩冶の三田谷 I 遺跡にもある。311～313は石製紡錘車である。上下面、胴部は鋸歯文で飾る。完形に近い313は径4.7cm、高さ2.7cm、重さ4.0gある。311と312は約1/2残存し、重量はそれぞれ26.1gと21.0gである。

第64図はV群の遺物である。314は底部にヘラ削り痕のある土師器杯（杯0）、315は赤彩土師器の杯（杯A）で、赤彩は底部外面にまで及ばない。316・317は甕型土器で大型で、口縁部が大きく外反する。318～320は小型手捏土器である。321～323は鉄器である。321は長さ13.2cm、幅4.8cmの鍛造鉄斧でソケット部は両側から折り返している。332.0gある。321・322は釘、または刀子の破片であろう。

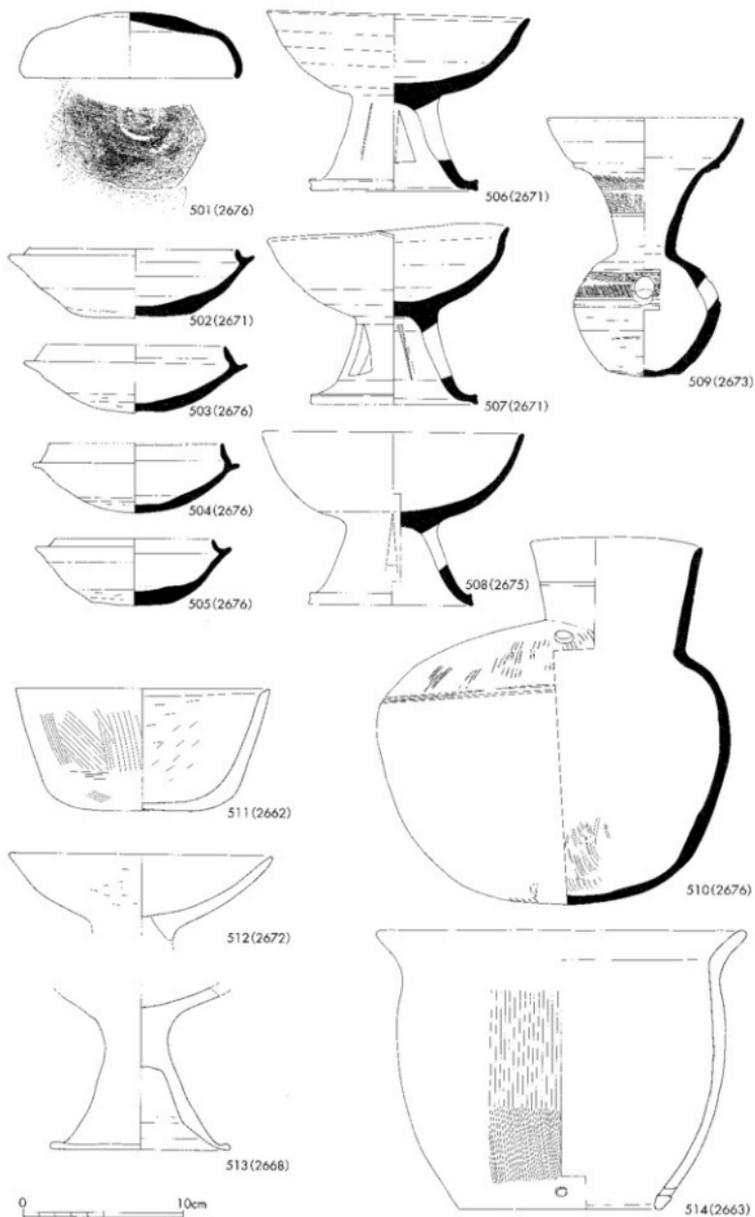
I群の須恵器は第65図と第66図の346～348に示した。324・326・327は蓋で、324は環状掘みで返りがある。掘み内部は静止糸切り後ナデか。327は擬宝珠状掘みが取れた蓋で返りの名残がある。326・327は回転ヘラ削りが外面にみられる。325は底部内面が平らにならず、全体に浅く内側に湾曲しながら立ち上がる体部で、口縁部は単純に細く調整され、しっかりとしたハの字状の高台で、底部外面はヘラ切り離し痕の杯（杯A0）である。底部外面に焼成前のヘラによる「×」記号がある。332～337は、底部外面に糸切り痕を残し、体部はゆるく内側に湾曲しながら立ち上がり、口縁部断面がS字状となる特徴の出雲大井産無高台杯（杯A1）。336は底部外面に墨書があるが判読不可である。「×」、「大」等の可能性がある。328・329・330・331は基本的には杯A1の体部に高台を付けた出雲大井産杯（杯A2）。口唇部は単純に丸く調整される。このうち、329は底部外面に静止糸切り痕があり、331は底部外面に墨書「依」が読める。337～339は体部が逆ハの字状に直線的に立ち上がる無高台杯（杯B1）。底部外面は回転糸切痕であるが、339はヘラ切り離し痕が残り、胎土も灰白色を呈しており出雲地域以外で生産された杯と考えられる。341・439は杯B1の形態に高台を付けた杯（杯B2）。342～344は無高台の皿（皿A）。342は底部外面に墨書がある。「三」の一部か。第66図346～348は無高台付の皿（皿B）。346は底部外面に焼成前のヘラによる「×」記号がある。347は底部外面に墨書「三」が読める。第65図345は無高台付壺であろう。なお、I群からは第76図481のような風字硯も出土している。破片のため全体は不明であるが、底部外面に回転糸切痕を残した皿に二本の短い足を付けている。内面は自然釉がかかったままで未使用である。

II群の須恵器は第66図350～第72図424に示した。第66図350～第67図360は蓋杯の蓋である。350は山本清編年のIII期で6世紀代、他はIV期で7世紀代。このうち360は小型化して形態上杯と身が逆転し、掘みがつけられている。354は口唇部外面に工具による叩き痕と、天井部にヘラ記号がある。第67図361～363は環状掘みの杯蓋。362・363には外面に糸切り痕がある。第67図364～第69図376は蓋杯の身である。いずれも6世紀末から7世紀代で、372・375・376の外面にはヘラ記号がある。366・369・374の外部には壘状の痕跡がある。377は底部外面に回転糸切痕のある鉢である。378～383は無高台の杯A1。378は静止糸切り痕である。386・388は杯A0。385・389～397・403は高台付の杯A2。403は底部外面に二重の竹管文がある。398～402は無高台付の杯B2。これらは出雲大井産以外の須恵器である。第69図384、第70図387は無高台の皿A。387は外面底部はヘラ切り離し

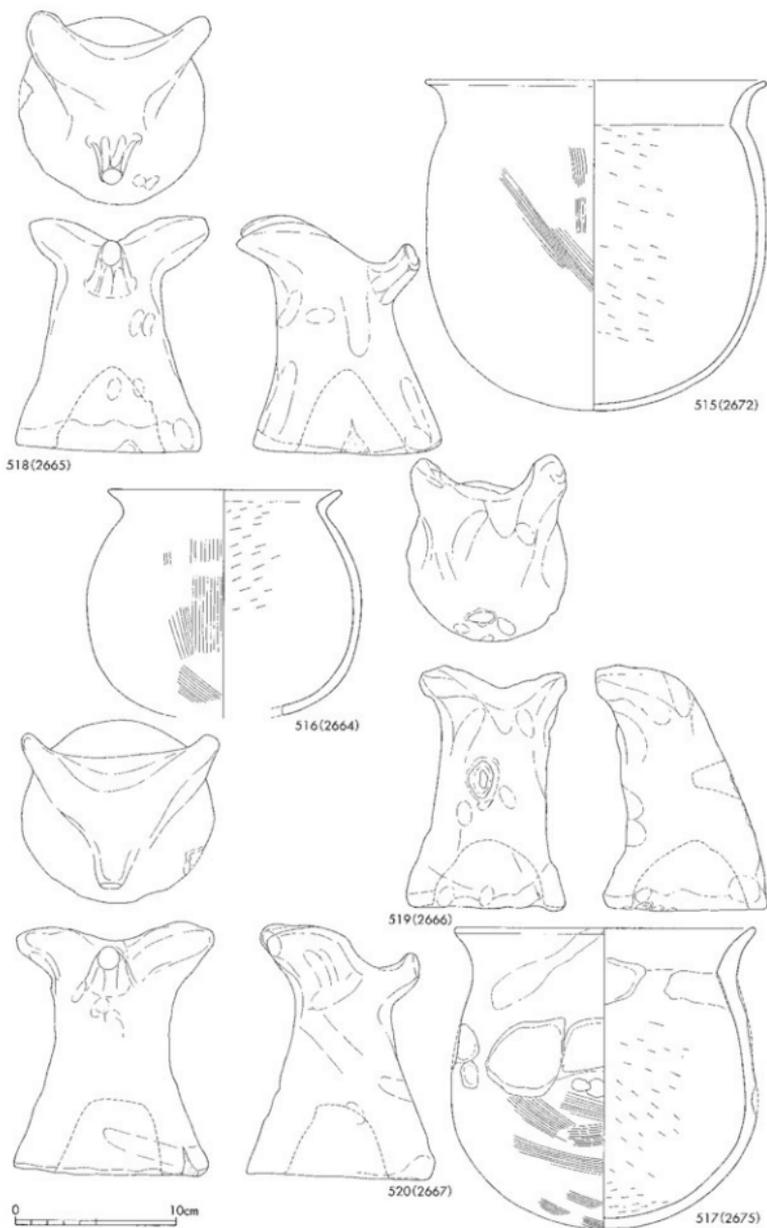


第82図 中野清水遺跡II区2層SX20出土遺物状態

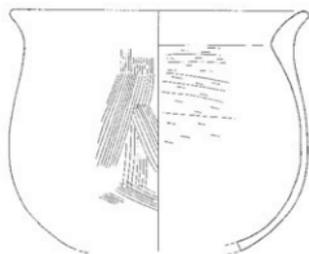
で、火罨がある。胎土には白色微砂粒を含み灰白色を呈し、焼成は良好である。出雲大井産以外の須恵器である。同じものは近くでは出雲市上塩冶の三田谷I遺跡³⁰に出土例がある。第71図404～406は高台付の皿Bで、土師器皿Bの器形を模したものである。404は口径22.4cm、器高4.0cm、高台径14.6cmで、口径に比して高台径が小さい。体部は内湾しながら立ち上がる。底部外面に回転糸切痕を残す。405・406より高台は高い。胎土は緻密で砂粒はほとんど含まない。色調は外面底部から体部の下半、及び内面底部に高台と同じ径の範囲が茶褐色となっており、それ以外は青灰色である。重ね焼きによる焼成条件がこうした色調差をもたらしたものと考えられる。このことから同じ器形の皿が窯の中で少なくとも3枚は重ねて焼成されたことが推定できる。405は口径18.8cm、器高3.5cmで内面底部には使用痕がある。406は口径18.8cm、器高3.2cmで、内面底部に使用痕がある。404→



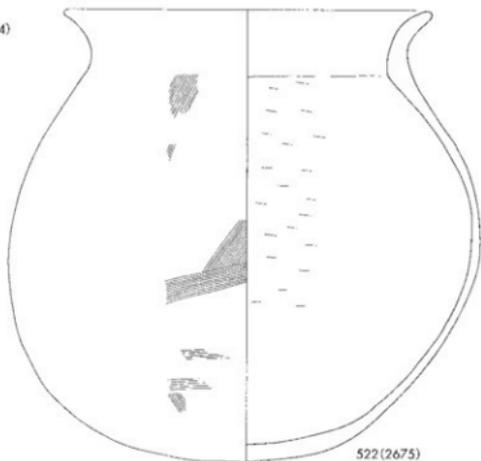
第83图 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX20出土遺物(1)



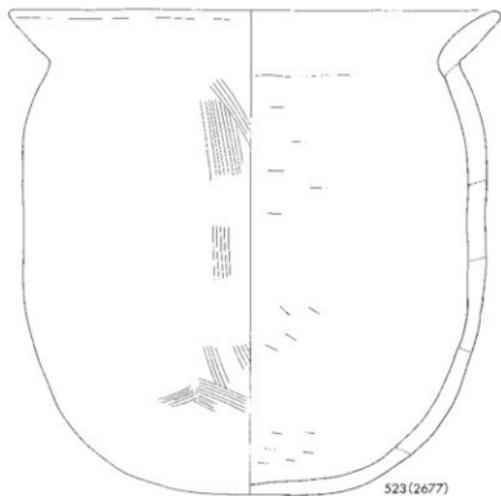
第84图 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX20出土遺物(2)



521(2674)



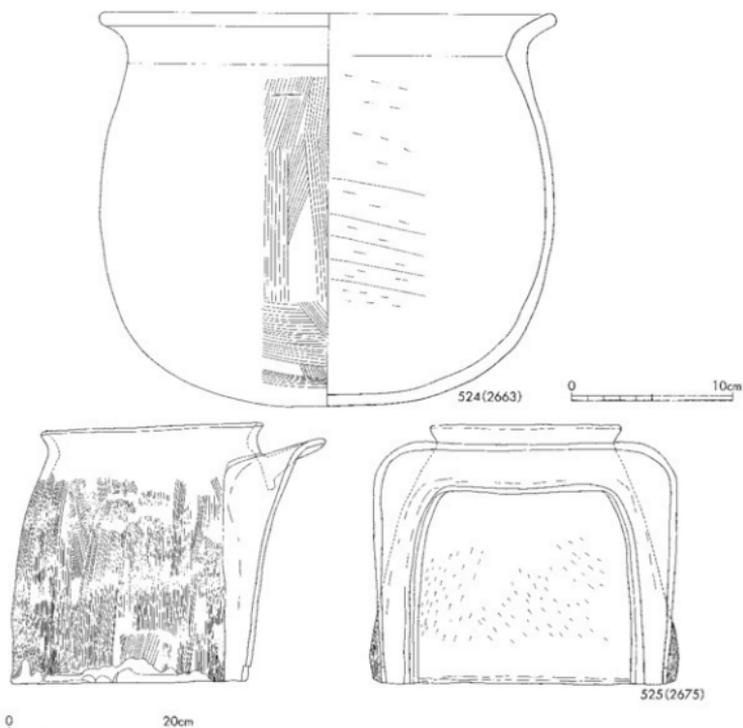
522(2675)



523(2677)

0 10cm

第85図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX20出土遺物(3)

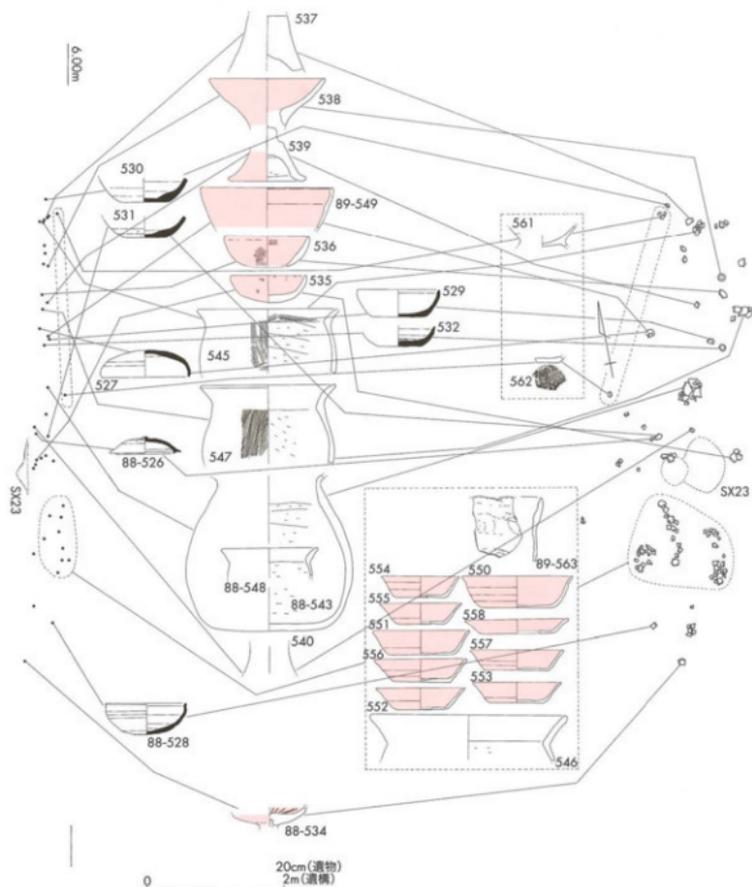


第86図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX20出土遺物(4)

406と高台は外側に付く。

第71図407～410は高坏。407は方形と三角形の二段透かしが2ヶ所、他は一の透かしである。411・418は甕。413は器高12.5cmの小型の平瓶。肩部に径0.7cm、厚さ0.2cmの円形浮文がある。胴部上半はいわゆるカキ目、下半は回転ヘラ削りである。414～417・421は長頸壺。414の高台には透かしがある。424の底部外面は叩き痕と高台の剥離した痕がある。また、成形時に付いたシダ類の葉と蕨状の痕がある。蕨状の痕は高台が取り付けられる前に付いている。414は頸部から胴部上半にかけてカキ目がある。412・421は短頸壺。412には底部外面にヘラ記号がある。419・420は平城京出土須恵器の壺Dに分類されるもので、420の底部外面は丁寧なヘラ削り調整がなされ、灰白色を呈し、焼成も良好である。搬入品であろう。422は横瓶で、口縁部を欠く。

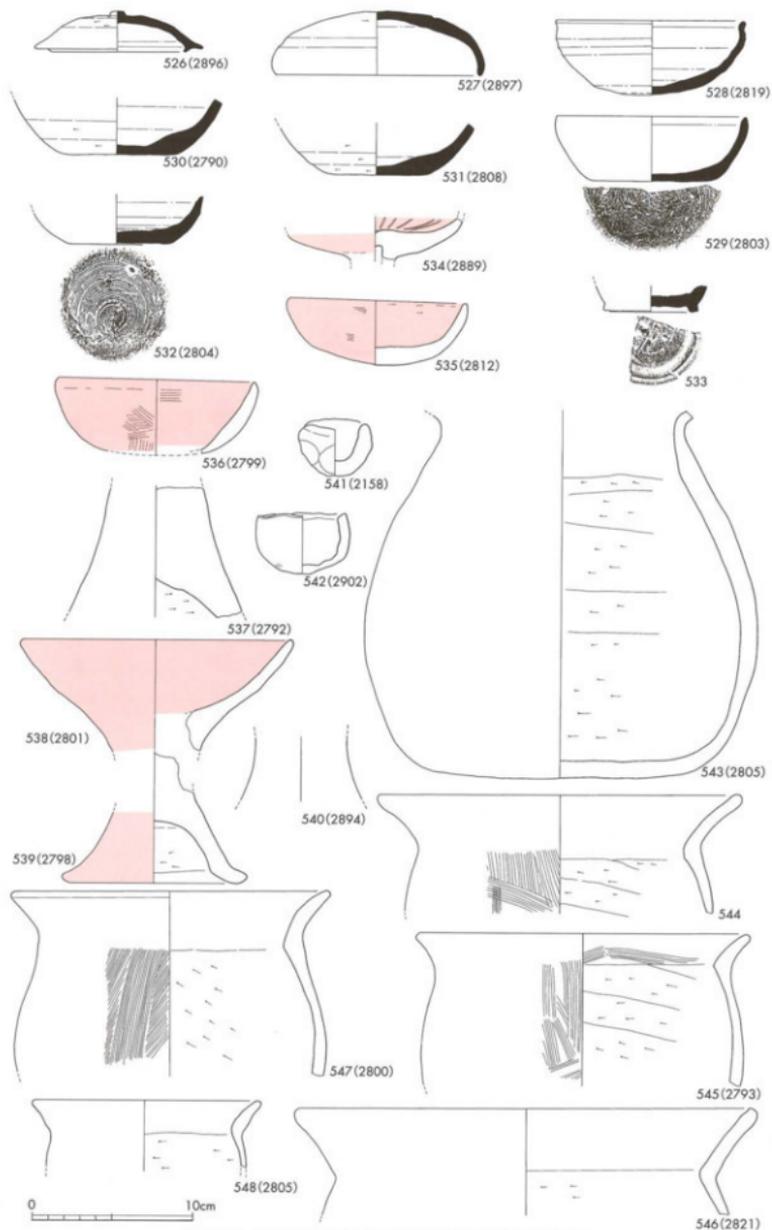
Ⅲ群の須恵器は第72図425～第73図442に示した。第72図425は小型化した蓋坏の蓋。外面にヘラ記号がある。426は坏A0に対応する環状撮みの蓋。撮み内部に「×」のヘラ記号がある。427は蓋坏の身。428～431は高坏で、428は円形透かしである。432は甕で、底部外面に回転糸切痕がある。433は鉢、または壺の底部。434は長頸壺。446は坏A0。434は無高台の坏A1。436・441・442は高台付の坏B2。437～439は高台付の皿B。437は火掬があり、胎土、製作技法等は第70図387の皿Aに



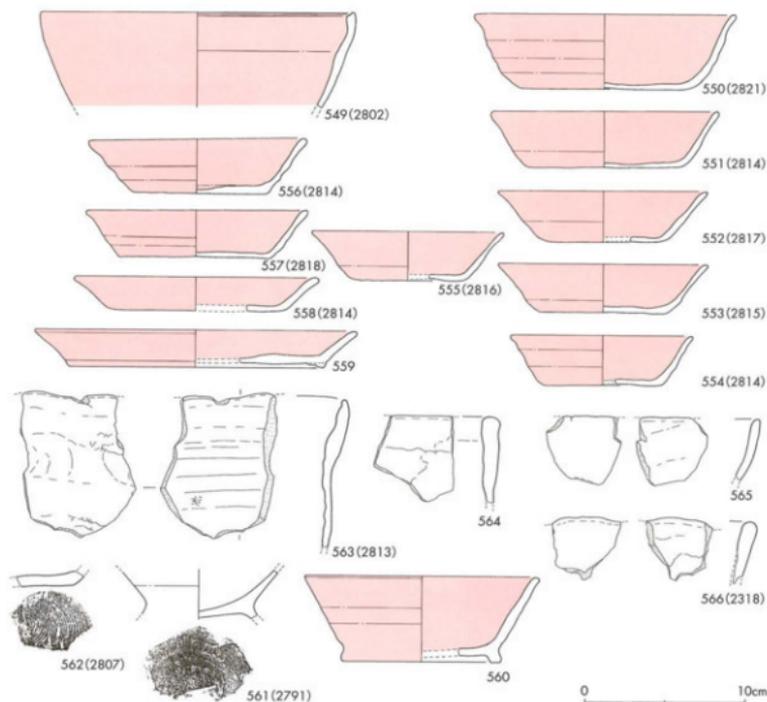
第87図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX23付近遺物出土状態

同じである。

IV群の須恵器は第73図443～第75図464に示した。第73図443・444・第74図448は蓋環の蓋である。445・446は坏A0に対応する環状掘みの蓋。447・449は擬宝珠状の掘みの蓋で、447は回転糸切痕、449はへら切り痕を掘み周辺部に残す。450・451は蓋環の身。452～455は無高台の坏A1。455には底部外面に墨書「三」、または「川」が読める。456は高台の高い坏A0。457は無高台の皿A。458は高台付の皿B。高台は径11.7cm、高さ0.5cmで低く、底部外面は回転へら削り調整である。二次焼成を受けている。出雲地域以外からの搬入品と考えられる。口縁部から体部を欠くが土師器模倣皿であろう。459は高坏の脚部で8世紀代。460・462は長頸壺。461は甕。底部外面は回転へら削りで、へら記号「×」がある。463は器形不明で、コンパスを使用した円を描いている。搬入品か。胎土



第88图 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX23付近出土遺物(1)

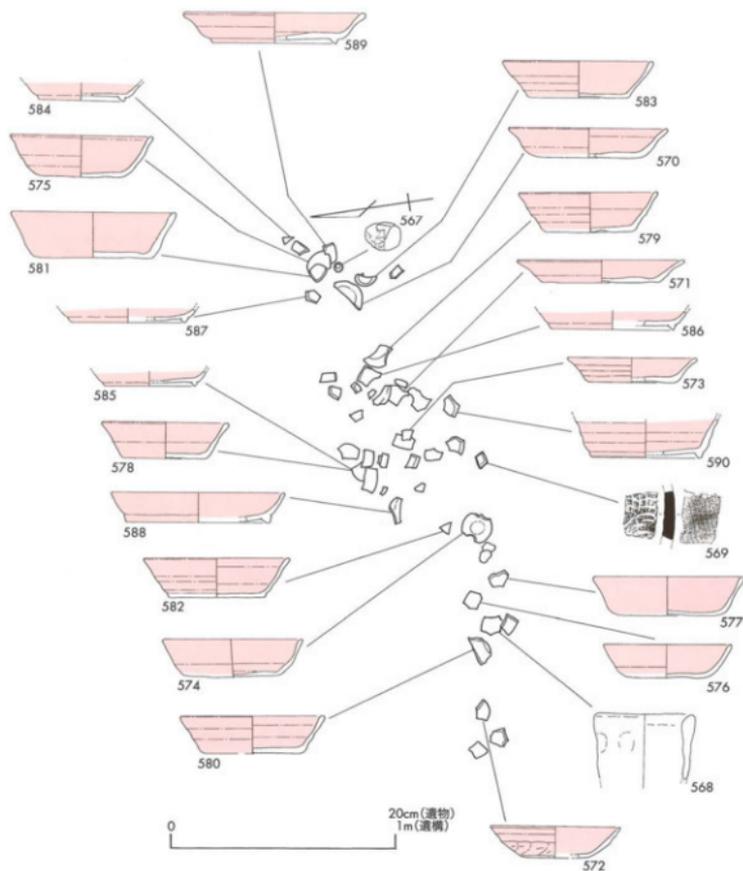


第89図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX23付近出土土遺物(2)

に黒色の微砂粒(?)を含む。464は提瓶。肩部にはしっかりと紐通しの把手が付けられている。外面底部付近に窯詰めの際に使用された他の須恵器製品の破片が付着している。

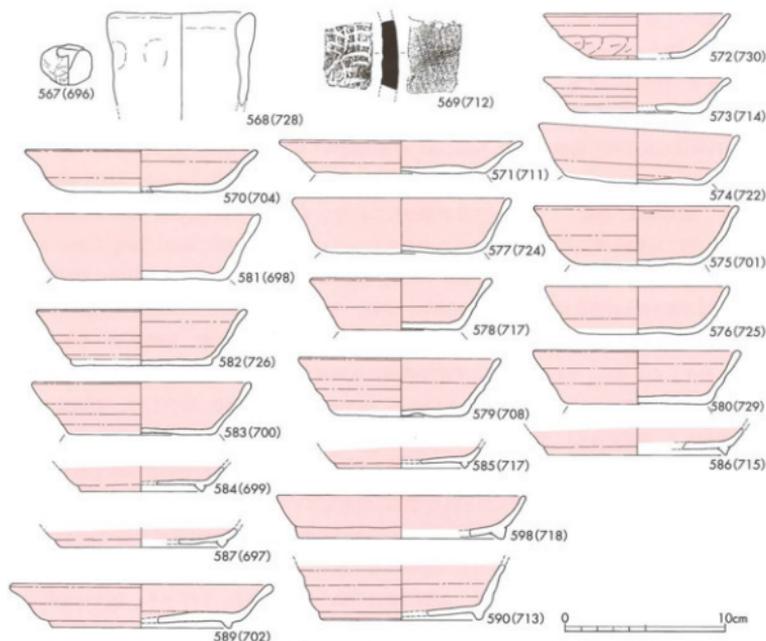
V群の須恵器は第75図465～第76図に示した(481を除く)。465は器形不明。蓋の一部か。466は環A0に対応する環状撮みの蓋、467・468は擬宝珠状撮みの蓋で、撮み周辺は回転ヘラ削りである。469は環A2で、高台内にヘラ記号「一」がある。470は長頸壺の頸部。471～473は蓋形の蓋。471・473は外面に葉状痕、472は外面に、473は内面に「一」のヘラ記号がある。474は大井産の鉢。475・477は大井産無高台の環A1。このうち、477の底部外面に「塩冶」の墨書がある。この「塩冶」は、『出雲国風土記』や『和名類聚抄』の出雲国神門郡塩冶郷、あるいは『出雲国風土記』や『延喜式』にみえる塩冶社・塩冶神社に関係すると考えられる。478・479は無高台の皿A。480も無高台の皿であるが、平安期に入るものであろう。

第79図～第81図には2層の遺物群とSD01の関係を示した。これによると、竈・獣脚形土製支脚(第79図)、通常みられる土製支脚・須恵器高環(第80図)、小型手握土器(第81図上)においては、SD01の東側、あるいはその付近に沿うように分布していることが知られる。つまり、遺物群のI～V群(第44図)のうち、II群(第78図)と関係していることを示している。このことは、集落のありかたよりも、調査の概要でも述べたように、この遺跡が斐伊川を見下ろす位置にあることと無



第90図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX07遺物出土状態

関係ではないだろう。おそらく斐伊川を意識し、それに沿うかたちで廃棄されたのであろう。Ⅲ群では祭祀遺物が特に多かったが、第80図上の土製支脚のうち、小型のものが、第81図上の小型手捏土器でもSD01付近とⅢ群に集中する傾向にある。場所によって祭祀のありかたに違いがあったようである。第81図下は製塩土器であるが、SD01からは離れるように調査区の東側のⅠ群に集中し、西側のⅣ群にもある。これらの製塩土器の近くには赤彩土師器が出土することが多く、それは外面底部には赤彩しない、どちらかと云えば奈良時代でも新しい要素のものである。製塩土器がそのような時期に多量に生産される必要があったことを示している。SD01の性格ははっきりしないが、Ⅱ群に遺物が廃棄されるころ、そうした場所とそうでない場所を区別するような意味を持っていたことが考えられよう。とすれば、そのことが結果的にⅡ群に多量の遺物を集積させた要因の一つで



第91図 中野清水遺跡Ⅱ区2層SX07出土遺物

あろう。

先にⅠ～Ⅴ群の遺物群は廃棄の単位がいくつか集合してできたものであることを述べたが、SX20はその一単位と考えられる。第82図に出土状況を示した（カラー図版7）。廃棄後に失われた遺物もあると思われるが、甕1、甕1、甕型土器7、土師器高坏2、須恵器高坏3、須恵器蓋环蓋1・身4、須恵器甕1、須恵器平瓶1、土師器鉢1、土製支脚3を検出した。これらがほぼ東西方向に並べられていたように思われた。周辺には柱穴は検出できなかった。この遺物の構成は、後述するようにⅣ区の同時期の土器2群に類似する。第83図501は径14.2cm、器高4.2cmの須恵器蓋环の蓋、502～505は蓋环の身である。503～505は外面にヘラ削りがみられるが顕著でない。503は径14.0cm、器高4.3cm、505は径12.2cm、器高4.2cmに復元される。502にはヘラ削りはみられない。径15.4cm、器高4.3cm。506～508は須恵器高坏である。脚部の透かしは2ヶ所で、三角形と沈線で一対となっている。506は口径16.2cm、器高11.2cm。507は口径15.0cm、器高11.3cmで、内面底部には使用痕があり、日常的に使用されていたことが知られる。508は口径16.2cm、器高10.8cmに復元される。509は甕。口径12.0cm、器高16.2cmで頸部と胴部に櫛描き波状文がある。510は平瓶。肩部にボタン状の浮文を付ける。器高は23.0cmである。511は土師器の広口の鉢である。口径15.8cm、器高7.7cmに復元され、外面はハケ調整、内面はヘラ削りされている。一部に二次焼成痕がある。512・513は土師器高坏である。二次焼成痕がある。521の口径は16.4cmである。514は口径23.0cm、器高17.3cmの甕で、底部には4ヶ所の小孔がある。二次焼成を受けている。口縁部内面に剥離がある。第84図518～520は頭

部が二股の上製支脚である。高さ14.5cmの518と高さ15.5cmの520には胴部上方に突起が同じ造りである。高さ14.7cmの519は胴部に孔を持つ。高さだけを比較すると、突起を持つ518と孔を持つ519がセット関係と云える。しかし、胴部に孔を持つ四番目の土製支脚がないので、同じ形態のものもセットもあったのであろう。第84図515～第86図524は甕型土器である。このうち、512・515・517の内外面に炭化物付着痕がある。515には口唇部内面にも炭化物付着痕がある。516は口径14.5cm、器高14.3cmに復元される小型の甕型土器である。517は口径18.6cm、器高18.6cmで、特に二次焼成が著しく、胴部外面が剥離し、口縁部付近が部分的に白変しているのがみられる。単なる二次焼成ではなく、例えば製塩等の用途に使用されたのかもしれない。522は口径22.6cm、器高28.0cm、523は口径30.5cm、器高30.0cmの大型の甕型土器である。第86図は甕で、胴部内面の口縁部に近い部分と底部付近に幅5.0cmの黒色付着物の痕跡がある。また、外面にも、床から3.0cm前後の位置に、幅1.0cm程の黒色付着物の痕跡がある。時期は8世紀代に入るが、甕、土製支脚、甕型土器、祭祀遺物が多量に出土したⅡ群は、SX20のような単位が幾度も廃棄された結果できた遺物群と考えられる。

SX20と同様に廃棄の単位と考えられるSX07は、SX20とSB01の中間に検出した。第90図に出土状態を示した(図版35上)。失われた遺物もあると思われるが、小型手握土器Ⅰ、製塩土器Ⅰ、須恵器甕片Ⅰ、赤彩土師器21がある。ただし、赤彩土師器は復元図化できたものが21点であり、実際にはもう数個体が加えられる。SX20と同じ方向に散布している。赤彩土師器が主となった単位である。第91図567は小型手握土器で径3.0cm、器高2.2cmで黒斑がある。568は製塩土器で5.5×6.0の破片から復元した。実際には径はもう少し大きいかもしれない。二次焼成痕がみられる。569は4.3×3.3cmの須恵器甕、あるいは壺の小破片。570～590は赤彩土師器である。いずれも、胎土は砂粒を含まない乳白色で、赤彩は底部外面に及ばない。572の杯のみに外面に削りがある。無高台の杯には体部が緩く内湾しながら立ち上がるものと(杯AⅠ)、直線的なものがある(杯BⅠ)。584・585・587は無高台付の杯であろう。高台は低く逆三角形で外側に貼り付けられる。570・571は無高台の皿(皿A)、586～589は無高台付の皿である。590は杯A2であるが、須恵器を模倣したものであろう。これらの遺物からSX07を8世紀後半に位置づけることができよう。比較的新しい時期の赤彩土師器と製塩土器が集中するⅠ群は、SX07のような単位が重複してできあがったと考えられる。前述したようにSX23付近でも8世紀後半の赤彩土師器と製塩土器の組み合わせの一群がみられた。

こうして、SX20とSX07を比較し、Ⅱ区全体の遺物群のありかたをみると、7世紀代には日常使用していた炊飯用具と食器が、数セットが一つの単位として廃棄され、8世紀前半にはそれらに小型手握土器や鉄器、墨書土器等が加わり、8世紀後半には炊飯用具は影を潜め、多量の赤彩土師器と製塩土器を中心とする単位に変遷しているということが云えよう。仮にこのⅡ区の遺物群が、廃棄行為を含めた祭祀の最終段階を示しているとするれば、SX20→Ⅱ群を構成している単位→SX07というおおきな祭祀の変遷を知ることができよう。8世紀代の臈は、時折漆容器にも転用されることがあるけれども、実際には日常的な祭祀の用具として生産されていたのであろう。また、8世紀後半には塩が祭祀の場において重要な位置を占めるようになったことを、製塩土器の増加は示唆するものであろう。さらに、杯・皿といった赤彩土師器の増加は、後の祭祀における土師質土器や「かわらけ」に継承されていくものと思われる。

墨書土器は隣接する大津町北遺跡を含めると、「三」と「依」が多い。「三」は須恵器と赤彩土師器の両方にある。『出雲国風土記』には、出雲郡条美談郷において、大穴持命が「三太三」と云つ

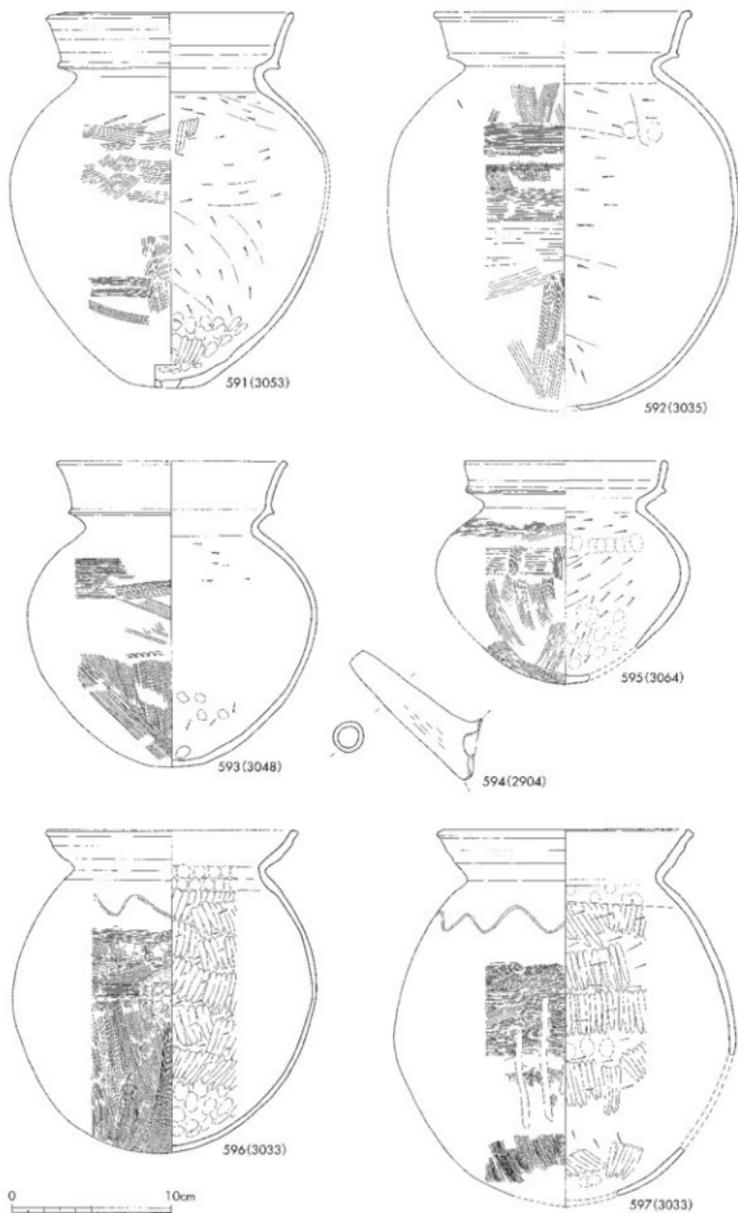
たことに由来するという地名起源説話があり、斐川町三井遺跡では「三井」の墨書土器が出土している。「三」が「美」に用いられるならば、中野清水遺跡は古代には神門郡であったので、『出雲国風土記』神門郡条で「美」をさがすと神社列記の筆頭に「美久我社」がある。「依」は須恵器の高台付環（環A2）にしかみられない。古代では女性の人名にしばしばみられる。また、玉依売命のように神名にもある。石川県金沢市戸水C遺跡では多数の「依」の墨書須恵器が円面硯や風字硯と共に出土している¹⁷。遺跡の時代の中心は平安時代にあり、大型の掘立建物跡が発見されている。遺跡の立地は大野川を利用した水運を活用できる位置にあり、同じ日本海側にあつて、時期差はあるが、斐伊川左岸に中野清水遺跡があることを考えると、何らかの共通した祭祀があつたかもしれない。他に、「×」が赤彩土師器の底部外面に朱墨したものや（第58図214）、後述するようにⅢ区出土の赤彩土師器の中に内面に墨書したもの（第100図23）がある。「×」は須恵器の皿に焼成前にへら書きしたものがあつたように（第66図346）、普通は刻して広く全国に類例がある。荒神谷遺跡出土青銅器はその最古の例であるが、墨書・朱墨の例は意外に少ない。墨書例の第100図23をみることでは、「×」よりも、「ㄨ」の筆跡とみたほうが良いのかもしれない。隠岐島の東笠根1号墳（横穴式石室）では山陰地方Ⅲ期の須恵器蓋環に赤色顔料で、蓋環のセットを縛るように「×」を書いた資料が出土している。何かを封じ込める意味があつたのであろうか¹⁸。中野清水遺跡出土例はその形骸化した祭祀行為とも受け取れる。このようにみると、「三」、「依」、「×」はいずれも神を象徴し記号化した文字として理解することも可能であろう。小型土製模造品には、手捏土器、鉢形・甕形土器、土製土脚、土馬、鏡、勾玉、土玉、その他があるが、甕や鉄製品のそれはない。ほぼ同じ時期の祭祀遺物を多数出土した松江市竹矢町才ノ峰遺跡¹⁹と比較するとやや趣を異にする。Ⅲ群にみられた小型の鉢・甕類に小石を入れた例はこれまであまり知られていないが、やや類似した資料が高知県中村市古津賀遺跡にある²⁰。四万十川の支流の後川の河川敷にある遺跡で、第10号祭祀遺構（SF10）では、須恵器蓋環に小石1～3個が入れられた状態で検出されている。しかも、蓋環は蓋も身も、身のようにして使用されており、蓋環の機能を考える上にも大変興味深い出土状態である。6世紀前葉～中葉の遺跡とされている。小石の意味は不明確であるが、民俗例を参考にすれば神への贅を象徴するものであろうか。祭祀の場はオープンにするものと、封印しなければならぬものが二律背反する聖域であつた。

3層から出土した遺物は第92図～第98図に示した。調査区の北東隅に特に遺物の集中する場所があつた（図版41）。このあたりの土層は第98図のようである。甕型土器・壺型土器・器台・高環・鉢・石器等がある。甕型土器・壺型土器とも、複合口縁のものと、「く」の字に折れる単純口縁のものがある。第92図591～593・595は（図版57）複合口縁の甕型土器である。内外面に炭化物の付着痕がある。591は口径15.0cm、器高23.4cmで底部は完全に丸底にはならない。径4.0cmの平底を意識している。外面は口縁部から底部まで全面に炭化物の付着痕がある。内面は底と胴部より上方に炭化物の付着痕がある。底部には径1.0cmの焼成後にあけられた孔があるが、日常的に炊飯に使用した後、おそらく廃棄時に故意に穿たれたと考えられる。内面は頸部以下をへら削りするが、底に近いところには、指頭圧痕が多数ある。593は器高19.1cmで、592より低いが、成形・調整は酷似する。内外面の炭化物付着痕も同じである。592は器高24.9cmで丸底に復元される。596・597は単純口縁の甕型土器である。丸底で、外面胴部に一条の波状沈線を廻らす。胎土は591～593・595に比較すると砂粒が少なく、色調も薄い褐色を呈す。596は口径15.2cm、器高20.2cmある。内面底部には指頭圧

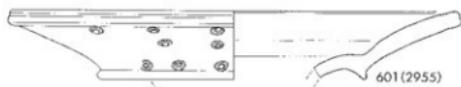
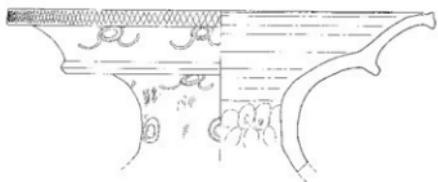
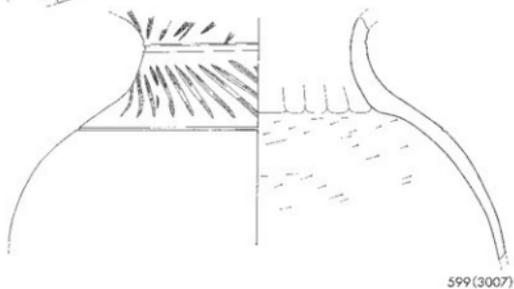
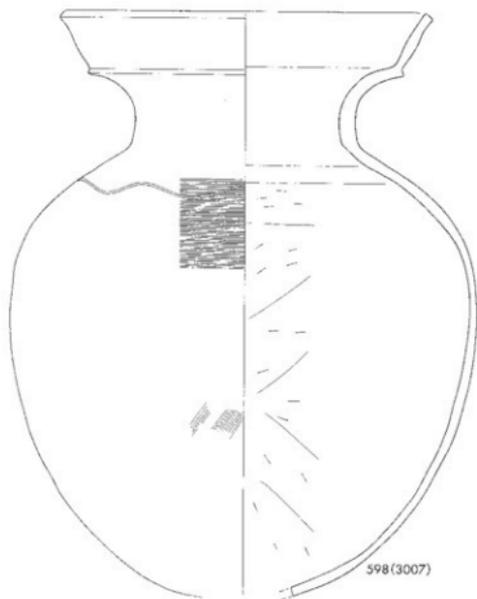
痕が多数みられる。597は口径15.2cm、器高18.6cmに復元される。胴部外面に炭化物付着痕とは別のふきこぼれ痕がある。これらの時期は古墳時代前期前半に位置づけられるが、591・593は大木式、596・597は布留式土器の系譜の甕で小谷式併行期であろう。594は注口土器で弥生時代に遡る時期と思われる。第93図、第94図602・603は複合口縁の壺型土器である。いずれも底部は欠くが丸底になると思われる。602は口径21.5cm、器高は33.0cmほどに復元できよう。598は口径23.0cm、器高36.5cmで、肩部に一条の波状沈線を、599・602・603は頸部に羽状文を廻らす。600・601は竹管文を組み合わせた文様を持つ壺型土器で、口縁部が大きく外反する(図版58)。600は三種の竹管と半截竹管の少なくとも四種類の施文具が組み合わされて使用されている。特殊な文様で類型を知らない。口径は26.2cmに復元される。口唇部には斜格子文がある。これらは正面で正位置の状態では文様が見えないので、少なくとも目線より高い位置に置かれて使用されていた甕であったと考えられる。601の口径は27.4cmに復元される。両者とも文様は規則的に割り付けられている。600では半截竹管の位置を間違えた様子か窺われる文様単位がある。小谷式併行期であろう。604～607、及び第95図613は単純口縁の甕型土器であるが、小型化し、器壁は厚く、内面の削りも粗い。古墳時代中期に下るものであろう。いずれも、内外面に炭化物の付着痕がある。

第95図には特殊な土器を示した(図版58・59)。608は外面は叩き痕、内面はナデ調整された、明確な底部を持つ甕型土器である。底部外面には叩きはみられない。十数片から復元した。内外面の大部分は黒灰色で白色砂粒を含む。609は弥生時代の壺の口縁部で、口径は32.6cmである。頸部に低い突帯を一条廻らす。粗い砂粒を含む赤褐色の胎土である。610は底部を欠くが、外面は粗いナデ、内面は粗いハケ状施紋具痕のある鉢型土器である。口唇部は摘み出している。611は明確な底部を持つ甕の破片であろう。内面はハケ目痕が残る。616・615は小型の深鉢、617は小型の浅鉢土器である。612は甕の一種であろうか。614は器種は不明であるが、鋸歯状に列点文がみえる。618は小型の壺型土器で、胴部に小孔を縦方向に穿った把手を持つ。おそらく、紐で吊すような甕であったろう。622は口径11.0cm、器高8.8cmの単純口縁の小型の甕型土器で、内外面の胴部下半に炭化物の付着痕がある。625は口径7.4cmに復元できる複合口縁部が退化した小型甕型土器である。619・620は小型丸底甕である。621・623・624は古墳時代前期の埴。626・627・628は小型手捏土器で古墳時代中期のものか。629は上製支脚である(図版59)。小型の甕型土器を逆転し、二本の突起を摘み出したような形態である。その為、内面は縦方向の皺がみられる。1/2が残存する。胎土は少量の砂粒を含むが全体的には緻密である。色調は内外面とも薄い黄褐色で、突起と胴部の一部分に二次焼成を受けた痕跡があるが日常的に使用されていたとは思えない。胴部には径1.0cmの孔がある。古墳時代前期の土器と伴した。後に山陰地方で多くみられるようになる頸部が二股になった土製支脚の祖形となったものであろう。608・609・610は西部瀬戸内～北部九州からの搬入土器であろう。630は始刃石斧(図版58)。

第96図は器台である(図版59)。最大の口径のものは633で、23.3cm、底径19.9cm、器高は14.0cmある。631・632・633・635が大型の一群である。639は器高が6.5cmと低く、口径は13.6cm、底径12.0cmと小型である。受け部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラ削りの原則は守られているが、受け部は部分的にヘラ削り痕が残る。637の脚部には円孔がある。このうち、641は赤褐色に焼き上げており、受け部内面にヘラ削り痕が残る。635は一部に二次焼成痕がみられる。また、ミガキの前にハケ調整がある。640はこの地方であまり見かけない器台である。器高8.5cm、口径10.4cm、底径

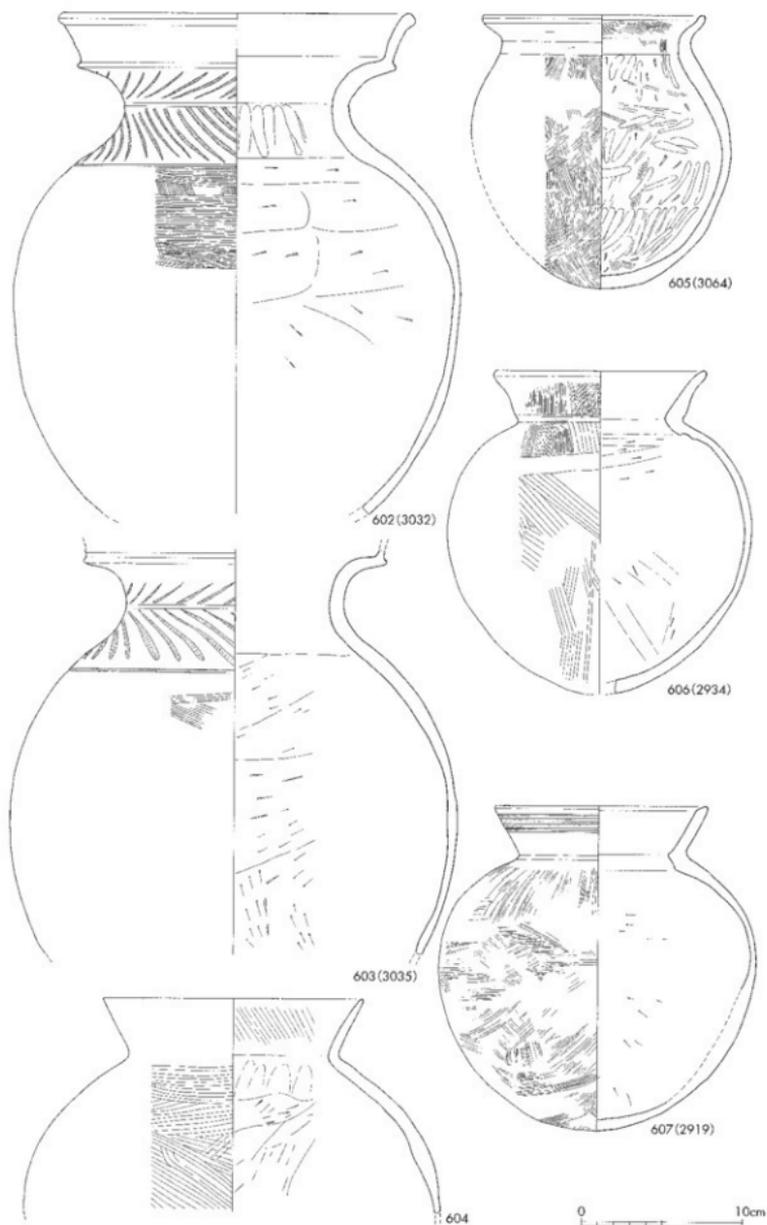


第92図 中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(1)

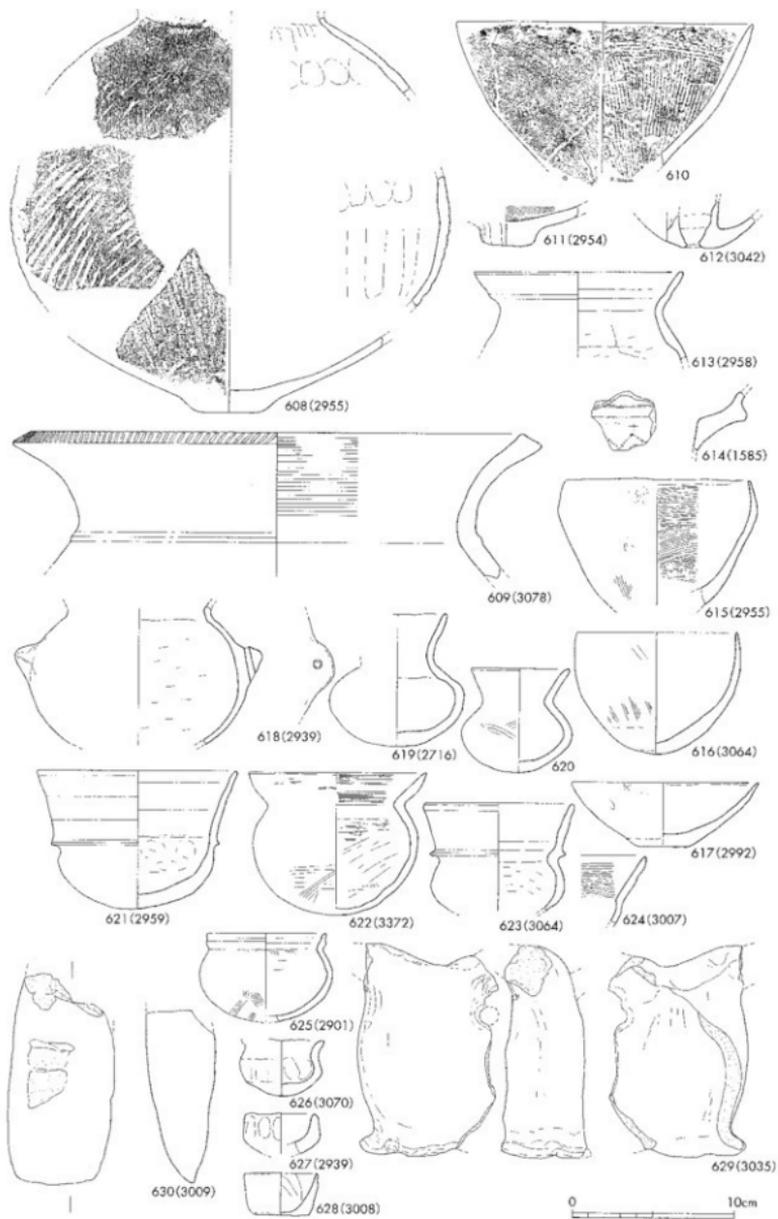


0 10cm

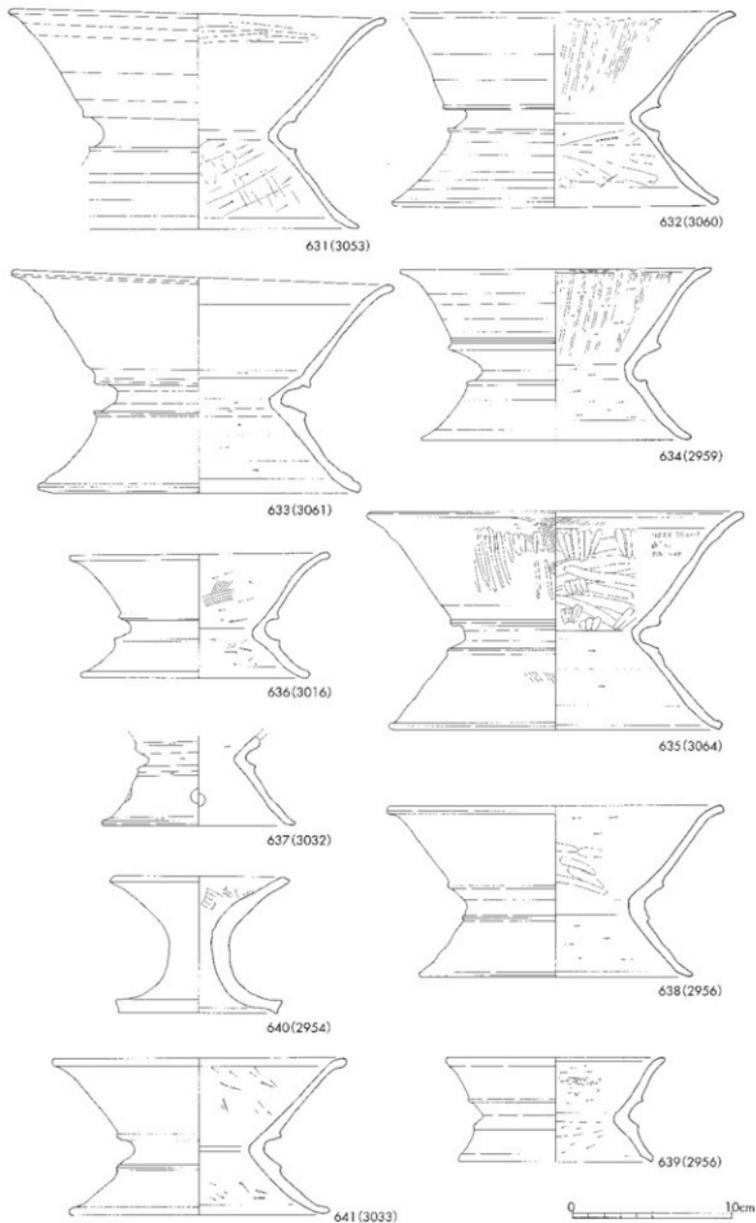
第93图 中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(2)



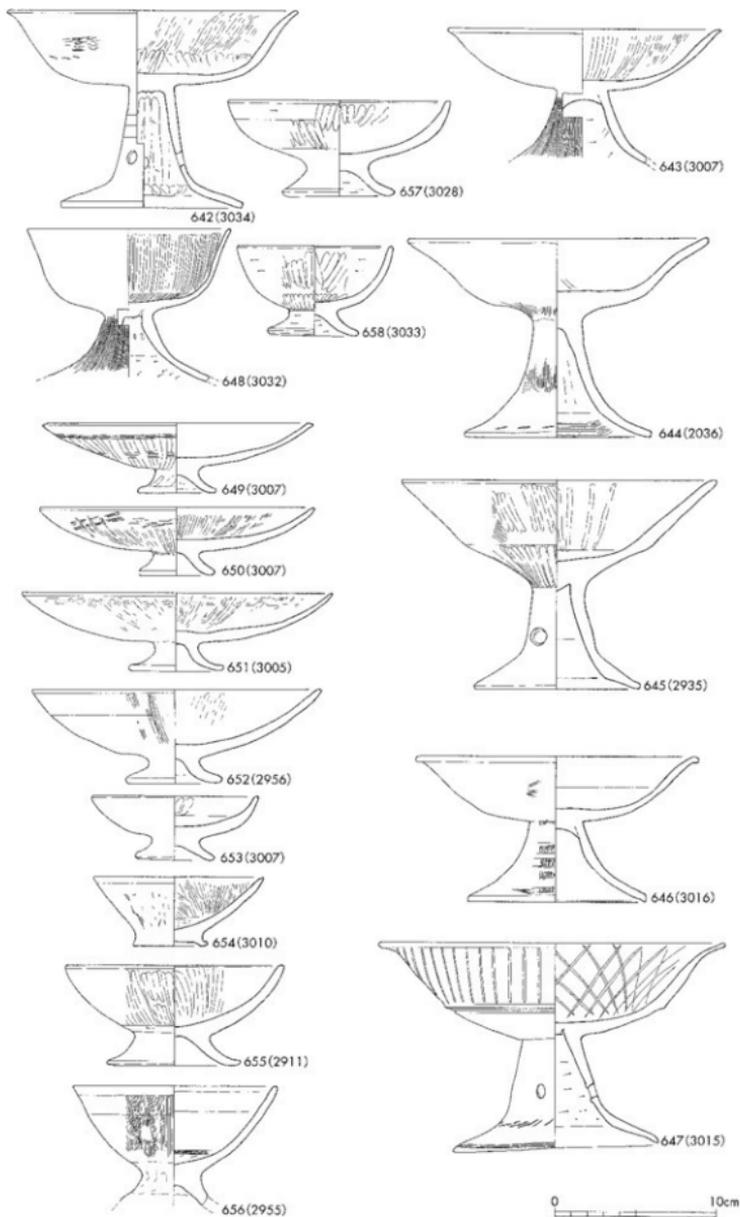
第94图 中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(3)



第95图 中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(4)



第96图 中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(5)



第97図 中野清水遺跡Ⅱ区3層出土遺物(6)

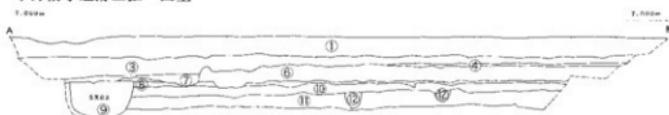
Ⅲ区 V区(東側)とⅣ区(西側)の間をⅢ区とした(第4図)。Ⅰ層では中世以降の水田面とⅠ区と同様な小区面の遺構を検出した。水田面には多数の人と牛の足跡があった(図版61)。小区面遺構は一部2層まで達していた(第99図中)。Ⅰ区で述べたように瓦の粘土採掘跡である。このⅢ区ではⅠ層の下にある2・3層の区別があまりはっきりしなく、後世擾乱を受けている可能性がある。遺物も古墳時代と律令期のものが共存して出土することが多かった。しかし、3層では遺物は発見できなかったが、SX01(図版62)、SX02、SX06の土坑を検出した(第99図下)。

第100図には須恵器(1~14)と土師器(15~31)を示した(図版63)。1~3は蓋坏である。1の蓋は径12.5cm、器高3.9cmで、外面はへら削りと回転ナデ、体部に沈線状の段がある。2・3の身はそれぞれ、口径11.4cm、器高4.3cm、口径2.9cm、器高10.0cmで、外面には回転へら削り痕がある。4は口径14.5cm、器高10.7cmの高坏で脚部に三角形の透かし窓が2ヶ所ある。二次焼成を受け、茶褐色に変色している。5は扁平な擬宝珠状の撮みの坏蓋である。9は口径13.0cm、器高3.5cmで無高台の坏Aである。底部外面はへら切り離し痕である。6・7・12は高台付の坏Bである。6は口径13.0cm、器高4.4cmで、しっかりとした高台である。破片のため底部外面の調整がはっきりしないが、焼成前にへら書きされた「三」が読める。7・12は平安期に下と考えられる。10は口径13.2cm、器高2.5cmで無高台のⅢA。底部外面は回転糸切痕で「二」に読める墨痕状のものがかすかにみえるがはっきりしない。11は口径20.0cm、器高3.5cmの高台付のⅢB。高台はやや外側に付き体部は直線的に外側に大きく開きながら立ち上がる。9は長頸壺の底部で、底部外面に回転糸切痕がある。13は口径10.0cmの短頸壺で、胴部~底部を欠く。

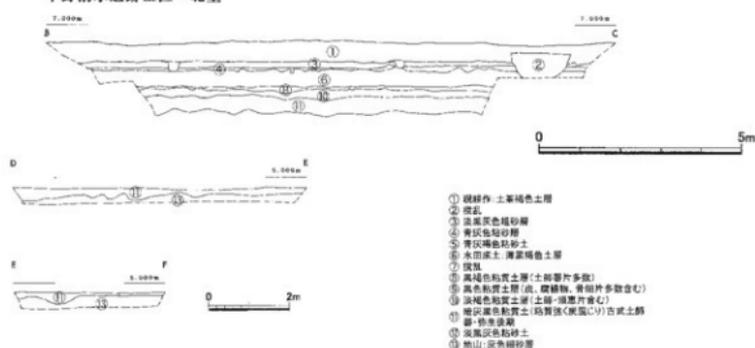
15~29は赤彩土師器である。15~20・29は無高台の坏A。15以外は皆体部が直線的に外に「ハ」の字状に開き、赤彩は底部外面にはない。15は口径12.0cm、器高2.9cmで、体部が湾曲しながら立ち上がり、底部はへら削りで、赤彩は全面に施す。16は口径14.2cm、器高3.5cmで、内面底部に墨書があるが破片のため判読不能。21~26は無高台のⅢAである。21は口径19.5cm、器高2.3cmで、体部が湾曲しながら立ち上がり、底部はへら削りである。赤彩は厚く全面に施される。22~26は体部が直線的に外側に開き、赤彩は底部外面まで及ばない一群である。このうち、23の内面には墨書「×」がある。筆跡から受ける印象は、単なる「×」ではなく、「メ」である。横が短く、縦が長いものは、第69図386の須恵器にもある。27・28は破片のため器形は不明であるが、底部外面に墨書のある赤彩土師器である。いずれも赤彩は内面であり、底部外面にはない。28は判読不能である。27は「伎」と読める。前後に墨書はみられないので一字のみと考えられる。「出雲国風土記」神門郡条から「伎」を探すと、「多伎郷」があり、其の説話に「阿陀加夜努志多伎吉比賣命」、また、「多伎駅」がある。隣接する出雲郡条では、神社列記の中に、「阿受伎社」、「美佐伎社」、神名火山に「伎比佐加美高日子命社」がある。30は土師質土器、31は土唾である。

第101図には製塩土器、土製支脚、甕型土器を示した(図版63・64)。32~40は製塩土器の口縁部の破片である。34・36・39・40の外面は皺状となり、内面に横方向の凹凸のあるものが多い。41はⅡ区2層で出土している獣脚形土製支脚の破片である。厚さ3.5cmある。46は頸部を欠く土製支脚である。おそらく、頸部は二股であろう。胸部に孔がある。42~45は甕型土器である。いずれも、45を除いて内外面に多量の黒色付着物がある。42は口径21.6cm、器高19.5cmに復元される。45は口径9.5cm、器高9.5cmの小型の甕である。内面のへら削りは粗く、42~44に比較して器壁は厚い。43は口唇部が内側にやや返る。

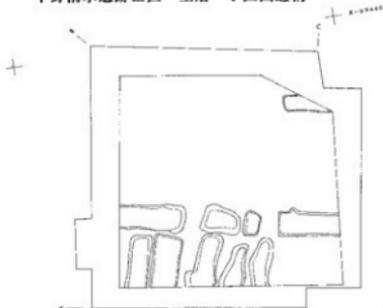
中野清水遺跡Ⅲ区 西壁



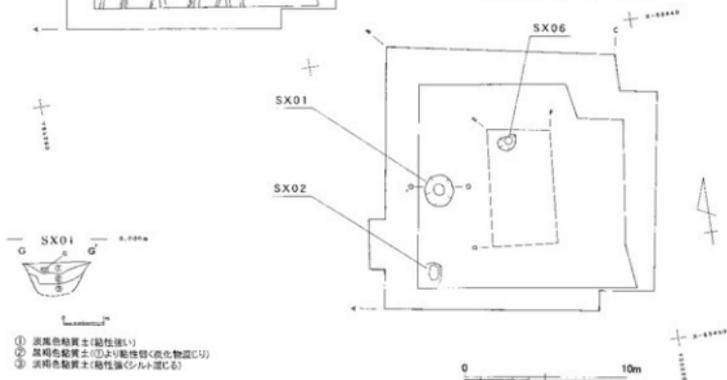
中野清水遺跡Ⅲ区 北壁



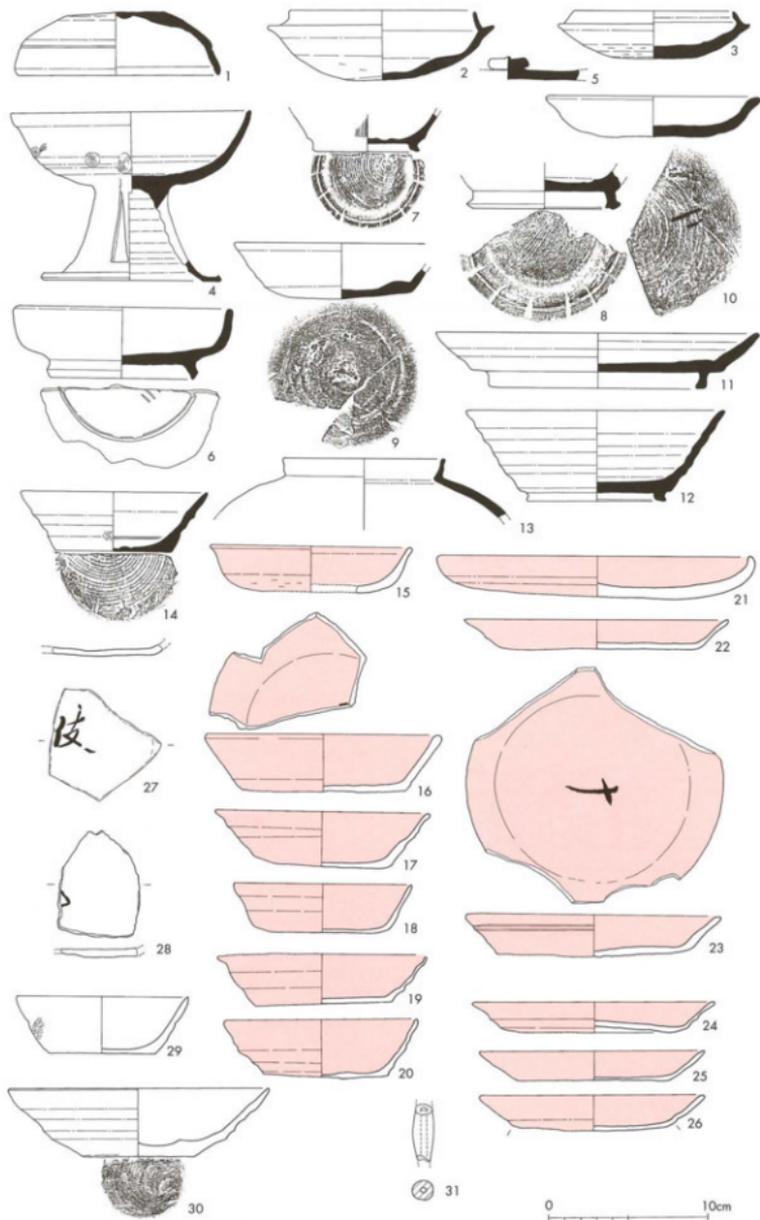
中野清水遺跡Ⅲ区 上層 小区画遺構



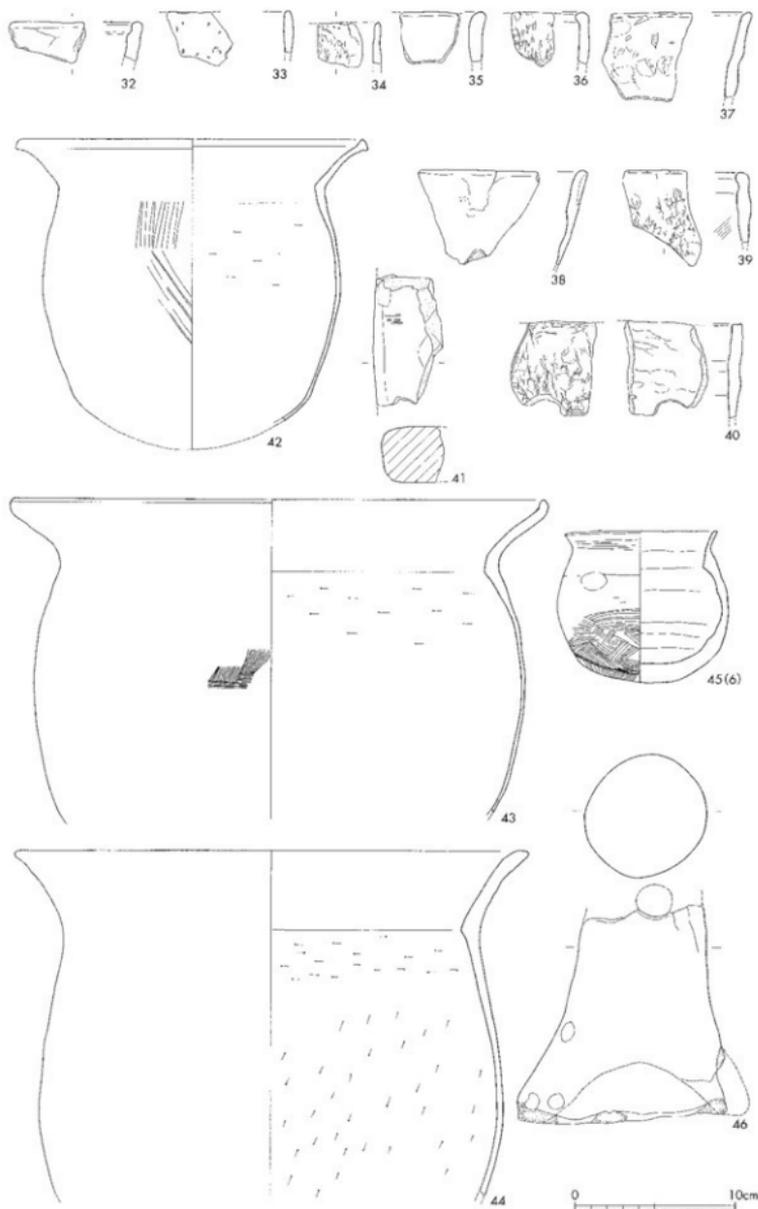
中野清水遺跡Ⅲ区 下層



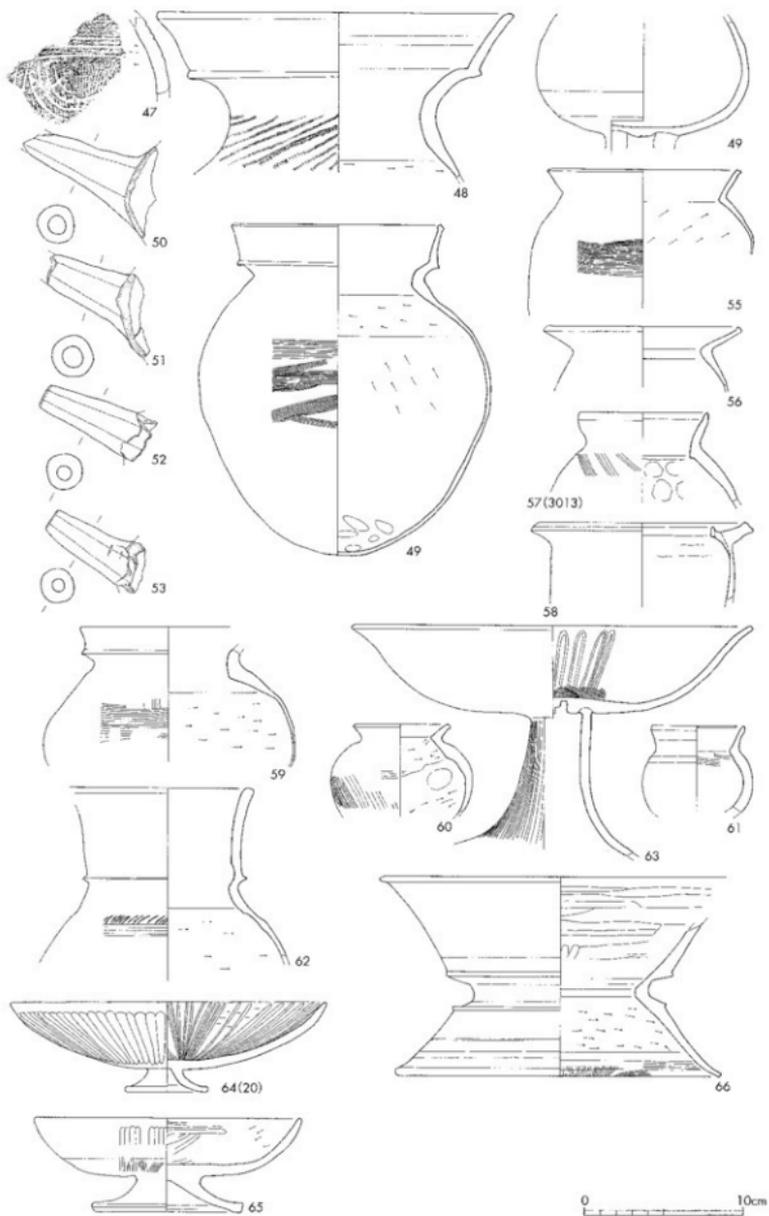
第99図 中野清水遺跡Ⅲ区遺構実測図



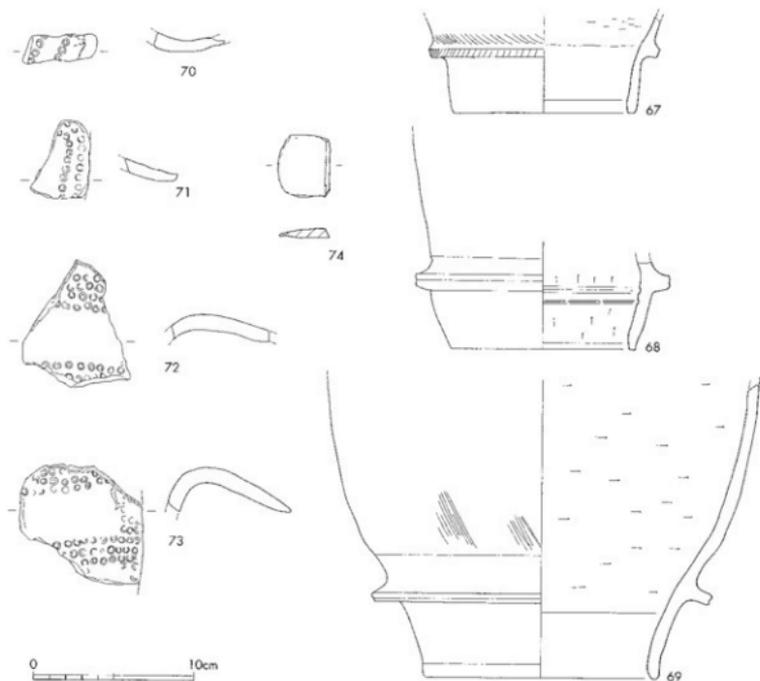
第100图 中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(1)



第101图 中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(2)



第102图 中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(3)



第103図 中野清水遺跡Ⅲ区出土遺物(4)

第102図～第103図には弥生土器～古墳時代前・中期の土師器を示した(図版64・65)。主として3層からの遺物である。47は破片のためはっきりしないが、壺の肩部と考えられる。外面はハケ目調整した後、ヘラによる沈線と曲線文を描いている。内面は横方向のヘラ削りである。類似資料に鳥取県青谷上寺地遺跡出土の弥生時代後期の壺型土器がある。50～53は注口土器の注口である。弥生終末期のものであろう。48・62は複合口縁の壺型土器である。48は口径22.2cmで、頸部に粗い羽状文を入れる。62は口縁が直立する。49・59は複合口縁の壺型土器である。49は口径8.1cm、器高20.7cmの丸底で内外面とも肩部下半に黒色付着物の痕跡がある。内面底部は指頭圧痕がある。55・56は単純口縁の壺型土器で、古墳時代前前期半ごろである。54は大きなワイングラス状の高坏であろう。58は器形不明である。一応、内面の突帯を蓋の受け部として、蓋頭の鉢と考えた。あるいは、天地逆にして甌かもしれない。60・61は中期に下る、小型壺型土器であろう。62・65は低脚坏。65は62に比して脚部が大きい。64は坏部の内外面にミガキが顕著であるが、65はミガキの他にハケ目がみえる。63は口径25.0cmの高坏である。坏部内面、脚部外面に丁寧なヘラミガキを施す。66は笠形器台で、口径23.0cm、底径21.0cm、器高12.3cmである。67～69は壺型土器である。67は突帯部分に文様を入れている。70～31は同一個体、不明土製品である。小さな竹管文を魚々子状に入れている。片面のみに文様がみられる。74は楔状の鉄製品で、3.9×3.2cm、厚さは最大で0.6cmある。重量は15.84g。

IV区 IV区の東はIII区、西はVII区である(第4図)。1層は粘土採掘の坑が多くみられ、その一部は2層まで達している。2層は主として6世紀末から8世紀の遺構、遺物である。調査区の東側にまとまって廃棄されたと考えられるいくつかの土器群を検出した(第104図)。3層では、調査区の東端で、排水ポンプを設置するために深く掘ったところ、古墳時代中期の祭祀遺物が出土した。西側では、貯蔵穴と考えられる土坑とその周辺に小土坑を検出した(第104図)。

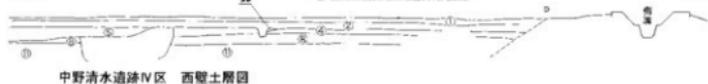
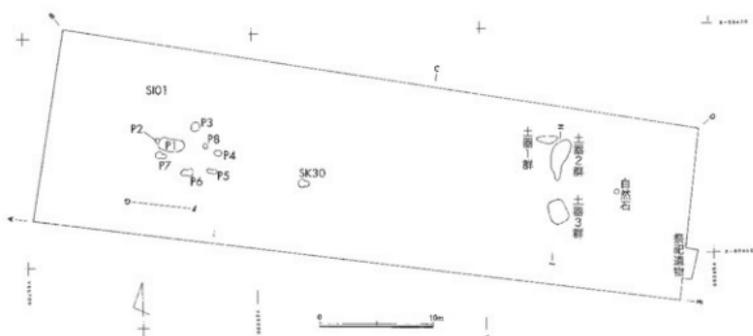
第105図には遺構に伴わない2層出土の遺物を示した(図版75)。須恵器(1~7)、土師器(8・11~21)、鉄器(9・10)がある。1・2は蓋坏である。1の蓋は口径12.0cm、器高4.4cmで、外面は回転ヘラ削りとナデで仕上げられている。内面には螺旋状の凹凸がある。2の身は口径14.5cm、器高4.3cmで、底部外面はヘラ切り離し痕、体部は回転ナデ、内面は螺旋状の凹凸があり、一方向へのナデ調整痕がみえる。3は須恵器の坏、もしくは鉢の底部である。高台は径13.3cmで外側に「ハ」の字状に付く。薄い青灰色で焼成は良好である。胎土にはまばらに砂粒を含むがあまり目立たない。底部外面には糸切り痕はみられず、きれいな回転ヘラ削りである。内面もきれいな回転ナデである。この地域以外からの搬入品である。4は長頸壺の頸部である。口径9cm、長さ12.5cm。5は高台付きの須恵器坏A2の低部片である。高台は剥離しており、糸切り痕はみえない。低部外面に焼成前にヘラ書きされた「三」がある。第100図GのIII区2層出土須恵器坏A2にもみられる。6は須恵器坏0で、「ハ」の字状に開いた高くしつかりとした高台が付く。低部外面は糸切り痕はみられず、焼成前の「×」印がある。7は高台付きの須恵器坏A2で、口径14.5cm、器高5.5cmある。低部外面は回転糸切痕、内面は使用痕がある。

8は無高台の赤彩土師器皿Aで、口径15.8cm、器高2.3cmで、赤彩は底部外面まで及ばない。9は鉄鎌の一部であろう。長さ14.0cm、幅3.5cm、重さ105.76gある。10は刀子の破片。両端部を欠く。長さ9.0cm、刃部幅1.1cm、重さ2.95cmある。

11は土鍾で一方の端部を欠く。中央での径1.5cm。12は頭部が二股の上製支脚である。胴部に突起があるが失われている。表面は全体に削り調整されている。14はII区でみられたような獣脚形上製支脚の破片である。現状での長さ9.0cm、幅7.0cm、厚さ4.0cmで片面がより強く被熱している。13は口径31.2cmの甕型上器で底部を欠く。胴部内面は粗くヘラ削りされ、器壁は薄く仕上げられている。外面と胴部内面には炭化物が付着している。15~21は小型手捏土器である。最小のものは15で径3.5cm、器高2.6cmで、最大のものは20で径5.0cm、器高3.6cmある。

調査区の東側に検出した土器群は1~4群あり、このうち、2・3群に特にまとまりがみられた(第106図、図版66~68)。土器2群の器種構成は、須恵器蓋坏の蓋2、身3、甕1、高坏2、長頸壺1、土師器高坏2、土製支脚2、甕1、甕型上器7、甕2である(第108図~第113図)。第108図は須恵器である。これらが、南北方向に廃棄された状態で検出された。

第108図24・25は蓋坏の蓋。24は口径10.0cm、器高4.3cmで、外面は回転ヘラ削りと回転ナデである。焼成はやや不良で茶褐色である。体部に浅い沈線がある。内面は回転ナデと低い螺旋状の凹凸がある。法量から28の坏身とセット関係にあると考えられる。25は口径12.3cm、器高4.2cmで、外面は回転ヘラ削りと回転ナデで、体部に段状の浅い沈線がある。内面はきれいに回転ナデされている。薄い青灰色を呈し、胎土には黒色と白色の砂粒を含み、器面はなめらかでない。内面に特に黒斑点がみられる。このような特徴と法量から27の坏身とセット関係にあることがわかる。26~28は坏身である。26は口径14.0cm、器高4.1cmで、外面にはヘラ削りはみられない。内面は一方向へのナデが



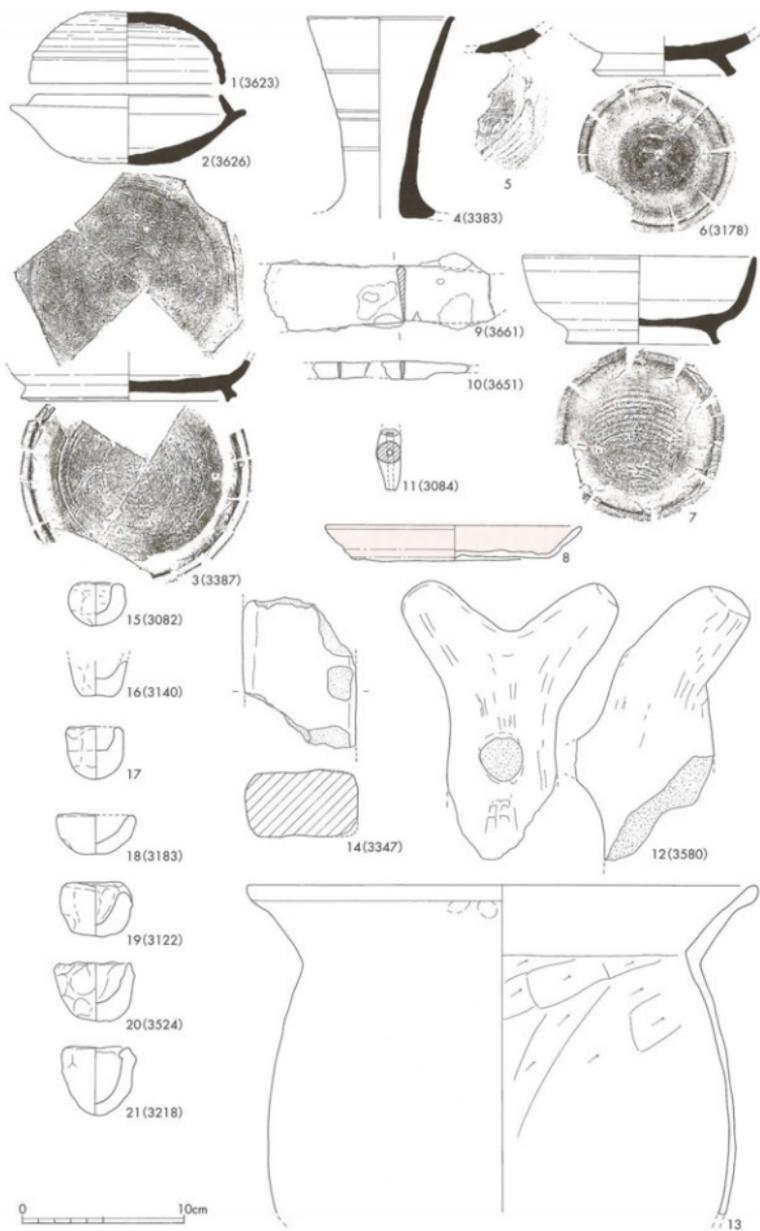
中野清水遺跡Ⅳ区 東壁土層図



中野清水遺跡Ⅳ区 南壁土層図(下層のみ)



第104図 中野清水遺跡Ⅳ区遺構配置図



第105図 中野清水遺跡IV区2層出土遺物

ある。27は口径13.4cm、器高4.3cm外面は回転ヘラ削りと回転ナデで仕上げられている。内面には低い凹みがある。薄い青灰色を呈し、胎土には黒色と白色の砂粒を含み、器面はなめらかでない。内面に特に黒斑点がみられる。坯蓋25とセット関係にある。28は口径13.4cm、器高4.3cmで、外面は回転ヘラ削りと回転ナデ、内面には螺旋状の凹凸がある。焼成はやや不良で茶褐色である。坯蓋24とセット関係にある。29は甕である。器高13.6cm、口径9.8cmで、径7.7cm、高さ1.0cmの低脚が付く。脚部は焼成時に焼けひずみがあるが、外側に大きく開いたしっかりしたものである。頸部へ胴部上半に、沈線と竹管文を施しているが、一周しない。胴部中央の孔を正面とすれば、正面のみに文様を付けたと思われる。胴部の孔の径は1.0cmである。色調は薄い青灰色で、胎土にはまばらに黒色砂粒を含み、器面はなめらかでない。こうした特徴から蓋坯25・27と同一窯で同時期に焼成されたと考えられる。壺型土器の中に入れられた状態で出土した(図版68)。30・31は高杯である。30は口径13.7cm、器高10.8cm、脚部径11.0cmある。杯部外面には段状の浅い沈線がある。脚部の透かしは三角形で2ヶ所ある。31は口径15.3cm、器高10.2cm、脚部径11.7cmある。内面底部には使用痕がある。脚部の透かしは三角形で2ヶ所ある。32は長頸甕で、頸部を欠く。脚部の径11.0cm、高さは1.0cmであるが、外側に「ハ」の字状に大きく開いており、ひずみがある。底部外面中央はくぼんでいる。青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には白色・黒色砂粒を含み、内面には黒色砂粒が霜降り状にみられる。内面には炭化物が部分的に付着している。こうした特徴から、これらの高杯は、蓋坯25・27、甕29と同時期に同一窯で焼成されたと考えられる。これらの須恵器は出雲大井産と考えられるが、少なくとも、蓋坯、甕、長頸甕が同一窯で焼成され、セットとして使用されていることがわかる。この時期の須恵器生産の、需要、供給、流通の一端を垣間見るようである。

第109図33・34は上脚器高杯である。赤彩はみられない。33は口径18.0cmで脚部の先端を欠く。現状では器高13.0cmあり、復元すれば15.0cmほどになると思われる。淡褐色。34は口径17.0cm、33と同様に脚部先端を欠くが、現状では器高14.5cmあり、復元すれば15.0cmほどになると思われる。33に比して杯部が深い。33・34とも強く二次焼成を受けており、支脚として使用された可能性がある。

第109図35・36は頭部が二股の上製支脚である。35は高さ15.5cm、底径12.5cmで胴部中程に孔がある。底部の一部を欠くが全容が知られる。ハケ目調整がみられる。孔は外側から内側へ貫通している。内側が強く被熱している。底部のくぼみは深さ4.0cmにヘラ削りされている。36は高さ15.7cm、底径12.3cmで、胴部中程に突起がある。突起は折れている。全体にナデ調整されている。底部は1.7cmの深さでくぼみがあるが、布目痕が残る。上製支脚の底部の窪みに布目痕が残るものは、図示しなかったがⅡ区2層出土資料の中にもある。同様な資料は出雲市三田谷1遺跡でも出土している。上製支脚は二つを向かい合わせセットとして使用するので、その作成にあたっては高さや径等の規格を同じくすることが必要であったのだろう。このくぼみが深くヘラ削りされているものも、製作の段階では布目が残っていた可能性がある。

第110図37は甕である(図版71)。口縁から胴部を欠く。底径は11.6cm。第110図38～第112図は壺型土器である(図版71)。38は口径18.0cm、器高18.0cmで、やや下膨れで底部は平らである。器壁は厚く、内面のヘラ削りは粗い。外面はハケ調整である。外面胴部中程に幅4.0～5.0cmに黒色付着物の痕跡が帯状にみられる。39は口径22.7cm、器高19.0cmで丸底である。器壁は厚く、内面は粗いヘラ削り、外面は細かなハケ調整である。胴部外面に幅5.0cmの幅で、黒色付着物痕が帯状に廻る。40は口径28.6cmで、底部を欠く。内面は斜め方向のヘラ削り痕。外面は全面に黒色付着物痕がある。

41は口径20.6cm、器高30.9cmの丸底で、胴部は球形に近い大型の甕である。頸部から下は、外面は不整方向のハケ目痕、内面は横方向のへう削り痕がある。外面は頸部から下は全面に黒色附着物痕、内面底部には炭化物が残る。42は口径25.0cm、器高27.0cmで、胴部が横に長い大型の丸底の甕である。器壁は厚く、内面のへう削りはやや粗い。外面は粗いハケ調整である。外面底部のみに黒色附着物痕がある。

第113図45・46は甕である(図版78)。45は口径27.2cm、器高33.3cm、底径は推定で38.0cmある。外面はハケ目調整、内面は粗いへう削り調整であるところは甕型土器に同じである。底の前面は7.0cmと長く前に張り出し、両脇は漸進的に狭くなり、床より3.0cm上で止まり、床には着かない。胴部内面の上半に黒色附着物がある。46は口径27.0cm、器高31.0cm、底径33.5cmあり、45とほぼ同形、同サイズである。外面は縦方向のハケ目調整痕、内面は粗いへう削り痕である。焚き口は23.0×20.0cmで、底は大きく耳状に付けられている。底前面の長さは8.0cmに達する。底は45と同様に、床より2.0~4.0cm上で止まり、床に着かない。底の前面と、甕内面の頸部から8.0cmの幅と、胴部中程からやや下方に幅5.0cmが帯状に黒色物質の付着痕がみられる。この甕45・46に対応する甕型土器は、第110図38・39の小型のものである。外面にみられる黒色物質痕も胴部外面下方に帯状にあり、底部や胴部中程より上方にはない。これら以外の大型のものは甕に乗せたときに、底が甕の内面頸部にとどかない。この大型の甕型土器の第111図41、第112図43・44は胴部外面より上の肩部あたりまで黒色物質痕がある。これらのことを重くみれば、大型の甕型土器は支脚が利用されて煮沸が行われたと考えられよう。

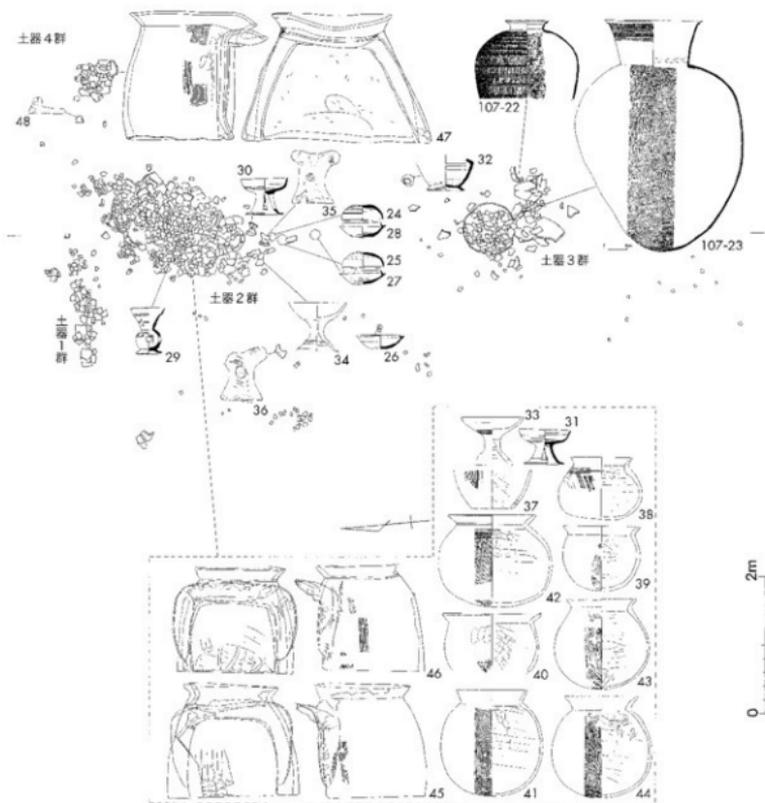
土器3群は、土器2群の南に検出した(第106図)。須恵器の大甕2個体からなり、第107図に図示した(図版76)。23は口径42.0cm、器高99.6cmで底部は丸く尖る。焼成は良好で、青灰色を呈す。胴部外面は平行叩き痕、内面は青海波文で、11緑部には沈線と二条の櫛揃き波状文がある。検出時は底部を故意に打ち欠いて据え置かれており(第106図、図版67)、周辺の破片を接合したところほぼ完形となった。したがって、検出した場所に置いて底部を打ち欠き据え置かれたと判断される。復元したところ、底部には3ヶ所のくぼみがあり、成形時の工具痕と考えられる。また、復元後に①底部に近いところ、②胴部、③肩部に外部から力を加え割れたポイントが3ヶ所確認できた。①は据え置くとき、②と③は据え置いた後に破砕された時の痕跡と思われる。22は23に比較すると小型で頸部も短い。胴部には2~5条の沈線が数cmおきに廻る。茶褐色を呈し、やや焼成不良である。底部が復元できなかったで、23と同様に故意に打ち欠いたものかもしれない。この土器3群は土器2群と一体となったもの可能性が高い。土器2群の器種構成に須恵器大甕2種が加わったものが本来の廃棄の一単位であろう。この土器2・3群と、時期と出土状態が近似している、Ⅱ区2層SX20の遺物構成を比較すると次のようである。須恵器蓋は、蓋と身の個体数の多い方でセット数とした。

Ⅱ区2層SX20

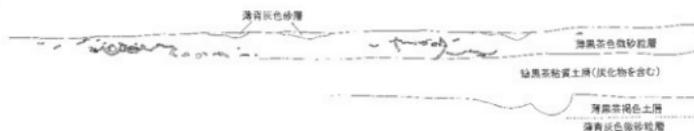
甕・・・・・・・・・・1
甕・・・・・・・・・・1
甕型土器・・・・・・・・7
上師器高坏・・・・・・2
須恵器蓋坏・・・・・・4セット

Ⅳ区2層土器2・3群

甕・・・・・・・・・・2
甕・・・・・・・・・・1
甕型土器・・・・・・・・7
須恵器高坏・・・・・・2
須恵器蓋坏・・・・・・3セット



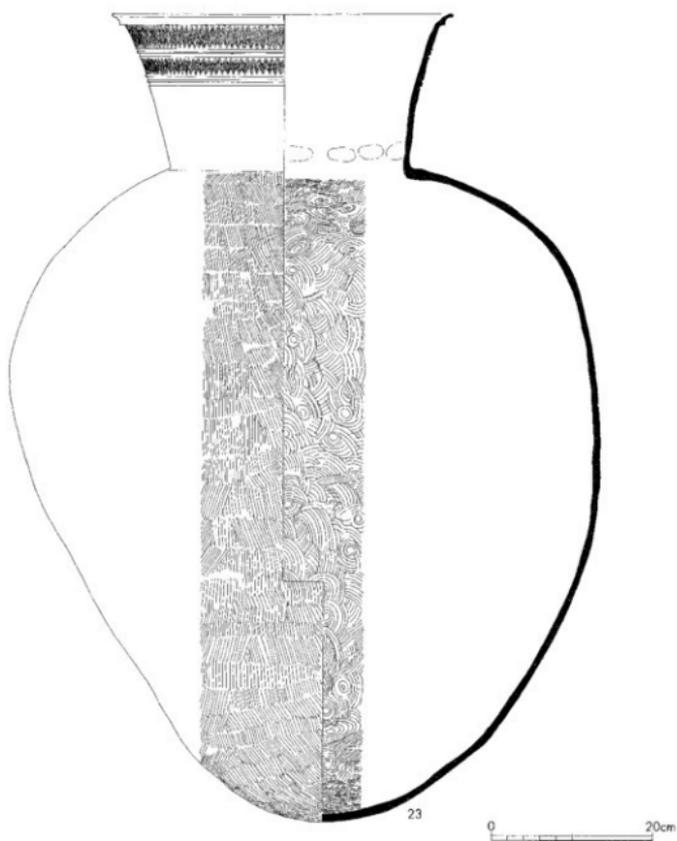
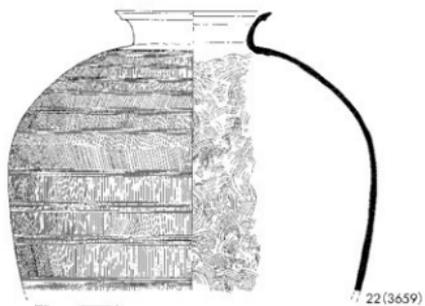
6, 000m



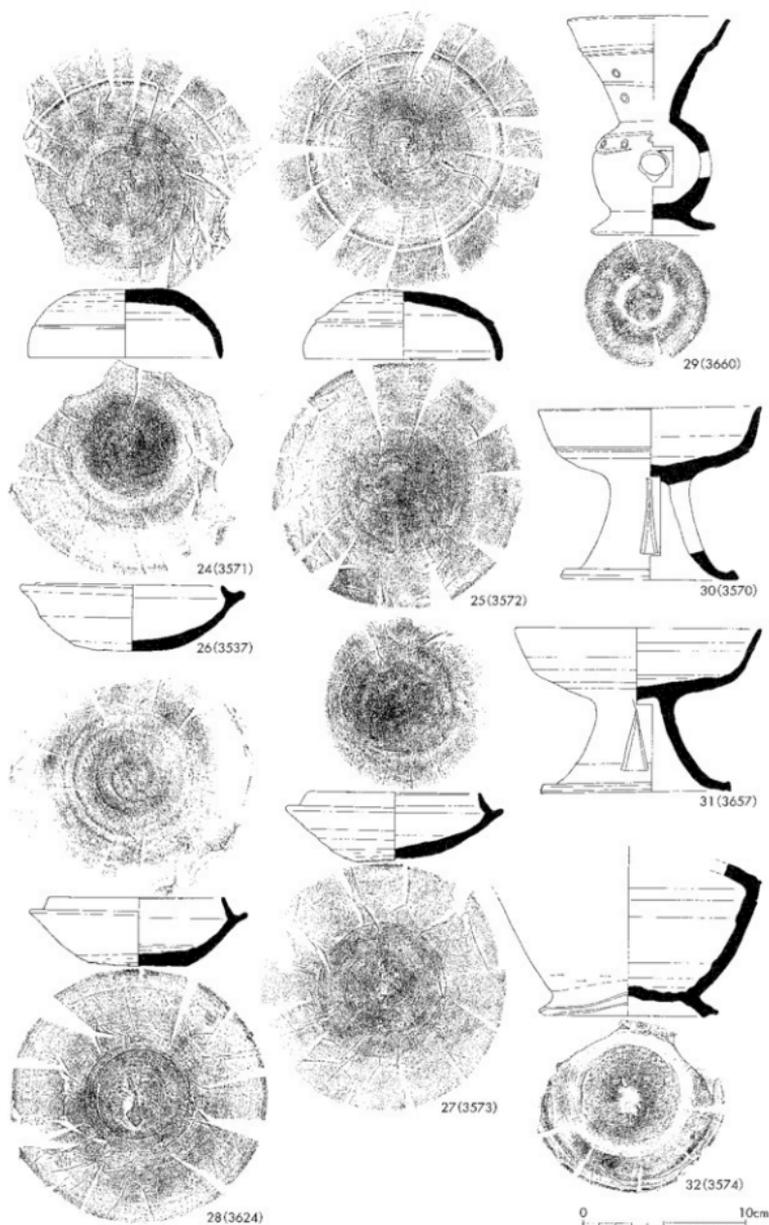
第106図 中野清水遺跡IV区2層遺物出土状態

甕	1	甕	1
平瓶	1	平瓶	0
上師罍鉢	1	上師罍鉢	0
上製支脚	3	土製支脚	2
須恵器大甕	0	須恵器大甕	2

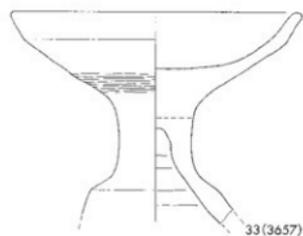
長い間に既に失われたものもあることを考慮に入れると、両者は極めてよく似た器種構成をして



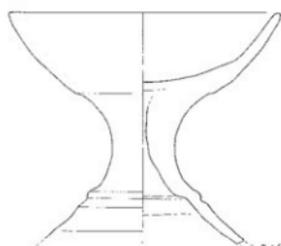
第107图 中野清水道跡IV区2層土器3群出土遺物



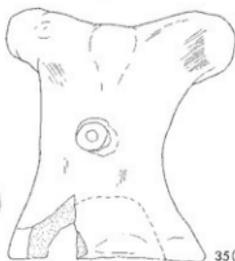
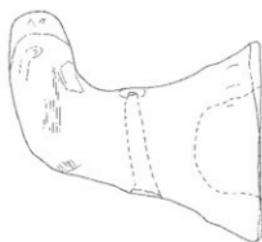
第108図 中野清水道跡IV区2層土器2群出土遺物(1)



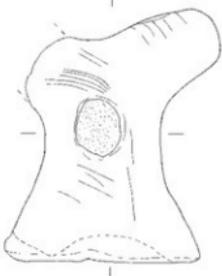
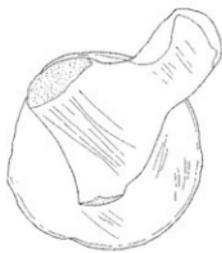
33(3657)



34(3576)



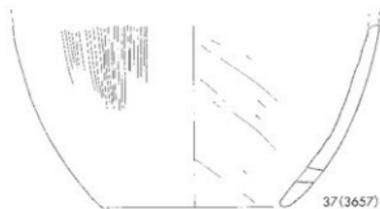
35(3575)



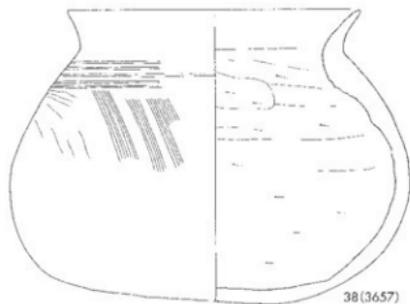
36(3540)

0 10cm

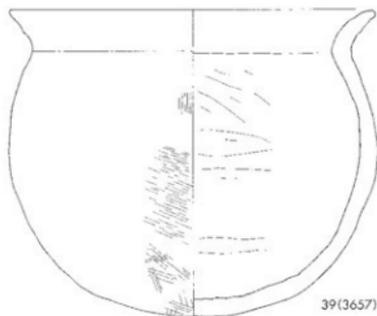
第109图 中野清水遺跡IV区2層土器2群出土土遺物(2)



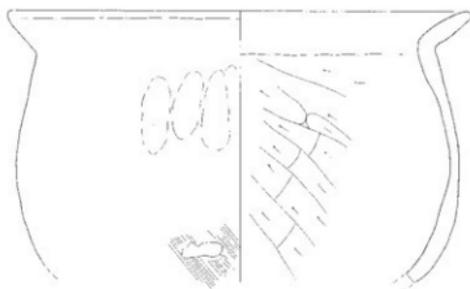
37(3657)



38(3657)



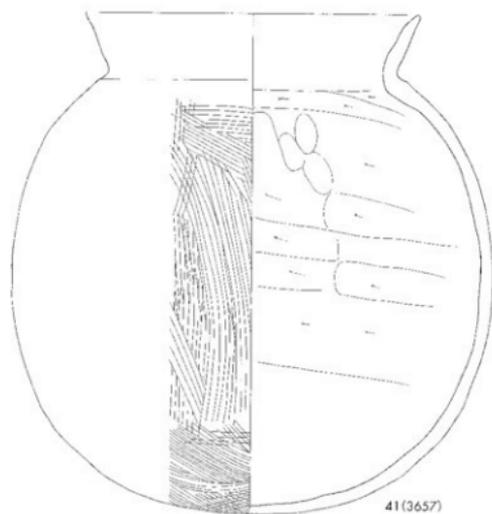
39(3657)



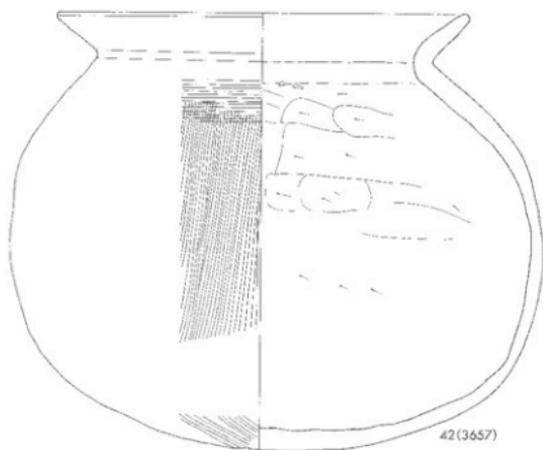
40(3657)



第110图 中野清水遺跡IV区2層土器2群出土遺物(3)



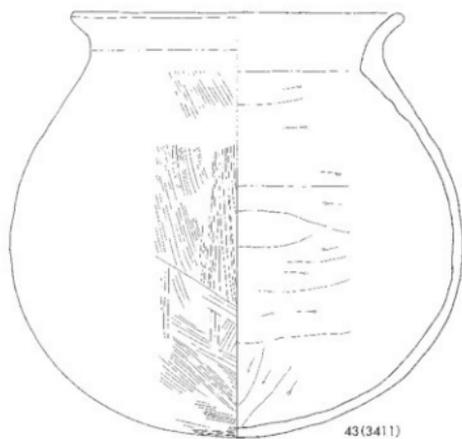
41(3657)



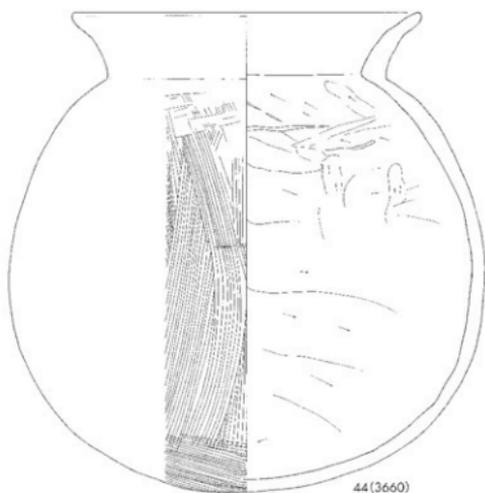
42(3657)

0 10cm

第111图 中野清水遺跡IV区2層上層2群出土遺物(4)



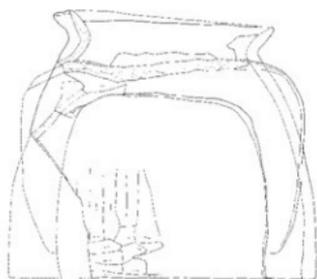
43(3411)



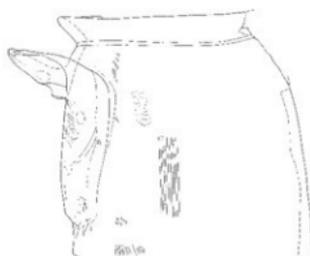
44(3660)



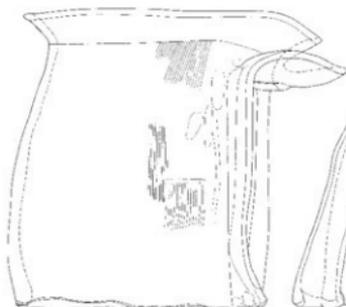
第112図 中野清水遺跡IV区2層土器2群出土遺物(5)



45(3657)



46(3657)



47(3395)



48(3578)

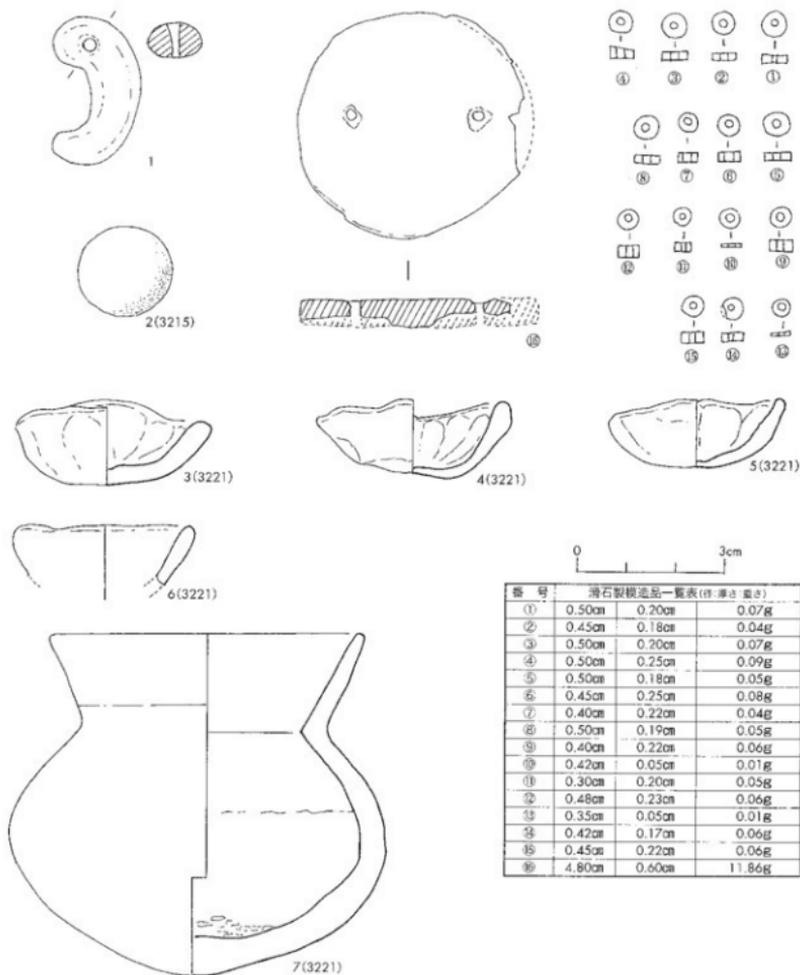


第113图 中野清水遺跡IV区2層土器2・4群出土遺物

いることが知られる。この一単位は一つの建物の中で数人が生活する場合に、木製品もあったことを想定すれば、祭祀を含めた恒常的な生活に必要な最低限供えておくべき器種構成と云えよう。文学的な誇張表現があるにせよ、万葉歌人で有名な山上憶良(660~733?)の「貧窮問答歌」を想起せずにはいられない。そこには一つの建物の中に、竈や甕があり、家長とその妻、子供と両親たちの生活が描写されているからである。このことは、仮にⅡ区で考察したように祭祀の一単位とすれば、その祭祀の主体がどのような人たちであったのかも示唆している。それは最多の遺物を出したⅡ区の性格を考える時にも重要である。

土器2群の東2.0mに検出した甕と蓋を、土器4群とした(第113図47・48)。47は甕で、口径34.7cm、器高37.4cm、底径54.9cmで、「ハ」の字状に底部が大きく開く形状をしている(図版76)。土器2群の甕と比較すると大型である。口径も広く大型の壺型土器との組み合わせが想定できる。全体的に黄白色を呈し、器壁は薄い。外面は縦方向のハケ目調整、内面はへら削りである。底は上方で長く10.0cm突き出しているが、口縁部の高さを超えない。両脇は床まで達している。内面には、頸部から下方に幅8.0cm、床から上方8.0cmあたりに幅5.0cmで帯状に黒色の付着物の痕跡がある。48はⅡ区でも出土している変型土器の蓋と考えられるものである。器高は4.6cm、径は復元すれば16.5cmになる。振りは径3.0cmある。

調査区の東端に、排水用のポンプを設置するために深く掘り下げた時に、滑石製有孔円板を発見したので、土を水洗し、乾燥した後に1mmメッシュのふるいにかけてところ、第114図のような遺物を得た(図版77)。3層に相当する。1は瑪瑙製勾玉で、長さ3.0cm、中央での幅1.0cm、厚さ0.7cmある。完全にはコの字状にはなっていない。丁寧な作りである。赤茶褐色を呈す。重量は4.83gで、孔は一方から穿孔されている。2は上製の玉で球形である。径は1.8cmで、孔はない。胎土は緻密で雲母片を含む。全体に黒色である。重さは6.85gある。3~6は小型手捏土器である。いずれも「環」状で、律令期のものと比較すると器高は低く器壁も薄い。内面には指頭圧痕が著しく、指先で少量の粘土を挿んで作った様子が窺える。3~5は完形、5は口縁部片である。この地域における小型手捏土器の最も古い例である。3は径4.0cm、器高1.7cm、くすんだ灰黒色で、12.44gある。4は径4.0cm、器高1.6cm、淡茶褐色で、8.93gある。底部の器壁が薄い。5は径3.6cm、器高1.4cm、黒色で、7.22gある。底部の器壁が薄い。6は3.0×1.2cmの破片で、淡茶褐色である。7はいわゆる小型丸底壺である。口径6.0cm、器高7.0cmで、外面は焼成時の黒斑が大部分を占め、一部は淡黄褐色である。内面は黒色であるが付着物はない。底部内面に小さな指頭圧痕がある。底部は口縁から胴部の器壁より幾分厚くなる。①~⑥は滑石製模造品である。法量は表(滑石製模造品一覧表:第114図)に示した。①~⑤は白玉である。この他に水洗中に壊れたもの4点があり、合計18点ある。⑥は有孔円板で、片面の多くは剥離している。表面にはかすかに赤色顔料の塗られていた痕跡が認められる。この滑石製有孔円板は出雲地域では出土例は少なく1例に満たない。祭祀遺跡そのものの発見例が少ないためと思われる。史跡出雲玉作跡や大東高校グラウンド遺跡等玉作遺跡において、白玉とともに製作されていることが知られている。松江市の荒神畑古墳や薬師山古墳等の古墳時代中期の古墳の副葬品としても出土例がある。これらの祭祀遺物の付近から出土した土器に第119図26の複合口縁の壺型土器がある(図版81)。口径21.2cmで、胴部から底部を欠く。色調は淡い褐色で、器壁は厚く、胎土には白色微砂粒を含む。外面は肩部から下半を粗いハケ目で調整し、肩部に木口状の施文具で羽状文を施している。内面は肩部より下をへら削りしている。古墳時代中



第114図 中野清水遺跡IV区3層出土遺物(1)

期のものであろう。勾玉の形状や滑石製模造品の多くが古墳時代中期の遺跡から出土することと土器の年代観とは矛盾しない。周辺部を含めかなり丁寧に水洗したが須恵器は出土しなかった。したがって、これらの祭祀遺物は、古墳時代の中期でも、この地方で須恵器の出現する以前の、およそ5世紀の前半から中頃にかけての時期のものと考えたい。この中野清水遺跡全体では古墳時代中期の遺物は少ないが、この地方の大和型の祭祀の古い例としても注目されよう。

3層においては、弥生時代末から古墳時代前期にかけての土器群と土坑群を、調査区の西側に検

出した(第104図、図版68・70)。土器群を取り除いた段階で土坑群を検出した。便宜上、これらの土坑群をP1～P7、SK30と番号を付けて呼ぶことにした。P1は長さ1.6m、幅1.17m、深さ0.5mの小判型の土坑で、暗黒褐色有機質土と淡黒灰色土が交互に堆積していた(第115図P1、図版71)。貯蔵穴と考えられる。弥生時代末～古墳時代前期の土器片が出土した。P3はP1の東側の径0.7×0.7m、深さ0.32mの正円形土坑(図版74)。P4はP1の東側の径0.6×0.6m、深さ0.05mの正円形土坑(図版73)。P5はP1の東側の長さ0.8m、幅0.4m、深さ0.5mの瓢箪型の上坑(図版72)。P6は長さ1.0m、幅0.54m、深さ0.25mの瓢箪型の上坑(図版73)。P7はP1の南に接した長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.15mの瓢箪型の土坑(図版74)。P1以外は遺物は出土しなかった。P8はP1の東側の径0.45×0.4m、深さ0.05mの浅い円形土坑(図版72)。最大のP1以外は小規模なもので浅い。P1については、大津町北遺跡3層のSX01(第6図、図版1)に似ている。遺物検出面が削平されているとすればこれらの土坑群は貯蔵穴を囲む柱穴群で、建物遺構となろう。この上坑群の東7mの位置に、長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.25mの瓢箪型のSK30があった(図版72)。

第116図～第121図は3層の土器群である(図版69、80～83図)。8は口径29.0cmの壺型土器である。肩部以下を欠く。頸部は「く」の字状で、器壁は厚い。胎土には3mmほどの砂粒を含み焼成は良好である。口縁部には4条の沈線、外面はハケ目調整痕の上から、8条の沈線と4状歯施文具の波状文を廻らす。一部に竹管文がある。内面はハケ目調整痕である。9は口径30.0cmの壺型土器で、肩部以下を欠く。胎土は8に似て砂粒を多く含み、器壁も厚い。頸部は径中央で21.0cmあり、長さ約11.0cmと長い。口縁部は複合口縁に近く、外面に4条の沈線がある。頸部外面はハケ目調整痕の上から18条の沈線を施している。8と9は口縁部の形態に違いはあるが両方とも弥生時代中期後半の時期のものであろう。10は口径23.0cmの高杯の坏部である。脚部を欠く。口縁部に6条の沈線が入る。内外面とも赤彩が施されている。8・9に近い時期のものであろう。

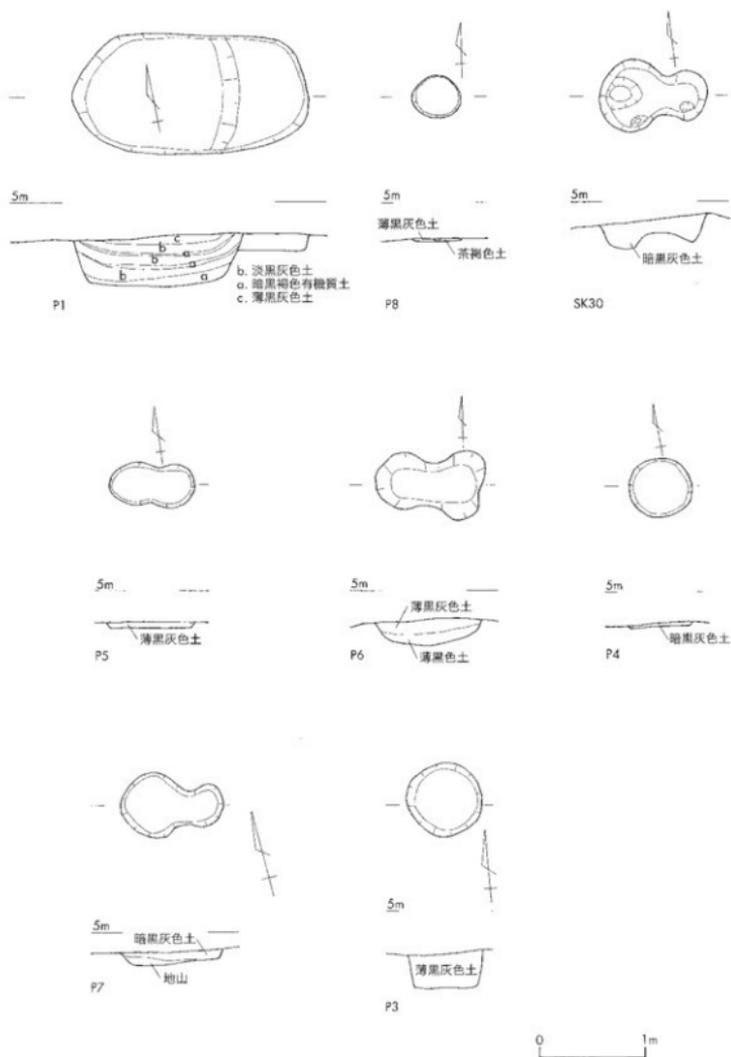
第116図11～第118図18は複合口縁の壺型土器である(図版80)。11は口径11.6cm、器高10.4cmの小形で、丸底に近い。器壁は薄く、外面にはハケ調整痕、内面はヘラ削りである。外面肩部に細かな羽状文を廻らす。内外面に炭化物の付着痕はみられない。13は口径16.8cm、器高25.2cmで、底部は完全には丸底にはならない。外面はハケ調整痕で、肩部に刺突文を廻らす。施文具は貝殻腹縁のようにみえる。右下がりである。胴部外面の最大径部分より下方に炭化物付着痕があるが、底部の先端部分にはみられない。内面底部にも炭化物付着痕がある。器壁は薄い。12は口径16.9cm、器高26.5cmで、底部は丸底に近い。外面はハケ目調整痕、肩部には刺突文を廻らす。13とは逆に右上がりの単位である。内面はヘラ削りで、底部に指頭庄痕がある。14は口径21.0cm、器高32.5cmで、底部は径4.0cmほどの平底がある。外面はきれいにハケ調整され、肩部に櫛描波状文を廻らす。外面には肩部から底部にかけて炭化物付着痕があるが、底部とその周辺にはみられない。内面には底部から6.0cmのあたりまで炭化物付着痕がある。15は口径20.2cm、器高31.4cmで、やや胴長である。底部は径4.0cmほどの平底を意識している作りである。外面はきれいなハケ目調整痕、埋面はヘラ削りで、器壁は薄い。14・15は大木式。16は口径16.9cm、器高26.5cmで、丸底に近い底部である。外面はハケ目調整痕で、肩部に櫛描波状文を廻らす。内面はヘラ削りであるが、底部に多くの指頭庄痕がある。外面の胴部の最大径があるあたりから下半は炭化物付着痕があるが、底部とその周辺にはない。内面底部には炭化物付着痕がある。17は口径16.5cm、器高25.2cmの丸底である。外面はハケ目調整痕の上に櫛描波状文を廻らす。外面の胴部下半は底部まで炭化物付着痕がある。18は口径

16.0cm、器高24.8cmで丸底である。外面はハケ目調整痕の上から、肩部に刺突文を施す。施文具は木口のようにみえる右上がりである。内面はやや粗いへら削りである。第118図19は複合口縁の鉢形土器である。口径17.2cm、器高19.5cm、底径10.8cmである。外面はハケ目調整痕の上から、右上がりの刺突文を廻らすか施文具は不明である。内面は肩部より下をへら削りする。外面には胴部下半から底部まで炭化物付着痕がある。内面は底部一面に炭化物付着痕がある。壺として使用している。16～19は小谷式である。

20は胴部が算盤玉型した壺の胴部である。7.5×6.8cmの破片から復元実測した。最大径は15.8cmとなる。外面肩部の文様は、5段の3条沈線とその間に竹管文・貝殻腹縁文を充填し、胴部は波状の刺突文である。内面はへら削りである。胎土には白色砂粒を含むが、削りのある内面に目立つ。弥生時代後期のものであろう。21は壺の肩部の破片である。小破片のため径を復元できない。肩部に径・高さとも1.0cmほどの突起がある。内面は横方向のへら削りである。頸部にかかるころは絞り痕がみえる。外面は薄くすんだ茶褐色と焼成時の黒斑、内面は淡い黄褐色を呈す。あまり見かけない土器である。22は壺の胴部の破片である（図版82）。16.6×9.6cmの破片で、胴部径は復元できなかったが、30.0cm以上になると思われる。全体に二次焼成を受けており、風化が進んでいる。手で触ると砂粒が落ちる状態である。胎土に含まれる砂粒の粒は大きい。色調は外面は薄くすんだ黄褐色、内面は濃い茶褐色である。内外面とも器面が剝離している部分がある。外面の刺突文の施文具は貝殻腹縁のようにみえる。その間に4～5条の波状沈線文がある。内面は横方向のへら削りである。西部瀬戸内～北部九州からの搬入品であろう。

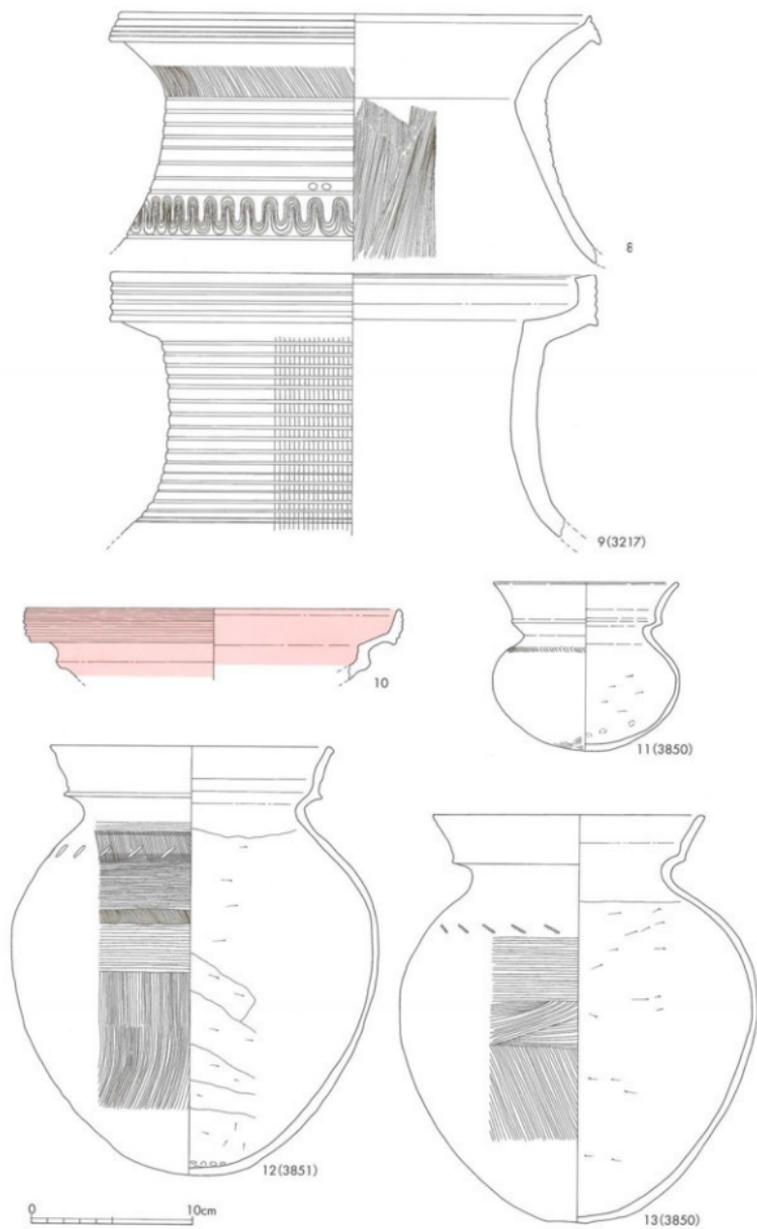
第119図23～25、第120図28は複合口縁の壺型土器である（図版81）。23は口径18.7cmで口縁部に焼成後にあけられた小孔がある。木蓋の存在したことが想定される。24は口径23.0cmで、器壁は薄い。頸部から肩部にかけて羽状文を施すが、同じ施文具による右上がりの刺突文が二段目に廻る。内面は頸部以下をへら削りする。口縁部外面に黒斑がある。23・24は大木式。25は口径18.5cm、器高30.9cmの丸底である。外面はきれいなハケ調整痕の上から、右上がりの刺突文を肩部に廻らす。内面は肩部以下を胴部中程まで横方向にへら削り、その下は横と縦の両方向の削り痕がある。胎土には砂粒は少なく、色調は内外面とも黄白色である。28は口径53.3cmで、大津町北遺跡・中野清水遺跡の出土資料の中で最大の壺型土器である。口縁部から肩部まで残存する。器壁は厚く2.0cmある。外面の頸部から肩部にかけて4条の沈線と木口による羽状文がある。口縁部は外面を縦方向にへらミガキを施し、下端は幅0.5cmの突帯状となる。直立して貼り付けられている。内面は肩部以下を横方向にへら削りする。胎土には白色微砂粒を少量含み、焼成は良好である。内面に胎土の中に白色斑点がみえる。壺棺として作成されたものと思われる。小谷式併行期であろう。

第120図29～32は器台である（図版82）。29～31は鼓型器台である。29は口径19.0cm、器高9.4cm、底径17.0cmで、外面はヨコナデ、内面の受け部は横方向のへらミガキ、脚部はへら削りである。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡褐色である。30は口径21.0cm、器高10.8cm、底径17.7cmで、受け部内面は、削りの後にナデか。脚部内面の削りは粗い。胎土には砂粒を多く含み、褐色を呈す。口縁部に2ヶ所、焼成後に、対になるかたちで欠損している部分がある。31は口径26.0cm、器高14.9cm、底径23.5cmの大型の鼓型器台である。口唇部は1条の沈線がある。受け部内面はへら削りの後、粗いミガキである。斜め方向のミガキもみられる。砂粒の多い胎土で、黄白色。29～31は小谷式であろう。32は弥生時代後期の小型の器台の脚部である。径は5.4cmある。

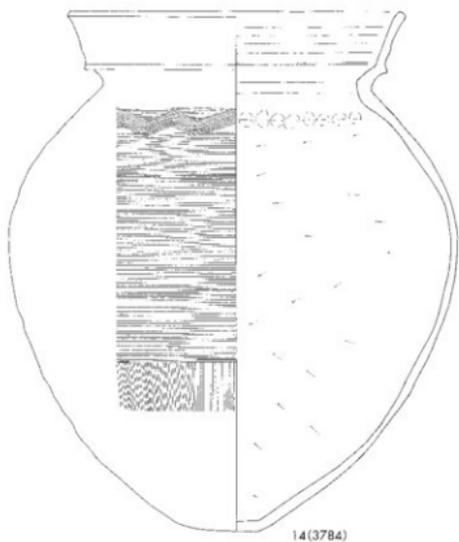


第115図 中野清水遺跡IV区3層遺構図

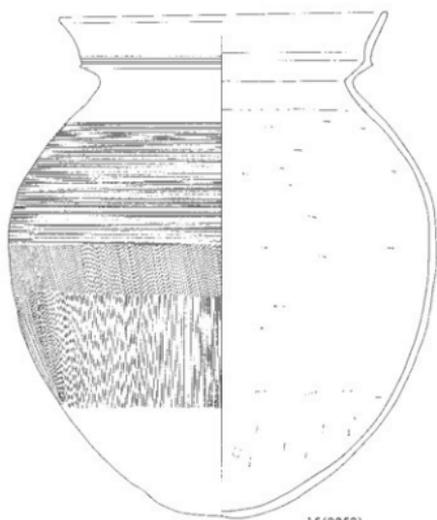
第120図33～39は高坏である（図版82）。33・34は脚部のみで、逆漏斗状をしている。33は底径10.1cm、内面はヘラ削りである。34は内外面共にハケ目調整痕があるが、内面の坏部に近い方は指ナデ調整されている。底径は11.5cmある。いずれも古墳時代中期のものであろう。35は口径38.2cmの大型の高坏の坏部と考えた。胎上には砂粒を多く含み、器壁は厚い。外面はヘラへ刷りと、横ナ



第116図 中野清水遺跡IV区3層出土遺物(2)



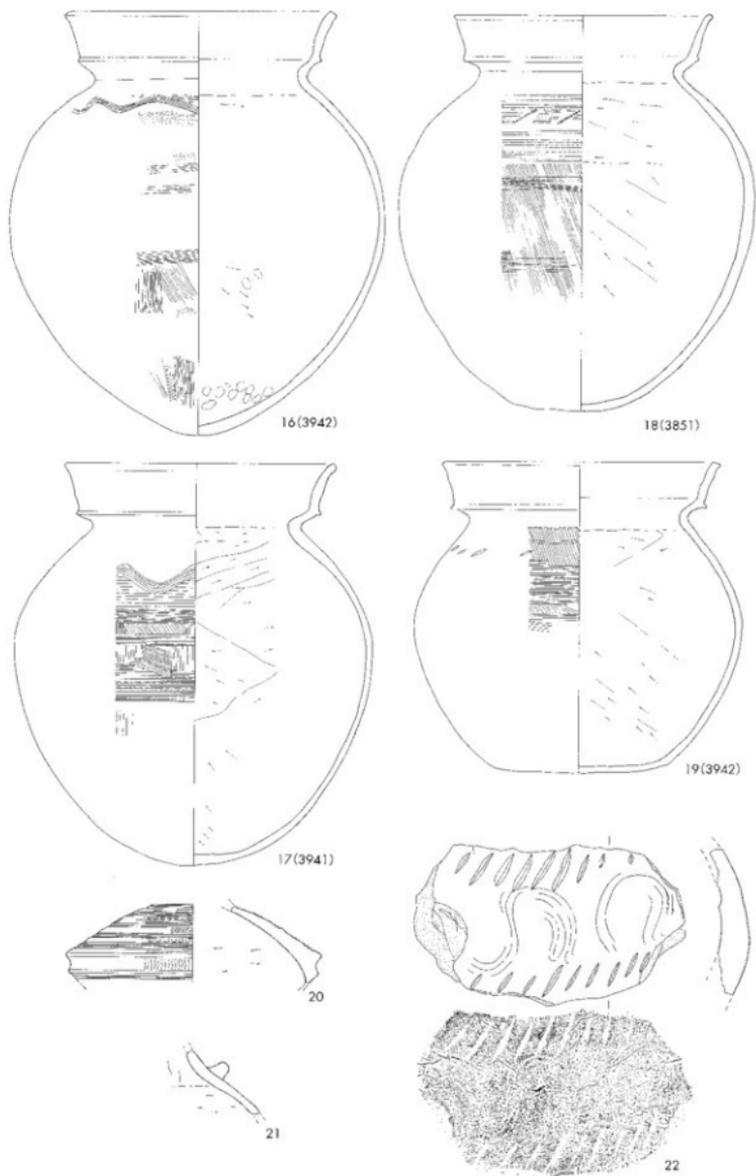
14(3784)



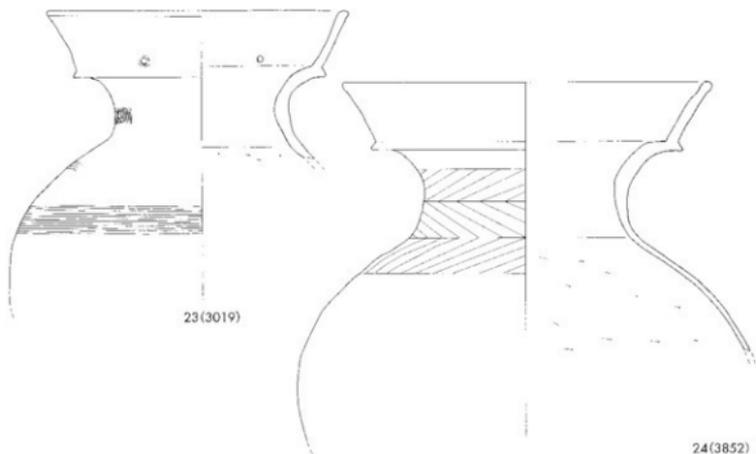
15(3852)



第117图 中野清水遺跡IV区3層出土遺物(3)

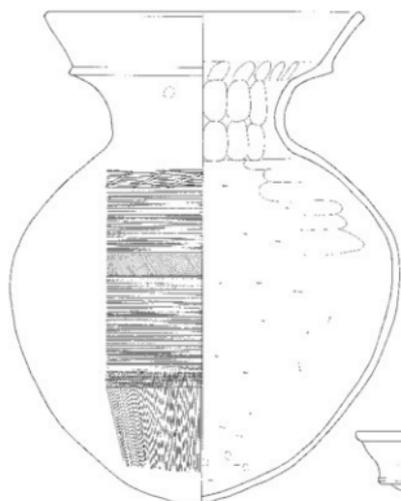


第118図 中野清水遺跡IV区3層出土遺物(4)

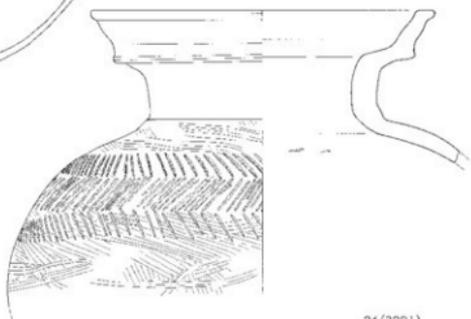


23(3019)

24(3852)



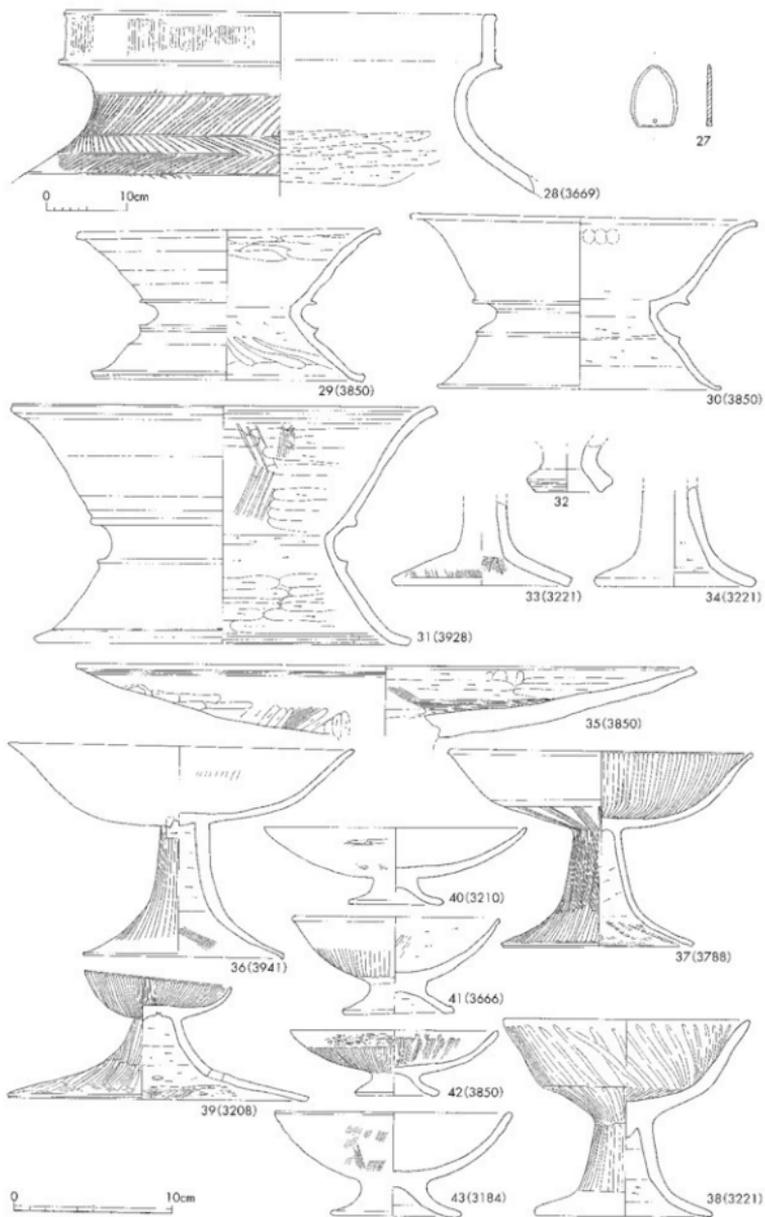
25(3695)



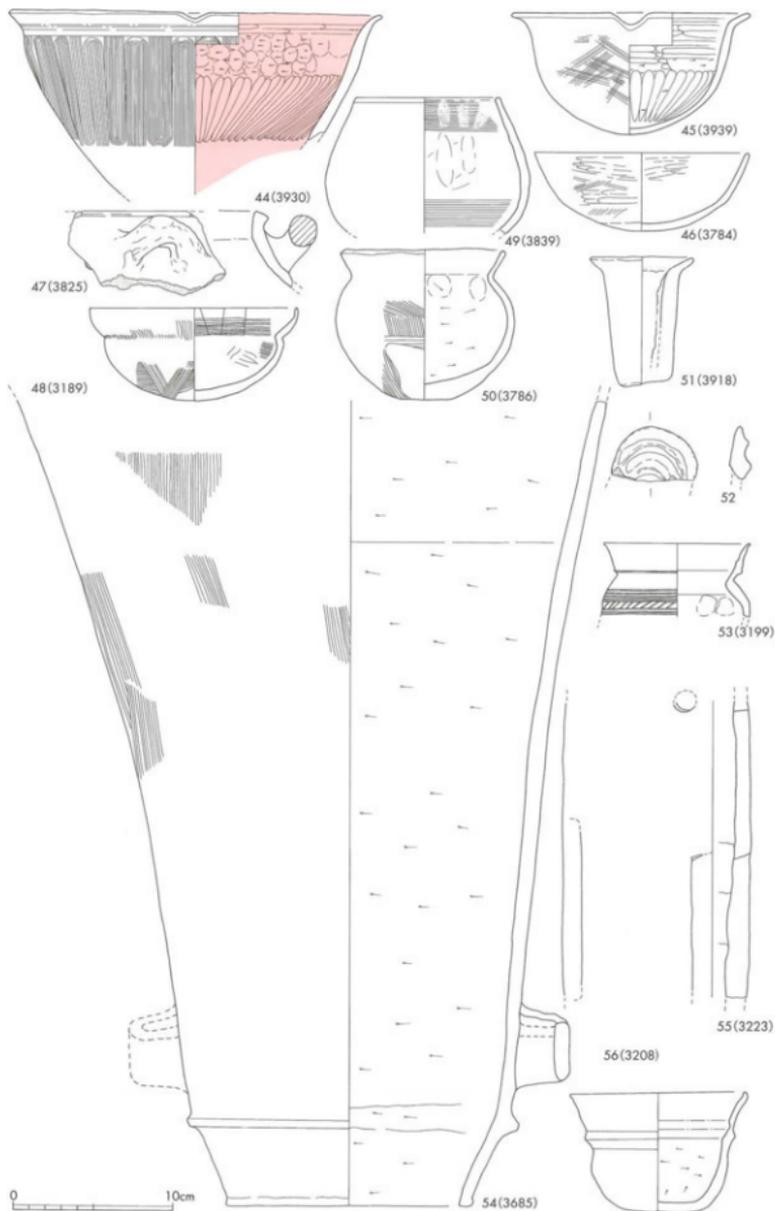
26(3221)



第119图 中野清水遺跡IV区3層出土遺物(5)



第120图 中野清水遺跡IV区3層出土遺物6)



第121图 中野清水遺跡IV区3層出土遺物(7)

デがみられる。内面は底部にヘラ削り痕と口縁部に近い方に粗いミガキがある。全体の色調は黄褐色である。高坏とすれば特殊な用途であろう。高坏以外の可能性を探れば、土器棺の蓋のようなものが考えられる。36は口径21.6cm、器高13.3cmで、外面はきれいなヘラミガキ、脚部内面にはハケ目状の調整痕とヘラ削り痕がある。37は口径18.5cm、器高12.4cmで、器壁は薄い。脚部の端部は1条の沈線が奔っているように見える。坏部内面は放射状のヘラミガキ痕、外面には細かなハケ目状痕がみられる。脚部の上半は細かなハケ目状痕、下半はヘラミガキである。脚部内面は、端部に近いところでは、ハケ目状痕、その上方はヘラ削りである。色調は全体に淡褐色である。坏部口縁に2ヶ所一対の焼成後の欠損部分がある。36・37は小谷式であろう。38は口径15.2cm、器高12.3cmで、36・37と比較すると坏部は口径が小さく深くなり、器壁も厚い。内外面に粗いヘラミガキがみられる。脚部の内面はヘラ削りと、端部に近いところはヨコナデである。胎上には白色の微砂粒を含み、緻密である。39は口径9.2cm、器高7.5cm、底径18.6cmで、小型の坏部に安定した脚部を付けたものである。全体に淡褐色を呈し、細かく丁寧なヘラミガキを施している。脚部には孔があり、内面は端部に近いところは細かなハケ目調整、その他はヘラ削りである。底部外面中央に小孔がある。小谷式併行か。

第120図40～43は低脚坏である。40は口径16.4cm、器高4.8cm、脚部径5.8cmで、脚部に比して坏部は大きく開いた皿状をなす。42は40を少し小型化したもので、口径13.0cm、器高4.1cm、脚部径4.6cmである。坏部内面は放射状に細かなミガキ、外面は口縁に近いところは横方向、その下は放射状のミガキである。43は口径14.8cm、器高6.5cm、底径8.2cmで、40・42に比べると坏部が碗状に深くなり、低脚には安定感がある。外面にハケ目状痕がある。41は43を少し小型化したもので、口径13.0cm、器高6.0cmで、坏部外面はヘラミガキ、内面はヘラ削り後、一部をヘラミガキしている。

第120図27は、鉄族である(図版103)。全体に扁平で、光背状をしている。長さ3.8cm、幅2.9cm、厚さ0.2cm、重さは6.36gある。平根式で孔がある。

第121図には特殊な土器を図示した(図版81・82)。44・45は丸底の片口鉢である。44は口径22.8cm、外面は丁寧なハケ目調整痕、内面はミガキであるが赤色顔料の痕跡が全面にみられる。45は口径14.6cm、器高7.6cmで44の小型化したものである。外面には口縁部の下から底部まで炭化物付着痕があるので、甕と同様に使用されたと考えられる。46は口径13.4cm、器高4.9cmの丸底の鉢である。内外面をヘラミガキするが、外面にはハケ目痕もある。47は把手付の短頸壺であろう。48は口径13.0cm、器高5.8cmの広口の埴。49は大きなワイングラス状の高坏であろう。口径は9.4cm。50は小型の単純口縁の甕。口径10.9cm、器高9.4cm。51は口径6.5cm、器高8.2cm、底径3.3cmの生漆採集容器である。底部外面はわずかに窪み、不安定である。内面に黒く厚く生漆が残存する(図版14)。胎土は緻密で砂粒は少ない。色調はくすんだ薄黄褐色である。大津町北遺跡や中野清水遺跡VII区でも出土している。52は不明土製品である。銅鐸形土製品の一部かもしれない。53は小型の複合口縁の甕形土器である。口径は9.1cm。54は甕形土器である。口縁部を欠く。現状での器高は50.5cmである。55は器台、または高坏の脚部であろう。径は11.6cm、上下を欠く。現状での器高は19.0cmある。外面はナデ調整、内面には粘土紐の接合痕がある。円形(推定径1.5cm)と長方形の透かしがある。色調はややくすんだ乳白色である。56は口径11.0cm、器高7.5cmの埴。古墳時代前期前葉のものであろう。

V区 III区の東側の調査区をV区とした。1層では水出面に多くの粘土採掘坑があった(第122図)。畦畔はこれらに切られるかたちで調査区の北東隅に一部を検出したにすぎない。粘土採掘坑は2層まで達しており、2層は部分的にしか残っていないかった。

第123図1～4は2層出土の遺物である。1は小型手掘土器である。径4.9cm、器高3.8cm。2は長さ5.9cm、径1.5cmの土錘。重さ8.0g。3は口径11.8cm、器高15.1cmの甕形土器。外面は口縁部から底部まで前面炭化物付着痕、内面は底部にある。4は石製紡錘車で径4.7cm、厚さ2.4cmで、重量は40.0gある。表面が剥離していて不明な部分もあるが、前面に鋸歯文を組み合わせた線刻文様があったと思われる。黄白色。10は口径20.0cmの甕形土器。胴部下半と内面は肩部より下に炭化物付着痕がある。

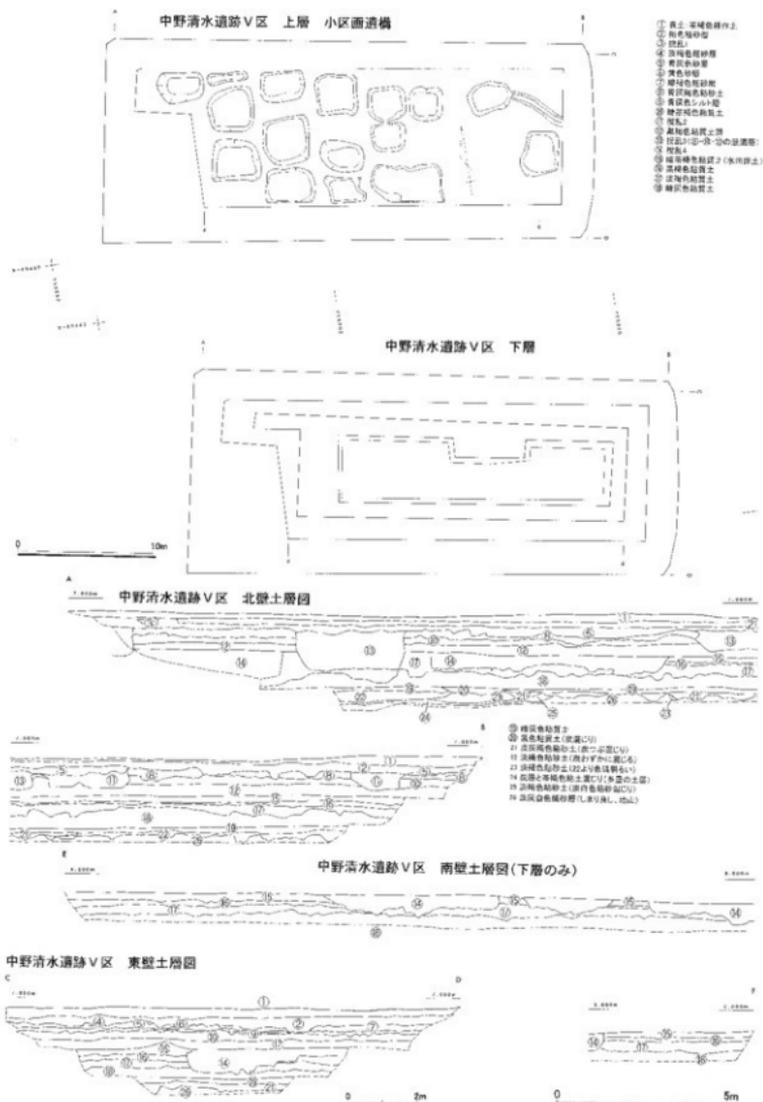
第123図～第127図は3層の遺物である。5・6・21・27・28は低脚杯である。27・28は口径に対し脚部径が小さいもので、杯部は皿状に大きく開き内外面にヘラミガキがある。27は口径24.8cm、器高5.5cm、脚部型5.9cmである。5・6は小型のものである。6は口径12.7cm、器高3.9cm、脚部径3.9cmある。21は杯部が碗状のもの。8・9は高杯である。8は口径25.8cm、器高16.0cmの大型で、外面はハケ目調整である。9は口径20.0cm、器高13.7cmで、杯部は深くなり、ヘラミガキ、脚部はハケ目調整痕と孔がある。11は大型の壺形土器である。胴部下半を欠く。口縁部は内傾し、頸部に突帯がある。外面は口縁部は縦方向のヘラミガキ、突帯より下は横、及びバナメ方向のハケ調整痕。内面は肩部以下をヘラ削りする。7は胴部が球形の短頸壺形土器である。外面は縦方向にきれいなハケ目調整、内面はヘラ削りで、褐色を呈す。胴部外面には炭化物付着痕がある。この地方であまりみかけない土器である。

第125図18、第126図22～24は複合口縁の甕形土器である。18は口径35.0cm、器高48.5cmの大型で、径8.0cmの底部を意識した作りとなっている。外面はハケ目調整され、肩部に櫛状波状文を廻らす。器壁は1.0cmと厚い。外面は胴部より下に炭化物付着痕があるが、底部にはない。内面はヘラ削りで、底部より14.0cm上に幅2.0cmの帯状に炭化物付着痕がある。26は口径38.8cm、器高54.0cmで26より一回り大きい。器形・製作技法は同じである。外面の胴部下から約30.0cmの幅で黒色炭化物痕がある。底部とその周辺にはない。23は18・26の小型のもので、口径16.6cm、器高28.2cm。外面は底部を除く胴部下半、内面は底部から7.0cmほどに炭化物付着痕がある。18・23・26は大木式。22・23は丸底である。22は外面肩部から底部までと、内面底部とその付近に炭化物付着痕がある。23は外面に肩部から底部を除く胴部に炭化物付着痕がある。22・23は小谷式。19は複合口縁の鉢形土器である。口径33.0cm、器高26.5cm、底径18.4cmある。外面胴部に幅1.0cmで帯状に、内面の頸部と底部に黒色炭化物痕がある。

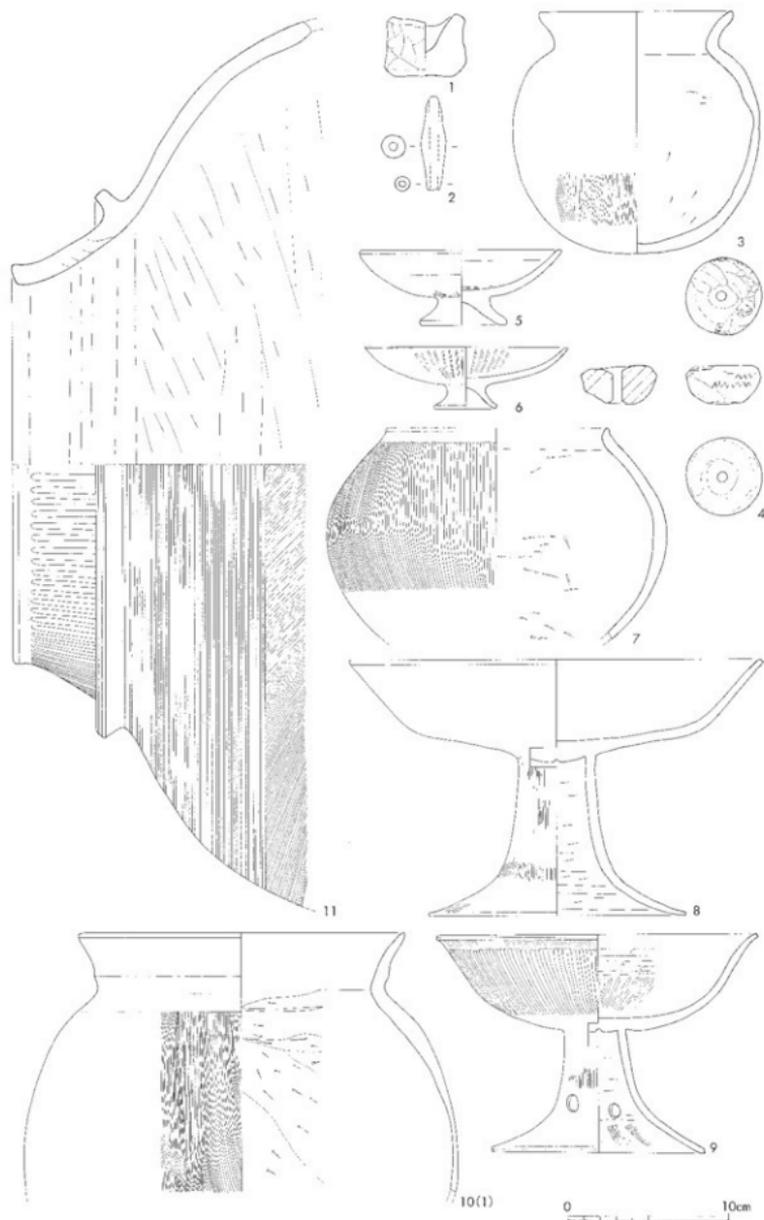
第126図20は大型の鼓型甕台で、口径29.2cm、器高14.7cm、底径25.6cmある。全体に風化している。弥生時代末か。25は口径12.5cmの甕形土器で内外面にハケ目調整が目立つ。外面はややくすんだ淡黄褐色、内面は頸部より下が淡灰白色。内面頸部に指頭圧痕。明確な削りはみられない。胎土には白色砂粒を多く含む。西部瀬戸内～北部九州からの搬入品。

第124図12・15は弥生時代中期前半の甕形土器と壺形土器である。16は弥生時代後期の複合口縁の甕形土器で、外面に部分的に炭化物付着痕がみられる。13・14は注口土器の注口で弥生時代末。

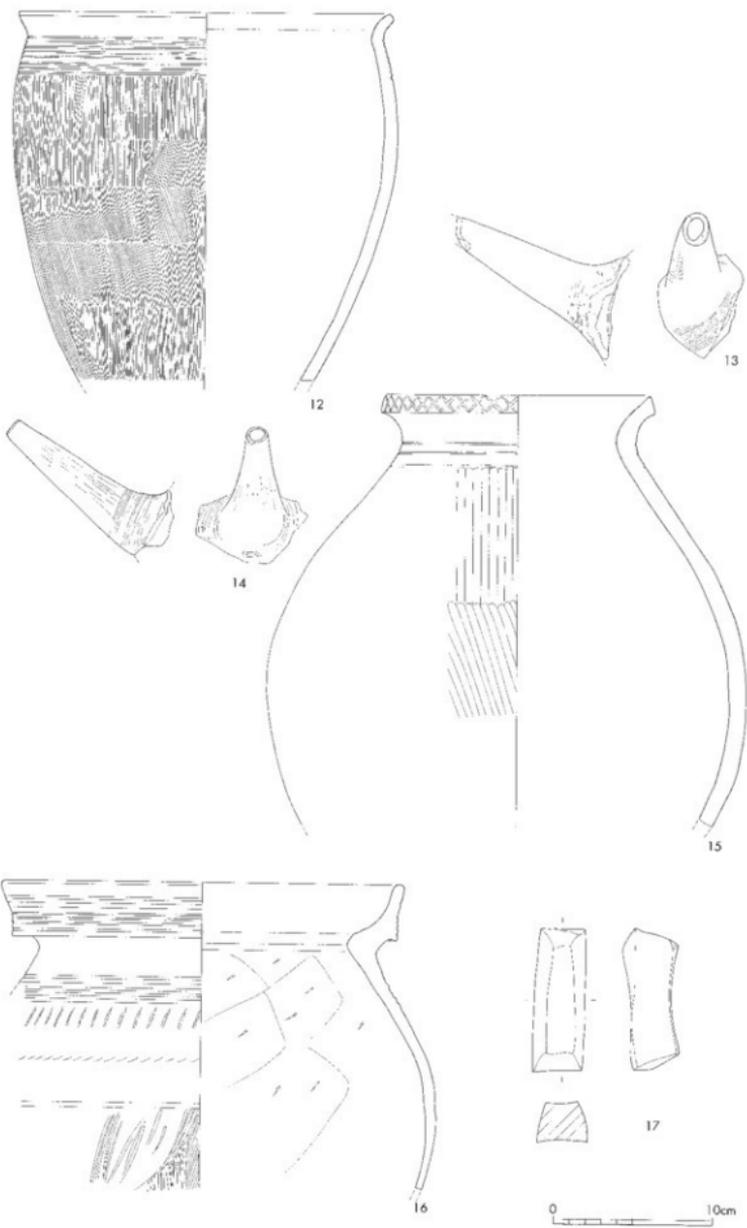
第124図17は碇^い。長さ8.7cm中央での幅3.3cm、厚さ2.3cmで、重さは143.35gある。両端に自然面を残す他は全て使用されている。



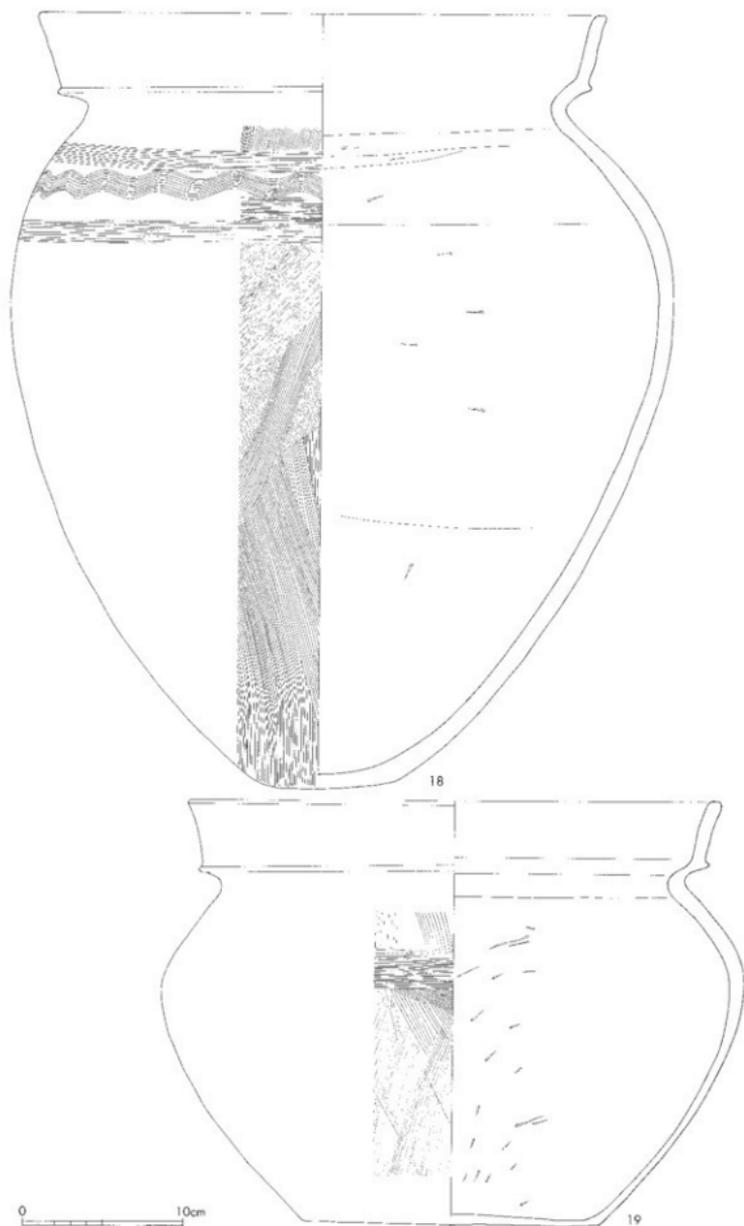
第122図 中野清水遺跡V区遺構実測図



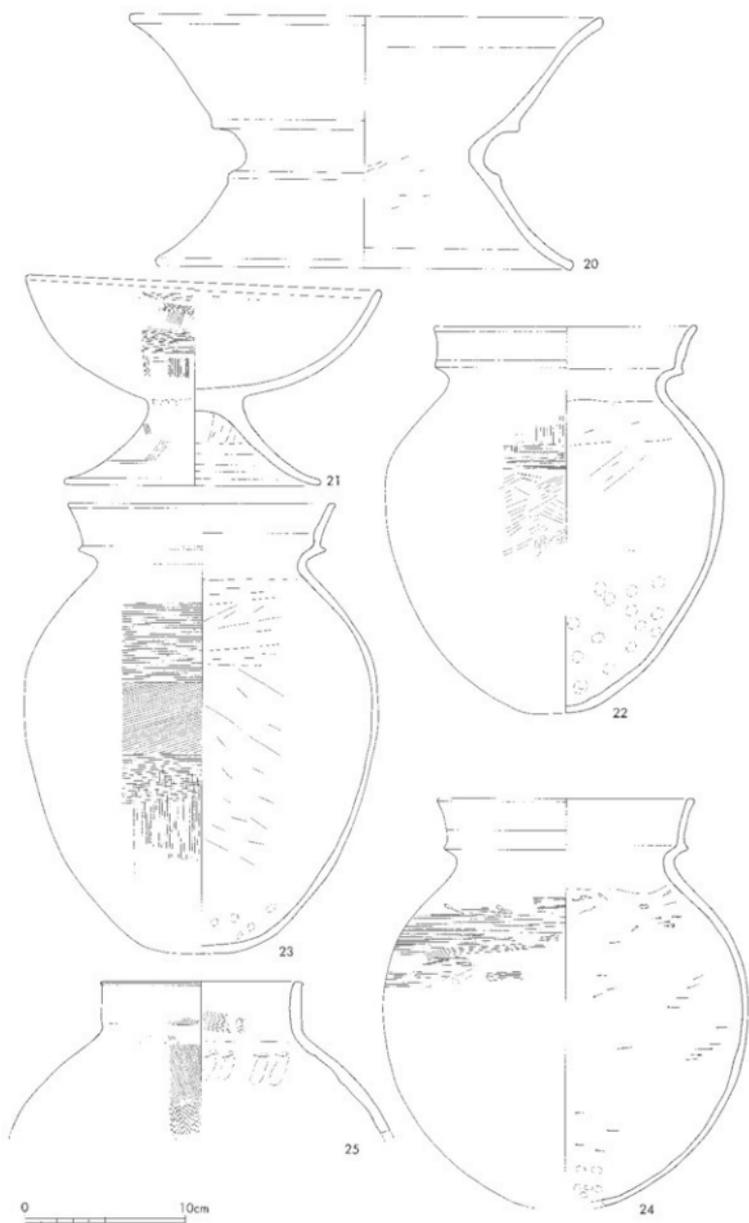
第123图 中野清水道跡V区出土遺物(1)



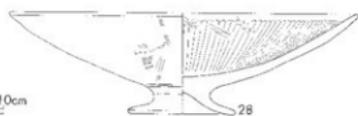
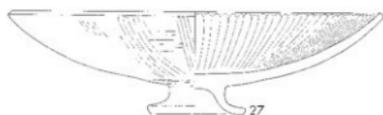
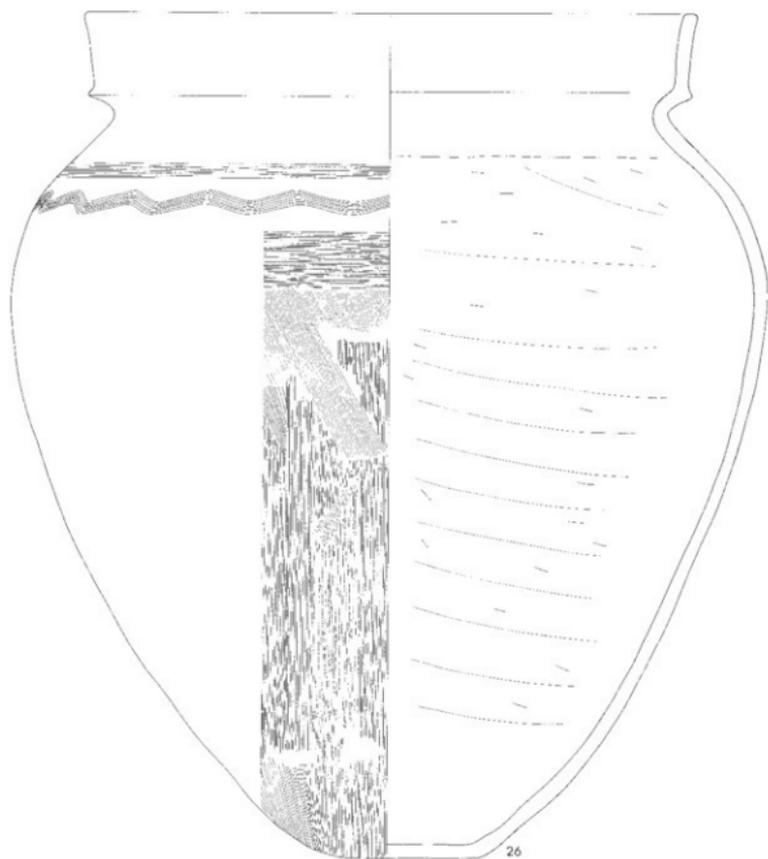
第124图 中野清水遺跡V区出土遺物②)



第125図 中野清水遺跡V区出土遺物(3)



第126图 中野清水道跡V区出土遺物(4)



0 10cm

第127图 中野清水遺跡V区出土遺物(5)

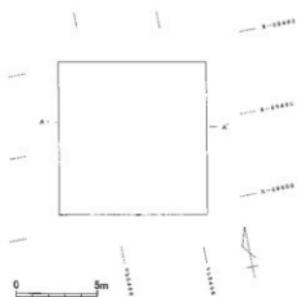
Ⅵ区 Ⅶ区は大津町北遺跡と中野清水遺跡Ⅱ区間の調査区である(第4図)。1層の下の2・3層は擾乱を受けていたらしく、他の調査区のように層によって明確に遺物の違いを知ることはできなかった。第128図～第131図はおよそ標高6～5mに混在して出土した(第131図下)。

第128図1は口径14.5cm、器高4.0cmの高台付土師器の浅鉢である。古墳時代前期のものであろう(図版86)。2・3は甕形土器で同一個体と考えられる(図版87)。口径は22.0cm、底径は13.0cmある。外面はハケ調整痕であるが、口縁部下に同じ施文具によると思われる山形文がある。内面に白色の胎土小塊がまばらに含まれる。4は小型の舟形土製品である(図版86)。約1/2を欠く。現状での長さ9.6cm、幅5.6cmある。軸先に孔がある。第129図5・6は弥生時代後期前葉の甕形土器と、高坏、あるいは器台の脚部で、両者とも外面に赤彩がある。7～9、11、12は小型の複合口縁の甕形土器である。10は単純口縁の甕形土器で、口径15.2cm、器高13.0cmで、丸底である。外面は胴部上半が横方向、下半は不整方向のハケ調整痕で、胴部上半はその上から縦方向に粗密のあるヘラミガキを行う。内面は頸部から下をヘラ削り、底部に近いところはナデである。この地方ではあまり見かけない器形である。口縁部は丁寧なナデである。胎土には白色微砂粒を多く含み、外面はほぼ全面に炭化物付着痕がある。小谷式併行か。14は単純口縁の小型の甕形土器である。底部外面はヘラ削りである。口径8.4cm、器高7.2cmで、外面は胴部より下半に炭化物付着痕があるが、底部にはない。内面は底部に炭化物付着痕がある。13は口径8.9cm、器高5.4cmの埴。15は口径6.5cm、器高2.7cmの小型の鉢である。16は鼓型器台で、口径19.0cm、器高10.4cm、底径8.9cmある。外面には縦方向に粗いミガキがあり、脚部には孔がある。17～24は低坏である。17は口径9.2cm、器高8.4cm、脚部径6.8cmで、コップに安定した脚部を付けた形状をしている。色調は薄褐色である。外面は縦方向にきれいなヘラミガキで、内面はヘラ削りの後、不整方向にヘラミガキを施す。18～20は坏部径に対して脚部径が小さい、坏部が大きく開き皿状をなすものである。坏部はヘラミガキ痕がある。18は口径16.0cm、器高5.0cm、脚部径5.0cmある。21～24は、18と比較すると坏部が深く、径が小さくなる。坏部はハケ調整痕がある。25～28は高坏である。25は坏部が碗状で内面は暗文状のヘラミガキである。26～27は坏部径が外に開き、径が大きく、脚部に孔を持つものである。26は口径19.5cm、器高11.2cm、底径11.8cmある。

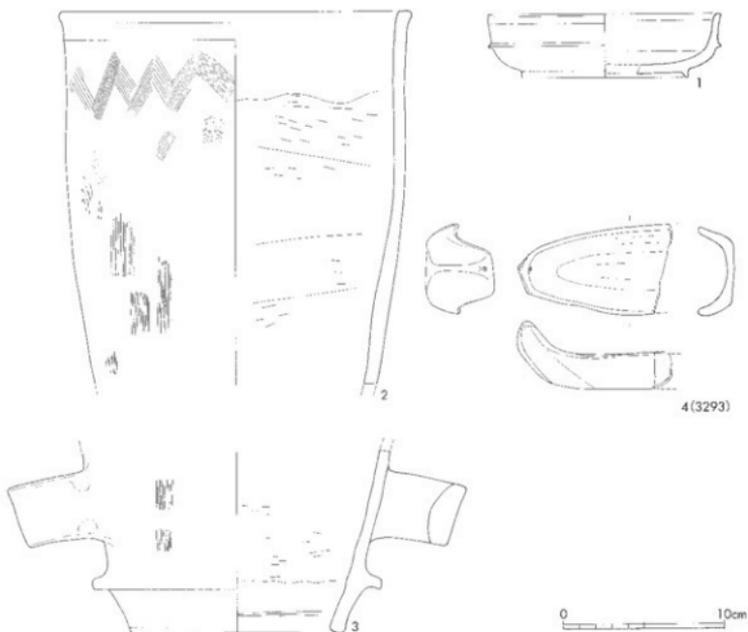
第130図29～41は須恵器である(図版88)。29～31は環状撮みの环蓋。端部に返りがある。須恵器坏02に対応する。32は蓋杯の身。底部外面はヘラ切り離し後、周囲を粗い回転ヘラ削りをする。33は蓋杯の身の底部付近の破片である。外面はヘラ切り離し痕で、内面には漆が付着している。後述するように、この漆で年代測定したところ6世紀末～7世紀初頭の年代が出た。34は高台付皿、または坏の底部の破片。底部は回転糸切痕で、墨書「三」が読める。35は口径16.4cm、器高6.7cmの鉢。底部外面は回転糸切痕、内面は使用痕がある。36・37は出雲大井産坏A1。38は坏B1。39は高台付の皿B。40は高台付の広口鉢とした。長頸壺の肩部より上を取り除いた形状である。高台内は、静止糸切痕がみえる。内面底部に径5.0cmの自然釉がかかった痕跡があるので、元々、長頸壺として作った後、肩部より上半を打ち欠き、磨いて鉢として再利用した可能性が高い。内面には漆が全面に付着している。外面にも部分的に漆の付着が認められる。41は口径12.0cmの小型の壺である。

第130図42～第131図は土師器である(図版89)。42・43は赤彩土師器である。42は全面赤彩の高い高台付の皿である。43も高台付の皿であるが、赤彩は高台まで及ばない。44は平安期に下る土師器であろう。45・46は土鉢である。47～53は小型手型土師器である。54・55は製塩土器の口縁部で、

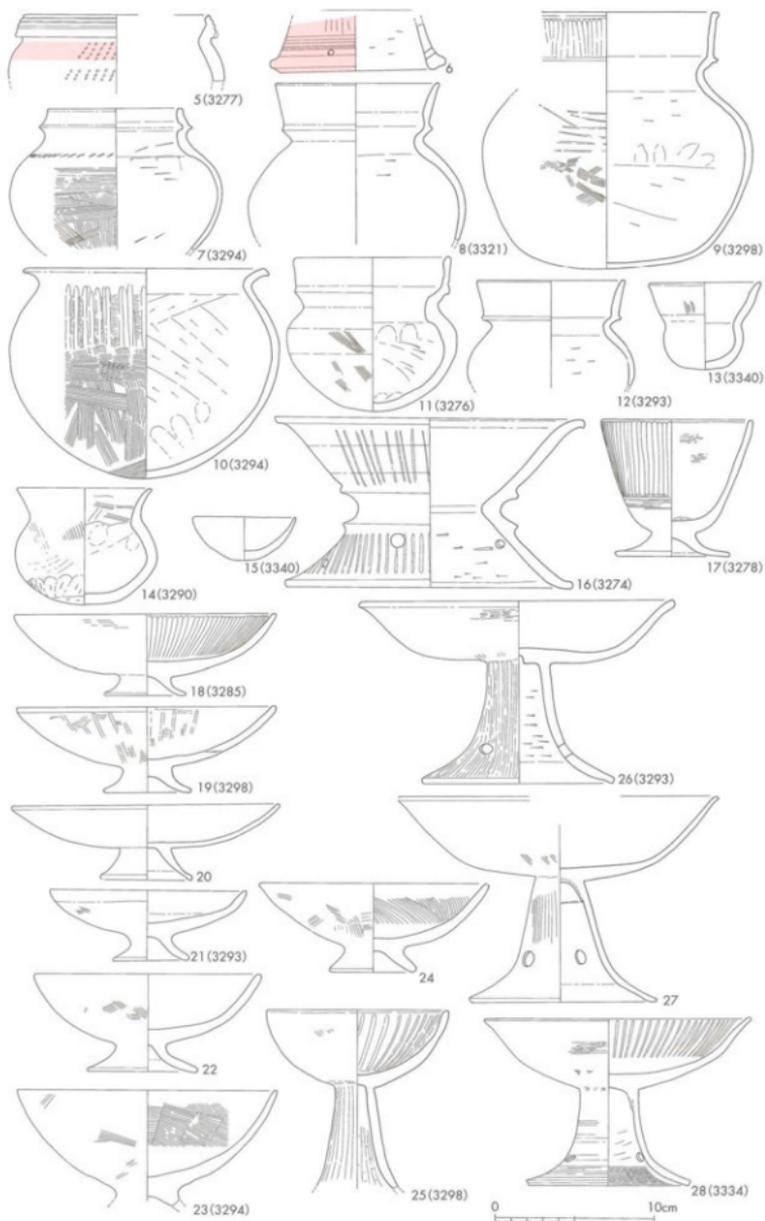
中野清水遺跡VI区



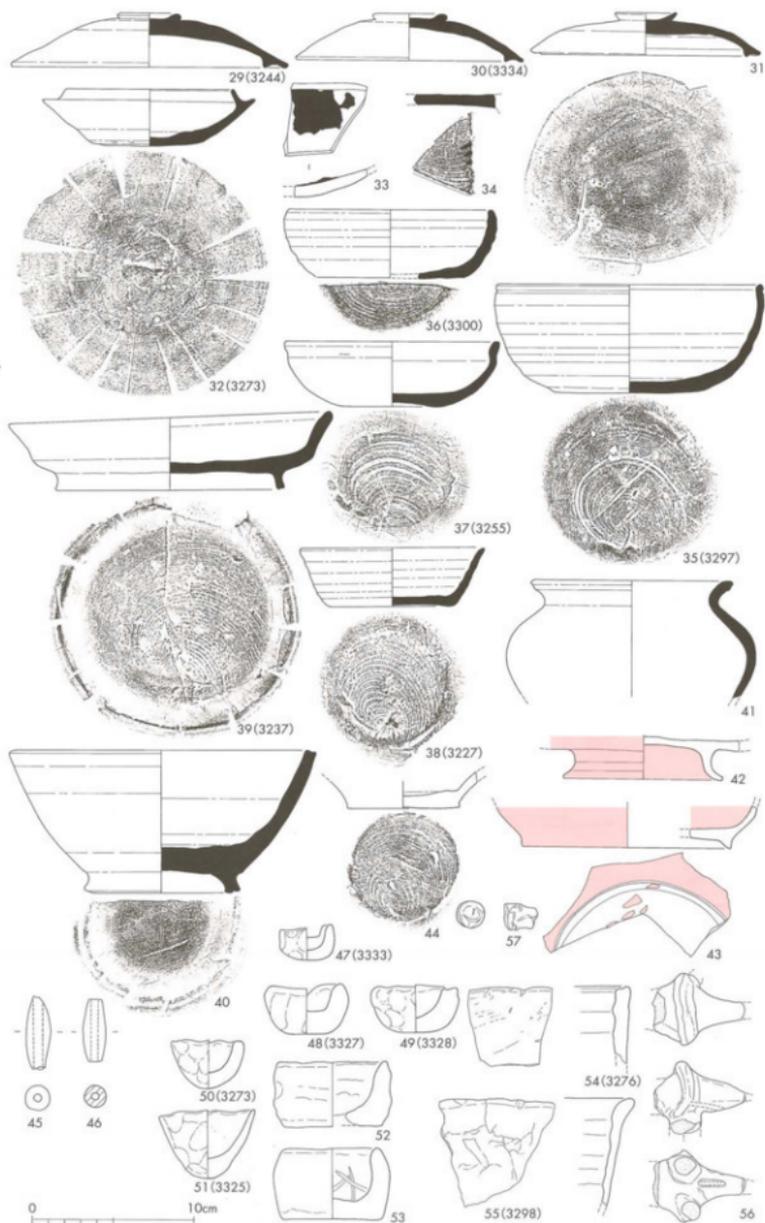
中野清水遺跡VI区 土層図



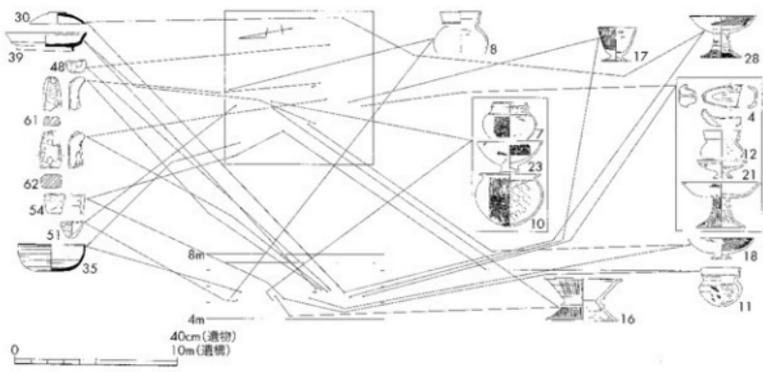
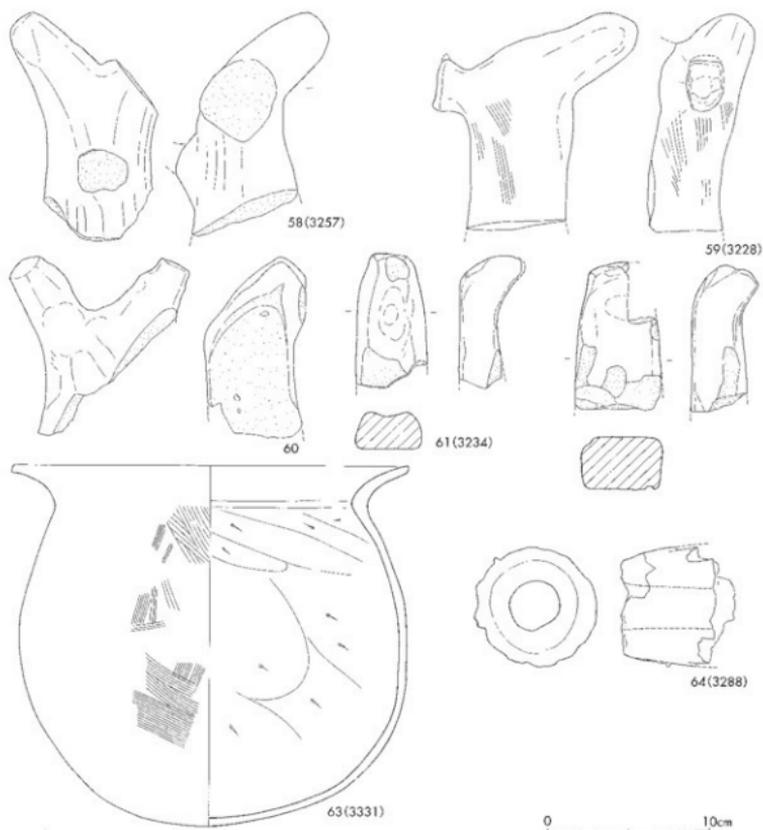
第128図 中野清水遺跡VI区調査区及び出土遺物(1)



第129图 中野清水遺跡Ⅵ区出土遺物(2)



第130图 中野清水遺跡Ⅶ区出土遺物(3)



第131图 中野清水道跡VI区出土遺物(4)

内面に横方向の凹みがある。56は土師質の上馬の破片である。尻尾と孔と轆の一部が認められる。57は径1.7cmの不明土製品である。小型の土製支脚かもしれない。58・59・60は頭部が二股になった土製支脚である。58・59は胴部に突起がある。61・62はⅡ区で出土例のある楕円形土製支脚の端部である。61は全体に強く被熱しており、62は内面がより強く被熱している。63は口径24.2cm、器高22.3cmの甕型土器で丸底である。外面は不整方向のハケ目調整、内面は比較的丁寧なヘラ削りである。外面には口縁部から底部まで全面に炭化物付着痕がある。内面は底部には狭い範囲に炭化物付着痕がある。64は径7.5cmの輪の羽目である。ガラス化した溶解物が先端に付着している。

予備調査の遺物 第26図1～4は予備調査で出土した遺物である。Ⅱ区とⅥ区の間の中間の位置である(06T)。1は高台付須恵器皿Bの破片で、口径は26.0cmに復元される。器高は2.5cmである。底部外面には糸切り痕はみられない。出雲大井産以外の窯の製品である。2は環状盥みの須恵器杯蓋の破片である。内面は全体がよく摩滅しており、墨痕があるので、転用碗であろう。3は鉄鉢形の赤彩土師器である。口径22.0cm、器高8.4cmで、全面に赤彩され、外面はハケ目調整痕である。4は2×1cm、厚さ0.3mmの緑釉陶器の破片である。

Ⅶ区 Ⅶ区は東にⅥ区、西にⅧ区に挟まれた東西に長い調査区である(第4図)。1層では近世以降と考えられる水田面と畦畔を検出した(第132図)。上層の観察から1層中にいくつかの水田面を確認できる。このⅦ区では2層に相当する層からの遺物は極僅かであった。古代の地形が高かったため、後世に水田化する時に削平されたようである。

第133図には2層相当層出土の遺物を図示した。1は須恵器の環状撮みの坏蓋である。2・3は小形手捏土器である。2は径6.3cm、器高4.7cmで底部外面に葉状の跡がある。3は径5.0cm、高さ3.4cm、緻密な胎土で、茶褐色。4は土玉で、径は4.1cmの球状を呈す。孔は径0.7cm。薄い灰白色で、重さは67.27gある。5は孔のない土玉で、径は2.1cmの球状である。胎土は緻密で、黒色である。重さは10.33gある。6はⅦ区～Ⅷ区の廃土中で採集した土玉である。5に似る。径は2.1cmの球状。重さは9.5gある。5・6はⅣ区出土資料(第114図2)と同じである。

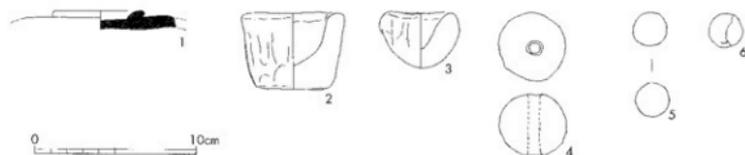
3層では中野清水遺跡の中で最も多くの遺物が出土した。幅約10.0mの南北方向の土器群である(第132図、図版91・92)。第134図～第144図に3層出土遺物を図示した。

第134図7は弥生時代中期の鉢形土器である。口径、器高とも21.8cm、底径10.4cmある。外面は上半がハケ目調整痕、下半が縦方向のヘラミガキ痕、内面は上半がハケ目調整痕、下半が横方向のヘラ削りである。底はわずかにくぼむ。口唇部はヨコナデである。内外面とも色調は淡褐色である。8は弥生時代中期の台付甕の底部である。外面はハケ目調整痕、内面は炭化物付着痕が全面にある。9は高坏、もしくは算盤玉形をした胴部をもつ壺の脚部であろう。ヘラ描き沈線とスタンプ文を交互に繰り返している。岡の上より、勾玉状スタンプ→4条沈線→勾玉状スタンプ→3条沈線→貝殻腹縁文→3条沈線→勾玉状スタンプ→3条沈線→ヘラ描き鋸歯文の順である。勾玉状スタンプは交互に逆位となっている。内面の一部はヘラ削りがある。10は口径20.4cm、器高35.6cmで、径7.7cmの底部をつくる弥生時代後期の複合口縁の壺形土器である。全体に内外面とも風化しており調整を観察しにくい。口縁部には多条沈線を入れている。内面は頸部より下をヘラ削りする。上半は横方向、下半は縦方向である。外面の胴部中程の少し下から底部にかけて炭化物付着痕がある。壺形土器を甕として使用した例である。11は口径16.0cm、器高16.4cmの複合口縁の壺形土器である。底部を欠く。器壁は薄く、色調は淡褐色である。肩部に2条の貝殻腹縁文がある。胎土には白色斑点があり、脆い。甕としては製作されていないと思われる。

第134図12・13～第135図14・15は注口土器である。いずれも、注口部分を除けば11の壺形土器に、器形や文様、胎土、焼成、色調等は酷似している。15は完形に近く、底部と注口の先端部分を欠く。口径は15.8cm、器高20.0cm、注口の長さ約10.5cmである。

第135図16・18・19・20は特殊な土器である。16は口径17.0cmに復元でされる複合口縁の壺形土器の口縁部であるが、外面に軽い飾描き波状文がある。胎土には砂粒を多く含み、色調は乳白色である。西部瀬戸内～九州北部からの搬入品か。頸部から下をヘラ削りする。18は壺の肩部片と思われる。外面は飾描きの文様がある。内面はヘラ削りである。胎土には白色砂粒を含み、色調は薄赤褐色である。器台の可能性も捨てきれない。16と同様に西部瀬戸内～九州北部からの搬入品か。19は肩部に瘤状の突起がある壺形土器の破片である。20は胴部に把手を付けた壺形土器の破片である。外面はハケ目調整痕があり、内面はナナメのヘラ削りがある。

第135図17～第136図21～26、第137図29～31、33は複合口縁の壺形土器である。17は口径37.0cmで、胴部から下を欠く。外面はハケ目調整痕で、肩部に飾描き波状文を廻らす。内面は肩部より下を横



第133図 中野清水遺跡VII区出土遺物(1)

方向にヘラ削りする。外面に一部に炭化物付着痕がある。21は口径18.2cm、器高27.5cmで、径4.0cmの底部がある。器壁は全体に薄く、外面はハケ調整痕で、肩部に櫛描き波状文がある。内面は肩部より下をヘラ削りする。外面は肩部の文様の下から底部まで炭化物付着痕がある。内面は底部とその周辺に炭化物付着痕がある。22は口径16.5cm、器高23.2cmで、径3.0cmの小さな底部を作っている。外面は細かなハケ目調整痕で、肩部に櫛描き波状文を廻らす。内面は上半は横方向、下半は縦方向のヘラ削りである。内外面とも炭化物付着痕はみられない。23は口径18.6cm、器高22.5cmで、径3.5cmの底部を意識している。内外面の器面調整は21・22に同じだが、内面底部に指頭圧痕がある。胴部外面中程から底部にかけては炭化物付着痕がある。内面には底部に炭化物付着痕がある。24は口径15.2cm、器高18.9cmで完全に丸底にならない。外面はハケ目調整痕で、肩部に櫛描き波状文がある。内面はヘラ削りするが、頸部は厚く残す。底部に指頭圧痕がある。外面胴部中程から底部にかけて炭化物付着痕があるが、中間が幅2cmほど帯状に抜けている。25は口径9.4cm、器高11.0cmで、径1.5cmの明確な底部を作っている。器壁は厚く、外面に黒斑がある。外面はハケ目調整痕、内面は指頭圧痕がある。甕としての実用品ではない。29は口径18.4cm、器高26.8cmで、径3.5cmの底部がある。口縁部下端が飛び出し、外面はハケ目調整痕と櫛描き波状文、内面はヘラ削りである。外面には胴部の下半から底部にかけて炭化物付着痕がある。30は口径19.8cmで底部を欠く。外面はハケ目調整痕で、肩部に櫛描波状文がある。内面はヘラ削りである。外面は波状文のある肩部を除いて、その上下に炭化物付着痕がある。31は口径19.4cm、器高26.5cmで、径3.0cmの底部が意識されている。外面はハケ目調整痕、内面はヘラ削りである。外面には黒斑がある。33は口径12.1cm、器高10.7cmの小型のものである。底部を欠く。26は複合口縁の鉢形土器である。口径23.5cm、器高28.8cm、底径15.3cmで、内外面の調整は甕形土器に同じである。肩部に貝殻腹縁による右上がりの刺突文を廻らすのがやや稚拙である。

第137図27・28は生漆採集土器である。内面に採集された漆が充填している(図版14)。いずれも、底部を欠く。27は口径6.2cm、口縁部は指で擠んで折り曲げたような痕がある。内外面ともくすんだ乳白色で、ナデ調整されている。全体にいびつである。28は口径5.7cmで、外面にも少量の漆が付着している。器面は風化している。色調は乳白色である。27・28とも、口縁部下に紐を巻いて吊したと考えられる。

第137図32は複合口縁の壺形土器である。器壁は厚く、胎土には砂粒を多く含み、褐色である。外面はハケ目調整痕、内面は肩部以下をヘラ削りする。西部瀬戸内から北部九州にかけての地域からの搬入品であろう。34は壺形土器の底部と思われる。砂粒を多く含み、全体に器壁が厚く、内外面とも風化が激しく、手で触ると砂粒が甃れる。内面のみが二次焼成を受けているためか、薄い黄褐色を呈し、器面が剥離している部分がある。外面は淡くくすんだ乳白色である。単なる壺形土器

ではなく、例えば埴塼のような特殊な土器であろうか(図版94)。

第138図35、第139図39・40は竹管文を施した壺形土器である(図版95)。35は口径41.4cmの大型の口縁部から頸部にかけての部分である。文様は口縁部に竹管文、頸部に2条の沈線・羽状文・2段の竹管文を廻らす。竹管文は規則性がない。内面は横方向のハケ目調整とナデである。壺帽として製作されたと思われる。39は口径18.4cmの直口壺の口縁部である。口縁部の幅は9.5cmある。竹管文は口縁部に3段、口縁部下段の突帯のしたに1段と合計4段ある。突帯の上下の竹管文は一周しない。40は口縁部が内傾する複合口縁で、竹管文は口縁部外面に廻らしている。口縁部下端は突帯状に飛び出している。口径は15.4cm。肩部から下を失う。類例をあげるならば、安来市荒島町の宮山IV号墓(四隅突出墓)^出出土資料がある。宮山IV号墓例は、口縁部の他に、頸部から肩部にかけて、羽状文と竹管文がある。

第138図36・37、第139図38・41は西部瀬戸内から九州北部にかけての地域からの搬入品と考えられる壺形土器の一群である(図版94)。36は頸部から肩部にかけての破片で、境に突帯がある。内外面は全面はハケ目調整痕。白色微砂粒を含む。色調はくすんだ黒茶褐色。内面は炭化物付着痕がある。37は胴部で、胴部厚45.0cmに復元される。胴部最大径の位置に幅1.0cmの貼り付け突帯がある。突帯には貝殻腹縁による刺突文がある。この突帯以外は内外面とも粗いハケ目調整痕であるが、内面の底部に近い方はヘラ削り痕がある。胎上・色調は36と同じである。36と37は同一個体の可能性がある。38は口径11.2cm、器高23.7cm、胴部径24.4cmで、径5.6cmの底部を作る短頸壺である。砂粒を含む、淡い褐色の色調である。胴部中ほどから下に炭化物付着痕があるが、底部とその周辺にはみられない。器面の調整は不明。41は口径16.2cm、器高30.7cm、胴部径32.5cmで、球形の短頸壺である。色調は淡い褐色で、胎土には砂粒を多く含む。頸部下は内外面ともハケ目調整痕があるが、内面は肩部あたりと底部付近はヘラ削りである。

第139図42~50は小型の土器である。42・43は丸底壺である。42は口径8.5cm、器高14.5cmで、外面はハケ目調整痕で、胴部より下に炭化物付着痕がある。また、胴部に焼成後の穿孔がある。43は口径10.6cm、器高17.5cmで、器壁が薄い、淡い褐色を呈す。外面の胴部はハケ目調整痕、頸部は縦方向の粗いミガキ、内面胴部はヘラ削りである。口唇部は丸く仕上げている。44・45は底部を欠くが、丸底であろう。44は口径9.0cm、胴部下半にはミガキがみられる。45は口径11.0cmで肩部には貝殻腹縁文を廻らす。46・47は単純口縁の丸底の壺形土器である。46は内外面に炭化物附着物痕がある。47は外面の胴部中程から下をヘラ削りを行っている。48は埴。49は単純口縁の小型の壺形土器で、口径8.3cm、器高8.7cmで、径3cmの底部が意識されている。内外面の胴部中程から下に炭化物付着痕がある。50は口径9.3cm、器高5.4cmの鉢である。

第140図51~58は波型器台である。いずれも、弥生時代末から古墳時代前期初頭のものであろう。51は口径24.8cm、器高14.0cm、底径21.5cmで受け部外面に柳描き波状文がある。器壁は薄い。52・53・58は受け部内面のミガキは粗く、ヘラ削り痕が残る。小型のものは55で、口径15.8cm、器高9.2cm、底径14.6cmである。調整ははっきりしない。57は口径25.0cm、器高13.0cm、底径18.8cmで、受け部の内外面と脚部外面には縦方向のミガキがある。最大のものは56で、受け部を欠くが、底径28.4cmある。59は壺形土器である。上半部を欠く。底径は12.0cmと小さい。

第141図、第142図66~68、第143図72~74は大型の高坪の一群である。基本的な作りは同じである。このうち、坪部下端が突帯状となる74は古墳時代中期に下るものであるが、66~67は弥生時代

末へ古墳時代初頭のものであろう。口径で最大のものは、60・67の31.2cmで、器高では64の20.2cmである。60の場合だと、器高17.9cm、底径17.9cm。坏部は内外面とも横方向の細かなハケ目調整の後、2段の放射状のヘラミガキ、脚部は外面が細かなハケ目調整痕、内面はヘラ削りと端部近くはハケ目調整痕がある。器壁は薄く、底部外面に小孔がある。口縁部と脚部の口唇部は1条の細い沈線が入っている。64の場合だと、口径27.8cm、底径17.8cmで、坏部はやや深くなり、脚部外面にもヘラミガキ痕がある。62以外は底部外面中央に小孔がある。

第142図69・70・71・77は特殊な大型の器台、または高坏である。69はIV区3層出土第121図55と同じ器形の器台の脚部であろう。外面はハケ目調整痕、色調はくすんだ乳白色で、円形の透かしがある。71は底径19.6cm、坏部を欠く大型の高坏の脚部である。現状での器高は28.5cmある。色調はくすんだ乳白色で胎土は69に似る。外面は縦方向のナデ調整、内面は粘土継接合部の痕跡と、縦方向の指ナデ痕が著しい。70は69と同じ器形・胎土・色調であるが、底径は21.7cmある。71よりさらに器高が高いことが予想される。外面はハケ目調整痕、内面は指ナデ痕がある。69・70は類似のものが宮山IV号墓（四隅突出墓）²⁰にあり、69・70・71は同時期のものであろう。77は坏部の口縁部を欠く。脚部径は21.5cmある。坏部外面はヘラミガキ、脚部はハケ調整痕で、孔がある。内面はヘラ削りとハケ目調整痕がある。脚部内面以外は赤彩を施す。

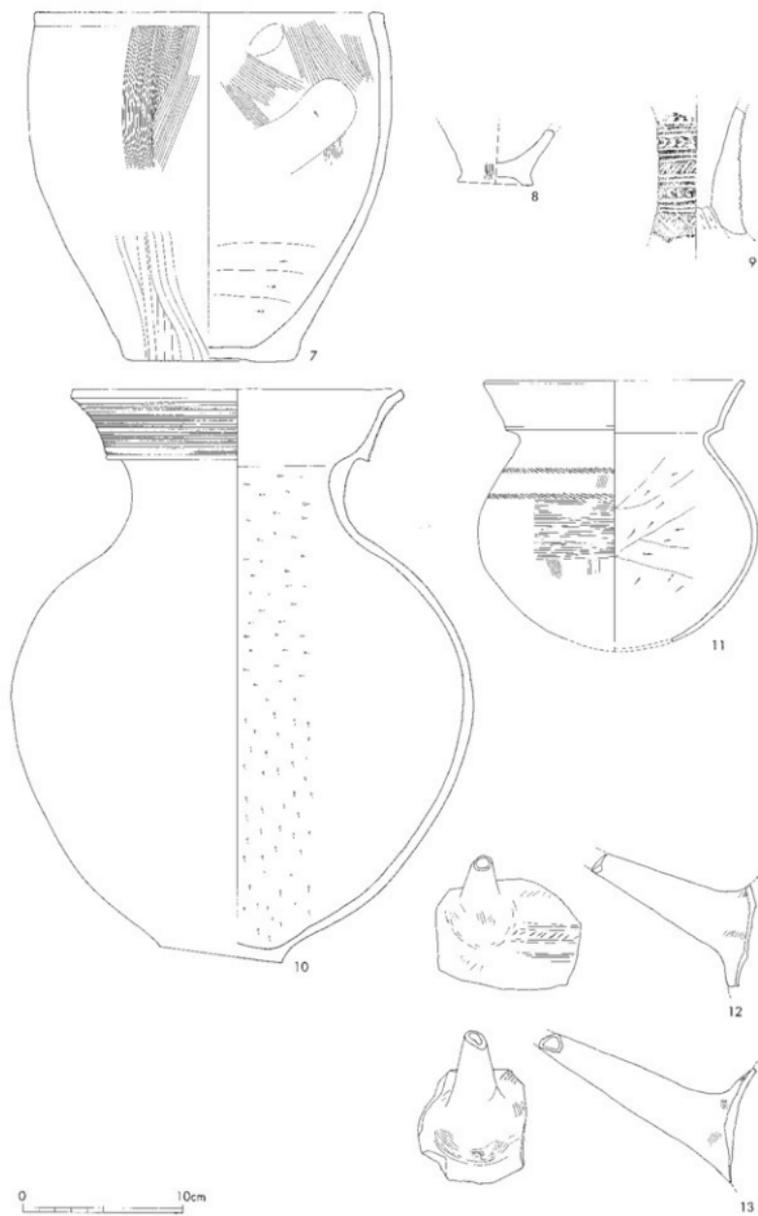
第143図75は脚部の付いた壺形土器である。口縁部を欠く。肩部には沈線と貝殻腹線文を施す。内面はヘラ削りである。

第143図76は鉢形土器である。口径21.8cmで、底部を欠く。外面は縦方向の細かなハケ目調整痕。内面はミガキである。外面には全面に炭化物付着痕がある。

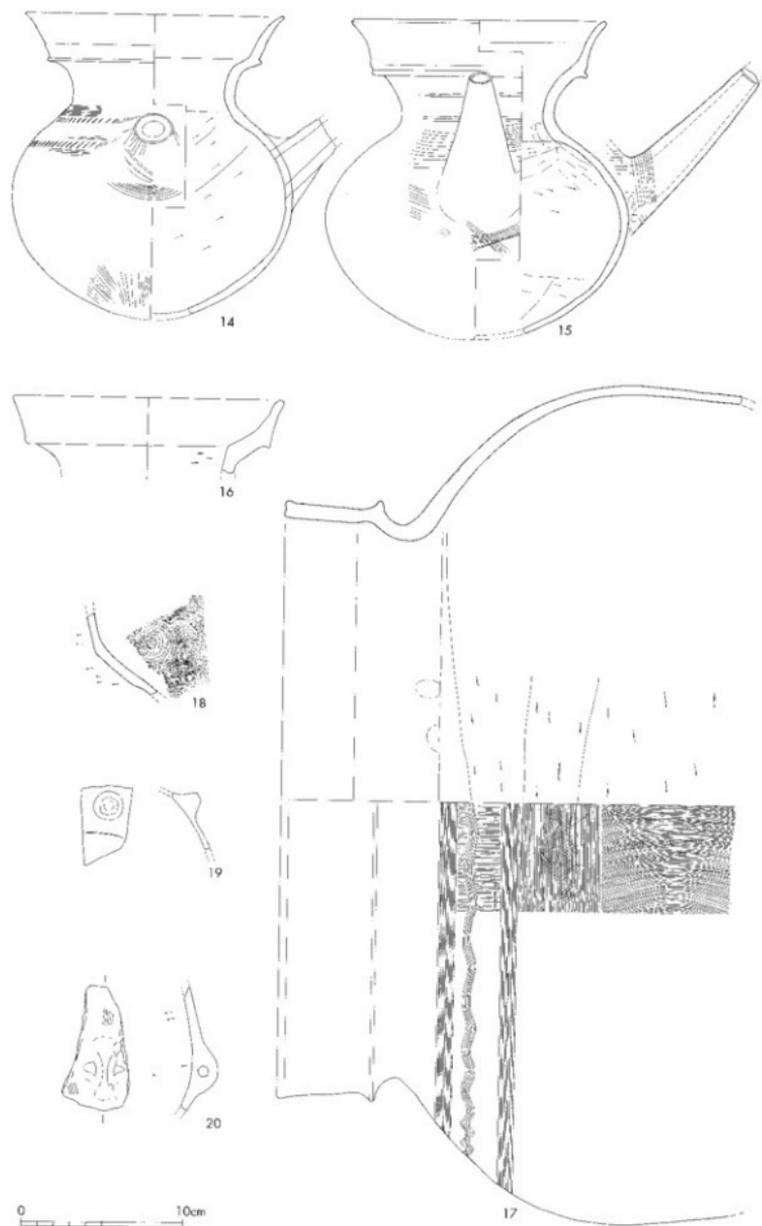
第143図78～81は脚部の付いた大型の鉢形土器であろうか（図版96）。あるいは、75のような壺形土器であろう。全体の器形は不明である。78は脚部径20.5cmで、坏部の内外面、脚部外面はハケ目調整痕、脚部内面はナデ調整である。79は脚部径22.4cm、脚部内面はヘラ削りとナデ調整をする。80は脚部径18.4cm。75の壺形土器に似る。81は脚部径14.8cmで最も大きい。外面はハケ目調整、内面はヘラ削りである。75、78～81は胎土が脆く、白色斑点がみられる点でも共通している。

第143図82は小型の舟形土製品である（図版93）。約1/3を欠く。現状での長さは14.7cm、高さ4.2cm、幅5.8cmある。色調はややくすんだ乳白色で、一部は淡褐色である。胎土には微砂粒を含み緻密である。焼成は良好。船首は板状となってそり上がり、小孔がある。その上に粘土塊が剥離した痕跡があり、その形状から波よけ板があったと考えられる。とすれば、準備造船を模したものであろう。鳥取県鳥取市の秋里遺跡ではこの種の舟形土製品が数点出土している。例を少し速くに求めると、群馬県太田市の下田遺跡や米沢中遺跡にもある²⁰。いずれも、古墳時代前期でⅧ区出土資料とも時期的に矛盾しない。

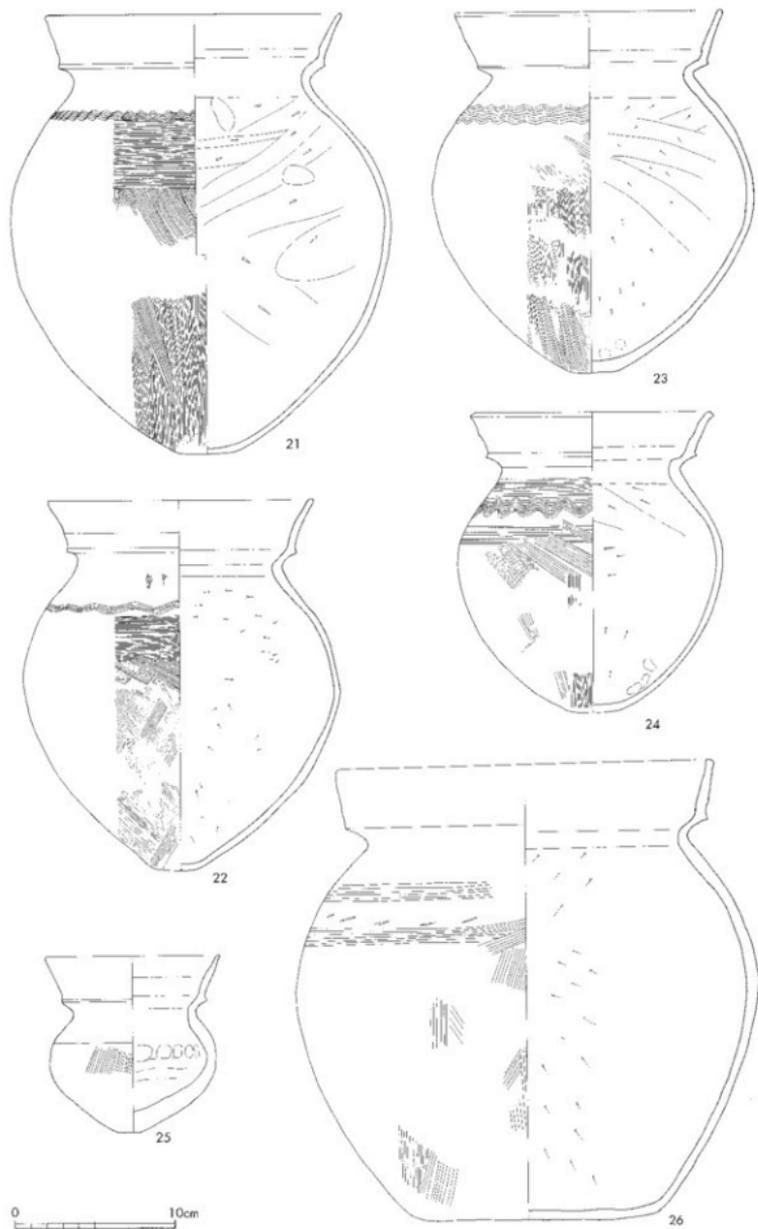
第144図は低脚坏である（図版96・97）。坏部の形態から大別して2種ある。一つは大きく皿状に坏部が開くもので、大型のもの（96～100）と、小型のもの（83～95）である。最大の100は口径24.4cm、器高9.5cm、脚部径9.2cmである。最小のものは83で、口径8.4cm、器高3.0cm、脚部径4.0cmである。94・96には脚部に小孔が1ヶ所ある。大型の96～100の形態のものは、第141図～第143図に示した大型の高坏に時期的にも対応するものであろう。今ひとつは坏部が深く碗形の一群である（101～104）。このうち、104は口径19.6cm、器高9.8cm、脚部径13.0cmあり、坏部外面はハケ目調整痕、内面はヘラ削りの後にミガキ調整している。脚部内面はヘラ削りである。



第134图 中野清水遺跡VII区出土遺物(2)



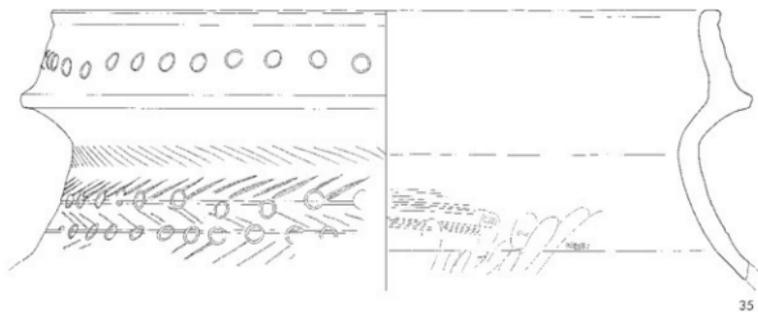
第135图 中野清水遺跡VII区出土遺物(3)



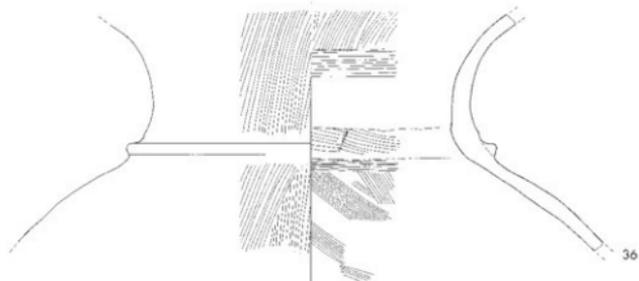
第136图 中野治水遺跡Ⅶ区出土遺物(4)



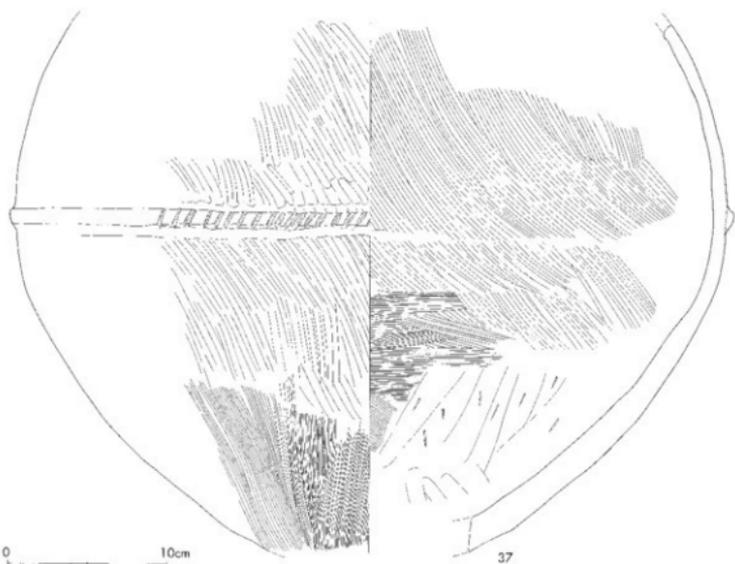
第137图 中野清水遺跡VII区出土遺物(5)



35

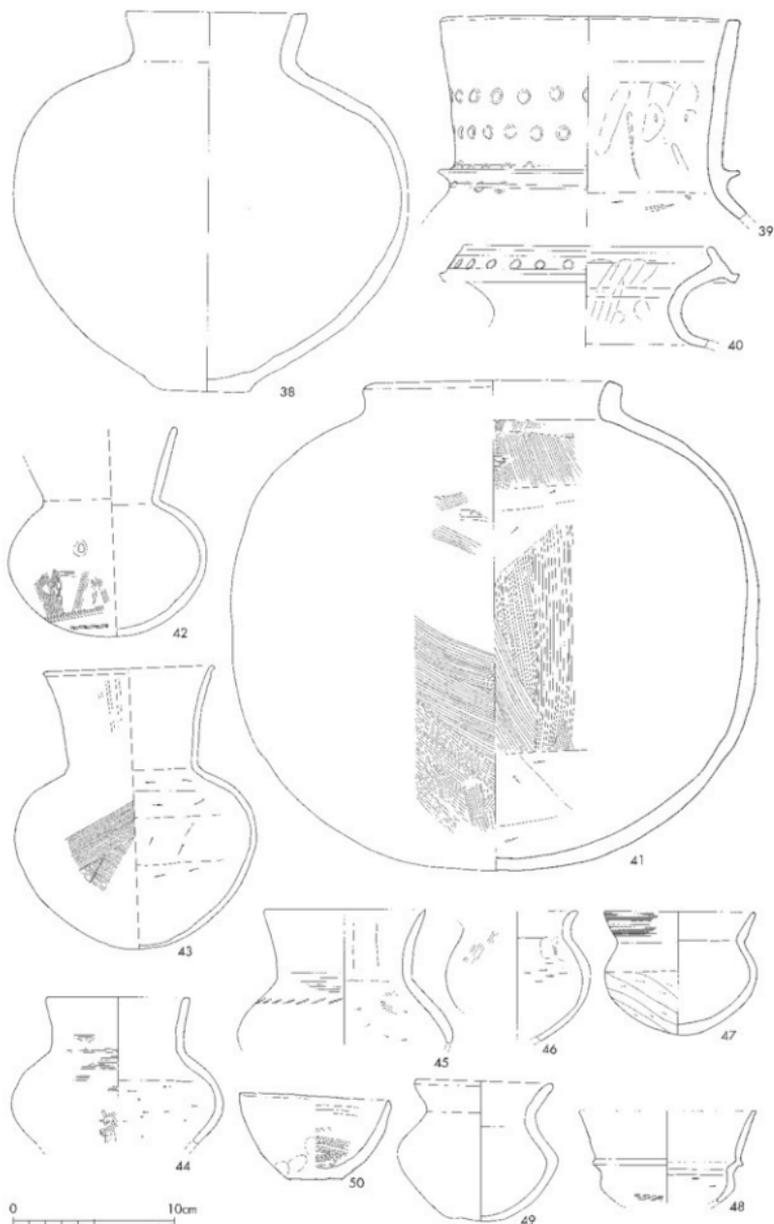


36

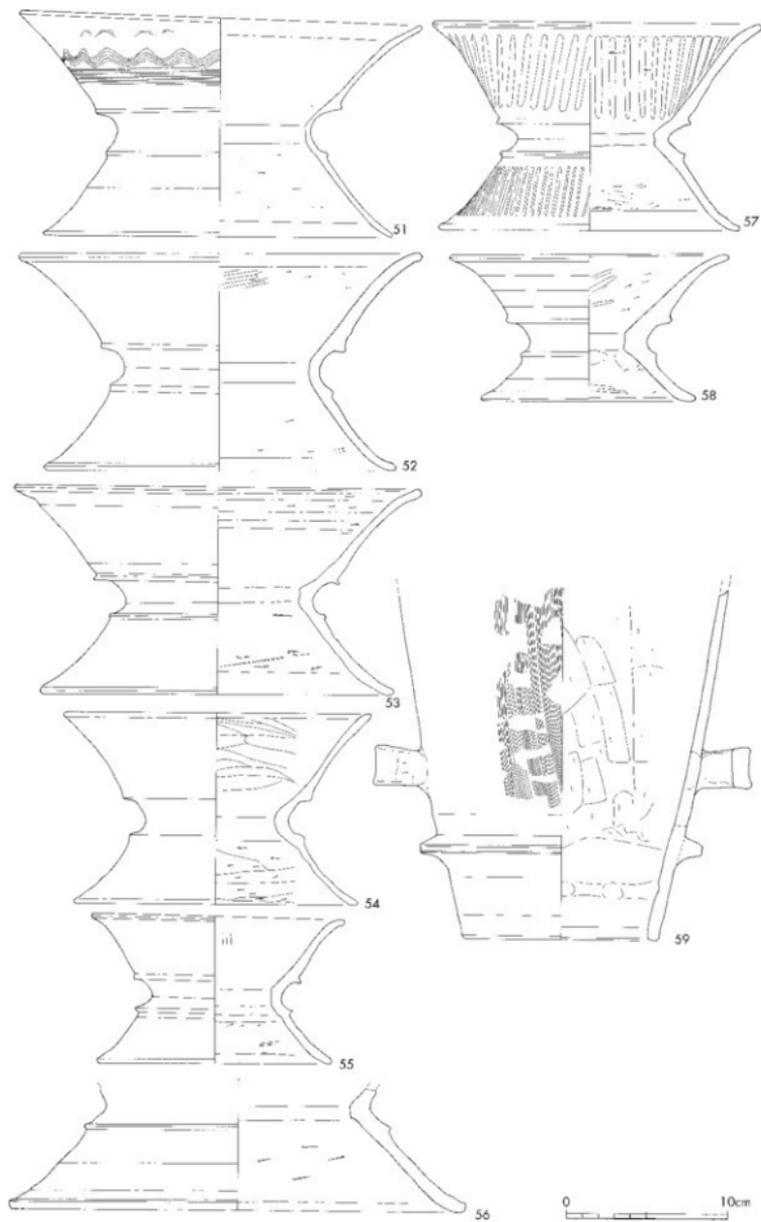


37

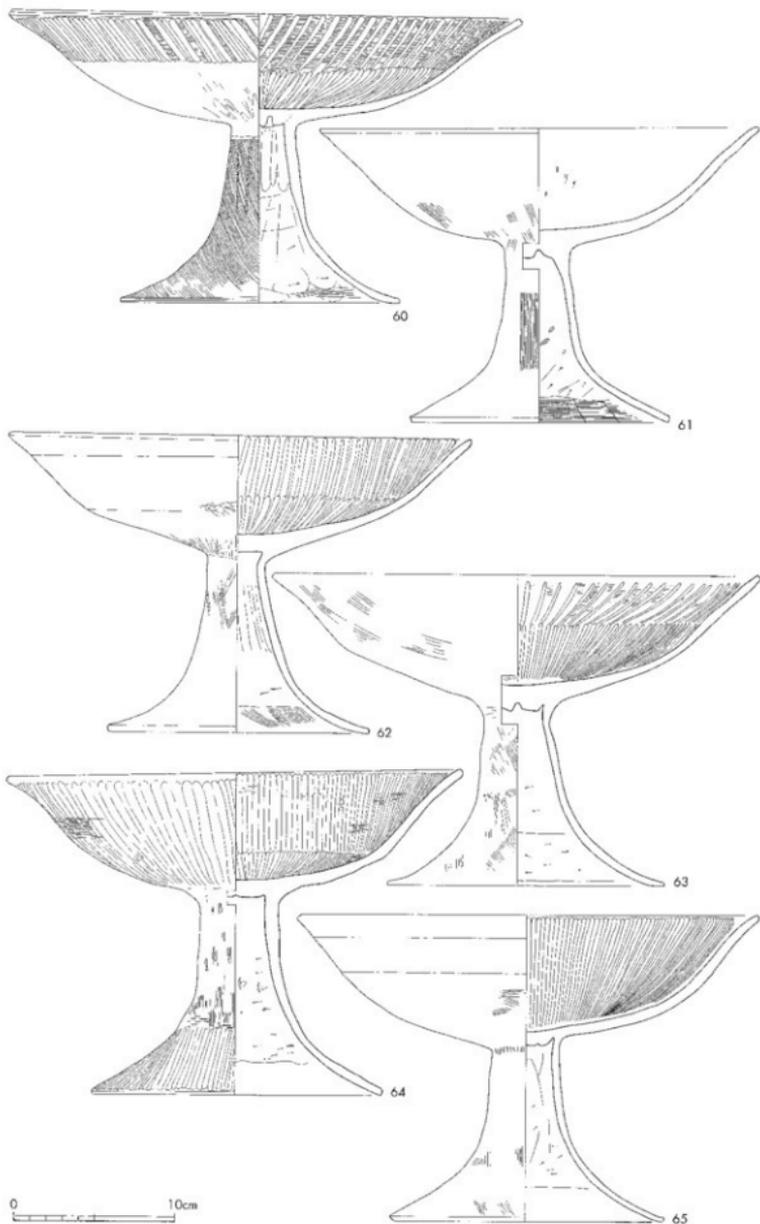
第138图 中野清水遺跡Ⅷ区出土遺物(6)



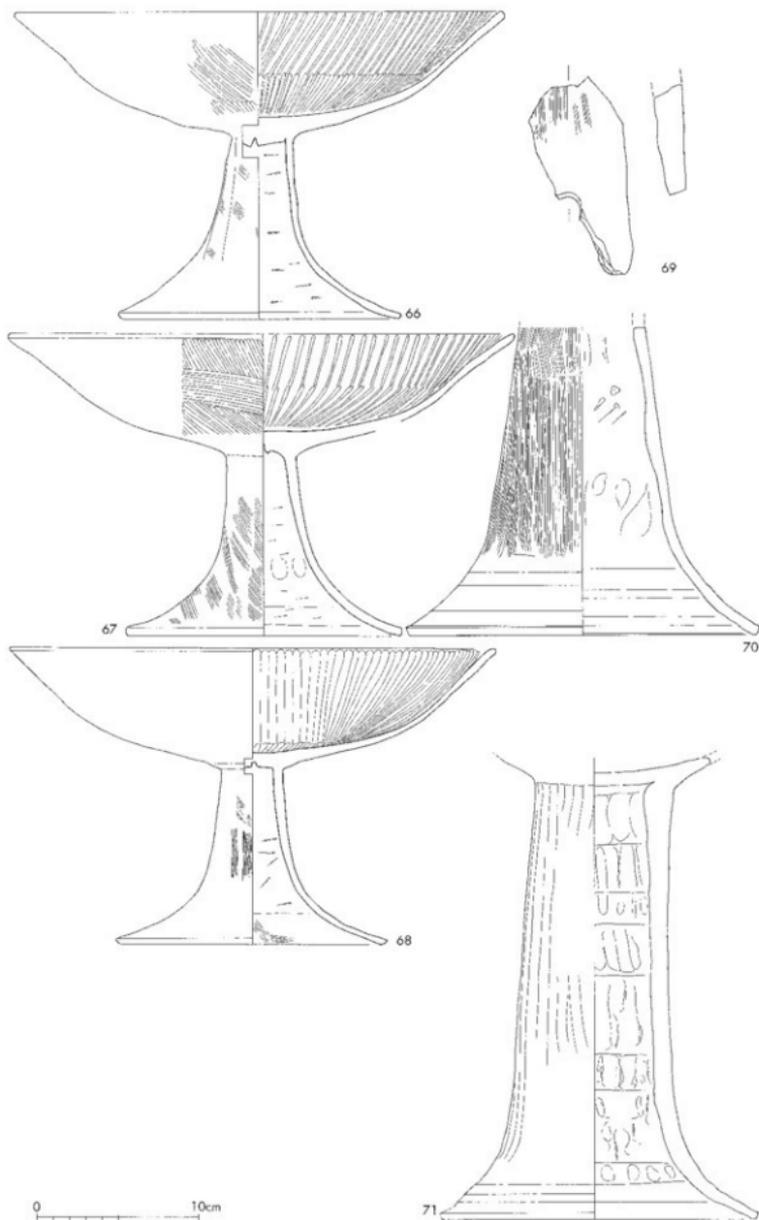
第139圖 中野清水遺跡Ⅶ区出土遺物(7)



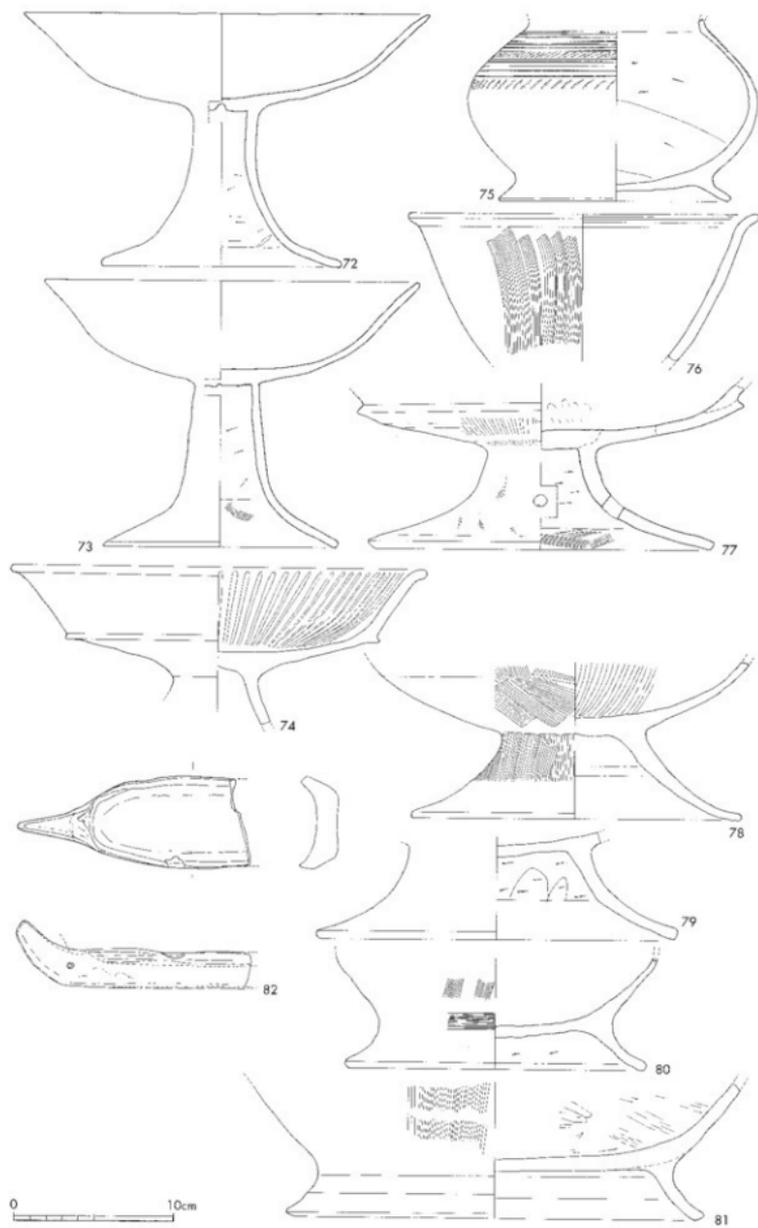
第140図 中野清水遺跡Ⅶ区出土遺物(8)



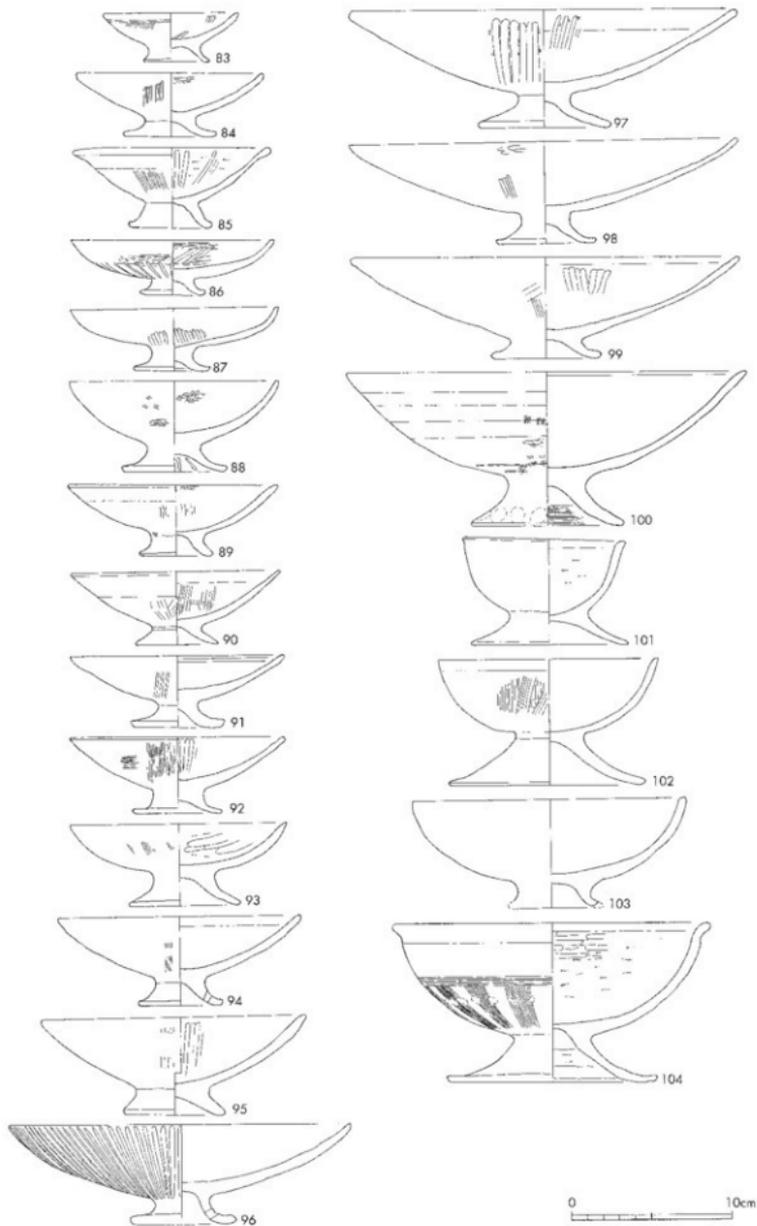
第141圖 中野清水遺跡VII区出土遺物(9)



第142图 中野清水遺跡Ⅶ区出土遺物⑩



第143图 中野清水遺跡Ⅶ区出土遺物(1)



第144图 中野清水遺跡Ⅶ区出土遺物12

Ⅷ区 Ⅷ区は調査区の西端で現在の人家に近い位置である。1層では近世以降と考えられる水田面と畦畔を検出した(第145図、図版98)。畦畔は走んでいるけれども調査区の範囲内では東西南北を意識して作られているように見える。これは近世以前の畦畔を継承している可能性がある。このⅧ区では2層相当層からの遺物は皆無に近く、古代には微高地であったと思われる。Ⅷ区同様に後世水田化するときに削平されたようである。

3層においては弥生時代末～古墳時代初頭の土器群SX02を検出した(第146図、図版98)。第151図25～第152図はSX02の上器群である(カラー図版11、図版100、101)。29・39は単純口縁の甕形土器である。いずれも小型で29は口径14.0cmの破片、39は口径12.2cm、器高12.9cmで、径2.5cmの底部がある。28は口縁部から肩部を欠くが、39に似ており、外面に炭化物付着痕があるので同様な甕形土器であろう。

第151図25・30～32、第152図34～38は複合口縁の甕形土器である。25は口径20.2cm、30は口径16.0cmで、肩部に貝殻腹縁の刺突文がある。31は口径15.8cmで肩部に櫛描き波状文がある。32は口径17.2cm、34は口径15.4cm、器高22.2cmでわずかに底部が意識されている。胴部外面は胴部の文様の下から底部、内面は胴部中程から底部に炭化物付着痕がある。35は口径16.0cm、器高23.0cmで外面はハケ目調整痕と肩部に櫛描き波状文がある。胴部外面の文様の下から底部、内面は胴部中程から底部に炭化物付着痕がある。36は口径14.0cm、器高19.0cmで、径1.5cmほどの底部が意識されている。外面は底部とその周辺を除き口縁部まで、内面は頸部の下から底部まで広く炭化物付着痕がみられる。37は口径13.3cm、器高19.3cmでやや小型である。径2.5cmの底部がある。内外面とも肩部の少し下から底部まで炭化物付着痕がある。38は口径14.0cm、器高16.9cmの小型で、径1.5cmの底部がある。外面は胴部の少し下から底部まで、内面は肩部あたりに炭化物付着痕がある。

第151図27は壺形土器の口縁部。口径12.8cm、40は口径10.4cmの短頸壺で脚部が付く。脚部は失われているが現状での器高は14.5cmである。内外面に漆が付着している。第151図26は、この甕形土器の蓋の可能性がある。第151図33は外面に叩き痕のある甕形土器の破片。器壁は薄い。二次焼成を受けているため調整は不明。搬入土器である。

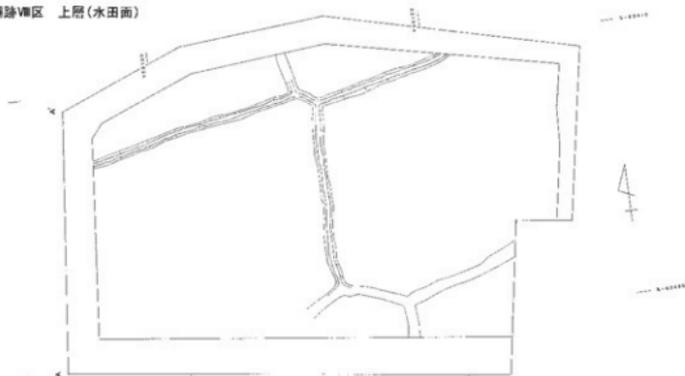
第153図41は調査区の北側中央で出土した大型の甕形土器である(図版102)。大津町北遺跡・中野清水遺跡の出土資料の中で最大の甕形土器である。口径41.2cm、器高54.9cm、胴部径49.0cm、底部径7.5cmである。全体に風化していて細かな調整は不明であるが、内面はヘラ削りである。器壁は薄い。淡い黄褐色で、胎土には白色砂粒を含み、白色斑点も多くみられる。外面に底部より15.0cm上に幅6～7cm、内面は底部を除く胴部下半に、炭化物付着痕がある。

4層からは主として弥生時代中期の遺物が出上った。特に調査区の北側中央付近に集中してみられた。地下水が吹き出たため遺構は検出できなかったが、土坑や建物跡等の遺構を見逃しているかもしれない。

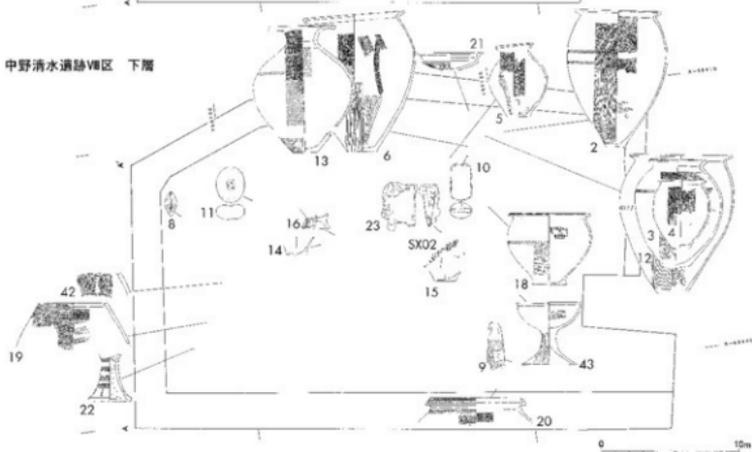
第147図～第150図、第153図42・43は4層の遺物である。1は蓋で口径7.9cm、器高3.5cmで、径1.6cmの握みがあるが、紐孔はない。

第147図2・4、第148図6、第149図12、第150図14～16・20は甕形土器である。2は口径25.0cm、器高39.7cm、底部径5.4cmで、胴部に2条の貝殻腹縁による刺突文を廻らしている。外面の上半はハケ目調整痕で、その下は刺突文をはずすように底部から約1cm上まで縦方向にヘラミガキを施す。内面は胴部中程まではハケ目調整痕、その下にはミガキがある。また、外面には頸部と底部から1

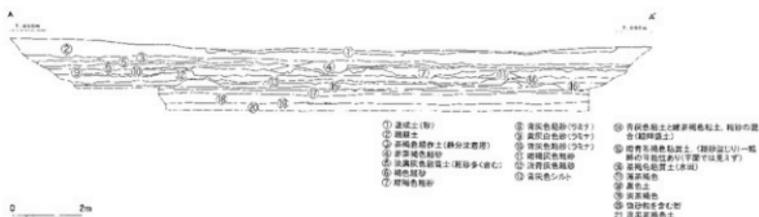
中野清水遺跡Ⅷ区 上層(水田面)



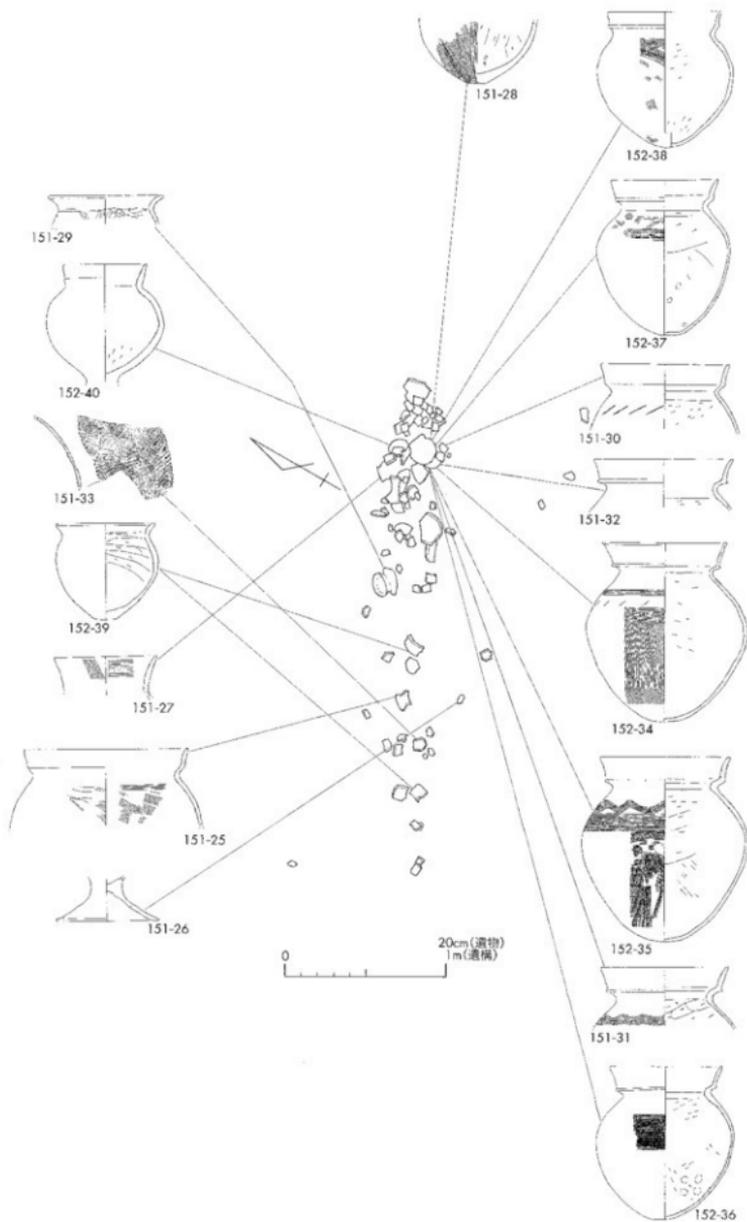
中野清水遺跡Ⅷ区 下層



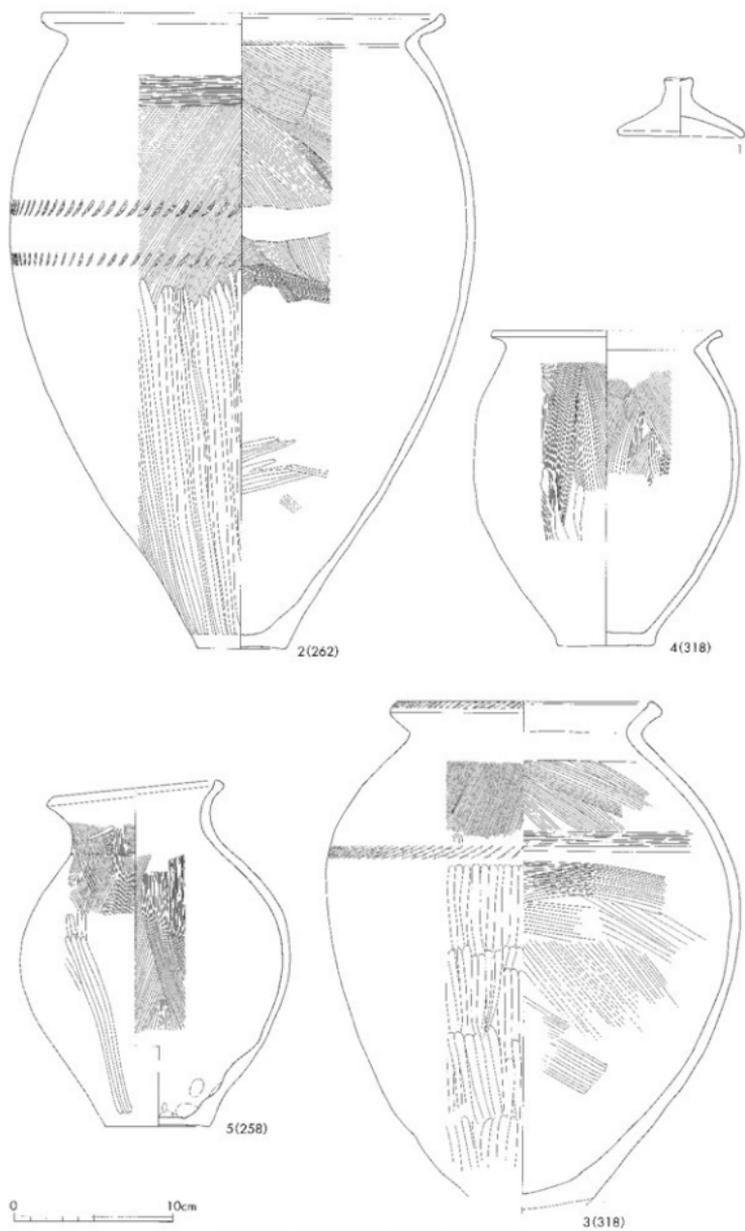
中野清水遺跡Ⅷ区 西壁土層図



第145図 中野清水遺跡Ⅷ区遺構配置図



第146図 中野清水遺跡Ⅷ区SX02



第147图 中野清水道跡Ⅷ区出土遺物(1)